

ドラえもん のび太の
カメラが斬る！

雛月 加代

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

映画ドラえもん26周年

大山版ドラえもん と アカメが斬る！ のクロス

タツミがレオーネと出会わなかった世界。

人が次第に朽ちゆくように、国もいずれは滅びゆく・・・千年栄えた帝都すらも、今や腐敗し生き地獄。人の形の魑魅魍魎が、我が物顔で跋扈する・・・天が裁けぬその悪を、闇の中で始末する・・・我等全員、殺し屋稼業

「……どうして邪魔をする！お前と俺と、何が違うんだ！俺だってこの国を救いたかった！誰にも迫害されない世界が欲しかった……！」

そして帝国革命から数年後。ドラえもんとのび太の前に現れた五人の少女たち。始まる新たな戦い。

「のび太さんっ！その人たちは誰よ!? 一体なにがどうなってるのか説明しなさいっ！」

地球編：(83話 — ???話)

言っただけだ、ずっとお前の側にいると。

甘えん坊だけど……嫌いにならないでいてくれる？

好きな相手の事は、最後まで信じ通してあげたいじゃない？

いい男に育てばおねーさんのものだ！

やっぱりあなたは私の良く知る強くて優しい人です。

あら、それは聞き捨てならないわね。野比くんは私がいたたくわ。

目次

帝国

プロローグ

第一章：出会いを斬る

第二章：お金を斬る

第三章：サヨを斬る

第四章：ナイトレイドを斬る

第五章：目標を斬る

第六章：やり過ぎを斬る

第七章：教育係を斬る

最終章：修行を斬る

帝具戦

プロローグ

第一章：三年を斬る

第二章：帰国を斬る

第三章：処刑を斬る

第四章：侵入を斬る

第五章：幼馴染みを斬る

第六章：生還を斬る

第七章：勝ち組を斬る

第八章：戦う意味を斬る

第九章：上の空を斬る

第十章：怪物を斬る

第十一章：再会を斬る

第十二章：マインを斬る

第十三章：思い出を斬る

52

46

39

34

29

24

19

15

9

2

57

61

65

69

73

77

82

86

94

99

108

111

119

第十四章：謝罪を斬る	125	第二十四章：チャンスを斬る	211
第十五章：ポリツクを斬る	130	最終章：お願いを斬る	217
第十六章：仲間を斬る	136	全ての始まり	
第十七章：ピンチを斬る	140	プロローグ	227
第十八章：クロメを斬る	145	第一章：嵐を斬る	232
第十九章：思いを斬る（前編）	152	第二章：ワイルドハントを斬る	236
第二十章：思いを斬る（中編）	164	第三章：ラバツクを斬る	242
第二十一章：思いを斬る（後編）	179	第四章：墓参りを斬る	248
第二十二章：絶望を斬る	197	第五章：過去を斬る（前編）	253
第二十三章：進化を斬る	202	第六章：過去を斬る（後編）	264
		最終章：信じることを斬る	274
		最終決戦	

	プロローグ	280			
	第一章：戦いを斬る	285			
	第二章：至高を斬る	291			
	第三章：復活を斬る	296			
309	第四章：エスデスを斬る（前編）				
	第五章：エスデスを斬る（後編）				
317	第六章：シコウテイザーを斬る				
324	第七章：タツミを斬る（前編）				
331	第八章：タツミを斬る（後編）				
	第九章：代償を斬る	340			
	第十章：見込みを斬る	345			
	第十一章：任務完了を斬る	351			
	最終章：さよならを斬る	360			
	地球へ	370			
	プロローグ	378			
	第一章：靄を斬る	383			
	第二章：望みを斬る	388			
	第三章：一目惚れを斬る	392			
	第四章：侵入を斬る	400			
	第五章：再会を斬る	405			
	第六章：死刑を斬る	412			
		418			

第八章：水着を斬る	425
第九章：説明を斬る	431
第十章：計画性を斬る	438
第十一章：告白を斬る	444
第十三章：眠りを斬る	450
第十四章：寝起きを斬る	458
第十五章：転校生を斬る	464
第十六章：変わらない心を斬る	467
第十七章：嫉妬を斬る	473
第十八章：部活を斬る	478
第十九章：お世話を斬る	483
第二十章：ポーズを斬る	487

第二十一章：唇を斬る	493
第二十二章：ファーストキスを斬る	499
第二十五章：アイドルを斬る	502
第二十六章：逢い引きを斬る	507
最終章：聞き耳を斬る	513
文化祭	
プロローグ	519
第一章：居眠りを斬る	525
第二章：前触れを斬る	529
第三章：男らしいを斬る	534
第四章：優しい味を斬る	540

第五章：オーデイションを斬る

校内新聞

547

プロローグ

第六章：努力の結果を斬る

第一章：立候補を斬る

610

第七章：引きこもりを斬る

第二章：記事を斬る

614

第八章：代役を斬る

第三章：質問を斬る
(前編)

617

第九章：もう一人のロミオを斬る

第四章：質問を斬る
(後編)

622

580

最終章：新聞を斬る

631

第十章：本番を斬る
(前編)

夏休み

636

第十一章：本番を斬る
(中編)

プロローグ

640

588

第一章：誘惑を斬る

643

第十二章：本番を斬る
(後編)

第二章：ビーチボールを斬る

649

595

第三章：肝試しを斬る
(前編)

最終章：勝負の結果を斬る

600

649

第四章：肝試しを斬る（中編）

654

第五章：肝試しを斬る（後編）

658

第六章：イタズラを斬る

664

最終章：怖いものを斬る

669

将来

プロローグ

673

第一章：完璧を斬る・

678

第二章：将来を斬る

683

第三章：謎の少女を斬る（前編）

688

第四章：謎の少女を斬る（中編）

694

第五章：謎の少女を斬る（後編）

699

第六章：あなたを斬る

703

第七章：アルバムを斬る

709

第八章：膝枕を斬る

713

第九章：大好きを斬る

717

第十章：渡さないを斬る

723

最終章：実力行使を斬る

732

設定 1

登場人物 1

738

野比のび太暗殺計画

プロローグ

745

第一章：裁判を斬る	750	第二章：きつかけを斬る	794
第二章：判決を斬る	755	第十三章：久々を斬る	797
第三章：暗殺を斬る	760	第十四章：事件を斬る	801
第四章：排除を斬る	764	第十五章：最後を斬る	808
第五章：一難を斬る	767	第十六章：好きな人を斬る	812
第六章：オットセイを斬る	771	第十七章：文句を斬る	816
第七章：キューピッドのやを斬る	776	第十八章：仲間外れを斬る	823
第八章：放送を斬る	780	第十九章：変わるを斬る	827
第九章：あいすボックスを斬る	787	第二十章：違いを斬る	832
第十章：体育祭を斬る	790	第二十一章：前言撤回を斬る	837
第十一章：あなただけのものガスを斬る	790	最終章：初夢	841
		プロローグ	845

第一章：初夢を斬る	848
第二章：初詣を斬る	853
第三章：おみくじを斬る	858
第五章：緊急会議を斬る	864
第六章：すれ違いを斬る（前偏）	
868	
第七章：すれ違いを斬る（後偏）	
872	
第八章：勘違いを斬る	877
第九章：本音を斬る	884
最終章：物色を斬る	890
がんばれ！ジャイアン！！	
プロローグ	895

第一章：欲しいものを斬る	899
第二章：御祓を斬る	903
第三章：愛想を斬る	907
第四章：俺様の時代を斬る	911
第五章：恋を斬る	916
第六章：話の裏を斬る	921
第七章：いざという時を斬る	926
第八章：不可能を斬る	937
最終章：ダーリンを斬る	951
燃えよ！静香！	
プロローグ	957
第一章：ラブレターを斬る	965
第二章：求愛を斬る	969

第三章：返却を斬る	975
第四章：手紙を斬る	978
第五章：同性愛を斬る	982
最終章：満足を斬る	986
負けるな！スネ夫！	
プロローグ	991
第一章：ネットゲーを斬る	995
第二章：恋愛ゲームを斬る	999
最終章：マザコンを斬る	1005
初恋事件	
プロローグ	1010
第一章：誘拐を斬る	1014
第二章：おばあちゃんを斬る	1019

第三章：ダルマを斬る	1025
第四章：秘密のおまじないを斬る	1030
第五章：大騒ぎを斬る	1035
第六章：真相を斬る	1040
最終章：しばらくこのままを斬る	1045
のび太のやりたい事	
プロローグ	1050
第一章：演技を斬る	1054
第二章：チェルシーの凄さを斬る	1062
第三章：やりたいことを斬る	1066

プロローグ	1134
??? <ul style="list-style-type: none"> 最終章：解決を斬る 第六章：嫌がらせを斬る 第五章：ストーリーカーを斬る 第四章：囹を斬る 第三章：脅迫を斬る 第二章：腹黒悪魔を斬る 第一章：友だちを斬る 	11301124111811131108110110941084
ストーリー事件	10801076
プロローグ	1084

第一章：撮影を斬る	1137
第二章：良い事を斬る	1142
第三章：居眠りを斬る	1146
第七章：目覚めを斬る	1150
第八章：当たり前の事を斬る	1154
第八章：子供を斬る	1157
第十一章：授業参観を斬る	1160
第十二章：ベタ惚れを斬る	1163
子育て	
プロローグ	1167
第一章：赤ちゃんを斬る	1172
第二章：子育てを斬る	1177
第三章：喧嘩を斬る	1181

第二章：アカメの悩み	1234
第一章：日常を斬る	1231
プロローグ	1227
クリスマス パーティ	1222
最終章：未来を斬る	1215
第十一章：雪だるまを斬る	1210
第十章：どら焼きを斬る	1207
第九章：幼稚園を斬る	1202
第八章：パパとママを斬る	1198
第七章：ツクモを斬る	1193
第六章：助っ人を斬る	1189
第五章：不運を斬る	1184
第四章：無視を斬る	

第十三章：クリスマスプレゼントを斬る	1266
第十二章：クリスマスプレゼントを斬る	1262
第十一章：バイトを斬る	1259
第十章：取引を斬る	1254
第九章：景品を斬る	1251
第八章：合コンを斬る	1248
第七章：翼の妄想を斬る	
第六章：クロメとシエーレの妄想を斬る	1245
第五章：チエルシーの妄想を斬る	
第四章：アカメの妄想を斬る	1239
第三章：クリスマス会議を斬る	1242

る

第十三章：女の気持ちを斬る

第十四章：景色を斬る

最終章：サンタクロースを斬る

1278

最後のイタズラ

プロローグ

第一章：想いを斬る

第二章：気持ちを斬る

第三章：トークを斬る

第四章：バイオリンを斬る

第五章：同じ人物を斬る

第六章：二人だけの世界を斬る

1308

第七章：喧嘩を斬る

第八章：ヘイトレターを斬る

第九章：メッセージを斬る

第十章：封筒を斬る

第十一章：賭けを斬る

第十二章：掲示板を斬る

第十三章：気持ちを斬る

第十四章：バイトを斬る

第十五章：クレープを斬る

第十六章：お迎えを斬る

最終章：自作自演を斬る

遊園地デート

130413011295129212881282

127512721269

13591355134713441340133513301325132213181314

プロローグ

—

1362

第一章：ジェットコースターを斬る

1368

第二章：幸せを斬る

—

1374

第三章：観覧車を斬る

—

1378

最終章：ウラドラマンを斬る

—

1384

帝国

プロローグ

ある日、テレビで宝のニュースを見ていたのび太がドラえもんに言い放った。

「聞いてくれ、埋まっている宝を掘り出すのは僕にとつての一生の夢なんだ。」

「……………」

のび太の言葉にドラえもんはキョトンとする。

「だけど世界中に埋められている財宝には限りがあるはずなんだ、うん。」

「なるほど、そりやそうだ。」

「でしょ！ねえ、それなのにこう先にどんどん発見されたら、僕の方がなくなる。」

「なくなるね。」

「ああ！僕の人生には夢も希望も残されてない。」

そう言うと、のび太は泣き出した。

「おおげさだな。」

「わあああ！おおげさだっていいよ！」

「じゃあ、ささやかな夢を……………」

ドラえもんは呆れながら四次元ポケットに手を入れる。そして

「宝星探査ロケット!!」

「!?!」

「広い宇宙には人間みたいな生命体の住んでいる星が他にあつてもおかしくない。このロケットは財宝探知レイダーをつけていて、宇宙の果てまで飛び続けながら・・・」

「宝を見つけて、知らせてくれるんだね!?!」

「そういうこと。」

「ヤターーーー!!ワァーイ!!ワァーイ!!」

「でもあてにしないでね。」

「えっ!?!どうして?」

「何しろ宇宙は広いからね。宝クジよりもっとあたりにくいんだから。わかる?」

「うん、それでもいい!もしもという夢が持てるだけでものび太少年のマロンさ。」

「ロマン。」

「あつ、それぞれそれ。」

「静香ちゃん！」

「あっ！のび太さん！」

「僕、もうすぐ大金持ちになるかも。」

「えっ？大金持ち？」

「そしたらさ、プールとテニスコート付きの家を建てるんだ！」

「・・・・・・・・・・。」

「もちろん、静香ちゃんの為に。」

ところが、現実はそう甘くはなかった。

「もういいよ。宝探しなんて。」

のび太はその場でねっころがる。

「僕、疲れた。」

すると隣に座っていたドラえもんが口を開く。

「でも君は運がいい方だよ。」

「どうして?どこが?」

「たった三発のロケットで二発も当てるなんて……。本当すごいんだよ、これは!」

「宝なしじゃ、外れとおんなじだよ。」

「……そんな……。」

「あのロケット、不良品じゃないの？」

「なに!? そんなことないぞ！」

「うん！ インチキだ！」

「インチキとはなんだ!!」

「だーてインチキだもん！」

「宝探しが君の夢だつて言うから協力してるんだぞ!!」

「……余計な御世話だね!!」

「なにを!!」

「やるか!!」

取っ組み合いの喧嘩をしだすのび太とドラえもん。すると突然宝探しモニターに「3」の数字が写し出される。

『!?!』

いそいでモニターを持って、ロケットに乗り込む二人。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ロケットの中は先程の喧嘩のせい、気まずい空気が流れていた。

『ワープ!!!』

ほぼ同時にワープボタンを押そうとする二人。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人はニコリと笑うと

「今度こそ宝を・・・・・・・・」

「二人で見つけよう!!」

『宝星へ、ワープ』

ワープの果てにロケットはある星へとたどり着く。

「おっかしい!」

「地球と同じくらいだ!」

「!?」

その頃、とある森の中で空を見上げる少女がいた。

「どうしたのよ、アカメ?」

隣にいたピンクツインテールの少女が声をかける。

「風が……」

「風……?」

第一章：出会いを斬る

ロケットはゆっくりと着陸し、のび太とドラえもんは外に出る。

「景色も地球そっくり。」

「でも地球じゃないよ。」

「今度は望みがありそうだね。」

「うん。あつ！ねえ、あそこ。」

「街だ。」

「どうやらここから少し行ったところに街があるみたいだ。しばらくすると二人の顔を馬車を通り過ぎる。」

「どうやら、この星はまだ中世代みたいだね。」

「うん。」

すると地面が揺れ始める。

『「あつ!!」』

地面の下から巨大な龍が姿を現した。

「土龍だあああああ!!」

「こんな街道に出るなんて聞いてないぞ！」

「逃げろおお!!」

馬車に乗っていた人たちは一目散に逃げて行った。のび太たちは土龍を見上げると、

『「でかい!!」』

ウオオオオオ!!

「お休みの所をどうも……………」

「あの……………ボク……………ボク……………ドラえもんです。」

それだけ言うと、後ずさりし、走り出す。

「考えてみたら、なんで龍がいるの？」

「そんなこと知るか!!」

「なんとかしてよ!!」

「なんとか、なんとか。」

ドラえもんは四次元ポケットに手を入れた。

「桃太郎印のきびだんご!!!」

ドラえもんは土龍に向き直り、だんごを土龍の口の中に投げ入れる。

パクッ

「グー……」

すると土龍はたちまちおとなしくなった。

「助かった……」

「……ふう。」

のび太とドラえもんは糸が切れたようにその場にへたり込む。

「凄かったぜ、二人も！」

「まさか危険種を大人しくさせるなんて……!!」

馬車に乗っていた連中が帰ってきた。

「やあー、それほどでも。」

「ん？」

ドラえもんはポケットからロケットのモニターを取り出す。モニターの矢印はさっきの街をさしているようだ。

「どうやら、ロケットはあの街にあるみたいだ。」

「うん。」

すると馬車に乗っていた男の一人が話しかけてきた。

「君たちもしかして帝都に行くつもりなのか？」

「帝都？」

「そうだけど……」

男たちは真剣な顔つきなり、ドラえもんたちに警告する。

「やめたほうがいい……あそこは賑わってはいるが、この土竜よりもタチの悪い化物が一杯いるんだ……。」

「化物？」

「街中で怪物が出るんですか？」

「人だよ……人だけど心は化物……。そんな連中ばかりなんだ……」
「人？」

訳が分からず混乱する二人。

「広いな迷子になりそう。」

「うーん。」

モニターの矢印をたどって街に入ったのび太とドラえもん。しばらくすると立ち止まる。

「どうやら、ロケットはあの宮殿の中にあるみたいだ。」

「えーっ!？」

すると突然、

「ハーイ、お困りのようだね、少年たち。お姉さんが力を貸してやろうか？」

見知らぬ金髪の女性が話しかけてきた。

「少年らはさ、帝都にロマンを求めて地方からやって来たやつだろ？」

「うくん、まあ、そんなところです。」

少し違うけど。間違っではない。

「で、私手っ取り早く仕官する方法知ってるんだけど。」

「仕官？」

「いえ、僕たちはただあの宮殿にようがあるだけで……。」

「宮殿？」

「はい。」

「あそこにはこの国を動かす皇帝様がいるからな。行っても中に入れてもらえないぞ。」

女性の話を聞き、のび太はドラえもんの方を向く。

「どうしよう、ドラえもん？」

「うーん。」

すると女性は二人に助け船を出した。

「私手っ取り早くあそこに入れる方法も知ってるんだけど……。」

『「本当!?!」』

「教えて欲しい？」

『「はい!」』

「んじゃ、お姉さんにご飯奢って♡」

（ドラえもん、いくら持つてる?）」

（……40円）

第二章：お金を斬る

「どうする……」

「……うん。あつ、そうだ！」

何かを思いつくドラえもん。そして三人は場所を移す。

「どうしたんだ、お前たち？」

いきなり人気のない場所に連れてこられる金髪の女性。ドラえもんはさっそくポケットの中に手を入れる。

「グルメテーブルかけ!!」

ドラえもんはテーブルかけを床に敷く。

「これ、食べたい物なんでも出してくれるんだよねー」

「何が食べたい？」

「ラーメン。」

「えーと、おでんと酒。」

とりあえず食べたい物を言う金髪の女性。するとテーブルかけからラーメン、どら焼き、おでん、お酒が現れた。

「さっ、食べよう！」

「いっただきます!!」

「これは………いったいどうしたんだ!？」

女性 は目を輝かせながら驚きの声を上げる。

「ちよつと僕の道具でね。」

「帝具か？」

「帝具………?」

「なにそれ？」

ゴツゴツゴツ。プハーツ。

「いやーっ。昼間っから呑む酒は最高だね!!」

「飲みすぎだよ！」

「昼間っから。」

「そういえば自己紹介がまだだったね、私はレオーネ。」

「僕、野比のび太って言うんだ。」

「僕、ドラえもんです。」

・満腹になったのび太はレオーネに問いかける。

「それより宮殿の中に入れる方法を教えてくれよ。」

するとレオーネは酔っているのか、頬を赤くしながら、ゆつくりと口を開いた。

「ああ、それはつまり……金と人脈だな。」

「お金……?」

「私の知り合いに軍のやつがいてな。そいつに小遣い出せばすぐだ、すぐ!!」

「お金……か。」

のび太たちは考え込む。いくら二十二世紀でもお金を出す道具などない。あつたとしても使うのは法律で禁止されているに決まっている。するとのび太は・

「あつ、そうだ!ドラえもん耳貸して。」

「??」

ドラえもんは耳元で何かを伝える。

(ゴニョ、ゴニョ、ゴニョ。)

すると

「いいね!面白そう。」

ドラえもんとおび太はニッコリ笑った。

「???

それを見て?を浮かべるレオーネ。

「えーと……」

ドラえもんは四次元ポケットに手を入れると

「円ピツ!!」

「これで紙に金額を書き込めば。その紙がそのままお金になるんだよ。」

「本当か?」

レオーネは再び目を輝かせる。

「こりや二人共すぐに宮殿に招かれるよ!」

「うん!頼みましたよ!」

レオーネは円ピツを持って立ち上がると、

「私との出会いは色々勉強になると思うよ。少年たち。んじゃ、話つけてくるからそこで待つててね!」

レオーネはそのまま去って行った。残されたドラえもんとおび太は笑いを堪えながら呟く。

「レオーネさんって、無邪気だね。」

第三章：サヨを斬る

「レオーネさん、遅いね。」

レオーネを待つていたが、いつまでたつても帰つて来ない。辺りもすっかり暗くなり、夜の寒さは疲れている体にはこたえる。

「しようがない、とらあえず宇宙船にもどろう。」

「うん。」

すると突然、声をかけられる。

「ねえ、どうかしたの？」

「え？え、いや、大丈夫！ちよつと歩きつぱなしで疲れただけ。」

「そう。よかつた。」

振り向くとそこには……

「静香ちゃん!? どうしてこんなところに!？」

「え？」

「あれ……？」

「あの……悪いけど、人違いだと思うよ。私はサヨっていう名前なんだけど。」

「サヨ？」

「ええ。」

「ごめん!! 僕の知り合いの女の子に良く似ていたものだから、つい……。」

「そうなんだ。あなたが急に大きな声をだすから、私、ビックリしちゃった。」

「本当にごめん。」

「ううん。気にしないで。え、えつと……地方から来たの？」

「え……? ううん……」

「もし今日泊まるアテがないんだったら…… 私の家に来ない？」

「どうしよう、ドラえもん？」

「ううん。」

『「じゃあ……お言葉に甘えて……。」』

「決まりね!!」

サヨは嬉しそうに笑った。

「まあ！別の星から？」

二人はサヨがお世話になっている家に招かれた。家には奥さんと子供が一人いた。子供の名前はローグと言うらしい。旦那さんは帝都の軍人で家には滅多に帰らないらしい。

「なんでまたこの星に？」

「それは宝を……」

「のび太くん!!」

いきなりのび太はドラえもんに口を塞がれる。

「えっ？宝？」

（もう！なにすんだよ！）

（のび太くん、もし宝のことを言ったら、先取りされちゃうぞ。いいのか？）

（あつ、そうか。）

「どうしたの？」

「なんでもないんです。ただの旅行です。」

するとローグがのび太の袖を掴むと、

「のび太お兄ちゃん、ローグと遊ぼう！」

「うん。いいよ！」

「この子は兄弟がいないのよ、お友達になってね。」
「もちろんです。」

すると突然、物凄い音がした。

ドオン!!

「!?!」

「外からだ!」

窓を開けて外を見つめるのび太たち。

「また彼らね。」

「彼ら?」

「ナイトレイド。帝都を震え上がらせている殺し屋集団。名前の通り標的に夜襲を仕掛け、帝都の重役達や富裕層の人間が主に狙うといわれているわ。」

「一応覚悟はしておいてね。」

「.....」

「こんな賑やかな街なのに、悪がはびこむなんて。怖いね。」

サヨから殺し屋の事を聞かされ、おじけづくのび太。

「ねえ、帰ろうよ地球へ。」

「じゃあ、一人で宝見つけちゃおっと!!」

第四章：ナイトレイドを斬る

三人の傭兵に囲まれている黒髪の少女こと、アカメ。

「コイツがここにいるってことは。やはりアジトはこの近くのような……地道に探したかいがあったぜ。」

「……………」

「それにしても可愛い女だな」

「殺った後も楽しめそうだ、あまり体に傷をつけるな

ヒュン！

よー

勝負は一瞬で決まった。アカメは目にも止まらぬ速さで三人を葬った。

「あ」

「え？」

「お前達、敵地で余裕持ちすぎだ……」

「そんな……速すぎ……る……」

ゴシヤツ

二人の傭兵はそのまま倒れる。そして最後の一人は
「クソツ！せめて相打ち．．．に．．．？」

腰から剣を抜くが、

ドクンッ

「傷口から呪．．．．．？毒．．．？」

そのまま倒れる。

「一撃必殺。」

ゴソゴソ

「!?」

アカメの後ろで何か物音がした。振り返るとそこには．．．

「広い森だな、迷子になりそう。」

「!?」

サヨと森に食料を取りに来ていたのび太たち。だが不運にもサヨとはぐれ、アカメと鉢合わせしてしまった。アカメは刀を手に、のび太たちに近づいてくる。

「な……何の用？」

「……………」

「逃げろ！」

逃げようとするが、すぐに回り込まれてしまう。

「待つてください！僕たちは決して怪しい者じゃあ、ありません！」

「……………」

「わあ！話の分かる相手じゃなさそうだ、逃げろ！」

逃げようにも、のび太は腰が抜けていて動けない。そんなのび太にアカメは、

「葬る！」

刀を振り抜こうとした。

「危ない！」

ドラえもんは四次元ポケットに手を入れる。

「手品ステッキ!!」

手品ステッキーこのステッキで物を触ると、さまざまなものに変えることができる。

ゴン！

ステッキはアカメの持っていた日本刀に触れると、刀はたちまち花の束へと姿を変えた。

「!?」

アカメは目の前で起こったことに驚く。

「いまだ!」

『「逃げろ!」』

アカメを振り切り、そのまま森を抜けようとするのび太たちだったが、

「かなり遠くまで逃げてるわ。アレを撃ちぬくためにはこうして姿をさらすしかないわ。」

遠くでのび太たちを監視するツインテール少女こと、マイン。

バツ

「貰った!」

茂みから傭兵が飛び出し、マインを攻撃しようとするが、

ジコッ

「すいません。」

メガネをかけたチャイナ服の女性ことシエーレに真つ二つにされる。

「ありがと、シエーレ。ナイスピンチ！ このリスクで十分届く!!」

マインはパンプキンでのび太たちに狙いをさだめると、

ゴウ!!

引き金を引いた。

「!?!」

眩しい光がのび太たちに向かって放射される。ドラえもんはもう一度ポケットの中に手を入れる。

「ひらりマント!! えーいー!」

ドラえもんはひらりマントを光に向かって振りかざす。するとどうだろう、マインが放射した光が何故か彼女自身に跳ね返ってきた。

「えっ!?! なんて!?!」

ドゴーーーーー!!

第五章：目標を斬る

「そうだ、ドラえもん。石ころ帽子があったろう。」

「あつ、そうだった！」

のび太の名案を聞き、ドラえもんはポケットの中に手を入れる。

「石ころ帽子!!」

なんとか石ころ帽子を被って無事に帰って来たのび太たち。

「結局のび太たちが取ってきたのはこれだけ……。」

「でも初めてにしては上出来だよ。」

「そうよ、怪我がなくなによりだわ。」

サヨに笑われ、ブーたれるのび太。邪魔さえなければ、もっと取ってこれたというのに。すると、のび太はふと顔を上げる。

「そういえばサヨちゃんって小さな村の出身なんですよ？何しに帝都に来たの？」
「……………」

のび太の何気ない質問にサヨの顔から笑顔が消えていく。何かを察してかローグの母親が会話に割って入る。

「サヨちゃんの故郷の村は重税に苦しんでいるの。だから、幼なじみの二人と一緒に帝都軍の兵士になって出世して村を豊かにする為に帝都に来たの。」

『わあ〜っ！頑張っつて!!』

サヨの立派な目標に関心し、拍手するのび太とドラえもん。

「……………それと……………」

「??？」

暗い顔をしていたサヨが口を開いた。その表情は何故か物凄く怖い。

「ある男を探しているの……………殺すために。」

「えっ!？」

ドラえもんたちの目が点になり、家中に気まずい空気が流れる。

「ハハハ、冗談だよね？」

場を和ますために、のび太は笑う。だが

「……………」

サヨは悲しそうな顔をしながら何も答えない。どうやら冗談ではないらしい。

「いない。サヨちゃん、どこ行ったんだろう？」

次の日、のび太とドラえもんは街でサヨとはぐれてしまう。すると突然後ろから声をかけられる。

「見つけた！」

『???』

振り向くとそこにはピンク髪のツインテール……ではなくなぜかボロボロの少女が仁王立ちしていた。

「二日ぶり。昨日は本当にゴメンナサイね。」

「昨日……?」

何を言ってるのか分からない。こんな少女と対面するのは今日が初めてのはず。

パシッ

「え？」

少女はいきなりお菓子の袋をのび太から奪い取ると、そのまま走り出す。

「待てよ、それ僕のじゃないか！」

「のび太くん、追いかけてよう！」

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

少女を必死で追いかけるのび太たち。気のせいかどんどん人気のない道に入つて行つてゐるような気がする。それにわざと追いかけられる速さで走つてゐるようにも見える。しばらくすると、人気のない建物にたどり着く。

「(ハハ)は．．．」

「どこいったんだ？出てこーい！」

辺りを見渡すのび太とドラえもん。すると

「野比のび太、変な名前ね。」

振り向くと少女は袋の中のお菓子を食べながら、古びたベンチに座っている。

「返してよー！」

少女はベンチから立ち上がると、

ガタン

「『!?!』」

同時に入り口のドアが閉まる。

「さて、と。話を聞かせてもらいましょうか。」

第六章：やり過ぎを斬る

「……今、鍵、かけましたよね？」

「にげられないようにね。」

唯一の出入り口を塞がれ、焦り出すのび太たち。すると少女は腕をならし始める。

「正直に吐きなさい、どここの所属？ イエガーズ？ それとも……」

「??？」

バカッ

すると少女はいきなり襲い掛かってきた。

「とぼけないで！ 偵察に来ていたんでしょ？」

「『??』」

「私たちのアジトの情報を帝都に伝えて、多額の謝礼をもらうつもりだった。違うの？」

少女の言葉にのび太たちは

「誤解だよ！」

「僕たちはそんな気は絶対ない！」

「じゃあどうしてあんな時間にあんなところに行ったのよ!? 張り込んでたと考えるのが普

通でしょう！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・。』

「そうやって人を勘繰るのがこの人の『普通』？だとすれば、関わり合いになるのは遠慮したい。」

「さあ、さつさと答えなさい！」

身勝手に攻撃してくる少女にドラえもんたちは

「そっちがその気なら・・・・・・・・。」

「僕たちだって・・・・・・・・。」

と意気込むが、

数分後。のび太とドラえもんはボコボコにされ、その場に倒れながら目を回す。話し

合う為に呼び出したはずなのに。

「あ。」

少女は、自分のやった事に今更気づく。すると

「マイン。」

物陰から黒髪の少女が姿を現わす。

「ゴメンっ、アカメ。やり過ぎちゃった。」

「……………」

「スイッチが入っちゃうとついやっちゃうのよね。ハハハ。」

「……………」

「ごめんなさい……………」

申し訳なきようにマインは謝った。アカメはため息をつく、倒れているのび太たちに視線を向ける。

「ツハ!?!」

のび太とドラえもんは勢いよくフカフカのベッドから飛び起きた。

「ここはどこだろう?」

「さあ……」

見覚えのない天井、家具、そして外の景色。すると部屋の扉がゆつくりと開かれる。

「おはようございます。よく眠れましたか?」

入ってきたのは、メガネをかけたチャイナドレスの女性だった。

「あの……」

「あなたは……」

「私はシエーレ。そしてここは私たちのアジトです。」

「アジト?」

「……」

「詳しい話は会議室でします。ご同行お願いできますか、のび太、ドラえもん?」

「何で僕たちの名を……」

「あつ、それはですね……」

するとシエーレの後ろから何かが飛び出してくる。

ガンツ

「よくもやったな!!この野郎!!!」

突然現れたレオーネの飛び蹴りをモロに受けるのび太。

「グハッ。」

のび太はそのまま吹き飛ばされる。そして

「私はなあ．．．騙すのは好きだけど、されるのはだいつつつつ嫌いなんだよ！楽に死ねると思うなよ!!」

ギリギリギリ

そう言いながらのび太の首を締めるレオーネ。

「と．．．．．いうことです。」

シエーレとドラえもんは只々苦笑いするしかなかった。

第七章：教育係を斬る

「あー、なんてかたい柱だ!!早く切れろ!!」

??ノコギリを手に今まさにこのアジトを破壊しようとしている、のび太。

?「みんなが起きてくる前に何とか壊さないと。あいつ、毎日 僕をボコスコ殴って。僕からの仕返しだ!!」

あれから毎日雑用させられる毎日に、のび太の心は疲れ果てていた。??

「アジトがなければ掃除もしなくていい。ざまーみろだ。」

??笑みを浮かべながらノコギリを動かしていると。

ガッ

「??」

突然 腕を誰かに掴まれる。

「驚きだな。最近のシロアリはこんなに大きいのか。」

??のび太の腕を掴んだのは、彼の教育係の少女、アカメ。

「朝の訓練をサボるためにアジトを破壊するとは。史上空前のうつけ者だなお前は。」??

「う、うるさい!!こうでもしないと休めないでしょう!!毎日毎日バカみたいに雑用や訓

のび太は顔中傷だらけで鼻血を出している。

「まだ当分私には勝てないな。今のお前には殺し屋としての欠点がぎつと 288こはある。」??

その言葉にのび太は

「たった288こ!? 教えて!! 今すぐ!!」??

声を上げる。

「前向きな奴だ。一つ目、目上の者への口の利き方になってない。」??

「失礼しました アカメ様。二つ目は何ですか?」??

「二つ目、せっかく作ってやったピーマンの炒め物をいつも残す。」

「……おい。単なる僕への日々の不満だろそれは。」?

部屋に戻ると、のび太はベッドに横になる。

「強くなりたい。力が欲しいな〜っ。」

カチャ

「んっ。」

振り向くと、そこには小さい紫の箱があった。

「E・S・P訓練ボックスだ。前に使ったことがあるぞ。これを使えば、超能者になることが出来るんだ。」

E・S・P訓練ボックスー念力、透視、瞬間移動の3つの超能力を使えるように訓練するための道具。この道具に向かって念じることでそれぞれの能力が使えるようになるが、毎日3時間ずつ3年間訓練しないと一人前にはなることができない。

「……………一所懸命思ってるのに……………。うーん。」
空き地でE・S・P訓練ボックスと睨めっこするのび太。これは念力の特訓なのである。

ジー

「うーん。」

未だにE・S・P訓練ボックスと睨めっこするのび太。そこへ、

「この箱がどうかしたのか？」

「!!!」

顔を上げるとそこには、茶髪で翠眼の少年がいた。

「話しかけた！気持ちが悪れた。」

「???」

「もう少しで上手くいくところだったのに……………。」

「何が？」

「超能力さ。」

「超・能力…………？」

「テレキネシス、念力だよ！手を触れずに物を動かしたりするの。」

「プツ。」

すると少年は腹を抑えて笑い出した。

「アハハハハハ。よせ、よせ、よせ、そんなことできるわけないだろ！」

少年の反応にのび太は、眉間にシワを寄せる。

「……………君、誰？」

「ハハハハハ。あつ、悪かった。俺はタツミ。」

「僕は野比のび太。」

お互いに自己紹介をすると、のび太はE・S・P訓練ボックスの方を向く。

「よし、見てろ！今からこの箱を手を触れずに動かしてやる。じーっ。」

するとE・S・P訓練ボックスが少しだけ宙に浮いた。

「おお、凄い浮いてる！」

「うーん。」

「頑張れ！落とすな。しっかり、もう少しだ。」

最終章：修行を斬る

帝国のとある空き地、そこには大量の空き缶が並べられていた。のび太は持っていた銃で空き缶を一つずつ、外すことなく撃ち抜いていく。もちろん弾はプラスチックである。

「わあー、すごい！百発百中じゃないか。」

のび太の射撃の腕前に興奮を覚えるタツミ。タツミに褒められ、嬉しくなるのび太だが、

「誰にでも取り柄はあるんだね。こういうくだらないことだと、のび太は実に上手い！」
後ろで座っていた、黒髪の少女が声を上げる。彼女はクロメ。タツミの仲間の一人である。

「じつに腹の立つ褒め方だな。」

「だって、それプラスチックでしょ？当たっても、痛いだけだよ！」

「……………」

「それにのび太って、ここぞって時に弱そう。」

クスクスと笑うクロメ。

「……」
凶星をさされて、何も言い返せないのび太。

そしてアジトでは

「よし、次は瞬間移動だ！」

「瞬間移動？」

「姿を消す、同時に離れた場所に現れる。例えば、ここからトイレに行こうと思えば……」

のび太は目を閉じると、

「心の中でトイレに長紐をひっかけて、それをぐいって引き寄せる感じ。うーん。」

隣でその様子を見守るドラえもん。

「グイ、グイ、グイ。」

するとどこからともなく便器が飛んで来て

ガン！

ドラえもんの頭を直撃する。

「やっぱり無理だな。何か他のものにしてよう！」

「何をいまさら、決めたことはとことんまでやるんだ！」

ドラえもんの勢いに飲まれ、特訓は日が暮れるまで続いた。

「ねえ、どうしても3年かかるの？」

「何が？」

「訓練。」

「うん、一人前の超能力者になるには、毎日3時間ずつ訓練して3年かかるんだ。」

「そんなあ……もつと簡単に超能力者になれないかなあ……。」

のび太の発言にドラえもんは呆れる。

「君はすぐそうやって、楽をしようとする。」

「違うよ。これじゃあ、いつまでたつても宮殿に入れないし、サヨちゃん達だって守れるかどうか……。」

「そうだな……。」

「ねえ、ドラえもん。1日で3年の訓練ができる道具はない？」

「そんな物あるわけ……。」

「えっ!？」

ドラえもんの返答に驚くのび太。ドラえもんはポケットに手を入れると

「かんづめかん!!」

かんづめかんー巨大な缶詰の形をした道具で、中は圧縮空間となっており仕事に必要な道具がそろっているほか、出前が取れたりマツサージを受けられたりとサービス面も万全。また、中の時間の流れは外より早い（中で1日過ぎても、外では1時間しか経過しない）ため結果少ない時間で大量の仕事ができるようになってる。

「そうか! 確かこの中に入れば……。」

「そう、一時間で1日の訓練が出来る。」

「えーと、3年は1095日で、1日3時間だから……。」

「訓練は3285時間。でも僕たちは1日9時間だから、365日かかる。カンズメの中で365日過ごすしても、外では15日だ。」

「わーい！僕はやるぞ！この世界で最初の超能力者になるんだ！」

「えっ、しばらく留守にする？」

「うん。ちよつと訳あって・・・。」

しばらく留守にすることをタツミとクロメに報告するのび太。

「それでいつ帰って来るんだ？」

「二週間ぐらいかな。でも今度会う時は、ちゃんとした超能力者になってるから。」

「ああ、楽しみにしてるぜ！」

「まっ、期待してないけどね。」

三人で握手を交わす。

「それまでにこの国を今よりずーと豊かにしてみせる。」

「うん。」

のび太はニツコリ笑う。

「超能力者、野比のび太はしばらく、休業だ！」

そう言いながらタツミたちと別れるのび太。

帝具戦

プロローグ

「まだまだだな。私に傷を負わせる程ではない。」

正面から迫り来る帝国最強の將軍。今、ナイトレイドのアジトは敵の総攻撃を受けている。敵はエスデスに加えてイエガーズの残等。

「……………」

ガッ、ガッ、ガッ

手負いのブラートは、同じく手負であるレオーネ、マイン、アカメを抱きかかえると「ブラート?」

穴の空いた天井めがけて彼女らを放り投げた。

「どこまでも駆け抜ける。見守ってるからよ……みんな……」

『「ブラート!!!」』

仲間が脱出した様子を見届けるブラートだったが、

「逃がさん!!」

すぐにエスデスは彼女たちを追撃しようとする。

「やらせるか!!」

放った氷の結晶が全て撃ち落とされる。

「お前の奥の手はやはり一回きりで打ち止めのようだな。奴らを追撃はさせん。」

その言葉にため息をつく、エスデス。

「自らを盾として仲間を逃す時間を稼ぐか。ナジエンダの部下は甘い奴ばかりだな。」

「……………」

「………… お前がああの一〇〇人斬りのブラートか？」

「そうだ。」

「その名を覚えておいてやろう。」

「……………」

「命の散り際、その最後のあがきで楽しませてみせろ!!」

「おとおおおおおおおおおおおおお!!」

ガチン

!!!!!!

「ここともお別れですね。」

「よく生き延びられたわね。」

崩壊したアジトを遠くから眺めながら、今は亡きブライトに心から感謝するシエーレとマイン。

「そういえば明日ね、あいつらが帰ってくるの。」

「のび太たちですか？」

「本気で超能力者になれると思っっているのかしら？」

「問題ないと思いますよ。」

「めずらしいわね。シエーレが評価するなんて。」

「マインの言う通り、彼には殺しの才能はありません。」

「だったら……『ですが』……!？」

「彼には別の……私たちが持つてない才能があります。」

「それって……」

『!?!』

いきなり鋭い視線を感じ、振り向く。

「今、隠れた奴。気付いてるわよ。出てきなさい。」

ザツ

すると木の陰からフードを被った男が出てきた。

「うまく隠れたつもりだったけど・・・さすが悪名高いナイトレイド。」

ズツ

男はポケットから何かを取り出し、地面に押し付ける。

「帝具、シヤンバラ発動!!!」

突然周りが光に包まれる。

「な・・・なに!?!」

「くっ。」

目を開けると、二人は見知らぬ場所にいた。どうやらどこかの建物の中のような。そして壁に掲げてある飾りに目をやると・・・

「な!?!」

「()は・・・!!」

マインとシェーレは気づいた。

「宮殿だよ、お前たちは罨にかかったって訳だ!!」
フーアの男が声を上げた。

第一章：三年を斬る

「ハア、ハア、ハア。」

森の中を必死で走る女性。彼女は赤いリボンの付いたヘッドホンを付けており、左腕の指は全てなくなっている。先程の敵の攻撃で帝具もろとも切断されてしまったのである。彼女の名はチエルシー、ナイトレイドの新メンバーである。暗殺者としては一流で、アカメと同じくらい多くの任務を成功させてきた手練れである。彼女の帝具はガイアファンデーション、他人や動物等、様々なモノに変身できる能力を持つ。大きさや性別、種別などは問わない為、隠密活動に非常に役立ち、相手に警戒させずに近づき仕留めることも可能。彼女はこれを利用し、ターゲットに接近し、針を対象の首に刺すという戦法で暗殺していた。ただし、あくまで変身するだけで身体能力は使用者に準拠する為、戦闘力が上がったりはしない。なので、彼女の戦闘能力はほぼゼロなのである。

「くっ、まさか半分人間やめてるなんて……」

森を抜けると彼女は小さな洞窟に行き当たる。

「ハア、ハア、洞窟？」

するとチエルシーは洞窟から何か不思議な力を感じた。例えるなら、どんな願いも叶

えてくれそうなそんな力である。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

チエルシーは、洞窟の中に入っていった。中には大きな岩や石ころが大量に転がってあるが、それでも彼女はそんな険しい道をなんとか進んでいく。しばらくすると何かに足をぶつける。

「これは・・・・・・・・・・・・・・・・？」

それは車一台分くらいある大きなカンズメであった。

その頃、カンズメの中では、

「のび太くん!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「起きろ、のび太くん!朝だぞ!」

「うるさいな・・・・・・・・もう少し寝かせてくれよ。」

「のび太くん、今日がなんの日か忘れたの?」

「ん?あつ、そうか!今日だったけ!」

のび太は布団の中から飛び出し、急いで着替えを始める。

「早いねえ。三年もあつという間だったね・・・・。」

カレンダーを見ながらドラえもんは静かに囁く。のび太は朝食を食べ終わると、ドラえもんの方を向く。

「さつ、最後のおさらいだ。まず、テレキネシス!」

三年間の成果を確認するのび太とドラえもん。

その頃、外では

コンコン

チエルシーはカンズメを叩いたり、蹴ったりしてみるのが、何も起きない。すると突然、
パアン

チエルシーは背後から撃たれ、大量の血を吐く。

「あ……………」

彼女はそのまま仰向けの状態で倒れる。

「ああ……………そっか。報いを受けるのは私の方だったか……………」

第二章：帰国を斬る

「ちえ．．．．．」

ナタラがチエルシーの首を槍で切り落とそうとする。チエルシーの目から一粒の涙が溢れ、彼女は死を覚悟した。だが、

「??」

何も起きない。ゆっくり目を開けると、ナタラが固まっている。ナタラだけじゃない、側にいるドーヤもまるで時間が止まっているかのようにピクリとも動かない。しばらくすると、二体は粉々に砕け散った。

「!」

いきなりのことに驚くチエルシー。すると後ろから声がした。

「ただいま!」

「1095日トレーニング完了!」

カンズメが開き、中から少年とロボットが出てくる。日本最強ヒーローたちのお帰りである。

「メガネをかけた少年と青い狸．．．．．」

チエルシーは何が何だか分からず呆然とする。だが以前読んだ報告書を思い出す。
「のび太とドラえもん……」。

そして、とあるキャンプ場

「チエルシー……」

うつ伏せ状態のまま、人差し指で地面に仲間の名前を書く少女。

「腹が減りすぎてアカメがダウンしちゃったじゃないか。何してんだあいつ。」

そう言いながら、アカメの頭を撫でるレオーネ。

「あくあ、とりよせバッグがあればなあ、すぐなんだけどなく。」

今この場にはいない仲間たちの存在を語るレオーネ。するとナジエンダとアカメも会話に加わる。

「それよりノビール水道管だ。地下の水脈を探り当てて冷たい水を……」

「いや、グルメテーブルかけがいい。肉、肉、肉、お望みしただけだからな。」

三人は会話に花をさかせる。さつきまで死人のような顔をしていたのが嘘のようだ。

しばらくすると、ベッドで寝ているナジエンダが何かを感じ取る。

「これは……。……。チェルシーの身に危険が及んでいるな。私の勤がそう告げる。

「?!」

ナジエンダの発言にアカメとレオーネは飛び起きる。

「ただいまー」

突然後ろから見知った声があった。アカメたちは振り返る。そして久々の仲間の再会に笑顔になる。

「そ……。……そうだったのか……。ごめん。15日も待たせちゃって……。」

アカメたちから帝都の現状を聞かされ、シンミリするのび太。

「……………。」

ゴン

「あでっ。」

いきなりのび太の頭にチョップを下すアカメ。

「いくらでも待つき、仲間だからな！」

アカメの言葉に頷くレオーネとナジエンダ。

「ありがとう……。」

「どうした？」

「なんかアカメの顔見たらすごいホツとした……。」

その言葉に笑みを浮かべるアカメ。

「おかえりのび太。」

「うん……ただいま。」

お互いに握手をする二人。

「それより、ご飯にしようぜ！」

「では早速、グルメテーブルかけ!!」

第三章：処刑を斬る

街の中央広場が騒い。また公開処刑かと思に行くと、

「こ．．．これは．．．．．。」

看板に書いてある内容に驚く国民たち。

「何て書いてあるんだろ？」

字が読めず困り果てるのび太。するとドラえもんはポケットに手をいれと、

「ほんやくコンニャク!!」

こんにやくを食べ終わると、看板に目を向ける。

「反乱分子、マインの公開処刑．．!!」

「なんだって!!」

その夜：

「助けに行くとかバカなこといわないでよのび太。」

「??？」

チエルシーに釘を刺されるのび太。

「救出なんて絶対無理！だって高札によると待ち構えている処刑担当は……エスデスとブドー。最強最悪の組み合わせ。」

「……………」

「100%の死よ。」

「それがどうしたの？」

「えっ？」

「こつちには二十二世紀の科学の結晶、ドラえもんがいるんだぞ！」

のび太の言葉にドラえもんは思わず笑みを浮かべる。

「チエルシー、言った通りだ。みんながなんと言おうと僕たちは行くからね。友達をほつてはおけないんだ。」

「……………」

「当然、僕もついてくから心配いりません。」

チエルシーはのび太たちを眺めて、不思議に気持ちになる。どうしてここまで絶望的な状況なのにここまで希望を抱いて、前向きになれるのか。自分より年下なのに。ただの世間しらずなのか？

そして勢い良く、アジトのドアを開けると

「!!」

そこにはアカメが待ち構えていた。

「どこに行く?」

「どこって、マインを助けにじゃないか。」

「これは罠だ。」

「知ってるよ、でも友達をほってはおけないんだ。」

「お前はこの国の人間じゃない、関係ないだろう。」

自分から人を巻き込んでおいて、今更という発言である。

「関係なくなんかないよ! 僕達友達だろ?! アカメたちとは身分は違うかもしれないけ

ど、1+1は1より大きいよ！ 助け合うのは当たり前じゃないか!!!」

「……………」

「だからぼくた『わかった』……えっ?」

「私も行く。」

「……………」

「力を合わせれば、生還の可能性も増す。」

アカメの言葉に笑みを浮かべるのび太。すると突然アカメの後ろから声がある。

「じゃあ、決まりだ!」

「レオーネさん?」

「と言う訳なんでボス、止めないでよ!」

「誰が止めると言った?」

「ナジエンダさん?」

「この公開処刑が革命軍の指揮を下げるための見せしめだとしたら、それこそ我々が阻止せねばならない。それにマインのパンプキンは最終決戦のさいに必ず必要だ。」

「……………」

「ナイトレイド、緊急ミッションだ!マインを救出するぞ!」

第四章：侵入を斬る

公開処刑当日。

「助けに来ると思うかナイトレイドは。」

「ナジエンダの甘さからすると十分ありえる。」

十字架にはりつけられているマインを眺めながら会話をする半日の処刑担当人、エスデスとブドー。どちらも帝都では最強最悪と呼ばれている将軍である。

「この隙に宮殿を襲われる確率の方が遥かに高いと思うが？」

「それは大丈夫だろ。今、宮殿には……。」

「フツ、たしかに。」

「まあ我慢してしばらくここにいてくれ。」

「この見世物は私とお前の脅威を知らしめるのが目的……だそうだからな。」

「大臣の考えそうなことだな。」

バツ

『「!」』

いきなり背後に気配を感じ、振り向く。

「アカメ……!!」

アカメの不意打ちをなんとか剣で受け止めるエスデス。

ガチン

群青色の髪に角を生やした男は、棒状の武器でブドーとぶつかり合う。

「さあつ、目の前の敵を駆逐しろ!! スサノオ!!」

「わかった。」

ナジエンダの指示に対して無表情に返事をする。

「ナイトレイドか? いつの間に……。」

「どうやってここに侵入したというのだ。」

いきなりの展開に動揺する將軍たち。

『「忘れ物送り届け機ささままだな……。」』

ナイトレイドメンバーは一斉に呟く。

「バカ、なんで来たのよ!!」

「助けに来てやったのに何その言い方。」

マインの発言に笑いながら文句言うレオーネ。

「仲間を救いに来たか、ナイトレイド！」

ブドーがスサノオから距離をとると、雷撃を放つ。

「いくぞ!!」

「ああ。」

「分かった！」

「マインは返してもらおうぞ!!」

アカメたちが処刑場で暴れている頃、宮殿では……………
「……は通さない！」

バン、バン、バン!!

楽々宮殿に忍び込めたのび太たち。今も兵士たちをドラえもんが秘密道具のシヨツ

クガンで気絶させる。兵士たちの攻撃は全てのび太のテレキネシスで無効にする。

「広いな、迷子になりそう……」

さき程から階段が上がったり、下がったり、さすがのび太たちもクタクタである。

ゴン!!

「いたっ。」

「大丈夫、のび太くん？」

いきなり曲がった角で誰かにぶつかる。

「すいません、急いでるもので。」

こんな時でもぶつかった人に謝る正直な人、野比のび太。

「のび太!? ドラえもん!」

突然懐かしい声でした。

「えっ?」

顔を上げると、そこには見知った顔があった。整ったあどけない顔立ち、綺麗な花の髪飾り、そして黒髪。この星での最初の友達。

「サヨちゃん、どうしてここに!」

第五章：幼馴染みを斬る

サヨと手分けして宮殿を探索するのび太とドラえもん。

「あつた!!」

部屋の扉を開けて、それらを見つける。

「パンプキンとエクスタス。」

ドラえもんは帝具を二つともポケットにしまう。

「あとは、シエーレさんを助け出すだけだね。」

ふと周りを見渡す。部屋中には切り傷や焦げ跡がある。誰かの部屋にしては悲惨すぎる。すると部屋に置いてあつた一枚の写真に目がとまる。

「これは……」

そこには三人の少年少女が映っていた。

「サヨちゃん。それと……」

「のび太くん。多分、頭にバンダナを巻いている男の子がイエヤスくんだよ。」

「たしか……、サヨちゃんの幼馴染みの。」

以前、サヨは自分にはだらしがない幼馴染みがいたと言っていた。寝坊助のうえに方

向音痴、だけど彼女にとっては大切な友達だったそうだ。

「この真ん中にいる男の子、誰だろう?」

「写真が破れていてわかんないな。」

すると写真の右下に小さいが文字が書かれてあるのを見つける。

「えーと、サヨ、イエヤス、それと……タ……ツ……」

カン

「誰? 誰かいるの?」

部屋の外で物音がしたので見に行く。

「よく来たね、のび太。」

「??」

「案外早いものだね、一ヶ月って。それでどうだ? 修業の成果は。」

「タツミ!?! どうしてここに?」

突然現れた親友に驚くのび太。今日は懐かしい奴に良く会う日だなと心の中で思う

のだった。

「久しぶりだね。」

そう言いながらタツミに近づくのび太だったが、

「危ない!!」

後ろから誰かに襟を掴まれ、引っ張られるのび太。

「ハア〜。まだ生きてたのか、サヨ。」

そう言いながらため息をつくタツミ。

「サヨちゃん？」

「シエーレさんは助け出したわ。だから早く逃げて。ここは私に任せて！」

タツミは指を鳴らした。するといきなり地面が揺れ始める。

「うわあああああ!!」

サヨは構わず剣を抜くと、そのままタツミに飛びかかる。

「フン。」

サヨの剣を片手で受け止めると、もう片方の手で彼女の首を絞める。

「はか、ぐあつ！」

「いつまで昔のノリだ、お前!!今のお前なんて怖くも何ともないんだよ!!」

サヨを乱暴に投げ捨てると、タツミは左手で手刀を作り、サヨに向けて構える。すると何かがサヨのわき腹に突き刺さる。

「ガハツ!!」

サヨは口から大量の血を吐きだす。

「お前が生きているとは意外だったな。あの時に死んだと思ってたぜ。」

「ハア、ハア、ハア。」

肩で息をしながらなんとか立ち上がろうとするサヨ。

「周りを見てみるよ。もう誰もいねえ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「この国は不滅・・・・・・・・お前は必要ない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「お前はもうゴミだ。ゴミは死んどけ。」

第六章：生還を斬る

「ハア、ハア、ハア。」

サヨの脇腹から大量の血がこぼれ出る。

「消えろ。」

タツミは右の手の平をサヨに向ける。しかしのび太はサヨとドラえもんの手を瞬時に掴むと、

「テレポーターション！」

その場を後にした。残されたタツミは笑みを浮かべる。

「今のがテレポーターション……フフフ。」

シユン

テレポーターションした場所は処刑場である。いきなり現れたドラえもんたちにア
カメたちは驚く。

「このタイミングで新手か！」

エスデスは指をならずと、巨大な氷の塊がのび太たちに襲いかかる。

ドラえもんはポケットに手を入れると、

「空気砲、ドガン!!」

秘密道具で塊を破壊する。

『!?!』

そして頭上を見て驚愕した。空には黒雲があり、雷があらゆる所に落ちている。

「なっ!?!」

「お前の相手は雷ではなく氷だ!!」

『!?!』

振り向くとエスデスがのび太に斬りかかろうとしていた。

「のび太くん!」

ドラえもんは瞬時にポケットからエクスタスを取り出し、のび太に手渡す。

ガキイ、ガ、ガ

エスデスの攻撃をエクスタスで受け止める。

「念入りに凍らせて、確保だ。」

エスデスはのび太に手を伸ばすが、

バツ

「!?回避したと!」

のび太は一瞬で彼女の背後に回りこみ、拳を振り上げる。

バキイ

エスデスに一撃を入れ、吹っ飛ばす。

(あのエスデスに……。)

のび太の活躍を遠くから見えて驚くアカメ。

「後はみんなで逃げるだけだ。」

「ダメだ、まだ逃げる事は出来ない……。」

アカメの視線の先には怒り狂ったブドー将軍がいた。

「そうはさせん……!!!」

ドラえもんは通り抜けフープを処刑場の壁に付ける。

「みんな、早く!」

「逃がさん!」

ブドーの雷撃をエクスタスで受け止めるのび太。

「だったらこれでどう!!」

ドン!!

ドラえもんからパンプキンを受け取り、放射するマインだったが、

「!」

ピキッ

(パンプキンが……無理させすぎたか。)

宮殿での戦いで無理をさせ過ぎたせい、パンプキンにヒビが入る。

ガキッ

「アドラメレク!!」

ドオッ

「アカメ!!レオーネ!!」

ブドーに飛びかかるアカメとレオーネだったが、彼の一撃で吹き飛ばされる。

「逃げ場が……」

アカメは呟いた。これでは全滅、全員生きて帰ることなどできはしないと。ドラえもんは急いでポケットの中身を出し始める。

「えーと、何かないかな、何か……」

「体の中がどれだけ傷つこうと、構わん。こいつらはここで倒す!!」

そう言いながら迫り来る大將軍に絶望の顔をするナイトレイドたち。

「冗談じゃないわよ……!アタシは必ず生き延びて勝ち組みになるんだ!!」

ボロボロのパンプキンを抱えながらマインが叫ぶ。するとそのび太はパンプキン、エクスタス、そしてドラえもんがポケットから出したある道具に目をつける。そしてとんでもないことを思いつく。

「そうだ!」

マインの手を取ると彼女を強引に引つ張る。

「ちよつと、何?」

のび太はドラえもんが出した秘密道具の前に立つ。その道具とは

ウルトラミキサー。二つのものをミックスして、一つの新たなハイブリッド(合成物・

交配種)にするひみつ道具。

第七章：勝ち組を斬る

「なによ、これ？」

「これはウルトラミキサー。」

「ウルトラミキサー？」

のび太の説明に首を傾げるアカメとマイン。

「これでエクスタスとパンプキンを合体させよう。」

「合体!?!」

のび太のとんでもない提案に唾然とする一同。当然だろう、帝具同士の合体なんて聞いたことない。むしろ土壇場でこんなこと言い出す馬鹿は普通いない。

「ダメだ、危険すぎる!」

アカメが真っ先に反対する。そもそも通常帝具は一人に一つ。もし一人が二つの帝具を同時に使ったら、その人間は崩壊する。ましてや合体した帝具ならなおさらのことである。

「情けだ、トドメを刺してやろう。」

いつの間にか上空にいるブドーが雷をまといながら叫んだ。

「浮いている……!? 帝具の力なのか？」

「あそこまで規格外とか……!」

「くっ……」。

「僕たちはここで終わらない。なるんだよ、勝ち組に!」

そう叫びながらのび太は吸引口の片方をエクスタスに付ける。のび太の言葉にマインはハッと我にかえる。

「!？」

マインは西の異民族とのハーフで、差別され続けた悲惨な幼少時代を過ごし、それゆえ国交で多くの血が入り交じった「差別のない」新国家を誕生させるために戦っている。差別されてきた反動からか、「勝ち組」への執着も強い。

「合体すれば本当にブドーに勝てるの？」

「マイン!？」

「わかんない、でも今より強くなるのは確かだよ。」

「我が帝具アドラメレクの奥の手、喰らうがいい!!」

マインはもう片方の吸引口をボロボロのパンプキンに付ける。

「全員で、誰一人欠けることなく、ここから戻るのよ！絶対に！」

「ソリッドシューター!!!」

巨大な雷の玉がのび太たちに向かって放たれた。のび太はスイッチを入れると、二つの帝具は中へ吸い込まれる。しばらくすると本体の上部から強い光が放たれ、

「っ、これは!!」

ブドーの巨大な雷の玉を消し飛ばし、そのまま周囲を包みこむ。

「これは……」。

「眩しい。」

あまりの眩しさに、目を瞑る一同。

ギヤアアアア

ピューン

二つの鳴き声が聞こえる。のび太は目を開けると、見たこともない二体の危険種がいた。二体は雄叫びをあげると、混ざりあうように体を重ね、消えていった。しばらくすると、本体の上部から何かが吐き出される。

「これは……?」

合体、万物砲台「エクスキーン」。吐き出された物を手取るのび太。それはパンプキンでもない、もちろんエクスタスでもない。形は銃というより、バズーカに近いが引き金はなく、あるのは握り鋏（和鋏）。

「どう使うんだろう?」

すると空にいるブドーが叫んだ。

「アドラメレクよ……轟雷を呼び込め!!」

「やばい!」

「マイン!のび太!」

第八章：戦う意味を斬る

のび太はエクスキンをブドーに向けて構える。

「僕に力を貸してくれ!!!」

「裁きだ！ソリッドシユーター!!!」

巨大な雷の玉が再びのび太たちに向かって放たれた。

「ぐう……ああ。」

のび太は口から大量の血を吐き出しながらも、なんとか帝具を構える。するとマインはのび太の側に来ると、一緒にエクスキンを支える。

「ふざけんな……！何がなんでもアタシたちは帰るのよ……！」

二人は手前にある握り鋏をハサミを使う時のように左右に押してから、力強く引いてみる。

「無駄だ！この雷撃の前では誰もがひれ伏す！」

エクスキンから円形型の光が発射される光は回転しながらブドーの放った玉を真っ二つにする。

「なに!?!」

光はそのままブドーの方に向かっていく。

「なんの更なる雷撃で押し返す!!……くっ……」

ブドーは雷撃で押し返そとするが、

「うわおおおおおお!!」

光は雷撃ごとブドーを真つ二つにする。

「!?!」

ブドーの体は左右に割れ、そのまま地面に落下する。

「……勝った」

ドサツ

のび太とマインはその場に倒れこむ。

「のび太!!マイン!!」

急いでのび太たちの元へ駆けつけるアカメたち。

「ブドーを仕留めるとは、お前たちというやつは……」

「よし、すぐに脱出するぞ!!」

ナジエンダの言葉に全員頷く。だが……

まだだよ!!

「!?!」

振り向くと、そこには・・・

「タツミ・・・」

タツミが立っていた。のび太は、動かない体にムチを打ってなんとか立ち上がる。

「へえ。ブドーを倒したんだ、嬉しいよのび太。」

タツミは嬉しそうに笑う。

「どうだろう、俺も今ここでお前と戦ってみたいな。」

するとのび太はドラえもんの横で倒れているサヨに視線を向ける。

（今、目の前にいるのがサヨちゃんが見たい相手。）

ドラえもんはポケットに手を入れると、

「名刀電光丸!!」

名刀電光丸―レーダーが組み込まれている剣。相手の動きをキャッチすると、自動的に相手を倒す装置が働く。敵洞察センサーが敵の動きを探り、コンピューターが敵の動きを上回る作戦を計算する。

「のび太くん!」

ドラえもんは剣をのび太に投げて渡す。

「来なよ、のび太!」

のび太は剣を受け取り、タツミに斬りかかるが、全てかわされてしまう。なんとか動き回って攻撃を当てようとするのび太だったが

「ねえ、のび太……」

「???」

「人間は醜い、愚かだな。」

「……………」

「お前もこつち（帝国）にこいよ。ここには永遠が約束される。」

「僕は……………ハア……………ハア……………こつち（ナイトレイド）に残るよ。」

「分からないな。この国の人間でもないのに……………別の惑星の連中のために何故そこまで？」

「……………ハア……………ハア……………ハア……………ハア……………」

「お前にとつてこの戦いになんの意味がある？」

「意味なんてないよ……………ただ僕は……………」

「??？」

「友達を……………放つては置けないんだ!!」

「……………お前とは友達になれそうにないのかな。」

タツミは掌を空に掲げる。すると見えない何かがのび太に向かって放たれる。

「のび太くん!」

ドラえもんはのび太の前に立つとポケットに手を入れる。

「ひらりマント!!」

なんとかマントで攻撃を跳ね返そうとするが、

わああああ!!!

そのまま二人は吹き飛ばされてしまう。

「終わりだ。」

いつの間にか大勢の警備隊がアカメたちを取り囲んでいる。

「これで……もう私たちと戦える力を持つ者はいない、全員を拷問室へご案内しよう。」

エスデスの合図でアカメたちに飛びかかろうとする警備隊。だが

「待て!!!」

『!?!』

声の主を全員が捉える。エスデスと警備隊がきよとした顔でタツミを見つめる。

ピタッ

『[[[[[?!]]]]』

タツミの左腕から一筋の血が流れる。その光景に警備隊は勿論、エスデスも驚く。

「満身創痍の中で俺に傷をつけた。初めて会った時とは全然違う。強くなったな、のび

太。」

血まみれの手を見ながら笑みを浮かべる。

「公開処刑はもういいや。帰るぞ！ワイルドハントにもそう伝えておけ。」

「は、はい。」

タツミに言われ、エスデスたちはそのまま処刑場を後にした。

「のび太、次戦う時は殺すからな。」

それだけ言うのとタツミは去って言った。

「情けない……なんのためにあんなに修業したの……このままでは……」

ドラえもんとのび太が振り向くと、そこには血まみれのサヨが立っていた。

「サヨちゃん！」

「大丈夫！しっかりして！」

二人は急いでサヨの側にきた。

「説明したいけど、無理みたい。でも一言だけ……」

『??』

「ありがとう。」

ドサッ

そのままサヨは倒れる。

『「サヨちゃん！」』

第九章：上の空を斬る

「アカメちゃん　つてさー、可愛いけど疑問が一つあるの。」

「なんだ？」

のび太と特訓をしていたアカメにチエルシーが近づいてきた。そしてアカメのスカートの裾すそをつまみ、少しずつ持ち上げる。

「……………」

「ギリギリまでサービス。」

するとアカメはチエルシーの頭に手刀を振り下ろす。

ビシッ

「あ、良かった怒った。」

「なんなんだいきなり。」

「いやあ女の子としての恥じらいがあるのかどうか、ふと心配になってね。」

「当然だ！一般常識は教わっている。」

「じゃあ、国が新しくなったら、一緒にショッピング行こうよ！アカメちゃん可愛いんだからオシヤレしないと。」

「・・・・・・・・似合わないと思うが・・・・・・・・」

「そんなことはないよ、最高の素材。最高に仕上げてみせる！」

「・・・・・・・・ありがとう。」

するとチエルシーはのび太に視線を向けると、

「のび太、アンタもそのダサイ服なんとかしなさいよ。磨けば光るんだから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん・・・・・・・・・・そうだね。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

次の日、酔っ払ったレオーネがのび太にこんな質問を試してみた。

「のび太さあ・・・・・・・・ウチの女子陣の中で誰が一番好み？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「アカメちゃんはクールな肉食女子。とぼけたところもご愛敬。マインは絵に描いたようなツンツン娘。シエーレはおっとりメガネ。一番優しいお姉さん。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「んんん？まつたくその気がないなんて言わせないわよ？ほれほれ、お姉さんに言つてごらんなさい？」

「……………うん……………そうだね。」

さらに次の日、マインはのび太ををシヨッピングに誘うが、

【洋服屋】

シヤアア

「ねえねえ！この服どう？似合う？」

着試着室のカーテンが開くと、白と黒のツートンの服を着たマインが出て来た。その姿にのび太は

「……………ああ……………いいんじゃないか。」

「……………。」

【お菓子屋】

「うーん！このパフエおいしい♪」

お菓子屋を見つけると、マインは買い食いし始めた。その様子を遠くから眺めるのび太。

「……………」

マインはのび太の側に来ると、

「はいーこれ、アンタの分……」

左手に持っていたソフトクリームを差し出す。

「……………」

「なによ、いらなの？」

のび太は無言でソフトクリームを受け取り、

ペロッ

「……………ああ……………おいしい……………」

食べ始めるが、その様子にマインは

「いい加減にしなさいよ!!」

ベシッ

「!?!」

右手に持っていたソフトクリームをのび太の顔面に投げつける。

「この間っから、何話しても上の空でボーとして!」

「……………ああ……………ごめん、マイン。」

「ごめんじゃない!私と話しているのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボーとし

てなさいよ！」

それだけ言うと、マインは怒りながら帰って行った。

「……………」

残されたのび太はそのまま呆然と立ち尽くす。

「!!」

「ボヤボヤしてるとレオーネに……」

バシイ

ナジエンダにお湯をぶっかけ、即退場するマイン。

「もうあがるわ!」

怒りながら脱衣場に向かうマイン。

「フ……若いな。」

そんな彼女をナジエンダはクスクスと笑う。

『力でいままでお前を馬鹿にしていたヤツらに復讐できるとぜ』

のび太の頭に浮かぶあの時の言葉。この何日間、彼は悩んでいた。何故なら、彼は学

校では

「また遅刻か、のび太。廊下に立ってなさい！」

家では、

「勉強が勉強して勉強になって勉強する事が 勉強の勉強だから勉強なのよ！わかった
!？」

そして友達には

「このまま無事に逃げられると思ったら、大間違いだぞ。必ず捕まえて空手の練習台に
使ってやる。一、三十発は殴らせてもらうからな！」

「新記録だつてねえ。すごいなあ。君のママが、この大ニュースを聞いたら、どんなによ
ろこぶか。」

「ほほほほほ！忘れんぼのあんたが？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すると突然声がした。

「おい！こら、覗き魔！何してんのよ田舎者!!」

「!?」

振り返るとマインがいた。

「今日は手下としてあたしに付き従いなさい。」

「え〜っ!? また!？」

「いいから早く来なさいよ!」

マインの買物に再び付き合わされることになったのび太。するとマインは突然立ち止まる。

「ねえ、のび太。」

「??？」

「この戦いが終わったたら大事な話があるんだけど、聞いてくれない?」

「今じゃダメなの?」

「ダメ。」

「??？」

（これでいいわ。ボスとアタシの考えは逆。生き延びたいって気持ちを少しでも強くしないとダメよね。）

自分の気持ちを押しとどめるマイン。すると彼女は頭の中で声が聞こえた。

『目覚めよ……』

「!?」

マインはその場に崩れ落ちる。

ドクン

ドクン

「ああああああああ!!」

マインは頭を押さえながら苦しみだす。

『目覚めるのだ!!』

『目覚めよ、サンプル M!!!』

「いやあああああああ!!!」

「マイン、大丈夫!」

のび太は急いでマインのもとに駆け寄るが

ボコオ

ボコオ

ブチッ

「何、これ!!?」

マインの背中から翼のような物が飛び出す。

『サンプル M。その男をやっザキにしろ。』

「!?」

その瞬間、マインの目から光が消える。

ボコオ

ボコオ

彼女の体はみるみる変化していく。

「な……なんだコレは！コレじゃまるで……危険種じゃない。」

ギヤアアアアア!!!

最早、目の前にいるのはマインではなく、理性を持たないタダの怪物だった。

「ドラえもん!!!」

怪物と化したマインから逃げるのび太だったが、

「行き止まりだ……」

目の前には崖、後ろには怪物。

ギヤアアアアア!!!

『さあ、やれ！サンプル M!!小僧の頭蓋を粉々に打ち砕いてしまえ!!』
「マイン!!!」

必死で彼女の名前を叫ぶのび太。

「……………の……………び……………た？」

その叫びに怪物の動きが止まる。だが

『何をしている、早く砕け!!』

ギヤアアアア!!!

すぐに怪物はその鋭い爪でのび太を切り裂こうとする。

スルッ

「わああああ!!」

運悪く、のび太は足を滑らせて崖から転落した。

第十一章：再会を斬る

崖から転落したのび太は、何故か川の近くで倒れていた。

つんつん

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

何かがのび太の顔をつつく。

つんつん

「う・・・・・・・・う・・・・・・・・う・・・・・・・・。」

徐々に意識がハッキリしてくる。目を開けると

「じーーーーーーーーーーーーーーーーつ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ク・・・・・・・・口・・・・・・・・メ？」

目の前には懐かしい顔があった。約2ヶ月ぶりの再会である。

「つて。何してんの!？」

彼女が持っているのは自分が来ているはずのシャツ。いつの間にか脱がされていた。

「あの怪物の爪には毒があるから、掠り傷でも危ないと思って・・・・・・・・。」

のび太は自分の体を見る。あの高さから落ちたのに怪我をしていない。どうやらク

ロメに助けられたらしい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

のび太の表情が暗くなる。

「怪物・・・・・・・・なんかじゃないよ。あれは・・・・・・・・マイン。僕の大切な友達さ。」

「『元』でしょ?」

「違うよ、あれはマインだよ。僕が呼んだ時だつて、返事をした。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

なんと少しでも友達を救いたい。のび太の心にはそれだけしかなかった。

「どうしてこんなことになったんだろう・・・・・・・・ マインはどうしちゃったんだ?」

「彼女は帝国に捕まった時、何らかの改造を受けたらしいね。」

「改造・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

クロメの話によると帝都には人体実験を好む医者があり、彼は帝具を使ってさまざまな兵器を製造し、強化手術した人間を私兵として率いるらしい。

「何とか僕のことを思い出させれば・・・・・・・・。」

「あの怪物の呪いを解く方法は・・・・・・・・。」

クロメは持っていた袋からお菓子を一つ取り出し、口に入れる。

「殺すしかない。そしてそれができるのは、のび太だけ。」

「簡単に言わないでよ！友達を殺せるわけないでしょ!？」

ゴン

「あでっ。」

いきなりのび太の頭にチョップを下すクロメ。

「ついて来て。」

クロメはお菓子を食べ終わると、歩き出す。

「??？」

のび太はクロメの後を付いていくと、小さな町へとたどり着く。

「!？」

建物は無残に破壊され、辺り一面血の海、子供の死骸がたくさん転がっている。まるで台風が通り過ぎたあとの様だ。その光景に、のび太は思わずその場で吐いた。

「今もあの怪物は人を襲っている。このまま放っておいたら、犠牲者が増えるだけ。」

「.....」

第十二章：マインを斬る

「なあ、エスデス、あの炎がなぜ美しく見えるか分かるか？」

フエイクマウンテンで狩りをしていたタツミはふと街の方角を眺める。

「ゴミを焼き尽くしているからでしょ？」

「そうだ。」

タツミの質問にエスデスは嬉しそうに答える。その顔は少し赤くなっている。彼女は今猛烈に機嫌がいい。何故なら、彼女は今、タツミと二人つきりで狩りをしているのだから。

「見ろよ、エスデス。帝都のあちこちから火が上がってる。綺麗だな。ワクワクするぜ。」

「そうですね。」

「でもこれからもっと楽しくなるぞ。」

「と言いますと？」

タツミは自分の脇腹を嬉しそうに抑える。それを見たエスデスは眉間にシワを寄せ
る。

『無駄だ!!!』

ドクン

「(どんなお題目をつけようが、私のやってきたことは殺し。いつ誰が死んでもおかしくない。私もそれを覚悟してナイトレイドに入った……。そう……。これは報い……。そんなことは分かっているわ……。それでもやつぱり一人じやさみしい。みんなともつと一緒にいたい!)」ワタシニハ……。デキナイ。ノビタをコロスナンテ、アタシニハ……。」

だがマインとの気持ちとは裏腹に彼女の体は勝手に動き始める。

『殺せ! その死に損ないの息の根を止めてしまえ!!』

ドクン

ドクン

ドクン

「イヤ!!」ワタシ……。イイナリニハナラナイ!!」

再び苦しみ出す怪物《マイン》。

「のび太!!」

アカメがパンプキンをのび太に投げ、彼はそれを受け取る。

「……。嫌だ、出来ないよ! マインはこれから勝ち組になるんだよ!」

「ギャアアアアア!!」

「のび太!!!」

「のび太くん!!!」

「のび太!!!」。

のび太は、パンプキンを手につつと

「わああああああああああああ!!!」

バァン!!

引き金を引いた。

ナイトレイド残り六人

第十三章：思い出を斬る

なんでいつも私だけこんな目に・・・。

異民族とのハーフだってだけで・・・。
みんなと少し違うってだけで・・・。

どうして……？

誰も……助けてくれない……。自分で自分を助けるしかない……。そして
将来この不幸な分を取り戻し……。差別のある理不尽な世界を変えてやる。

そしてナイトレイドに入って、しばらくしてあいつと出会った。容姿は丸顔に大きな眼鏡をかけている。ごく平凡な顔立ちで、髪型も特徴なし。漫画みたい顔。知能は帝都の一般常識を理解することも不得意で、あたしたちが説明してもほとんど把握できないことが多く、物覚えも悪い。運動神経にいたっては軽い物でもなかなか持つことができない、脆弱な身体能力しか持たない。運にいたつても落下してきた物にぶつかると、溝にはまる、危険種に追いかけられる、馬車にはねられる。世間でいうダメ人間。

ある日、ボスからの命令で、あいつの一日上司になった。

「マイン、その髪……」

「フン！こんな色の髪で気持ちが悪い？」

「すごーい!!!」

「!？」

「綺麗!!凄く綺麗だと思うよ、僕は!!」

「……」

「ブラボー、ワンダフル、トレビアン、グレイト!!」

「……」

正直驚いた。今まで髪……容姿のことで褒められたことなんてなかった。こいつの第一印象、変な奴。

ある日、ドラえもんは秘密道具、あこがれミラーを出した。私は面白半分であいつを脅かしてやろうと、ミラーに頼み込んで綺麗になった。

「~~~~~」

自分でも惚れ惚れするような姿。試しにラバックやレオーネに見せてみた。始め、二人は私だと気づかずペコペコしていた。そして私だと知った時は驚き、開いた口が塞がらなかった。

「アハハハ。」

私のこの姿を見たらアイツはどんな反応をするだろう？考えただけでもおかしくなる。だが……

「……………？何やってのマイン？」

「……………。」

予想もしなかった反応。

「……………なんで一瞬で分かったの？」

も~~~~、何よ。つまらないわね!!会心の演技だとおもったのになく!何で分かった?今まで誰にも見破れなかったのに。私、なんかミスってた?

そして夕食のあと、

「何で分かったのか教えなさいよ。」

「やだ。」

「教えなさい！ケーキあげたのに。」

「やだ。」

そしてこの頃からかな・・・私が何かとコイツに関わろうとするようになったのは。

第十四章：謝罪を斬る

コンコン

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

アカメはドアをノックするが返事はない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

カチャ

アカメは夕食の乗ったトレイをドアの前に置いた。

「シエーレさんの方は大丈夫？」

夕食時、ドラえもんはふとそんなことを聞いた。

「問題ない。シエーレの怪我はほぼ完治している。それよりも・・・・・・・・。」

アカメは二階を見上げる。

「そうか……のび太のお守りも大変だな。」

「のび太は優しすぎるからね。」

レオーネとチエルシーの言葉にアカメは曇った表情をする。

「すまない。こんなつもりじゃなかったんだ。私はただお前たちを……」

「うん。分かっているよ。」

のび太たちをナイトレイドに勧誘した事に今更ながら、後悔するアカメ。ドラえもんは二階に視線を移す。

（これじゃあ、僕も何のために二十二世紀から来たのか分からないよ……。）

のび太は地面に膝をつき、何かを探していた。その手にはタイム風呂敷が握られている。マインが死んだあの時、彼女の死体は溶けて無くなってしまった。だが、もし欠片でも残っていればタイム風呂敷で……

「無駄な努力ね。」

「!?!」

振り向くとそこにはチエルシーがいた。

「死んだ人間は生き返らない。命は……一度きり。」

「……………」

「出来損ないの危険種を蘇らせて誰が幸せになるの?」

「……………」

「いつ誰が死んでもおかしくないと云ったでしょ。のび太もそれを覚悟して入って来たんじゃないの?」

「……………」

「だったら無理矢理納得してでも前に進みなさい。」

「……………」

「でないと次の殉職者になるわよ。」

それだけ言うと、チエルシーは去っていった。残されたのび太は拳を握りしめる。

「……………」

そしてその様子を見守る一人の少女。

「……………」

その日の真夜中、のび太は目を覚ました。部屋を出て、階段を降り、トイレに行く。そして再び部屋に戻ろうとしたその時、

「……………のび太？」

振り向くと、そこにはアカメがいた。

「……………」

「……………」

気まずい空気が流れる。

「……………」

のび太はそのまま部屋に戻ろうと、階段に足をかける。

「……すまない……」

アカメは、力なくつぶやいた。

「??」

振り向くと、アカメがのび太に向かって土下座をしている。

「すま……ない、本当にすまない！どうか、許してくれ!!」

こんな、こんな事になったのも全て私のせいだ。

ナイトレイドに誘ったこと、謝る。本当にすまない……」

アカメの頭にある光景が蘇る。それは帝国を抜けようとした日。あの時、強引にでも妹を連れて行くなりして、決着をつけていけば……。

「頼む。お前が望むなら、私の全てを捧げよう。金だというなら、墓場に入るまで働く。体が欲しいのなら、好きにしてくれていい。だから……頼む!!これ以上自分を責めないでくれ!自分だけで全てを抱え込まないでくれ!!」

ぼろぼろと大粒の涙を流しながら、アカメは必死に謝った。

第十五章：ポリックを斬る

早朝、のび太は散歩に出かけた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

特に行き先も決めず、あてもなく歩き続ける。気がつくところこそは墓場。あたりを見渡していると、墓の前でお祈りをしている子供を発見する。

「ローグ・・・・？」

「!？」

それは以前のび太たちが、お世話になっていた家の娘である。

「のび太・・・・お兄ちゃん？」

ローグは目を輝かせてのび太に抱きつく。

「久しぶり!!」

「うん、そうだね。でもどうしてここに？」

するとのび太はローグの目の前にある墓に視線を向ける。

「これって・・・・・・・・」

「うん。このお墓は・・・・・・・・」

その夜、ナイトレイドたちはポリック暗殺任務を受けていた。

「た．．．大変です!! 賊が数名突然中庭に現れて．．．!」

「やはり今晚を選んだがナイトレイド。読み通りだ。」

大聖堂で腕を組みながらエスデスは笑みを浮かべる。

「な、中庭?! すぐそこではないか!!」

ポリックは震えながらエスデスの足にしがみつく。

「普段顔を立ててやってる分、デンとしてろ。みつともない。心配せんでも大聖堂をで

たりはせん。」

メシッ

あぐっ!?

エスデスはポリックの顔面に蹴りを入れる。

「(いくら騒ぎを起こしても、お前たちはポリックを討たなければ負けだろう。)さて、新戦力のお試しといくか!」

エスデスの後ろから緑の長髪をした少年が現れた。彼は鎧とマントで身を包み、サングラス状のゴーグルを着用している。

「これだけ騒ぎを起こしても中から出てこないか……。」

「逃げた可能性は?」

「いや、いるよ。」

ナジエンダの言葉にレオーネは大聖堂を睨む。

「大聖堂から出るこのおぞましい殺気……間違いなくエスデス、こつちを狩る気満々だ……。」

「そろそろアカメたちが空から突入してくる時間だぞ、ナジエンダ。」

「……………（暗殺を成功させるにはエスデス達の注意をこちらに引きつける必要がある、やむを得ん！）」

スサノオの言葉にナジエンダは覚悟を決める。

「プラン変更!!こちらから大聖堂に乗り込むぞ!!」

「『了解!!』」

ナジエンダの言葉にスサノオとレオーネは頷く。

「スサノオ、奥の手の準備はいいな？」

「ああ、ナジエンダがキーワードを言うだけで発動するようにしてある。」

エスデスの戦いで破損したスサノオはドラえもんのタイム風呂敷でなんとか修復し、今やその力も完全復活している。

ダッ

レオーネたちは急いで大聖堂に向かった。

大聖堂の中は静まり返っていた。周りを見渡しても誰もいない。

「ん？」

ふと奥のベンチに誰かが座っているが見えた。

「お前がポリックか？」

ナジエンダはそう言いながら戦闘態勢に入る。

「一足遅かったな。奴はもうここにはいない。」

「何？」

「こんなにも早く再会できるなんて、驚いたぜ。」

そう言うと、少年は振り返った。

「この声……」

スサノオが目を見開く。

「まさか……」

レオーネの顔が驚きの表情になる。

「久しぶりだな、みんな。」

「そ．．．そんな．．．。」

ナジエンダの顔色が変わる。そこにいたのはボリックではなく、数週間前に殉職したはずのかつての仲間。

第十六章：仲間を斬る

「殺し屋ども……遊びは終りだ。」

ラバックは大剣を取り出す。

「グランシヤリオン!!」

グググググ

メキメキ

ラバの体に鎧が自動装着されていく。

「ラバ……!!」

その姿はブラートのインクルシオと外見は似ているが、外装は黒く、背中にはジエツトのような物がある。

「凄まじい戦闘力を感じる……。」

ブドー以上の力をラバから感じ取るレオーネ。

「さあ、覚悟するがいい。帝国に仇なす者たちよ。」

「なぜだ。なぜお前と戦わなきゃならないんだ。イエガーズとの戦いに命さえ投げだし、戦うことの意味を教えてくださいましたのはラバ……お前じゃないか!!」

「問答無用ツ。」

ラバはナジエンダに飛びかかる。

ドウン

その拳をスサノオが受け止める。

「う．．．お、思い出してくれ、ラバ。私たちのことを．．．ナイトレイドのことを．．．

そして私達と一緒に死にももの狂いで戦った日々のことを．．．。」

「フ、もちろん覚えているとも。だがそれがなんだというのだ？」

「何？」

「それはまだ俺がお前たちムシケラと同等の存在だったころの話だ。この地上において最高位の存在『大將軍』になった今．．．そのような過去の記憶など塵芥に等しい!!」

「．．．．ラ．．．ラバ!!!」

その言葉にナジエンダの頭が真っ白になる。

「ムダだ．．．ナジエンダ。」

「スサノオ．．．。」

「あそこにいるのはもはや俺たちの知っているラバックじゃない。俺たちが倒すべき敵だ!!」

「．．．．．」

「いいかげん目を覚ませナジエンダ!!ラバックはあの時死んだんだ!!」
ナジエンダの頭に今までラバと過ごした日々が蘇る。

その頃、いつもの空き地で目を覚ますのび太。

「……………」

昼間の出来事を思い出し、拳を握りしめる。すると

「どうしたの……………」

視線をあげるとそこには

「…………クロメ。」

彼女は心配そうにのび太の顔を覗き込む。

「何か思いつめた顔をしているけど……………」

「何でもないよ。それよりなんか用？」

のび太は立ち上がり、おしりのゴミをはらった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「用がないなら僕は行くよ。」

そう言いながら、のび太は歩き出す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

カチャ

振り向くと、クロメは銃を持っていた。彼女は銃をのび太に投げ渡す。

「!?」

訳が分からず銃を受け取るのび太。

「ナイトレイドの中でものび太は標的、覚悟して。」

「!?」

するとクロメは腰につけている鞆から刀を引き抜き、刀の先をのび太に向ける。

「帝都からの任務・・・・・・・・ううん、命令・・・・・・・・のび太今ここで死んでもらう。」

第十七章：ピンチを斬る

「ハクシヨン!!」

部屋で休んでいたドラえもんは大きなクシヤミをした。

「ロボットのくせに、風邪をひくなんて。ぼくは精巧にできすぎてるなあ。」

ドラえもんはそのままベッドに入り、横になる。

「あつたかくしてねてよう。」

すると

ビービー

振り向くと机の上に置いてあつた虫の知らせアラームがなっている。

虫の知らせアラームⅡ気になる人にアラームをセットしておく、何かあつたときに

知らせてくれる。

「ギ……ギギツ……」

何故か金属音がドラえもんの中から聞こえてくる。

「ギ……ギギツ……行かないわけにはいかな。ハクシヨイ。ハクシヨン。」

ドラえもんは急いでのでび太を探しに出かけた。

ザンッ

腕から血を流しながらその場に尻餅をつくのび太。

「痛い?のび太。次で楽にしてあげるからね。」

クロメは刀の先をのび太に向ける。逃げようにも、体が動かない。そんなのび太にクロメは、

「タツミから聞いたけど、相方殺しちゃったんだって?」

「!？」

「じゃあこれで、会いに行けるね。」

刀を振りあげる。

(こ……こんな所で……)

「最後つてのはあつけないものだよ、バイバーイ。」

そしてクロメは刀を振いた。のび太はとっさに目を瞑る。

ガチン

恐る恐る目を開けると、そこには……

「ギ……ギギツ……ノビタくん、大じよウ……ブ？」

「ドラえもん!!」

刀はドラえもんの右脇腹に突き刺さっている。

「ギ……ギギツ……。ノビタくん……ギ……はやく……逃げて。」

ドラえもんはそのままうつ伏せに倒れ、のび太は急いでその場から走り出す。

「何で僕つてこんな運がないの!？」

クロメから必死に逃げるのび太。運の問題かどうかはともかく。これは野比のび太

最大のピンチである。

「……………」

クロメはドラえもんから刀を引き抜くと、のび太を追いかける。

【回想：のび太とローグ】

「これって……」

のび太は目の前にある墓に目を向ける。

「うん。これはお父さんとお母さん。」

「!？」

初めて聞かされる事実には驚く。そしてローグは語った。数ヶ月前、父親が殉職した。そして父親の墓の前でサヨたちとお祈りをしていたら、十字傷の男が現れ、母親を目の前で殺されてしまった。それを見た瞬間頭の中が真っ白になったが、なんとかサヨに連れられてその場から逃げ切った。その日から、彼女はずっと一人で泣き続けた。それこそもう体の中の水分をすべて出してしまおうんじゃないかと思うくらいに。

「でもある日、私、お母さんとお父さんの夢を見たの。」

「夢？」

「うん、そして自分たちの分まで生き抜くように「元気をくれたの。」

「……………」

「私には戦う力はないけど、頑張る。もしまた殺されそうになっても、今度は逃げずに戦う。敵わなくても、最後まで相手を睨み続ける。」

「……………」（凄いな、ローグは……………。それに比べて僕なんか……………。）」

第十八章：クロメを斬る

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

毎月、二十二世紀で行われていた健康診断をサボっていたドラえもん。ここにきて、そのツケが回ってきたらしい。体が重い、吐き気が、目眩がする。

「ドラえもん!!!」

ピクッ

のび太の悲鳴に反応する。

「眠る暇もないなんてのび太くんはホントに世話が焼けるなあ・・・。」
なんとか体を動かし、後を追うドラえもん。

行き止まりだ。もう逃げ場はない。

「普通ならもう立ち上がれないのに．．．やるね。」

ジリジリと距離を詰めてくるクロメ。

「クロメ．．．なんで．．．．．．．．．．。」

今、友達だと思っていた少女に殺されかけている。

「．．．．．のび太は優し過ぎるよ．．．．．ここで死んだ方が．．．きつと楽だと思
う。」

この星に来てからというもの、のび太は友達にことごとく裏切られる。

「のび太くーん!!!」

やつと追いついたドラえもんはのび太に剣を投げ渡す。

名刀電光丸Ⅱ レーダーが組み込まれている剣。相手の動きをキャッチすると、自動的に相手を倒す装置が働く。敵洞察センサーが敵の動きを探り、コンピュータが敵の動きを上回る作戦を計算する。作戦の動作を、刀の柄に組み込まれている反射神経支配装置で使用者の反射神経に伝える。と同時に、反射神経を鋭くしてくれる。力が弱くても、電気ショックで相手を気絶させてくれる。

「!？」

「どんなに勉強ができなくても、どんなに顔が悪くても、どこかに君の宝石があるはずだよ。その宝石を磨いて磨いて魂をピカピカにしてみせてよ。!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「自信を持って！ぼくは世界一だと！」

「でも・・・・・・・・僕はローグやアカメみたいに強くないし・・・・・・・・。」

のび太の言葉にドラえもんはどうとうキレた。

「男だろ、戦うぐらいの勇気をもて!!君の帰りを待っている人だっているんだぞ!!」

ガチン

クロメがのび太に斬りかかる。

(僕が・・・・・・・・ここで死ぬ・・・・・・・・!?!そしたら・・・・・・・・)

静香ちゃんに会えない。

それに
．
．
．
．
．

セワシくんが生まれない。

「私がお前を殺し屋にしたせいで……」

頭を下げながら、涙を流すアカメ。

「違うよ、アカメ。」

「!？」

「悪いのはアカメじゃない。僕なんだ。」

「僕に力がなかったからだ……」

「……のび太。」

「でもこれから頑張るよ。アカメが僕を助けてくれたから、それができるんだ。」

「……」

「ありがとう、アカメ。」

「……」

「約束する、絶対強くなってみせる。だから……」

そう言いながら、のび太は小指を立てる。それを見たアカメも小指を立てる。

「……」

二人はフック状に小指を曲げると、互いに引つ掛け合う。

「そんな訳には．．．いかない!!」

クロメの刀を電光丸で受け止める。

「まだそこまで動けるなんて．．．。」

クロメは驚く。

「絶対に! (クロメを殺さないで僕が殺される．．．約束が果たせなくなる．．．なら!)」

「なっ!？」

ガキッ

クロメの刀を吹き飛ばす。

「クロメ．．．覚悟!!」

のび太はクロメに斬りかかる。

「はああああああ!!」

劍を振り抜いたのび太を見て、クロメは笑みを浮かべた。
(良くできました……。)

第十九章：思いを斬る（前編）

私たちは最高の暗殺部隊だった・・・つらい任務もあったけど・・・。

一緒だから乗り越えられた。お姉ちゃんといれば、私は幸せだった。

それなのに・・・

それなのに・・・

それなのに・・・

お姉ちゃんは帝国を裏切って、ナイトレイドになった。

どうして？あれだけ止めたのに。

置いていかれた、私は苦しくて苦しくて。毎日お姉ちゃんを殺すことだけを考えた。

そしてある日

見つけた。

お姉ちゃん？

骨つき肉を食べながら、何かを見てる。

男・・・・・・・・？

ある日、タツミと一緒にのび太を任務に誘った。

「えっ、帝都周辺に出現した新型危険種の捕獲と討伐!？」

「心配することないよ、俺たちがついてるからさ。」

「・・・・・・・・・・。」

のび太の顔がみるみる青くなる。

「わああああああ!!」

そして走り出す。

「オラ、戦いなんておっかないだ!やだよー!!」

「あつ!!のび太、待てよ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

急いで後を追いかけた。

「ヤダ、ヤダ、ヤダ!オラおっかないことは嫌いだ!」

のび太は近くにあった木にしがみつきながら駄々をこねる。

そして何とか引つ張って連れてきたけど・・・・。

「ギャアアア!!!!」

危険種が現れ、私とタツミはすぐに武器を構える。

「出てきた。行くぞ、のび太!」

「.....」

「.....のび太?」

「!?!」

のび太が返事をしない為、彼の顔を覗き込む。

「.....」

気絶してる。しかも立ったまま.....。

弱
虫

情
け
な
い

どうして、お姉ちゃんはこんな奴を……。

この時の私は分からなかった。でもそれは、彼を、のび太を良く知らなかったから。

そして、ある日の任務で賊を三人捕らえた。

「お、俺たちはナイトレイドなんかじゃねえよ!!」

「食うに困って盗みをやっただけだ！人だつて殺しちやいねえよ！」

手足を縛られながらも三人は必死で許しを問う。私は振り返り、のび太に言った。

「のび太に任せる。のび太の好きなようにしていいよ。」

「えっ、ぼくが!？」

「うん。」

私はのび太の横顔を見ながらお菓子を食べ始めた。殺す？拷問する？それとも………。私の頭の中で当たり前の答えが浮かび上がる。どうせのび太も人間の皮を被った怪物。権力をふりかざして、やりたい放題する悪魔なんだ。

「じゃあ、許してあげて。」

「!？」

えっ!？許す!？

「僕に任せてくれたんでしょ？だったら許してあげて。」
「.....」

「『ありがとうございます!!!』」

賊たちは泣きながらお礼を言った。

第二十章：思いを斬る（中編）

あの日、私はのび太と一緒にカフェに行った。

「はい、私の分のケーキもあげる！」

「……うん。」

元気がない。

「どうしたの……？何か思いつめた顔してるけど。」

もしかして、
相方^{マイン}を殺したことをまだ……。

「おんやあ。」

突然声がした。振り向くと、大臣の息子、シユラとワイルドハントのメンバーたちが立っていた。

「なんだなんだ。イエガーズにこんな上玉がいたのか！ しっかり見てなかったから分か

らなかつたぜ。」

シユラは強引に私の腕を掴んで引き寄せる。

「へえ・・・クスリで強化されたタイプかお前？面白いな。よし！次のオモチャに任命する。喜びな！」

「!？」

「お前みたいなクスリ漬けの女とはやったことはねえからな、面白そうだ。」

ペロツ

嫌らしく舌を出しながら私の腕を強引に引っ張る。

「おいっ。」

えっ、のび太!?

「ん？お前はたしか……………」

のび太は拳をかまえる……………けど、足が震えてる。

「はあっ！一丁前にやろうっていうのか、おい。」

ワイルドハントのメンバーはのび太を見て笑いだす。

「……………う……………う……………う……………」

「おもしれ、お前ら手え出すなよ！」

そう言うと、シユラは笑みを浮かべる。

「おら、俺一人だけで相手するぜ。かかってこいよ。」

「わあああああ!!!」

シユラの手招きにのび太は突撃する。

バツ

ゴッ

「ははっ、よえー、よえー！俺は帝具も使ってないぞ、オイ！」

バツ

ゴッ

「血反吐ぶちまけな!!」

シユラはのび太をサンドバックのように殴り続ける。

ドンッ!!

「ガハッ。」

のび太は大量の血を吐き出し、倒れた。

バタン

「さあて。これからお楽しみだぜ。俺様得意の殴り殺しだ。ん？」

「……………う……………う……………う……………」

のび太は這いつくばりながら落ちたメガネを拾う。

「まだ、負けたわけじゃないぞ！」

のび太は再び拳をかまえるけど、足がまだ震えてる。

「何んだ？もつと殴られたいってか！」

「……………勝負はこれからだ……………」

今度はシユラがのび太に飛びかかる。

「コイツー!!」

「こいー!!」

パソコン

メシッ

ビシッ

ボタン

のび太は再びその場に倒れる。

「分かりきったことだろう。」

ヤレヤレとシユラは首を横に振る。

「………う………う………う………ま………だ………」

『!?!』

のび太は壁に手をつきながら、立ち上がる。身体中アザだらけだ。

「いい加減、しつこいんだよ!!!」

シユラの顔から笑みが消える。

パソコン

メシッ

ビシッ

バタン

「ハア……ハア……ハア……ハア……これで懲りたか。ハア……ハア……ハア……ハア……何度やつても同じだ。いい加減、諦めろ。」

シユラは再び私の腕を掴むと歩き出す。

ガシッ

のび太はシユラの足にしがみつく。

「いい加減にしろよ、お前!!!」

「嫌なんだよ!」

!?

「友だちがどんどん死んでいく。それをタダ見てることしかできない、自分が!!」

………のび太………。

「もう誰も死なせない!!僕が守るんだ!!」

ベシッ

「しつたことかよ!!!」

シュラの蹴りでのび太は吹っ飛ぶ。

そしてついに……

「痛て!!止めろ、痛て!!」

のび太はシユラの耳やほっぺたを引つ張りながらしがみつく。

「分かった、悪かった!!俺の負けだ!!」

『!?!』

ワイルドハントのメンバーはシユラの発言に驚く。

「シユラが負けた……?」

「嘘だろう……」。

バタン

するとのび太はネジが切れたようにそのまま倒れこむ。

「くっ!」

シユラたちはそのままどこかへいつちやった。私はすぐに倒れているのび太を抱き

起こす。

「クロメ。勝ったよ、僕。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

顔の形が変わってる。アザも・・・・・・・・傷も・・・・・・・・血も出てる・・・・・・・・。

「見たろ、クロメ。僕、一人で勝ったんだ・・・・・・・・。」
「うん。」

あ
・
・
・
れ
？

涙
？

私
・
・
・
・
・
泣
い
て
る。

「僕、一人で……。」

涙が止まらない。嬉しいはずなのに……

「分かってるよ……。」

冷たい雨が降り注ぐ中、私はのび太を強く抱きしめて、泣きながら何度もお礼を言った。

ゴメンね。弱いとか言つて。

ゴメンね。情けないとか言つて。

ありがとう、大好き。

第二十一章：思いを斬る（後編）

「それでね．．．雲の上に王国を作って、僕が王様になったんだ。」

どれも聞いててワクワクする話ばかり。

恐竜を育てたり

犬の王国で暴れたり

畳の下から別の星に行ったり

海底にいたり

魔界で魔物と戦ったり

今日ものび太の過去の冒険を聞きながら、私は笑った。

.....のび太が王様って想像できないなあ。クスクス。

.....でも.....

いいかもね.....それ。お姉ちゃんは料理長。ドラえもんが大臣。それから、それから.....

うん、楽しそうな国。民も重税で苦しまないし・
・
・

それから私は・
・
・

私は
・
・
・
・
・
・

抜け落ちた自分の髪を見つめて一粒の涙が流れた。

そうだった私にはもう・・・

私がいなくなったら、お姉ちゃんは・・・

のび太は………どうするかな？

「帝都からの任務……ううん、命令……のび太ここで死んでもらう。」
私は腰につけている鞘から刀を引き抜き、刀の先をのび太に向けた。

嫌われるかもしれない、でもそれでもいい。

のび太。

私がいなくてもやっていける？

誰かに殺されたりしない？

どんな時でも殺しが出来る？

が
チン

が
チン

ち
ゃ
ん
と
止
め
を
さ
せ
る
？

剣と刀がぶつかり合う。

「友達をほってはおけないんだ。」

「関係なくなんかないよ！僕達友達だろ!? アカメたちとは身分は違うかもしれないけど、1+1は1より大きいよ！ 助け合うのは当たり前じゃないか!!!」

「僕たちはここで終わらない。なるんだよ、勝ち組に！」

のび太。

人間の値打ちは頭の良さや運動神経で決まるものじゃないよ。

お姉ちゃんは

お姉ちゃんは本当にのび太のことを信じてる。

だ
か
ら

お願い、私にもそう思わせて。

「はー！すげーっ。ここが帝都かあ。」

少年は目を輝かせて周りを見る。その後ろには無言で立ち尽くすクロメ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「連れてきてくれて本当に嬉しいぜ、クロメ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クロメは持っていたお菓子を口に入れる。

「すげーっ。本当にすげーぞ!!こりや出世すりや村一つだつて買えるな。」

「調子の良いこと言ってるけど、君には無理だと思うよ。」

クロメは笑いながら言った。

「なにおうつ!!俺の実力が信用出来ないってことかよ!!」

「うん、なんかここぞつて時に弱そう。」

「俺だつて本気を出せば危険種の四十匹や五十匹・・・・。」

「じゃあ今度強いトコ見せてよ・・・・えーと・・・・」

「俺か？俺はタツミ。帝都で有名になる男の名前だから覚えといた方がいいぜ!!」

第二十二章：絶望を斬る

大聖堂から遠く離れた建物の屋上。

「ふあーっ。」

タツミは椅子に腰掛け、大きな欠伸をする。

「流石のナイトレイドも実の仲間が相手では反撃できないわね。ラバックというボウヤの人格は完全に破壊してあるし。」

タツミの隣に立っているこの男はドクタースタイリッシュ。クロメが言っていた帝都の人体実験を好む医者で、彼は帝具を使ってさまざまな兵器を製造し、強化手術した人間を私兵として率いている。そして数週間前、帝都により回収されたラバックの遺体は彼の手により蘇生され、さらに洗脳と強化手術を施した。

「つまらん素材らしく、つまらん戦いだな。」

タツミは退屈そうに腕を伸ばす。

転がり落ちるスサノオのコア

バキイ

それを何のためらいもなく踏み潰すラバック。

「なかなかの連中を集めたなナジエンダ。やはりお前は面白い。歯ごたえのある敵がいなくなるのは残念だが……ナイトレイドのリーダーともなれば逃す訳にはいかん。」

ズルツ

「ん？」

するとスサノオのバラバラになったパーツが一箇所集まり始める。

ズズズ

「ほう、コアが割れてもまだ動くとは。奥の手で強化中なだけはある……というところか。」

「スサノオ……お前、そんな姿になってまで……」

仲間の必死の抵抗にナジエンダは言葉を失う。

「だが完全再生する力はないようだな。終わりだ。」

(万事……休すか……!!)

ナジエンダは諦めたように目を瞑る。ラバックはそんな彼女の首を掴み、持ち上げ

る。

「一瞬で楽にしてよるつもりだったが……。お前の命運もここまでだな……ナジエ
ンダ！」

首を掴んでいる腕に力が入る。

すると

バアーン！

大聖堂の窓ガラスが割れ、アカメとシエーレが飛び込んでくる。

「虫ケラめ……次から次へと！」

ラバックはナジエンを乱暴に投げ飛ばすと

バツ

頭上に飛んだ。

「グランフォー……」

シエーレはエクスタスを構える。

「アカメ！私の後ろへ。」

ガチン

「ぐ……重い……！」

「シエーレ!!」

ドンツ

なんとかラバックの一撃を防いだが、背後に吹き飛ばされる。そしてアカメは瞬時に辺りを見渡して全てを理解した。今の絶望的な状況を……。

ドンツ

「ん?」

ゴゴゴゴゴ

ラバックが振り向くと、バラバラになったはずのスサノオがいた。

「完全再生してると……」

よろめきながらナジエンダは立ち上がり、スサノオに力を与える。

「三度目の……禍魂顕現時!!!重ねがけなんて使い方、本来不可能であろうが……これを強引にやらなければもう全員死ぬ。」

それだけ言うと、ナジエンダはその場に倒れる。

ドサッ

(これで私の生命力は使い切った・・・あとは頼むぞスサノオ。)

「八尺瓊勾玉!!」

ゾリ

「む！パワーが上がっている。」

第二十三章：進化を斬る

ガチン

アカメはラバックに斬りかかる。だが鎧の硬度が高い為、刃が肌まで通らない。

ガチン

「虫ケラが何人集まろうと、無駄だ。」

ドン

バキバキ

ドン

「ぐあつ。」

反撃をガードするも、アカメは吹き飛ばされる。

「ハア・・・ハア・・・ラバ・・・お前、こんなに強かったのか!?!」

レオーネは息を切らしながら、そう言った。

ドオン

すると突然大聖堂の天井が崩れ、周囲に煙が散る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

周囲に散っていた煙がはれ、ラバックは辺りを見回す。

「逃げたか・・・・・・・・」

ナイトレイドの姿が消えていた。すると突然声がする。

「は・・・・はははははは・・・・!!さすがは大將軍ですな! 刺客を全員無力化させた!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

逃げたはずのボリックが戻ってきた。ラバックは無言でグランシャリオンを解除する。

「賊ごときが私を殺そうなどと百年早いのだ!! バカめ!! グズ共め!! ザマあない!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ラバツク……

「この国は不滅だ。帝国に仇なす者は全て排除する。」

何故だ、ラバ？

なんでお前が・・・

参ったな

覚悟はしていたのに。

なんてことだ。帝国軍は進化している。私が帝国にいた時よりも・・・。

「なあ、みんな。気付いたか？」

アカメが食堂でレオーネ、シエーレとチエルシーに言った。

「んー何が？」

「えっ？」

「ん？」

レオーネ、シエーレとチエルシーはアカメに視線を向ける。

「大聖堂を出てから、ボスが一度も笑っていない……」

「……ラバのことで自分を責めてるんでしょ。」

「ええ。」

「……これから先、ボスが笑うことはもう無いんだろうな。」

トントン

「のび太、ドラえもん、ご飯ができてるぞ。今日はすき焼き丼だ。しつかり食べて戦いに備えなくてはな。」

普段なら食事がのったトレイをドアの前に置くのだが、今回は様子が違う。昨日の夜に置いたトレイがそのまま残ってある。

しーん

「………のび太？ドラえもん？」

ガチャ

鍵が掛かっていない。胸騒ぎがする。アカメはすぐさま扉を開けた。

「!?」

あれからアカメたちはのび太とドラえもんを探したが見つからなかった。

「すー、すー。」

アカメは待ちくたびれて食堂のテーブルで寝てしまった。彼女の横にはのび太とドラえもんの為に作ったすき焼き丼が置いてある。

「すー、すー。」

時計の針が十二時をさそうとした時、

ゴト

そく

そく

ガチャ

ガチャ

ガト

「……こんなものでいいか。これだけで十分だよな。」

そく

そく

「……夕食の支度したまま、寝てる……いつも朝早いからな……。」

「すー、すー。」

「えーっ、またすき焼き丼。一昨日もそうだったのに。」

「すー、すー。」

「……。」

ガッ

ガッ

カチャ

バタン

第二十四章：チャンスを斬る

「何で……狙いを外したの？」

「……………」

クロメは怒りながらのび太を見上げる。

「私を殺すチャンスだったのに……」

「そんなことできないよ。」

「!!」

クロメは起き上がると、

ベシッ

のび太の頬をビンタする。ただのビンタではない。今までで最も重い一撃である。

「それじゃあ、どうやって大臣を倒して、この国を革命するの!!」

クロメは尻餅をついたのび太に声を上げる。

「そんなの人間の勝手じゃないか!!」

「今、この国が腐敗……民が苦しんでいるんだよ!」

「こんな所に住まなければいいんだよ!」

するとのび太は泣き出す。

「こんな世界で必死に生きてる人間を殺す権利なんて誰にもないよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「!?!」

バツ

クロメはいきなりのび太を連れて、その場から走り出す。

ズドン

「な・・・なんだ!?!」

先程立っていた場所に何か降ってきた。周囲に散っていた砂がはれると

「私が相手だ・・・新しい拷問を試してやる!」

「エスデス・・・。」

運悪く頭上から現れたのは帝国最強の将軍、エスデス。
「久しぶりだな。」

(どうしよう。．．．．．。)

のび太はエスデスを睨みつける。

「タツミの言った通り．．．．．なかなかいい目だ。私の前でも恐れな．．．．．お前何者だ？」

「またタツミか!?!あいつは一体!?!」

「知らないのか、お前?帝都の人間は皆、知ってると思ったが．．．．．皆。」
「???」

「タツミは人間じゃない。もちろん将軍でもない。」

「!?」

エスデスの言葉にのび太は眉間にシワを寄せる。

「言うなれば、神だ。」

「神?」

「我らの神がお前のような奴に目をかけている。私には到底それが理解できん。」

エスデスは日頃の鬱憤をのび太に打ちまける。タツミが自分に振り向いてくれないのは、のび太のせいだと。

「お前をここで殺すのは簡単だ。だが、チャンスをやろう。」

「チャンス?」

エスデスは持っていた剣を放り投げる。

「1分やろう。1分以内に私に触れる事が出来たら、見逃してやる。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ただし出来なかったら・・・・拷問室に来てもらう。」

「ハッ．．．．．ハッ．．．。」

肩で息をするのび太。

「あと三十秒。つまり男だな、お前。」

ブオ

スッ

「あたらない．．!!当たれ!!当たれ!!」

スッ

エスデスはのび太の背後をとらえた。

「これで．．．二回、後ろをとられたぞ。」

「!？」

のび太は振り返る。

「その程度では体どころか影も踏めないぞ。」

「．．．．．。」

「私は帝国イエガーズ作戦参謀のエスデス。負けることは決して許されない。」

「．．．．．。」

「私はいつでもタツミの側にいる。あの男はいずれこの世界そのものを自分の物にする

だ
ら
う。
」

最終章：お願いを斬る

そしてついに一分が経過した。

「さらばだ。タツミにはお前が危険種に食われたと報告しておこう。」

エスデスが剣でのび太の心臓を貫こうとした。

ガチン

だがエスデスの剣が受け止められる。受け止めたのは、クロメだった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

にらみ合う二人の少女たち。

「まさか・・・・・・・・噂は本当だったとはなあ・・・・。やはり裏切っていたのか、クロメ。お前がこの男に手を貸していたとはなあ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

二人は背後に飛び、それぞれ武器を構える。

「ん？」

だがエスデスが付けているイヤリングから回線が入った。

「はい、分かりました・・・・・・・・。」

『!?!』

「呼び出した、今日は見逃してやる。」

「どうやら召集のようだ。」

「だが覚えとけ。どこへ逃げても、無駄だ。お前たちの居場所は手に取るように分かるのだからな。」

『「……………」』

「次に会う時を楽しみにしてるぞ。」

「そう言いながらエスデスは去っていく。」

「だ……大丈夫!?!」

クロメはのび太に急いで駆け寄る。

「僕は今から宮殿に行く!!行ってタツミに会ってくる!!」

のび太は決心する。だが彼の言葉にクロメは

「な、何に!?今、なんて言ったの?」

「エスデス、また来るって言ってた。僕たちの居場所がわかってるんだ。どうせくるなら一緒!!こつちから行くよ!!」

「な、何言ってるの、のび太!!今回は相手が違うよ!!」

猛反対する。

「何訳の分からないこと言ってるの?今の時代が気にいらないとこぼしてるだけじゃ何にもならない。だから行くよ、僕一人で!!」

「訳分からんこと言ってるのは、のび太だよ!!宮殿がどれだけ危険か分かってるの!?!」
「友達が怪物にされる姿なんて・・・!!もう見たくない!!もう、誰もいなくなっほしくないんだよ!!!」

「私は……………」

激しい雨が降り注ぐ。

「ダメ!!絶対にダメ!!」

「クロメは何か勘違いしてるよ!道を選ぶということは、必ずしも歩きやすい安全な道を選ぶってことじゃないんだぞ!!」

「ダメ!のび太がいなくなったらお姉ちゃんが悲しむし、私も嫌っ・・・!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なら私が一人で行くよ!!私の方がそういうのに向いてるし!!」

「クロメ、一人でどうやって行くんだよ!!僕より弱いのに!!」

ブチッ

二人の堪忍袋の尾が切れた。

「じゃあ、一緒に来てよ!!!!」

クロメは精一杯叫んだ。

「うん、行ってあげる!!!」

のび太も精一杯叫ぶ。

『!?!』

二人は驚きながら、互いを見つめ合う。

『今、何て言ったの!?!』

クロメはのび太の手を握る。

「い……………い……………い……………」

「???

「い……………い……………い……………」

口ごもっていたクロメが顔を上げる。

「……………一緒に……………来て……………」

「??？」

「もう……あの頃の私には戻れない……お願い……私には……のび太が必要な……私と一緒に戦ってください……」

数時間後、ナイトレイドアジトにある時計の針が十二時をさそうとした時、

ゴト

そく

そく

玄関のドアを開け、忍び足で廊下を歩くのび太。彼は急いで自分の部屋に行き、荷物をまとめる。

ガチャ

ガチャ

ガト

「……こんなもんでいいか。これだけで十分だよな。」

そく

そく

そして食堂を通り過ぎる。するとテーブルで寝ているアカメに目が止まる。

「……夕食の支度したまま、寝てる……いつも朝早いからな……。」

「すー、すー。」

そして置いたあつた丼を手取る。

「えくつ、またすき焼き丼。一昨日もそうだったのに。」

「すー、すー。」

「……。」

のび太はアカメをチラ見するとすき焼き丼を食べ始める。

ガッ

ガッ

カチャ

食器を流しに置くと、アカメの方に振り向く。

「アカメ、今度こそ強くなって、帰ってくるよ！」

そゝ

そゝ

バタン

再び忍び足で廊下を歩き、玄関を閉めた。

「さあ、行くこう!!」

「うん!」

重たい荷物を背負いながら、のび太たちはアジトをあとにした。

全ての始まり

プロローグ

「ここ、どこ？ 宮殿から随分離れてるけど……」

大きな荷物を担ぎながら、クロメの後を追うのび太。だが進めば進むほど、宮殿から離れていく。

「宮殿には……まだいかない。」

「えっ!？」

するとクロメは立ち止まる。

「目的地はここ。」

「協会!？」

クロメは無言のまま協会の中に入り、のび太も彼女を追う。クロメは中であつた石像を力一杯動こした。すると像の下から階段が現れる。

「!？」

クロメはそのまま無言で階段を降りて行く。

ゴクリ

のび太もその後が続く。そして数時間後、

「ハア………ハア………いったいどこまで下がるんだ、この階段!？」

もう何時間も降りてるのに、一向に目的地に着かない。根を上げるのび太に対してクロメは未だに無言のまま歩き続ける。そしてさらに数時間後、クロメは立ち止まる。

「着いたよ。」

「えっ?」

目の前には扉があつた。クロメはまたしても無言のまま扉に入っていく。

「これは……!？」

部屋に入ったのび太は驚く。

「ここは……何かの研究室?」

すると今まで無言だったクロメが口を開いた。

「のび太、ドラえもんをテーブルの上に。」

「えっ? あっ……うん。」

のび太は背負っていたドラえもんをテーブルの上に置く。

「置いたよ。」

「今の私たちに『戦い』は必要ない。必要なのはまず『力』をつけること。」

「戦わない? じゃあなんでこんな所に来たんだよ!？」

「この場所が・・・全ての始まりだから・・・。」

「始まり？クロメ、何を言っているの？」

混乱するのび太にクロメはとんでもないことを告げる。

「全ての帝具は・・・ここで作られたんだよ。」

「!？」

帝具、それは・・・

約千年前、大帝国を築いた始皇帝は悩んでいた。この国を永遠に守っていきたいが余とていずれ死ぬ。だが・・・武器や防具なら・・・遙か未来まで受け継いでいける・・・『国を不滅にするために、叡智を結集させた兵器を作り上げる!!』

伝説と言われた超級危険種の素材

オリハルコンなどのレアメタル

世界各地から呼び寄せた最高の職人達

始皇帝の絶大な権力と財力は現代では到底製造できない48の兵器を生み出し、それを”帝具”と名付けた。

帝具の能力はどれも強力で中には一騎当千の力を持つものもある。

帝具を貸し与えられた臣下達はより大きな戦果を上げるようになったという。

だが五百年前の大規模な内乱により、その半分近くは各地に姿を消してしまった。

のび太はテーブルの上で機能停止しているドラえもんを目を向ける。

「そうか、ここでドラえもんを修理するだね！」

「………違う。」

「えっ？」

「直しても今のドラえもんじゃ、帝国軍に勝てない。」

「それじゃあ、どうしたら………」

するとクロメは手を差し出す。その手には光る金属がのっている。大きさは丁度野球のボールと同じくらいだ。

「これは………」

のび太は金属を受け取る。

「オリハルコン。」

「オリハ……ルコン?！」

第一章：嵐を斬る

その頃、帝都のウマトラ劇場では・・・

「おいーっす！」

「『!?!』」

全員の視線が劇場に入ってきた集団に集中する。

「秘密警察ワイルドハントだ。知ってるか？」

劇団員が全員息を飲む。

「(ワイルドハント・・・人数が減ったイエガーズの代わりに新しく組織されたという・・・)は・・・はい・・・あの・・・どういったご用件でしょうか？」

「帝国を批判する内容の劇をやっていると聞いてな。取り調べに来たぜ！」

その言葉に座長は焦り出し、団員たちも怯える。

「そ、その様な事実は一切ございません！」

「そいつは調査してみねえとわからねえよなあ？」

シユラは劇場を見渡す。すると座長はシユラに近づき

「あの・・・これはほんの・・・。」

ドサツ

お金が入った袋を手渡す。

「あーっーん？」

するとシユラは突然怒り出す。

「俺をこんな……チンケな金で動かそうとするなんて!!」

シユラは袋を投げ捨てると、座長を殴り飛ばす。

「座っ座長!」

「貴様よくも……」

団員たちがシユラに飛びかかるが

バキ

ボキ

バツ

「けっ、よえー、よえー。」

即返り討ちに合う。

「シユラの奴、荒れてんなあ……。」

「まあ、あんな負け方をしたゆえ、仕方なかる。」

暴れるシユラをジト目で見守るワイルドハントのメンバーたち。

（俺はあのカスに……負けたのか……？ふざけんなよ！親父に呆れられちまったじゃねえか!!）

そしてシユラの頭にあの日の光景が浮かび上がる。

（のび太とか言ったな、あのガキ。今すぐ見つけ出して、必ず殺してやる!!）

その様子を離れた所で伺う革命軍密偵チーム。

「何アレ……もう賊とかわらないじゃない。」

「皆よく黙ってるなこんな惨状。」

「しようがねえよ。下手に逆らえば皆殺しになるんだぜ……。」

「だったら我慢して嵐が過ぎるのを待ってた方が……皆殺しよりマシだ。」

(……話には聞いてたけど……まさかここまでひどいなんて……！早く報告しなくちゃ!!)

ワイルドハントは残虐な行いを楽しみつつも自らがナイトレイドの標的になればめたものと考えていた。殺しに来てくれれば探す手間も省けるからである。はたして市民からワイルドハントの暗殺依頼がナイトレイドに殺到する。これは過去最大件数であり、彼らの凶暴性をよく表していた。さらに革命軍からもアカメたちに指令が届く。民を虐げる彼らを消して、可能なら帝具を奪えと。ナイトレイドは直ちに行動を開始した。

第二章：ワイルドハントを斬る

ドカーーーーー！！！！！！

夜中の帝都に響き渡る凄まじい爆発。煙が止むと、そこにあつたのは凄まじい大きさと深さの穴。まるで巨大な隕石が落下した後のようだ。周囲の木や花はなぎ倒され、まるで戦場の跡地を見ているようだ。

「何……………これ?」

のび太とクロメは唖然とする。自分たちが作り出してしまったとんでもない兵器に動揺を隠せない。

「でもこれ凄いや。もの凄い力を感じる。のび太の発想力が強すぎて生まれたとんでもない帝具だよ。」

「……………。」

数時間後、アカメとチエルシーは……

「ここからはお静かにお願いします。」

「ああ。」

「でも意外ね。あなたみたいなのがレジスタンスに参加しているなんて……」

「私の父は皇帝陛下下の教育係だったのですが、大臣に反逆罪の濡れ衣を着せられ。母ともども幽閉されてしまい……」

「そうか。」

「じゃあ、あなた以外にも宮殿内には革命軍の協力者が？」

「はい。反大臣派の官僚を中心にまとめ、密かに革命軍の皆さんと連絡を取り合っています。」

「……………」

しばらく歩くと、宮殿の裏庭にある建物にたどり着く。

「ここです。」

女性は辺りを見渡した後、扉をノックする。

しーん

だが返事がない。

「どうした？」

「変です。いつもなら、合言葉代わりのノックが返ってくるはずなのに……。」
するとドアの隙間から大量の血痕が流れ出る。

「!？」

「下がれ！」

アカメは扉を勢い良く開ける。中にはレジスタンスのメンバーと思える人たちの死体が転がっていた。

「はあ、遅かったね……まちかねたぜ。」

『!?!』

そしてその死体の山に座る一人の男。

「生憎だったな、レジスタンスとやらは全員肅清させてもらったぜ。このシユラ様がない！」

「大臣の息子……。」

「テメエ等がナイトレイドか？少しは楽しませてくれるんだろうな。」

「なんのためにこんなことを……。」

「決まってるだろう？おもしろいからだよ!!」

「!?」

「俺は退屈ってやつがだいっきらいでな。」

するとアカメは無言で村雨を構える。

「まずい、逃げろ!」

だが転がっていた死体が膨らみだし、そして爆発した。

ドオoooooooooooo

「!?」

目を開けるとそこには

「ラバ!」

嘗ての仲間が現れた。

「また会ったな、ナイトレイド。今度は逃がさん……俺はお前たちを知り尽くしている。お前たちに希望はない。」

すると警備隊がアカメたちを取り囲む。

「それでは……アカメ! 相手をしてもらおうか。」

「一つだけ……。チェルシーには手を出すな。」

「ふむ……いいだろう。」

こうしてアカメ対ラバツクの戦いが始まった。

「アカメ、たしかにお前は強い……。」

ラバは血まみれで横たわっているアカメに言い放った。

「だが死んでしまつては、この国を変えることはできんぞ。」

するとラバは仰向けで倒れているアカメの頭部を蹴り飛ばす。蹴るたびにアカメの頭の傷口から血が噴き出す。そしてラバはもう二、三回蹴ると、今度は頭部を何回も踏みつける。

「や・・・やめて・・・やめて!!」

「所詮アカメはアカメ。これで終わりだ。」

第三章：ラバックを斬る

(誰か……誰か助けて!!誰かアカメちゃんを助けて……!!)

心の中で必死に助けを呼ぶチエルシー。

「これでシユラ様の大手柄って訳だ!!」

縛られたチエルシーと瀕死のアカメを見ながらシユラは叫んだ。二人を拷問室に連れていこうとしたまさにその時、

「ん?」

『『『??』』』

シユラたちが顔を上げると、そこには鎧が立っていた。

大きく後方へと張り出した角。

目の部分は鏡のような細工が施されている。

鎧の隙間には黒い皮膚が覗き、

また胸部はひときわ分厚い装甲で覆われていた。

ただの装飾と言いきってしまうことのできない、腕の突起。

そして何よりも異彩を放つのは、全身に埋め込まれた金属球。

「何者だ？」

「……………」

座っていたシユラが笑いながら立ち上がる。

「おもしれえー。何者かは知らんが、俺たちの邪魔をするって言うんだったら、消えてもらうぜ！」

シユラが飛びかかり、鎧と取っ組み合いになる。

「馬鹿が。力で俺にかなうと思ってるのか？」

しばらくの間、取っ組み合いが続く。体型からしてシユラが負けるはずはない。みなそう思っていた。だが

「!？」

ブチッ

鎧はシユラの両腕を引き千切る。

「わああああ!!!バカ……………な……………」

シユラは両腕をへし折られ、膝をつく。

「シユラ様!!」

「あの細身でシユラ様の腕を折るなんて……」

鎧は無言でシユラに近づく。

「くそ……わああああ!!」

シユラはそのまま鎧に蹴りを入れ、鎧はそれを両手で受け止める。そしてそのまま時間が止まったかのように二人は動かなくなった。後ろで見ていた警備隊も銃を構える。

『!』

そしてしばらくすると、シユラは体中から血を噴き出し、倒れる。

「すごい……」

遠くから見ていたチエルシーは驚く。

「驚いたな、シユラを倒してしまうとは……」

遠くから座つて見ていたラバックが立ち上がる。

「……………」

「まあ、いい……」

するとラバックは鎧に飛びかかる。鎧は攻撃をかわすとラバの体に自身の拳を叩きつける。

ガン

「無駄だ、いかにお前が強くても高い防御力を誇るこの鎧を破ることはできん。」

そして二人は取っ組み合いの体制になる。すると鎧はキイキイキイキイ、という酷く甲高い、耳に障る音を響きだす。

「な、なに、この音……ッ！」

「くっ！」

チエルシーとアカメは、耳を押さえて蹲る。そして異変が起きた。取っ組み合っていたグランシヤリオの身体が震えだしたかと思うと……

——ピシリ。

一気に全身にひび割れが生まれ、そして——崩れ落ちたのだ。それを確認すると「……………」

腕の突起が伸び、周囲にブウンという羽音のような音が響き出る。

——剣だ。

超高速で振動する刃は此の世に断ち切れぬものが存在しない。刃は、ラバックの体に食い込み、その分子接合を切断する。

「さようなら、ラバック……………」

鎧は静かに眩く。

アカメはすかさず縛られているチエルシーの元へ。

「無事か、チエルシー。」

「うん、なんとかね」

すぐにアカメはチエルシーの縄を解いていく。

「よし、脱出するぞー！」

「うん。」

それを見届けると鎧は歩き出す。

「ちよつと待つて!!」

「??？」

「突然いなくなつて、私たちはみんな心配している。だから本当のこと言つて。今は何をしているの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

チエルシーの問いに黙秘をする鎧。するとアカメも口を開く。

「いいたくないなら言わなくていい。でもこれだけは約束してくれ。」

「??？」

「私はお前のことを信じていたんだ!!だから・・・・・・・・。私たちの間で嘘はやめてくれ!!私を・・・・・・・・私たちを信じてくれ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

第四章：墓参りを斬る

私達三人、死ぬ時は同じと誓わん!!

おう!

帝都で出世して金稼ぎだ!俺達でこの貧乏故郷を救うんだ!

「・・・・・・・・・・とか言ってたのに。」

帝都より遠く離れた場所に人影があり、その人影のすぐそばには沢山のお墓があった。

「あれから一年か、早いものね。あんなことがあったなんて嘘みたい。」

少女は墓参りをしていた。

「本当にこの一年色々なことがあったわ」

今まで帝都で起きたことを思い出し

「私・・・・・・・・一人になっちゃった・・・・・・・・」

目から大粒の涙が流れ出す。

「う・・・・・・・・うっ・・・・・・・・うっ・・・・・・・・」

すると突然声をかけられる。

「お姉ちゃん？」

「えっ!?! ログ？」

川で遊んでたはずのログが戻ってきた。サヨは急いで涙を拭き、振り向く。

「あれ、のび太にドラえもん？それに……」

「あつ、彼女は僕たちの友達でクロメって言うんだ。」

サヨはクロメに向き直る。

「よろしく。」

「うん、よろしく。」

お互いに自己紹介をするクロメとサヨ。

「それにしても久しぶり、サヨちゃん!!」

「元気だった？」

「えっ、あつ、うん。」

サヨの言葉に元気がない。

「どうしたの？」

「何か悩み事……」

「なんでもない。」

サヨはニコリと笑う。だがドラえもん達には分かっていたその笑顔が偽物であることを。公開処刑後、サヨは革命軍本部の医療施設でしばらく入院していた。だがある日突然何も言わず姿を消した。

「はい、いっぱい食べてね。お代わりあるから。」

「わーい！いったきまーす!!」

のび太たちはサヨの家で夕食を ご馳走になる。メニューはスープと肉料理だけだが、その味付けは絶品である。クロメなんて信じられないスピードで肉を口の中に入れていく。

「この家に住んでるのはサヨちゃんたちだけ？他に誰もいないの？」

「うん。昔は人が沢山いて賑やかな村だったんだけど。みんな帝都の方に引っ越しちゃって……………」

『……………』

「今、この村に住んでいるのは私たちだけ。」

「……………」

この辺りには危険種や野生の動物たちが出現するのでとても危険だ。だがそれでも、腐敗しきった帝都に住むよりは何倍も安全である。

「……すー……すー……すー……すー……すー……」

夕食の後、ローグはのび太たちと思いつきり遊んだ。そのせいで疲れたのか、今はぐっすりと夢の中である。

『……すー……すー……すー……すー……すー……』

そんなのび太とドラえもんも同じく夢の中である。

「……」

すると別の部屋で寝ていたクロメは目を覚し、静かに部屋を出ていく。

第五章：過去を斬る（前編）

「さっきの話し……」

「??？」

深夜、墓場でお祈りをしていたサヨのもとにクロメがやってきた。だがサヨは振り向かず、目の前の墓を眺める。

「村の人たちがみんな帝都の方に引越したって……」

「……」

「うそなんでしょ？」

「……」

クロメは辺り一面に広がる墓を見渡す。

「このお墓……全部がこの村の人たち、違う？」

「……」

「聞いたことがある。昔、ある賑やかな村が一夜のうちに跡形もなくなっただこと。それもたった一人の少年の手によって……」

「……」

「そしてその少年の名は『やめて、聞きたくない!!』……」

サヨは両耳を抑えながら声を上げる。

「いつまでそうやっているつもり？」

「……」

「情けない。いつまでも過去にこだわって『分かっている!!』!?」

「分かっているわよ!!こんなことしたって死んだみんなが生き返るわけじゃない。ましてや喜びもしない。」

「……」

「今の私には家族もいなければ、帰るべき居場所もない。だから前に進むしかないんだ。」

そう言うとサヨは立ち上がり、振り向く。

「それと、調子に乗らないで！」

「??」

「いーだっ！」

サヨはクロメに舌を突き出す。

「私は別に悲しくてここに戻ってきたわけじゃないわ。決戦にむけて色々準備しに来たのよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」。

「サヨはこの村の出身？」

「そうよ。懐かしいなあ・・・・・・・・昔はタツミとイエヤスと一緒に遊んだり、悪戯して村長に叱られたり、剣術の稽古したり、狩りに行って迷子になったり・・・・・・・・」。

いつだって
・
・
・

私はいつもタツミのことを見ていた。

カチャ

「今日は何読んでんの!？」

私の部屋に今日も彼がやってきた。

「もうすぐ読み終わる．．．勇者が魔王を倒して．．．。」

「マジで!？すげえ。」

生まれた時から体が弱かった私は他の子たちと外で遊ぶこともできず、いつも部屋で本を読んでいた。そんな私にやたらとかまってくる男子。私に出来た最初で最高の友達……。私は、ほぼ毎日タツミに部屋から連れ出されては色んな遊びに付き合わされた。

ある日、イエヤスが虐められていた。彼を助ける為、タツミは一人でいじめっ子たちにむかっていった。けど

「イエヤス！」

いじめっ子二人がイエヤスを取り押さえる。

「お前が黙って殴られるっていうなら、こいつは許してやるよ！」

イエヤスを人質に取られ、なす術を失う。

「さあ、どうすんだ？」

「……………」

「どうすんだよ？」

「……………」

「いいんだな？ よーし、このお！」

いじめっ子たちはイエヤスに拳を振り上げる。

「待て！」

タツミはその場に胡座をかいて座り込む。

「タツミ！」

「ふん。最初からそうしてればいいんだよ！」

いじめっ子たち全員がタツミを取り囲み

ガス

ボス

ドス

ガス

ボス

ドス

ふくろ叩きにする。

「イエヤス、大丈夫か？」

「うーうん、大丈夫。」

フクロ叩きにあつたので全身に怪我。しかしそんな状況でも自分より他人を心配するお人好し、タツミ。その様子を見ていた私は声をかける。

「タツミは強いね。それにとっても優しんだね。」

「やーやめてくれよ。オレのどこが強いんだよ？」

「ううん。タツミは強いよ、それに優しい。だって優しくなきや、本当に強くはなれないんだから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・オレこれからもっともつと強くなるよ！そしてサヨとイエヤスはオレが守る。」

「うん、ありがとう。」

わんぱくで無鉄砲で怪我しないかいつもハラハラさせられた。そのクセ人のことは心配な性格で……。

ある日、こつそり家を抜け出してタツミと一緒に狩りに出かけた。そして帰る途中で危険種に出くわした。

「どうしよう、逃げられる状況じゃない。」

「……………」

「つて、何をしているの!？」

タツミは落ちていた木の棒を手取る。

「……………う……………う……………う……………う……………」

タツミは棒をかまえる……………けど、足が震えてる。

「う……………う……………う……………う……………う……………う……………う……………う……………う……………う……………」

「そんなんで勝てるの?」

「無理、でも時間稼ぎくらいには……………」

「死ぬつもり?」

「うん、でもいいんだ。」

「???」

「サヨはオレを守る!!」

ドオン

そして何とか二人で危険種を倒した。

「ハア……………ハア……………」

「ハア……………ハア……………」

「まったく……………なんて無茶苦茶なのよ……………」

全身大怪我を負いながらなんとか私は立ち上がる。

「死んだらどうするの？ 相手は危険種なのに……………」

「……………お前はオレが守るって言ったろ？ サヨは大事な友達だからな。」

タツミは全身血だらけで、うつ伏せに倒れている。

「……………ホント……………生意気なんだから……………」

タツミのせいで毎日を命がけで生きる私。でもそんな毎日が幸せだった。

第六章：過去を斬る（後編）

そしてある日、帝都の警備隊だったタツミの両親が死罪になったの。そしてこの頃から、タツミの出生につけこんだひどい仕打ちが始まった。普段からタツミを良く思っていなかったいじめっ子たちに加え、大人たちまでもが陰湿なイジメや嫌がらせをするようになった。しかもみんな巧妙に自分とバレないよう隠れてイジメを繰り返していた。

「出てけ、犯罪者!!」

「犯罪者の息子はこの村にいらぬ!」

「この村はお前みたいぬ奴が住むところじやないんだよ!」

「死ぬ、犯罪者!」

「アイツは危険すぎる。うちの子もアイツに怪我させられてるんだ!」

「このままではいつか、この村に大きな災いを齎すぞ、村長！」

「そうだ！そうだ！今のうちにどこか別の村にやっってしまうべきだ！」

「そもそも、あんな奴を住まわせてるアンタもどうかしてる。」

けどタツミはそんなこと気にもせず、いつも通り振舞っていた。

「元氣だぜ。病氣治して。なろうぜ、英雄に！」

英雄それは私たちがその頃、良く読んでいた本の主人公。

「帝都で出世して一緒にこの村を豊かにしようぜ。」

あんなことをされても、村のことを考えているなんて。私の顔から自然と笑みが生まれる。

「うん！なるう。・・・絶対。絶対だぞ、タツミ！ね、イエヤス！」

私は振り向き、イエヤスに話しかける。だが、イエヤスは無言のまま何も反応しない。

「イエヤス？」

「えっ、あつ、何だ？」

「どうしたの？今日イエヤス、朝から変だよ。」

「えっ、あつ、別に何でもないぞ。」

「ホント？」

私とタツミは心配そうにイエヤスの顔を覗き込む。

「悩みでもあるのか？」

「ホ、ホントに何でもないぞー！」

「それならいいけどさ・・・。」

「あつ、そうだ。」

私は持っていたカバンに手を入れる。

「はい、これ。私たちの仲良しの印。昨日の夜、私が作ったんだよ。」

私は三つの人形のうち二つをタツミとイエヤスに渡した。

「大事にするよ。」

「ありがとう！」

するとタツミは意を決したように口を開いた。

「なあ……」

『!?!』

「俺たち友達だよな？」

「そんなの当たり前でしょ！」

「友達に決まってるだろ！」

私たちの言葉にタツミの顔は笑顔になる。

そして次の日、とんでもない事件が起こった。この村にある禁断の洞窟で保管してあった帝具が盗まれたの。

ドン

「いたな！」

大人たちがタツミの家に押しかける。

「いつか何かやらかすと思つてたぜ。」

「えっ?」

「こんな奴追い出しちまえ!」

「俺はなにも・・・。」

無罪だと主張するタツミを大人たちは罵倒する。すると大人たちの後ろから何人もの子供たちが顔を出す。その中には・・・

「えっ! イエヤス!」

大人たちは子供たちに視線を向ける。

「コイツらが白状したんだよ。お前に脅されてイヤイヤ帝具を盗んだんだってな!」

「えっ!?!」

「脅して無理矢理悪事を働かせるとはとんでもねえ奴だぜ。」

「そんな・・・嘘だよ、な?俺、そんなことしてないよな?なあ、みんな?」

タツミは怯えた声で問いかけた。

「どうなんだ? お前らはコイツに脅されたんだよな?」

大人たちは鋭い口調で子供たちに問いかける。

「『タツミに脅されました・・・。』」

イエヤスたちは口を揃えて答えた。

「嘘だ．．．。」

「タツミに無理矢理．．．」

「嘘だ．．．．。嘘だ!!!」

タツミは、信じられないとばかりに声を上げる。

そしてタツミは牢獄に入れられ、彼は何日も何日も泣き続けた。そして10年後、牢獄に村長がやってきた。

「タツミ、お前を帝都に引き渡す。」

「えっ!?! どうして? 何でだよ、村長!?! 村長!!」

「タツミ．．．人を傷つれたり、盗みを働いた人は牢獄に入れられる。何故だか分かる

か？」

「何を言っているんだ、村長？」

「怖いからだよ。怖いから閉じ込めるんだ。怖い人は悪い人。そしてタツミ、お前は誰よりも怖いんだ！お前を好きになる人なんているわけない！」

「だったら……だったら最初から俺を引き取らなければ良かったじゃないか!!」

「お金だよ。お前を引き取る代わりにお前の両親が残した遺産が手に入ったんだ。お前を手放せば、遺産は帝都に返さなければならぬ。だがお前が罪を犯して捕まったとなれば、話は別だ。お前を犯罪者として帝都に引き渡せば、遺産は返さず済む。」

「……………」

「感謝するぞ、お前のおかげでこの村が豊かになる。我々が飢えて死ぬこともなくなる。」

「……………」

タツミの中で何かが音を立てて砕け散る。

「大量、大量。今夜はご馳走だな！」

川で夕食の魚を釣り終え、私とイエヤスは村に向かっていた。

「まっ、これぐらいこのイエヤス様にかかれば朝飯前だな。」

「!?」

すると私は異変を感じ、立ち止まる。

「どうした、サヨ？」

「きな臭い……」

私たちは辺りを見渡す。そして

「おい、サヨ！あれ！」

「村が……私たちの村が!!」

私たちは急いで村に戻った。だが火は村中に広がっていた。

ザツ

「タツミ！無事だったのね！」

見知った後ろ姿を見つけ、私は急いで彼に駆け寄る。だがタツミは私を無視して無言でイエヤスに近づいていく。

「あつ、あ、タツミ。あのときは……すまねえ……その……」

タツミはいきなり左手でイエヤスの顔を掴む。すると

「燃え散れ。」

イエヤスの体は炎に包まれ、消滅した。

「タツミ……」

私は突然の事で動揺し、動けなくなった。すると一緒に様子を伺っていた村人たちが驚きの声を上げる。

「何しやがった!?」

「……何って、ただのゴミ掃除だけど?」

「えっ!?（今、なんて言ったの?）」

タツミの発言に私は心の底から驚く。

「……………最後に一つ聞く。自ら帝都に出頭して法に裁かれるか、それともここで死ぬか……………、どっちがいい?」

タツミは持っていた村長の首を地面に落とす、踏みつける。

「ふざけんじゃねえ、化け物!!?」

「死ぬのは、お前だ!!?」

村人が一斉にタツミに襲いかかる。

「そうか……………じゃあここで死ぬ。」

最終章：信じることを斬る

そして火は一昼夜燃え続け、村を跡形もなく燃やし尽くした。

「濡れ衣だよサヨ。それともお前も俺が犯罪者の息子だから疑うのか？」

「違う!!! 悔しかったタツミの気持ちはよく分かる！あいつらは卑劣よ！許せない！それは私も同じよ!!! だからって……………」

ギロリ

タツミは鋭い視線を私に向ける。

「だからって？何？」

ゾクツ

「!？」

「だからって他人を使って盗みを働いていいわけがないって、言いたいんだろ？」

「……………」

タツミは大きなため息をつく。

「お前とは友達でいたかったけど、やっぱり無理みたいだな。俺とお前はある意味で似たもの同士だ。同じように山の頂上を目指し登り続けて行こうとする人間だ。だが残

念ながらお前とは登ろうとする山が違うらしい……。……。
タツミはそのまま私に背を向けて歩き出す。

「タツミ……。……。」

私はタツミの手を掴み引き止めるが

パシッ

彼は私の手をはじいた。

「俺にはお前も知っているとおり犯罪者の血がながれているんだ。それでも今までみんなに認められなくて、努力してきたけど。無理なんだな。今それを痛いほど実感している。」

「バカなこと言わないで!!!タツミはタツミでしょ!!!」

「サヨ。」

「!?!」

「お前は正義の味方ズラした偽善者だ……。」

タツミの目はまるで汚いゴミを見るかのように鋭かった。

「タツミは犯罪者のレッテルを貼られた自分にたえられなかったんだと思う。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あの時、私は心のどこかでタツミが本当にみんなをおどして帝具を盗ませたんじゃないかと思っていたみたい。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「今でも思うの、『どうして信じてあげられなかったんだろう』って。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「『信じてもらえない』事ってすごい辛いことなのに……私はいつも口先だけ……友達としてタツミに何もしてあげられなかった。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そして私の幸せは消え去った。目の前にあった幸せを繋ぎとめることができなかつた。当然ね。友達を陥れて、掴んだ幸せだもの。悪いのは全部私。『信じてあげられな

かった』自分のせい。『あの時、私に勇気があれば』そう思えば、思うほど、誰かを憎まないと気が狂ってしまいそうだった。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ねえ、クロメ。」

「何？」

「あなたに頼みたいことがあるの？」

「頼み？」

「のび太のことを最後の最後まで信じてあげて。それができるのはあなただけよ、クロメ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「これから何が起こつても。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「誰かが信じてくれていると確信したり、信じられる人がいれば人はそう大きく曲がったり歪んだりすることはないのよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

すると眩しい光が二人を照らす。話に夢中になっていつの間にか夜が開けたらしい。

「サヨ。」

「何？」

「さつき『今の私には家族もいなければ、帰るべき居場所もない。』って言ったよね。」

「うん。」

「それは間違いだよ。」

「えっ？」

「サヨには家族もいれば、帰るべき居場所もあるよ。」

そう言うのと、クロメは背を向けて歩き出す。

「??？」

訳が分からずクロメの後を追うサヨ。

「ただいま。」

玄関のドアを開けて、家に入るサヨたち。すると台所中に美味しそうな臭いが漂っていた。

「おかえりなさい、お姉ちゃん!!」

「おかえり、サヨちゃん!!」

「朝ごはん、もうすぐできるから、座ってて。」

目の前の光景に呆然とするサヨ。するとクロメは笑みを浮かべ

「いーだっ!」

お返しとばかりにサヨに舌を突き出す。

「.....」

サヨの顔が自然と笑顔になる。それは紛れもなく本物で今までよりも眩しく輝いていた。

最終決戦

プロローグ

時間は夜中の1時を過ぎようとした頃、一人の少女が教会の屋根に座り、星を眺めていた。

「???」

すると彼女の後ろから少年が現れた。

「のび太!」

「これ持ってきたんだけど、食べる?」

のび太はお菓子の入った袋を持ってきた。

「うん。」

「……不思議な関係だよね……私たち。敵対しても互いを信じてるっていうか……。」

「……………」

会話をしながら空を見上げる二人。

「そういえば、前にのび太がお菓子を持ってきた時。三人で分けるって言ったののにのび太が殆ど食べちゃったよね。」

「それはクロメでしょ？ 持ってきた袋を取り上げて『このお菓子はあげない』とかいってたし。」

「それとのび太が底なし沼にハマった時は大変だったね。」

「クロメはお菓子を食べながら、見てただけだったけどね。タツミがいなかったら、僕はどうなっていたことか……。」

いくつかの懐かしい思い出を語りだす二人。二人の表情から笑みが生まれる。

「……うん、やっぱりこうしていると凄く落ち着く。」

「これからも僕と一緒にいてよ、クロメ。」

その言葉にクロメの表情が暗くなる。

「そうだ！ 今度、僕の星にクロメを……ダメ、それはできない。」 えっ？

「……。」

「どうして……？」

「……。」

「??？」

「ねえ、のび太。」

「うん？」

「英雄って、お話だけじゃなかったのかもね。」

以前サヨの話聞いたクロメはさらりとそんな話題をふる。

「えっ?」

「本当はのび太がそうなんだよ。」

「そんなわけ……。」

クロメの言葉に照れるのび太。

「これって……。」

クロメの隣に小さい袋があるのを見つめる。

「こ、こ、これは、あげない。」

クロメは素早く袋をのび太から奪い返す。

「分かってる、クロメのお菓子は取ったりしないよ。」

「これはお菓子じゃない、お守り。」

「お守り？」

「これがあつたから、今の私があるんだよ。」

クロメは大切そうに袋を抱き抱える。その袋の中にあるのは小さなロケット。そしてそのロケットには数字の3が書かれていた。

ビウツ!!

「!?!」

いきなり眩しい光りがのび太たちの頭上を通る。

ドオン!!!

「!?!」

そしていきなり大爆発が起こる。振り向くと、

「山が………消えた!?!」

背後にあつた山がいきなり消滅した。そしてのび太たちは宮殿の方角に目をやると

「あ………あ………あれは……」

顔色を変える。

「
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
クロメは拳を握りしめる。
護国機神、
シコウテイザー・・・・・・・・。。」

第一章：戦いを斬る

「同志たちよ！今日、我々は革命を成功させ、新しい国を作る。悪性を滅ぼし、民が安らかに暮らせる国を自らの手で勝ち取るのだ!!」

「『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』」

ナジエンダと革命軍の叫びが帝都中に響き渡る。

その頃、宮殿内

「うおおおおお!!!」

ドオン

「当たり前！こつちは読み通り手薄だったね。」

下準備として掘っていた穴から宮殿内に浸入するナイトレイド。

「ラバが作った地図どおりだ。」

「良い仕事。」

するといきなり兵士たちに囲まれる。

「ナイトレイド！」

「無駄な殺しは望んでいない。覚悟のない者は去れ！」

殺気を込めた目で兵士たちに命令するアカメ。だが

「引くわけにはいかない！」

兵たちは武器を構える。

「流石に中を守ってるのは、骨があるか。」

「斬るしかありません。」

両者互いに武器を構える。

「のび太くーん!!」

「クロメ!!」

遠くからドラえもんとサヨが走ってくる。その足は意外と速かった。遠くに見えていた影が大きくなり、のび太たちの前に立つ。するとサヨは

「のび太………帝都に行くの?」

「うん。帝都で何かが起こっているんだ。」

「急ごう。」

「うん。」

「ええ。」

帝都へ向かうため、走りだそうとするのび太たち。

ロケットを飛ばして

帝都へ来て

帝国の闇を知って

皆と出会った

あれからどれぐらい経ったか

国が変わることを信じてずっと戦ってきた

友達をなくして

人を殺しながら

あと一歩

あと一歩なんだ

宝なんて関係ない

僕はみんなを守る

アカメたちは宮殿の中から外の様子を伺う。

「なんだ、ありやあ？」

「シコウテイザー？存在してたのね。大臣・・・あんな切り札を隠していたから、いつまでも負けを認めなかったんだ。」

「ヤバイってアレは・・・・・・でかすぎだつて・・・!!!」

「とにかく急ぎましょう！ 私達の標的を倒す事がアレを止めることに繋がっているかも
しれません。」

ドオーン

「ふう、何とかたどり着きましたね！」

「ああー！」

門を破壊し、玉座のある部屋に到着するレオーネたち。

「族ー！」

男は悲鳴に近い声を出す。彼はオネスト大臣、幼い皇帝を意のままに操って暴虐の
ぎりを尽くす帝都の大臣で、帝国の腐敗の元凶。「ナイトレイド」の最終的な標的であ
る。いつも何かを食べている巨漢だが、相当の切れ者で、後継者争いに乗じて今の皇帝
を帝位につけた功績を持っている。

「待ちくたびれたぞ、お前たち。」

するとそこへ、エステスが楽しそうに笑みを浮かべながら前に出る。

バリッ

「!?」

突然天井の窓ガラスが割れ、アカメが飛び込んでくる。

「目星警護はもういないようだ。」

「ターゲット、オネスト大臣。葬る!!!!」

第二章：至高を斬る

ドオン

「ここで総崩れになれば終わるぞ！踏ん張るんだ皆！」

至高の帝具の威力に革命軍は怯え出す。

「あんな奥の手を隠しもつていたとは……想定を遥かに超えている……。」

「これ以上撃つなああああああああ!!!」

鎧をつけたのび太が飛んで来た。

「単身で飛び込んでくるとは、お露か者め!!撃ち落とせ！」

大臣の命令でビームを放つ至高の帝具。のび太は攻撃をかわすとすかさずシコウテイザーの肩に飛び乗る。そして急いで帝具の額にその拳を叩き込む。

ドーン!!!

「な、なんだとおっ!?」

シコウテイザーは揺れ、バランスを崩すが、なんとか持ちこたえる。その光景に驚く大臣と皇帝。

「至高の帝具が・・・拳一撃で揺らぐなど・・・!!」

『!?!』

そしてこの光景を見ていたナジエンダと革命軍は

「・・・今のを見たか!あの兵器とて攻略法はある!!倒せるぞ!!怯えて逃げれば大臣の思う壺だ!ここまで来たんだ!最後の戦い、絶対に勝つぞ!!」

『『『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』』』

「来たかのび太。待っていたぞ、この時を。」

タツミはシコウテイザーの頭に飛び乗る。のび太はドラえもんをノーマル状態に戻すとタツミを殺気がこもった目で睨む。

「ふん、僕たちは怪我一つしてないよ。大したことないね、その帝具！」

ドラえもんの言葉にタツミはクスクスと笑う。

「シコウテイザー、本当の姿を見せてやれ。」

「何？」

「えっ？」

メキメキ

メキメキ

するとどうだろう、シコウテイザーの装甲が剥がれ落ち、帝具は体の各部に眼球を備えた生物的で禍々しい外観に変貌する。これが錬金術と帝具を合成させた粛清モード。

「大きい……。」

「凄まじい力を感じる。」

その姿に見ていた誰もが言葉を失う。

「フフフフ、どうだい？」

タツミの言葉にのび太とドラえもんは

「ふん！面白い！いくよ、ドラえもん!!」

「うん！」

ドラえもんと再び一つになると、走り出す。するとシコウテイザーの口が開き大量の

虫が飛び出す。

「出でよー！真・近衛兵!!」

バシッ

バシッ

バシッ

バシッ

「それがどうしたあつ!!」

虫を瞬時に叩き落とすと、再びシコウテイザーの腕にのり拳を叩きつけるが

カン！

「あれ!？」

「武装が増えただけじゃない。装甲もきつきより固くなってる。」

驚いているのび太たちを他所に、シコウテイザーの胸部が光り出す。

「まずい、街に落ちるぞー！」

ドラえもんの言葉にのび太は咄嗟に光の前に出る。

「のび太くん!？」

「くっ!」

ドオーオーン
!!!!

第三章：復活を斬る

「まったく、手こずらせおって。」

遠くでその様子を見ていた大臣がため息をつき、合図する。シコウテイザーは拳を大きく振りかぶる。

「これぞ、近接最強の武装……」

拳に力が集まり、のび太に襲いかかる。

「マズイ！」

「のび太!!」

遠くで見ていたアカメとクロメが声を上げる。

「のび太と言う男．．．運が悪かったようですね。至高の帝具では．．．．．」
「いや、それはどうかな。」

エスデスの言葉にタツミは笑みを浮かべる。

「??？」

そんなタツミの様子を横で見つめるエスデス。

眠い．．．．

このままずっと寝てたい
・
・
・

もう少し眠たい
・
・
・

もう、朝なのかな？

起きなきや。

起きて、また学校にいつて。

宿題忘れて、立たされて。

家に帰って、ママにテストの事で叱られて。

遊びに行って、ジャイアンたちに虐められて。

家に帰って、またママに叱られて。

宿題やらずに寝る。

いつもと同じ。

平凡な日が毎日繰り返される。

「の
・
・
・
・
のび
・
・
・
のび
太!!!
」

そう、いつものこと……。

ほら聞こえてくる。一階からママが僕を呼ぶ声が。

ピタッ

ピタッ

何かが顔に零れ落ちる。

何だろう？

とても暖かい。

そしてとても懐かしい。

「まさか……もう諦めた訳じゃないでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「これくらいでお前たちが死ぬとも思っているのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「違うだろう!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「アンタたちは勝ち組。こんな所で終わるんじゃないわよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「思い出せ・・・・・・・・お前たちが今までしてきたことを・・・・・・・・全部!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「お前たちと出会い、命を救われた者たち・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「存在を忘れられた者・・・・・・・・力がなく苦しんでいた者・・・・・・・・故郷を追われた

者・・・・・・・・憎しみに囚われていた者・・・・・・・・他族を拒んでいた者・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ボスも、ラバも、ブラートも、スサノオも、アカメも、チエルシーも、レオーネも、シエー

レも、サヨも、クロメも・・・・・・・・そして私も・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「なら分かるわよね? . . . 。アンタたちのすべき事」
「.」

「まだ苦しんでいる人がいる : アンタたちの助けを必要としている人がいる
そうでしょう?」

「.」

「大丈夫だ。お前たちの背には多くの意志たちが集まっている!」

「.」

「お前たちは何度でも失敗する、だがその度に立ち上がれる勇気を持っている!」

「.」

「もし起きられなければ、俺たちが起こしてやるよ!」

「.」

「みんな信じてる! アンタたちならやれるって! だから」

「.」

「だから真つ直ぐ進んで! 自分の意志で決められないことなんかないんだから!!!」

ザザザ

ビュー

「『『『『』』』』』」

いきなり目もくらむような光がのび太とドラえもんを中心に走った。その衝撃に周りがあるあらゆる物が吹っ飛んでいく。

ドオン！！！！

「な．．．．．なんだ？なんだ、この圧力は．．．？」

ニヤリ

その様子にエステスは驚き、タツミは笑みを浮かべる。アカメはなんとか目を開けるとそこには

「のび太くん、見せてやろう。君の．．．僕たちの力を!!!」

「．．．．．いくぞオツ!!」

第四章：エスデスを斬る（前編）

「のび太……」

アカメは静かに呟く。その表情は嬉しさと安心に満ちている。その視線を向けられた本人はとうとうと未だに無言のまま至高の帝具を見上げている。自身の髪が白く染まっているのに全く気づいていない。

「心の臓は止まっていたはずだが……」

エスデスはそう言うと、シコウテイザーから飛び降り、のび太に襲いかかる。

「さあ、わたしと……」

ダン!!!

そう言い終える前にエスデスはのび太に吹っ飛ばされる。気がつくときエスデスはシ

コウテイザーの足にめり込んでいた。

「のび太!？」

「なんて早さだ!!!」

その光景に誰もが驚く。

（こいつ……さつきまでとは違う。一体何が起こったというのだ!!）

エスデスはよろけながら立ち上がると

「ほう……少しはできるようにはなったな。」

のび太に再び襲いかかる。だがのび太は、エスデスの拳を片手で軽く受け止めると、もう片方の手を構える。

「!!!」

「プレッシャーカノン!!」

掌から衝撃波を放つ。

ドオン!!!

エスデスは距離を取ると、すかさず水の盾を作り、これを防ぐ。だが衝撃が凄まじく吹き飛ばされてしまう。

「くっ……フフ、これだから戦いは『どこを見ている!』何!？」

突然後ろで声がある。エスデスは振り向こうとした瞬間殴られた。のび太は瞬時に

後ろからエスデスの両腕を掴むと。

ドオン!!

両腕を掴んだまま空中で一回転し、エスデスの脳天にカカト落としをぶちかます。

「!?」

のび太は上空から気配を感じた。

「至高の帝具……」

シコウテイザーの拳を交わし、すかさず腕に飛び移る。

ドスン!!!

今度はキックで帝具を押し返す。するとシコウテイザーの胸部が再び光り出す。のび太は、両手の掌を前に突き出し、衝撃波を繰り出す。

ドオン!!!

何とかビームを相殺すると

「のび太くん、後ろ!!」

背後から頭から血を流したエスデスが襲いかかってくる。

タタタタッ

ガキイッ

「エスデス!!」

だが、正面からエスデスの攻撃を受け止めるアカメ。

「小賢しい!!お前の力も速度ももう見切っている・・・!!?」

邪魔をするなど言わんばかりに声を上げるエスデス。するとクロメも背後からエスデスに襲いかかる。だが

「摩訶鉢特摩!」

全ての時間が停止した。

「褒めておこう。今の連携はなかなかよかったぞお前たち。」

そう言うとエスデスは氷の剣を取り出すが

ダン！

背後から何者かに殴られる。

「なにっ!!」

その正体は鎧を身に纏ったのび太だった。

「どうやってこの停止した時間の中を……。」

すると鎧の額にある金属球が光り出す。

私はずっと・・・アンタたちを見てる!!だから・・・心配しないで。前に進んで!!

「お前に僕たちの時間は止められない!!」

第五章：エスデスを斬る（後編）

「全訪問の一斉射撃準備。まもなく完了。」

べしっ

ガシッ

ガガガ

ガシッ

帝国中にエスデスとのび太のぶっかかり合う音が鳴り響く。

「素晴らしいぞお前たち、流石タツミが見込んだだけのことはある。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ナジエンダめ、秘蔵の帝具なぞ存在しないな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お前たちだ。お前たちが初めから私への対抗策だったのだな・・・・・・・・」

ガガガガ

ガシッ

ガガガガ

ガシッ

「楽しいなあ、のび太！」

笑いながら踊り続けるエスデスにのび太は口を開いた。

「人間同士が憎しみ合い殺しあう、理不尽な暴力と悲劇に満ちた世界……。」
「??？」

「こんな腐敗した世界でも人の優しさや愛情というものはある。人は他人の幸せを共に喜び、他人の不幸を共に悲しむことのできる心も確かに持っている。」

ダメー！のび太がいなくなったらお姉ちゃんが悲しむし、私も嫌っ……！！

約束しただろ!!!生きて戻ると言ったのに!!!

「そしてそんな人の心を一度でも知ってしまったら、もう一人ではいられない。自分を受け入れてくれる誰かがこの世界にいるのだと知ったら、もう手を伸ばすにはいられない

い。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「この世界に財宝はあった。お金なんかよりも大切な宝が!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「そしてその宝を壊そうとするお前たちはここで死んでもらう・・・・。」

「ふん。」

やれるものならやってみろとエスデスは鼻で笑った。

ガ

ガ

ガ

「ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・。」

シコウテイザーとエスデス相手に肩で息をするのび太。

「力を振り絞っているな・・・・いいだろう・・・・。」

エスデスは全身を巨大な氷の鎧で積み込む。

「これならどうだ、お前たちの攻撃も届くまい。」

のび太は悟った。まもなくシコウテイザーの一斉射撃が始まると。ならば撃たれる

前に

「ハア、ハア、ハア、」

両手で胸の装甲を掴み、引き剥がす。露になったのは奇妙な光沢を放つ、透明の球体だった。状況が状況でなければ美しいとも思えたかもしれない。だが——それはあまりにも剣呑な光を帯びていた。違う。光が集まっていくのだ。淡い輝きが、徐々に強さを増し、そして収束し——

ドオン!!

解放された。

「いつけええええ!!!!」

のび太の放った光りがエスデスの氷の鎧を飲み込む。

「無駄だ！この氷は誰にも……なに?」

アカメ、クロメ、サヨ、レオーネ、シエーレが後ろからのび太を支える。その光景に驚くエスデス。

シューウー!!

「バカな!!」

全てを滅ぼす、恐るべき破滅の光。のび太の胸部から放たれたのは、まさにソレだった。エスデスの氷は消滅し、光がエスデスを包み込む。

ただ強いだけでは・・・最後には結局負けるんだな。

・・・すまない・・・タツミ・・・

．．．．．お前には一度も振り向いてもらえなかつたな、タツミ。

強大な光は、瞬く間にエスデスの肉体を飲み込み、そして、消し飛ばしたのだ。彼女は塵一つ、肉片一つ残すことなく、この世界から消滅した。彼女

第六章：シコウテイザーを斬る

全訪問の一斉射撃準備完了、発射する。

シコウテイザーの全身から光が放射する。

「このまま貫く!!!」

今度のはのび太たちとシコウテイザーの光りがぶつかり合う。目もくらむような光が帝都中を照らす。

(これが・・・最後の一撃！精神エネルギー全てを注ぎ込む!!!)

アカメたちも全身に力を入れ、踏ん張る。

「くっ・・・・・・・・・・。」

「ゴミが何人集まろうと無駄です。この至高の帝具の敵ではない。」

大笑いしながらアカメたちを見つめる大臣。

「ここまで追い込んだ反乱軍の責任です。大人しく全滅……して……!?」

大臣は再び視線を戻すと

「『『『いけえ、押し返せ!!!』』』」

今度はアカメたちだけではなく。革命軍、一般人、警備隊、帝国兵士までもがのび太たちを支える。

「もう少しだ、みんな力を振り絞れ!!!」

ゴオオオオオオ!!!

「本当に強いのは……!!!」

シコウテイザーの光が徐々に押し戻される。

「……強いの……!!!」

のび太たちの光りがシコウテイザーの上半身を包み込む。その様子に大臣は悲鳴を上げる。

のび太の体を指でつつく。

「……………」

そしてそんな様子を遠くから見守るアカメ。そんな彼女にナジエンダは倒した敵はこっちで見ている。」

「??？」

「あんなに会いたがっていただろう。行ってこい！」

「……………すまない。」

アカメはのび太のところに駆け寄り

「のび太!!!」

そのまま抱きついた。

「いたあああああああああああああああああああああ
今度は堪らず、声を上げた。その声は帝都中に響きわたった。
!!!!!!!」

千年にわたり繁栄した大帝国は今ここに崩壊した・・・

かのように見えた。

だが、
彼らは知らなかった本当の地獄はここからだということに。

第七章：タツミを斬る（前編）

人気のない森の中でにらみ合う二人の少年。そしてそれを遠くから見守る黒髪の少女。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

すると白髪の少年が口を開く。

「やっぱりこうなるのか・・・・・・・・。」

「お前があくまでナイトレイド・・・・・・・・人間の味方をするというのなら・・・・・・・・俺はお前を・・・・・・・・」

「!?!」

タツミの周りに禍々しいオーラが集まり出す。

「のび太!」

「くっ・・・・・・・・。離れててクロメ!」

余りの衝撃に吹き飛ばされそうになる。するとタツミの手のひらに何かが集まり出す。

「黒い炎!？」

タツミはその炎をのび太目掛けて、解き放った。

「まずい!」

ドオーオーン
!!!!!!

瞬間移動で木の上に飛んだのび太。

「!？」

さっきまでいた場所の地形が変わっていることに驚く。

「お前は人間が憎くないのか!？ 奴らを許せるのか!？」

「くっ!」

のび太は振り返り光の波動を手から放出する。

ドオン!!

爆発音と共に大量の煙が周囲を囲む。

「僕は確かにバカだよ。いつも僕を虐め、罵倒してきた『人間』を守ろうとするなんて。でも……これが僕なんだよ。」

煙の中から炎の腕が飛び出し、のび太の体を掴むと、そのまま地面に叩きつける。

「ぐはっ。」

のび太は血を吐きながらその場に倒れこむがすぐに立ち上がる。その光景にタツミは笑みを浮かべる。本来なら掴まれた時点で体が崩壊するのだが、どうやら身体能力も格段に上がっているらしい。

「人間は腐った生き物さ。自分とは違うものを受け入れようとせず、突き放すだけ。」

「(隙がない、近づけない……)……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

のび太は掴まれた部分に黒い火傷のようなものがあるのに気づく。

「帝具にしたってそうだ。始皇帝は『ずっとこの国を守っていききたい』という理由で作り上げたそうだが、結果はどうだ。未だに争いは無くなっていない。いや、寧ろ帝具のせいで増加する一方だ。国を……民を守るところか危険にさらしているじゃないか。そもそも国を守って生きたいのなら差別をなくす方法を考えるべきだった。そんな簡単なことも分らないのが人間さ。」

「……………」

「人間そのものが争いを招く種だ。そんな物を守る価値など無い!!」

タツミの炎の右腕が再びのび太に襲いかかる。

「今だ!!」

待つてましたと言わんばかりに腕をかわすと、タツミに向かつて走り出す。のび太は手に念力を集めると光の大剣を作りだし

「いっけええええええ!!」

水平に振り抜く。

「ふん!」

タツミは一步後ろに下がり、それを左手で受け止める。

「受け止めた!」

「そんな……」

「ふう……あぶない……あぶない……」

タツミは左手でのび太を剣ごと持ち上げると、そのまま投げ飛ばす。

「成る程……以前より機動力も攻撃力もアップしている……だが俺の敵じゃないな。」

帝都に咲いている花や木がみるみる枯れていく。それだけじゃない、あまりの暑さに海や川は蒸発し、建物に火の気があがる。

ドオン!!

ドオン!!

のび太は再び光の剣を水平に振り抜く。

ガチン

だが再びタツミが片手で受け止める。

「くっ!」

「ふん!」

そして右手でのび太の左腕を掴む。

「あっ!?!」

掴んだ瞬間、のび太の左腕が灰と化していく。

「くっ!」

ザクッ

ドサッ

のび太は咄嗟に左腕を切断する。

「離れてのび太!!バリヤーを張って!!」

「うん!!」

クロメの言葉にのび太は後ろに飛ぶと念力で全身にバリヤーを張る。

ドオン!!

ドオン!!

その間、無数の黒い炎がのび太に襲いかかる。

「くっ!?!」

ドオン!!

ドオン!!

バリヤーのおかげで致命所は避けられているがそれも時間の問題。

「おかしい……普段ののび太ならこれぐらい……もしかして一昨日からの戦いで……助けに行きたい。でも今の自分に何ができる？立ち上がって数歩歩くのがやっ
と……でもそれでも……」

クロメは近くにあった岩に必死にしがみつきながら立ち上がろうとするが
バタン

そのまま倒れてしまう。

（お願い頑張つて、のび太!!）

こんな時にもクロメは祈ることしかできなかつた。

ドオン!!

ドオン!!

「わあああああああああああ!!!」

とうとうバリヤーは消滅し、黒い炎が次々とのび太に襲いかかる。
ドオーーン!!

タツミは大きなため息をつく。

「お前たちを呼んだ覚えはないぞ。」

煙が晴れるとそこにはアカメとサヨがのび太を背負いながら立っていた。

「・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

のび太はサヨを突き放すとなんとか自分の足で立ち上がる。するとアカメは

「もういい、のび太!!そんな姿になって・・・お前はもう十分戦っただろう!!ここは任せ
て下がれ!!」

「・・・・・・ツミ・・・ケル・・・」

「???

「・・・・・・タ・・・ツミ・・・トモ・・・ダチ・・・タス・・・
ケル・・・」

「・・・・・・お前という奴は・・・今の状態でもそんなことを・・・」

アカメはのび太の身柄をクロメに渡すと、村雨を鞘から引き抜く。

「任務を遂行する!!」

第八章：タツミを斬る（後編）

『ハア．．．．．ハア．．．．．ハア．．．．．ハア．．．．．』

アカメとサヨは武器を構えながら、肩で息をする。

「お前たち、戦う気があるのか？そろそろ本気を出してほしいものだ。」

『ハア．．．．．ハア．．．．．ハア．．．．．ハア．．．．．』

「それとも本気を出してこの程度なのか？もしそうなら．．．．．」

『ハア．．．．．ハア．．．．．ハア．．．．．ハア．．．．．』

「お前たちは絶対に俺に勝つことはできないぞ。」

「ハア．．．．．ハア．．．．．ハア．．．．．ハア．．．．．」

「やはり人間は弱い．．．．．一度とは言わず、何度でも滅ぼしてやる。」

「そんなことはさせない!!」

タツミの言葉にアカメは再び村雨を構える。

「お前はここで死んでもらう。」

アカメの言葉にタツミは眉間にシワを寄せる。

「どうやって倒すというだ。」

「こーやって倒すんだ!!」

するとアカメの代わりに背後から返答が返ってきた。

「!？」

振り向くと何万という兵がタツミを取り囲んでいた。

「アカメ、サヨまたさせたな：：良くここまで持ち堪えた、おかげで方位と布陣が整った。」

その言葉にアカメとサヨは頷く。

（よし打ち合わせ通りだアカメ。お前は兵士の中に紛れて乱戦の中で隙を見てタツミを暗殺しろ。決して焦るなよ！）

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

（エスデスを倒すのに用意した・・・・正兵5万以上。帝具使い10人以上、プラスアカメ!!その条件を満たしたぞ。兵の総合だけみれば数百万!!）

「……………どちらの間違いだな。」

勝ち誇った顔をするナジエンダにタツミは口を開いた。

「!?」

「お前の頭に浮かぶのはせいぜい2つの事だろう。『この戦力に対して相手は立ったの一人。』『何とか村雨で触れられることができれば勝機はある。』」

「!?」

「……………両方考えが甘い！」

「……………なっ……………」

「まず一つ！エスデスより強い人間がここにゐる。」

タツミは左腕を正面から・垂直に振り抜く。

バシッ

「!?」

するとどうだろう腕を振り抜いた方向にいた盾兵2万以上が一瞬にして真つ二つになった。

「なっ!?!」

「な、なっ、どうなっている?」

「あいつ、今何しやがった!?!」

いち早く驚きの声を出したのはナジエンダであった。次いで、アカメも声を上げて驚く。一瞬で人が……しかも盾兵が斬り殺されたことに全員が動揺する。まさに神隠しである。

「まさか……空間を切り裂いたのか!?!」

「恐れるな!!消耗戦を仕掛ける!交代でぶつかっていくぞ!!」

ナジエンダの合図に兵たちは一斉にタツミに仕掛ける

「そして二つ目!お前たちは俺に触れる事など絶体にできんつ!!」

「なんだと……?」

タツミは人差指を太陽に向ける。

「!?!」

「何をする気だ!?!」

すると凄まじい熱が太陽からタツミへと送られた。

「……これは!?!」

「太陽の力を……」

「取り込んでいるのか!? こんなことが……」

凄まじい光が周囲を包む。

ドオーーーーーーン!!

「こ、これは……」

目を開けたナジエンダは驚く。周囲にあつた建物や岩は消滅し、あるのは見渡す限りの砂地獄。

「触れれば即ち死あるのみ……!!」

凄まじい熱がタツミの体を覆う。

「お前は……一体、何者なんだ!?!」

動揺するナジエンダの言葉にタツミの目は鋭くなる。

「お前たちが争いの果てに生み出した……大いなる遺産……つてところかな。」

ゾクッ

「くっ……」

全兵士たちはとつさに

武器を構えた。

「さあ、始めよう。身の程知らずの馬鹿野郎。」

第九章：代償を斬る

「奥の手、ナスティボイス!!」

ドオン!!!

「氷の球!!」

ドオン!!!

革命軍たちの攻撃を顔色一つ変えず対処するタツミ。

「効いていないのか!？」

ドサッ

ドサッ

タツミは向かってくる敵を次々と焼き払う。

「つ．．．強すぎる．．．近寄ることさえできない．．．。このままじゃ本当に我々はタツミに全員．．．」

(タツミのあの目．．．嬉しさも悲しさもない。自分の前では全てが無駄。まさに悪魔の目だ。)

「アカメ、伏せて!!」

「!？」

ガチン

サヨの弓がアカメの真上を通過する。

シューーウー!

弓はタツミの体に届く前に消滅した。

「へーっ。まだ治ってないんだ？この前の怪我……。」

タツミはサヨの身体に巻かれている包帯を見ながら笑った。

「あんだだけ傷ついたのに……懲りないな、お前は。」

タツミの体を覆っていた熱が消える。タツミは左手を手刀に変えると、そこから剣の形状をした炎を作り出した。そしてサヨを垂直に切り込もうとする。

ガチン

「!？」

だがナジエンダがサヨの前に立ち、義手でそれを防ぐ。

「ほうく。」

「どうだ？この前の私とは違う!!」

料がるナジエンダにタツミは

「でもまだまだだな!!」

剣の形状をした炎が真つ黒に色を変えると、ナジエンダの義手を溶かし始める。

バラン!!

「!？」

「義手が消えた・・・。」

義手が消滅したことに動揺するナジエンダ。タツミは手から炎の槍を生み出すと、彼女に向かって投げる。

グサリ!!

槍がナジエンダの左肩に突き刺さり

「!？」

「弾ける。」

ドオン!!!

突き刺さった槍が爆発し、サヨたちを吹き飛ばす。

「ああああああああああああ!!!」

ナジエンダは左腕を含む左半身を失ってしまう。その痛みに堪らず声を上げる。
「ボス!!」

「ああ・・・ああ・・・ああ・・・ああ・・・」

「楽には死なさん。じわじわと砕いてやる。」

そう言いながらタツミは倒れているナジエンダに近づくと

ドス

「片目を潰す。」

ドス

「頬に風穴を開ける。」

ドス

「足を斬る。」

ドス

「右胸をえぐる。」

ドス

「足の指はくりぬいておく。」

ドス

「鼻をおとす。」

「ぐあつ、あああああああああああああ!!!」

ナジエンダは悲鳴を上げる。

「へえ、まだ生きてるのか……。たいした生命力だ。」

「ハア……。ハア……。ハア……。ハア……。ハア……。」

「いい顔をしてきたなナイトレイドのリーダー、ナジエンダ。」

「くっ!」

吹き飛ばされたサヨは、よろけながら立ち上がろうとするが

「うっ!?!」

左胸を抑えながら膝を突き、口から大量の血を吐きだす。

「こんな時に……。」

再びうつ伏せに倒れる。そんな彼女の元にタツミはゆっくりと近づいていく。

「帝具複数同時使用と薬物投与……急激な進化の代償がこんな時に現れるなんて、お前も不運だな……。」

サヨは這いつくばりながら

「……それなら。もつと飲めば……!!」

薬の入った瓶に手を伸ばす。だが

ベシッ

タツミはそれを踏みつけ、粉々にする。

ゲシッ

そしてサヨの頭部を蹴り飛ばす。

第十章：見込みを斬る

「さてそろそろ終わりにするか……。」

タツミは片手で巨大な炎の玉を作り出すと。

「!?」

「で、でかい!!!」

それを解き放った。

「ボ、ボス!!」

放った先には瀕死のナジエンダが倒れている。

「ボス!!」

アカメは急いでナジエンダに駆け寄ろうとするが

「来るな!!」

「!?」

間に合わないかと判断したナジエンダは、アカメを制す。

「いいんだアカメ、これは報い。」

火の玉が近づくとつれ、ナジエンダの体が灰と化し、崩れていく。

「殺し屋……ナイトレイドのリーダーとして責任を取らなくてはならない……。」

「なあ……アカメ……お前たちに……託していいか？」

「??？」

「お前たちが言った。『みんなが楽しく暮らせる世界。』誰も生贄にならない、誰も差別されない、誰も犠牲にならない……誰も争わない……」

「……。」

「全ての民族が手を取り合う世界……そんな世界を作ってくれ……」

「……。」

「……お前たちにはこれから何度もつまづくだろう。でもそのたびに立ち直る強さももっている。だから……」

「……。」

「立ち止まらず……進め……前に……」

「ああ、分かった！だからボス……」

アカメは泣きながら声を上げる。

ドーン！！！！

巨大な爆発と共にナジエンダの体が消滅した。ナイトレイドリーダーの命が消え

さった。

「ボス—————!!!」

ところでその二人は？

あつ、そうだボス！この人材推挙！

オラ、戦いなんておっかないだ！やだよー！！

嫌だー！ー！ー！！嫌だよー！ー！ー！！離してー！ー！ー！！！！

・
・
・
・
・
見込みは
・
・
・
あるのか？

・
う
く
ん
・
・
・
・
あ
り
ま
す
よ
・
・
・
・
・
多
分
・
・
・

「次はお前たちだ。」

タツミは掌を残った兵たちに向ける。

「来るぞ!!」

「自然の摂理に従い滅びろ。」

再び炎を放とうとしたまさにその時……

ドン
!!!!

「!？」

タツミの背後で物音がする。振り向くとそこには……

「アカメ……!？」

アカメが、自身の体に赤い紋様を浮かばせながら近づいてくる。これは村雨の奥の手、役小角である。

「それが奥の手、役小角……。」

アカメを取り巻く禍々しい妖気にタツミは
「巨大で邪悪な力。」

スッ

剣を構える。

「『滅ぼし』が必要だ……。」

第十一章：任務完了を斬る

べしっ

ガシッ

ガガガ

ガシッ

帝國中にアカメとタツミのぶつかり合う音が鳴り響く。

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……（この力も長くは保たない……）」

「サヨ、お前が何を信じたのか知らないが……所詮人間はこの程度さ……。」

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……。」

肩で息をするアカメに対してタツミは息ひとつ乱れていない。

「人間は弱い、醜い、儂い、生きる価値もない、虫けら同然の存在さ。」

「……。」

「だからどうだつて言うんだ。」

「??？」

振り向くとそこには

「のび太．．．．。」

「遅くなってゴメン、アカメ。」

回復したのび太が立っていた。

「僕は確かに弱い、けど、．．．だからこそ僕は強くなるうって頑張れる!!タツミにとっては生きる価値もない、虫けら同然の存在かもしれないけど、．．．人間は弱いから背一杯あがいて強くなれる。」

「．．．．．．．．．．。」

「弱くて、醜くて、儂いからこそ人間は美しいんだ。」

その言葉にタツミは眉間にシワを寄せる。

「アカメ、ここからは僕一人で戦わせてくれ。」

「だが．．．．。」

「……………」

のび太の目は強い意思を宿していた、その瞳にアカメは何も言えなくなってしまう。
「分かった……………」

承知したものの、アカメの心は不安でいっぱいだった。

「行くぞ、タツミ!!」

「そうかなくちやな。」

ガガガガ

ガシツ

ガガガガ

ガシツ

二つの剣がぶつかり合う音が国中に鳴り響く。タツミは後ろに飛ぶと小さな炎の弾を連射する。

ドオン

ドオン

ドオン

それを瞬時にかわすのび太。

「まさか、手負い……。しかも帝具なしであそこまで動けるなんて……。」

「わああああ!!」

「くっ……。」

タツミは瞬時に左腕を正面から・垂直に振り抜こうとするが

グサリ

のび太の剣がタツミの右腕を切り落とした。

「バカな!!こんなことがあるはずがない!!」

タツミは信じられないと声を上げる。

「確かに君は強い……けど僕を見くびりすぎだ!!」

その言葉にタツミは笑みを浮かべる。

「流石だよ、のび太。それでこそ戦い甲斐があるというものだ。俺は本当に嬉しいよ!!」

こんなにワクワクしたのは久しぶりだ。

「じゃあ、本当の力を見せてやる。」

タツミは掌を太陽に向けてと凄まじい熱が太陽からタツミの掌へと送られる。

ドオーーーーーーン!!

「地獄の業火に焼かれて消えるがいい!!!」

タツミは掌を前に勢いよく突き出し

「死ねえええええ!!!」

貫通力のある黒い炎が直線に放たれる。

「ハツハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

燃え盛る炎の中から響き渡る高笑い。自分の前では全てが無駄。

「燃やせ!!燃やし尽くせ!!!ハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

もう誰も止められない、誰一人何も出来はしない。そんなことを思っていると

「僕は………」

炎の中から光が

「何？」

「どんなに虐められても、嫌われても、道をはずれても、倒れそうになっても、悪あがきだとわかってても何度でも立ち向かう、周りが立ちあがらせてくれる。そんな人間が僕は好きだ。」

「ほう………」

「例えまた騙されても、傷つけられても……僕はもう逃げない。」

「……………」

「この先は暗い夜道だけかもしれない。それでも信じて進むんだ、人間を……大好きなみんなを!!!」

「!?」

のび太は右手で破壊の光を放ち、タツミの放った炎を徐々に押し戻す。

「小賢しい……………」

その言葉にタツミは敵愾心を燃やす。

「『はあああああああ!!!』」

周りの有りとあらゆる物が吹き飛び、破壊されていく。余りの衝撃に吹き飛ばされそうになる。互いに一步も引かない攻防戦が続く。のび太とタツミ。ナイトレイドとイエガーズ。帝国と革命軍。光と炎。慈しみと憎しみ。その全てが今、ぶつかり合う。

「はあああああああ!!!」

そしてついに決着の時が来た。

「!?」

のび太の力がタツミの力を凌駕したのだ。のび太の放っていた破壊の光がタツミの肉体を飲み込み

．．．．．のび太．．．やっぱり．．．俺は．．．間違つて．．．ないよ．．．俺
たち．．．、人間つてこうやって．．．殺し合つて．．．ばっかで．．．危ない、生
き物．．．なんだ．．．。でも．．．俺．．．こんな力欲しく．．．なかつたよ．．．。
俺．．．．．ずっと．．．貧しくても．．．サヨと、イエヤス．．．と一緒に．．．村で．．．．
暮らしたかった．．．

そして、消し飛ばした。タツミは塵一つ、肉片一つ残すことなく、この世界から消滅

した。

「……タツミの分からず屋……」

最後まで自分を理解してくれなかった頑固な友にのび太は悲しい顔をする。その表情にうつるのは悔しさだけであった。

「……」

すると

「のび太……」

「??」

アカメは優しい笑みを浮かべる。

「任務……完了だ。」

アカメの言葉にのび太はゆっくりと頷く。

「ありがとう。ちゃんと約束守ってくれたな。」

「……」

するとアカメが手を差し伸ばす。

「さっ、帰ろう。」

「……うん。」

のび太とアカメは手を繋ぎ、歩き出す。

こうして千年にわたり繁栄した大帝國は今ここに崩壊した。帝國最強の帝具も英雄（ドラえもん）たちの帰國で歴史からその姿を消した。帝國に平和が戻ったのである。

最終章：さよならを斬る

帝都から西に20キロの位置にある少し離れた崖。

「これでナイトレイドも解散だ。」

「うん。」

そこに立つ少年少女たち。

「ありがとう、全てお前たちのおかげだ。これで帝国は生まれ変わることができる。」

「アカメたちの未来はこれからだね、応援してるよ。」

アカメたちの表情が暗くなる。

「……やっぱり帰るのか？」

「……うん。革命軍の闇の部分は全て僕たちのせいにしておけばいい。」

「すまない、辛い役目を……」

「国作りをするアカメたちの方がよっぽど大変だよ。辛いこともたくさんあったけど、

それでもアカメに誘われてナイトレイドに入って良かった。」

「寂しくなるな。」

クロメはドラえもんたちの前に立つ。

「のび太、ドラえもん、ありがとう。今の私があるのは二人のおかげだよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「のび太たちは思い出させてくれた。」

「クロメ・・・・・・・・。」

「私に泣くことも、怒ることも、そして一緒に笑うことも・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「私、生きるよ。背一杯、人間を信じて、のび太を信じて・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「自分を信じて!!」

「うん。」

「お兄ちゃん。」

「??？」

サヨの後ろからローグが顔を出す。

「いいのよ、ローグ。二人と一緒にいっても。」

そう言いながらサヨはローグに笑みを向ける。

「でも、街は沢山壊れちゃったし、怪我した人たちも一杯いる。だから私ここに残る。」

「……………ローグ……………」

「私嫌だよ、サヨナラするの……………でも……………」

「でも?」

「私決めたの!のび太お兄ちゃんみたいに強くなるつて!!」

『……………』

「ドラえもんみたいに困ってる人を助けるんだつて!!」

「偉いよ、ローグ。」

そう言いながらドラえもんとおび太はローグの頭を撫でる。

「私、泣かないよ……………」

「……………」

「泣かないよ、お兄ちゃん。」

「ローグ……。」

そして最後に、アカメがのび太に抱きつく。

「お別れだ。」

「……うん、さようなら。」

「お元気で。」

「私たちのこと、忘れないでね。」

シエーレとチエルシーも笑いながら手を振る。

「忘れるもんか、みんなとってもいい友達だった!!!」

「ただいま、タツミ。」

帝都より少し離れた場所にある墓地に人影があつた。

「のび太たちは帰つたよ。」

サヨはそう言いながら墓の前に座る。

「もうのび太は立派な私たちの英雄。私が保証するわ。」

帝都ではお祭りが行なわれているのだが、この辺りはいたって静かだ。

「……タツミ。はじめてあつた時のこと、覚えてる？お正月だったわよね。突然部屋の窓が破つて入ってくるんだもん驚いたわよ。二人でいろんなところへ行つたわけ。命からがら逃げたり、タツミはいつも肝心なところで詰めが甘かったわね。」

サヨの目から涙がこぼれ落ちる。

「私が虐められてたとき自分のことのように思ってくれて……。ちゃんとお礼言つてなかつたけど、本当に嬉しかった。本気で取っ組み合いの喧嘩もしたっけ。でも、その数だけ仲直りしたよね。」

サヨは涙をふいた。

「あの日、私、お医者さんから言われたの。あと半年の命だつて。そのことでお母さんとお父さんが夫婦喧嘩しちやつて。『どうせ半年しか生きられないんだから、入院させるだけ無駄だ』つて。もう私のために使うお金が家にはなかつたんでしようね。だから私、病院を抜け出してタツミに会いに行つた。あなたと一緒に村を出て、帝都に行くつもりだったの。残された時間をあなたと一緒に過ごしたかつたから……。」

サヨはニコリと笑う。

「辛いこともあつたけど、それでも帝都に来て良かった。……信じてあげられなくてゴメンね。助けてあげられなくてゴメンね。最後までカツコ悪くてゴメンね。ワガママばかりでゴメンね。一杯一杯ゴメンね。……ありがとう。」

生まれ変わったら・・・また会おうね・・・

「サヨお姉ちゃん!!お祭り早く行こう、みんな待つてるよ!!」

「・・・・・・・・・・。」

ローグがサヨの元へやってきた。だがサヨの返事がかえってくることはなかった。

「お姉ちゃん?」

ローグはサヨの顔を覗き込んだ。

「お姉ちゃん、こんな所で寝たら風邪ひくよ？」

ローグの目から涙が溢れ出る。

地球へ

プロローグ

帝都から少し離れた町、

「さあ、お集まりの皆さん！次はドラえもんズ一座期待の新人による。アクロバティツクなバランス芸でお楽しみください！頑張ってもらうのはこちらアカメちゃんとクロメちゃん！」

「こんにちはアカメです。」

「よ、宜しく願います、クロメです。」

私たちの登場に観客は大いに盛り上がる。私たちの芸に感激する者、過去に同情する者、将来に期待する者、私たちによって様々な人たちが幸せになっていく。

「新人なのに何故こんな動きが出来るか!?二人は元々違う一座の旅芸人でした！親方を事故で亡くして、次の一座を探していたところ私達と出会ったのでございますっ!!」

「アカメ……さっきの興行中ローグが来ていましたよ。」

「えっ！本当に！」

「ローグなんだって？」

『久しぶりにみんなの顔見たら、安心した。』ですって。」

「そっか……もう三年も経つんだね……。」

「ああ……。」

あれから三年、帝国が新国家となり、民は平和に暮らしている。そんな私たちも今や帝国にちよつとは名が知れた、旅芸人一座ドラえもんズ。殆どの人がこのヘンテコな名前前に不満を持つのだが、私はこの芸名を変えるつもりはない。

「そろそろ夕食の時間だぞ。」

「お姉ちゃん。今日はおかわりして大丈夫だって!!」

「本当かクロメ!!」

「ねえ？お姉ちゃんって彼氏とかいるの？」

「……いない。」

「好きな人も？」

「クロメが一番だ。クロメは付き合ってる人いるのか？」

「う……うん……いないよ。お姉ちゃんが一番！」

「……でもいつか出来るのかな。好きな人とか。」

「かもな。クロメは世界一番可愛いから……男から来るだろうし。」

「お姉ちゃんが全員追い返しそう。」

クロメはクスクスと笑い出す。

「そんなことはないぞ！」

「クロメの事を心から愛して幸せにすると行ってくれば……その覚悟が伝えれば……

私は……私は……」

アカメの目から涙がこぼれ落ちる。

「ちよつと何泣いてるのお姉ちゃん!!」

「想像したら涙が……」

「ふふ、大丈夫だよ。たとえ誰が現れようとも、何が起ころうとも、お姉ちゃんは私のお

姉ちゃんだもの……それは変わらない。」

「……………」

「大好きだよ、お姉ちゃん。」

「……………うん。」

そして私たちは眠りについた。

そして次の日、

「アカメ緊急招集だ!!!」

「何だ……………レオーネか。」

「何だとは、ずいぶん言い方だな。折角面白い話を持ってきてやったのに。」

第一章：靄を斬る

「ピンクの霧？」

「そう。この間、偶然見つけたんだ！入ってみたら見たこともない森の中に出てき……。アカメたちはレオーネの案内で帝都の近くにある洞穴へと脚を踏み入れ、階段を降りていく。そして数時間後、ある部屋にたどり着く。

「行き止まり？」

「確か、この部屋の筈なんだけど……。。」

レオーネは周囲を見渡す。するといきなり地面が揺れ始め

「危ない!!!」

天井が崩れる。

ドオン!!!!

大きな音とともに周囲に煙が散乱する。

煙が晴れ、目を開けるとそこには

「ああ！出口が!!」

「これで帰れなくなつたわけだな。」

「それだけじゃない。ここだってもうすぐ。」

するとレオーネは地面に小さな穴が空いているのを発見する。

「あれ？」

そして穴から微かだがピンクの霧が出ていることに気づく。

「霧が消えかかつてる!!」

レオーネは急いで獣化し、穴を掘り始めた。アカメたちもそれに続き、地面を掘り始める。

カチン

「あれ？」

何か硬いものにぶち当たる。しばらく掘り進めると、

「何だ、これ？」

ヘンテコな機械がその姿を表す。

「霧を出す機械じゃなの？」

すると天井から声がした。

上を見ると

「蜘蛛？」

「危険種だ!!」

巨大な蜘蛛の化け物がその姿を表す。クロメたちは瞬時に武器を構える。

「お姉ちゃん、ここは任せて!!」

「!？」

「今のうちに早く!!」

「ああ。」

「(チャンスは一回きり、間違えたらそれで終わり。どうしたらいいんだ。上か?下か?それとも真ん中?)」

「……………」

「ダメだ、分からない！どうしたらいいんだ！」

出口が塞がってしまった以上、この霧で外に脱出するしかない。だが機械を触った事
すらないアカメにはどんなに考えても分かるはずがない。

「何を躊躇しているんだ？」

「??？」

悩み苦しむアカメにレオーネは後ろ向きで、声をかけた。

「考えた所で答えは出ない。これはクイズやテスト問題じゃないんだ。」

「??？」

「ただ、お前という人間が一つの選ぶべき道を選ぶ……それだけのことなんだ。」

「お前は、人と出会う時、『誰と出会うべきか?』なんて考えるのか?」

「……………」

「……………」

「いつもお前が仕事へ出かけるように、晴れた日に散歩へ行くように……ただいつものように一歩踏み出せばいい!!お前がのび太たちと出会ったように、必ずそこに会いはある!!!」

「……………」

すると再び地面が揺れ始め

「アカメ!!!」

「まだか!!」

「お姉ちゃん!!」

仲間たちの叫びにアカメは・・・

「よし!決めた!!」

アカメは機械のボタンを押した。

「これだ!!」

すると機械からピンクのガスが漏れ出す。

「やった!!」

ゴゴゴゴゴ

すると再び天井が崩れ始める。

「いくぞ!!」

ピンクのガスに全員とびこんだ。

「急げ、ガスが消える前に!!」

ガスの中を必死で走るアカメたち。

「出た!!」

ピンクのガスは消え、目を開けるとそこは

「……」

見た事もない不思議な町並み。狭苦しく、幾何学的で、やたらと四角い建物が並んでいる。

「!？」

その頃、とある建物の中で空を見上げる少年がいた。

「どうしたの、のび太くん？」

「風が……。。。。。」

「風……。。。。？」

第二章：望みを斬る

「ん？」

街の中を歩くアカメたち。

「何か近づいてくるぞ!!」

プップー!!

『「わああああ!!」』

すると一台の車がアカメたちの背後から現れる。アカメたちは急いで近くにあった電信柱に登る。

「何だ、あれ？」

「新型の危険種か？」

車を通りすぎると、アカメたちは電信柱から降りる。

「皆さん、気を引き締めてください。ここは危険種の巣窟かもしれない。」

シエーレの言葉に全員が頷く。するとまた背後から

プップー!!!

ごんごはトラックが現れる。

『わああああ!!』

グウ

「腹減ったな。何か食べようぜ！」

「ん？」

するとアカメたちは商店街のスーパーの前に立ち止まる。

「何だろう、この建物？」

「入ってみようぜ！」

五人はスーパーの入り口に入ろうと足を踏み入れ・・・

ドン!!

自動ドアに顔をぶつける。

「痛iiiiiiiiii!!」

「何これ？隠し扉？」

そしてなんとか中に入ったアカメたちだが

「気のせいでしょうか・・・？ 私たち注目されてるみたいです。」

スーパ―の中に入るなり、アカメたちに皆の視線が集まる。

「私たちの服装が変なのかな？」

「!？」

するとアカメはいきなり走り出す。

「お姉ちゃん!？」

「アカメちゃん!？」

チエルシーたちは急いでアカメを追う。そしてしばらく走るとアカメは立ち止まる。

「アカメ、どうしたんですか？」

アカメは周りをキョロキョロ見渡す。

「今、のび太がいた。」

「『?!』」

アカメの発言にレオーネたちは驚く。

「まさか……気のせいじゃない。」

「……そうだな。その通りだ。」

「……。」

「すまなかった、みんな……。」

そのままアカメは暗い顔をして黙り込む。

「でももし本当なら、ここはのび太たちの星、地球つてことになるよね。」

「嘘、私たちそんな遠くに来ちゃったの……。」

すると落ち込んでいるアカメにクロメは

「お姉ちゃん!」

「何だ?」

「探そうよ、のび太とドラえもんを!!」

「??」

「人違いだったかもしれないけど、もしかしたらつてこともあるし……。」

「……。」

「それに……。」

「??？」

「私、のび太に会いたい。ドラえもんにも。お姉ちゃんもそうでしょう?」
「……ああ。」

その言葉に全員が頷く。

「なら決まりだ! まだ近くにいないかもしれない。手分けして探そう!」

「『おお!!』」

するといきなり後ろで声がする。

「もしもし?」

振り向くとそこには警備員たちが立っていた。

「ちよつと、事務室まで来てくれるかな?」

「不味い。」

アカメたちは瞬時に悟ったこの男たちはおそらく警備隊。捕まれば牢獄の中だということに。

「くっ!!!」

アカメたちは急いで逃げ出した。

「こら、待ちなさい!!」

警備員たちは急いでアカメたちの後を追った。

数十分後、

「しまった、みんなと逸れてしまった。」

アカメは誤ってスーパ―の外に出てしまった。不味い、とりあえずさっきの建物でみんなと合流……

「痛い!!!もうジャイアンったらすぐ殴るんだから……。」

「???」

すると後ろで声がした。振り向くとそこには三人の少年たちが言い争いをしていた。一人は大柄でガキ大将っぽい、もう一人の少年はキツネ顔、最後の一人は赤と黄色の帽子をかぶっている。

「これは愛の鞭、俺様の愛の鞭だ。ありがたいと思え!この、この、この。」

ジャイアンは帽子をかぶった少年をポカポカ殴り出す。

「やめてよ、ジャイアン。僕たちはただ夏休みのことを話していただけなんだから。」

「なに？夏休みだって？スネ夫のくせに夏休みの事なんて生意気だ！」

そういう時ジャイアンはスネ夫に飛びかかる。

『助けて〜!!!』

スネ夫たちはアカメの方に逃げていく。

「……………」

スネ夫たちは急いでアカメの後ろに隠れる。

「俺様は今機嫌が悪いんだ、どけ!!!」

そういうと今度はアカメに飛びかかるが

「……………」

アカメはヒラリと交わすとジャイアンをそのまま投げ飛ばす。

ドン!!

後ろで見ていた二人は啞然とする。

「!!の!!!」

ジャイアンは立ち上がると再び襲いかかる。

アカメは襲いかかってくる勢いを利用してカウンター（右ストレート）を顔面に叩き

こむ。

・ドン!!

ジャイアンはその場に倒れ、気を失う。

「わあ!!」

「ス・・・スゴイ!!」

ジャイアンが延びていることに驚くスネ夫。

「ありがとう、たすけて・・・あれ?」

スネ夫が振り向くと、そこにアカメの姿はなかった。残されたのは気絶したジャイアンと二人の少年だけであった。

第三章：一目惚れを斬る

「のび太、こっちだ、こっち。」

「???」

スネ夫に呼び出され、のび太は休み時間に校庭に来ていた。そこでは土管に座って後ろを向いたままのジャイアンがいた。

「ジャイアン、のび太が来たよー」

するとジャイアンは後ろを向きながら、紙切れを渡す。

『「???」』

スネ夫は紙切れを拾うとそこには『スネ夫、お前から話せ。』と書いてあった。

「フッフ、やっぱり照れくさいんだろうな」

スネ夫は笑いながら言った。

「ねえ、何？面白くないことって？」

その様子を見て面白そうな話だと考えたのび太。

「それがさあ……」

するとジャイアンは再び紙切れを渡す。

「分かるな、その気持ち。」

「だろ？下手にその娘に近づいてみる。気味悪がつて逃げ出しちゃうかもね。なんせ、あの顔だもん！」

ブチッ

「そうそう、見るからに頭が悪そうな。」

ブチッブチッ

「あはははははっはっ!!」

「でも本当に悪いんだからしようがないよね!!」

『「あはははははっはっ!!」』

ドガン!!

ドカン!!

二人は調子に乗ってどうでもいいことまでベラベラ話してしまったのでジャイアンは二人を殴りつけ、作戦を考えることを二人に命じる。

「それで相手はどここの誰なの?」

「それが……分からないんだ。」

「???」

スネ夫の言葉にのび太は首を傾げる。

「実は昨日……」

スネ夫は昨日の出来事をのび太に話した。ジャイアンを打ち負かした少女。彼女の強さと美しき、さらにはスネ夫を助けた優しきにジャイアンは心を打たれたの事。

「特徴は?」

「えーと、黒いロングの髪に……赤いネクタイ……黒い服に……」

「あつ、それから赤い瞳!!」

「!?!」

その言葉にのび太は驚く。

（赤い瞳・
似だ、多分。）
赤い目・
アカメ・
まさかね・
他人の空

第四章：侵入を斬る

「ここは、何だろうか？」

門の前で立ち止まる五人の美少女。

「たくさんの人たちが同じ服装で、同じ事してる。」

「ここは学校か？」

くんくん

「……………」

するとレオーネはいきなり門を飛び越え、校庭に侵入する。

「レオーネ!？」

「……………」

彼女につられてアカメも侵入する。

「アカメちゃん!？」

「お姉ちゃん!!」

チエルシーたちも急いでアカメたちを追う。

その頃、

「は〜っ!」

教室の中で大アクビをするのび太。授業中なのにも関わらず、教師の話聞いていない。

「……………」

理由は先ほどのジャイアンの頼まれごとと最近平和ボケした日常である。すると
「のび太さん、のび太さん。」

「??」

隣に座る少女が話しかけてくる。

「大丈夫?」

「あつ、静香ちゃん。うん、大丈夫。眠いだけ。」

「なら、いいけど……………そういえば最近物騒よね。」
「??」

「最近この辺りに不審者が現れるのよ。」

「不審者？」

「うん、なんでも刀をぶら下げて、そこら中を暴れ回ってるんですって。」

「ふくん。(刀か・・・アカメたちを思い出すな。どうしてるかなあ、みんな。)
するとのび太はふと窓の外に視線をやる。

「!？」

校庭に見知った少女たちの顔があつた。

ゴシゴシ

のび太は目を擦って再び校庭に目を向ける。

(あれ? 誰もいないや・・・。気のせいか。)

ため息を吐きながら、再び黒板に視線を戻す。

その数分後、学食では

ハグハグハグ

「このミソ・・・ねっとり舌に旨味が広がっていく。」

「タマゴもぎっしりで濃厚。」

「白子もプリプリしていい食感だよ・・・オスとメスで味が全然違うのも飽きないね。」

学食の厨房にある食料を次から次へと平らげる元殺し屋集団。

「一昨日から何も食べてなかったからな。」

幸い厨房には誰も居らず、彼らは人目を気にせず食事をする事が出来る。

「もう一杯お代わりしよう！」

「私も私も！」

「ちよっ・・・皆さん!？」

シエーレが止めたにも関わらず、アカメたちは茶碗を片手に鍋の蓋を開ける。もう一杯、もう一杯、そんなことをしていると当然お昼頃には、

「あああ!!食料が全部なくなってる!!!」

学食のおばちゃんの叫びが学校中に響き渡る。

そして昼休み、

「オーイー！ボール取ってきてくれよー！」

「!?」

変装をして校庭を歩いていたチエルシーの足元に野球のボールが転がってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

チエルシーはボールを拾うと思いつき投げける。

ヒューン!!

バシッ。

ボールは勢い良くキャッチャーのグローブに挟まる。

「スゲー!!」

見ていた全員が啞然とする。そしてチエルシーはそのまま立ち去ろうと

「タイム!!」

すると一人の野球部員がチエルシーに駆け寄り、何かをお願いし始める。チエルシーは何とかその頼みを承諾した。

「ピッチャー、交代!!」

そして数分後、

「あれ?あれってチエルシーだよな?」

「何で野球やってるんだろう?」

三振を取るチエルシーをアカメたちは遠くから見守る。

「ナイスピッチ!!」

チエルシーはキツネ顔の野球部員とハイタッチする。

「息が合ったね。(のび太と一緒にやった任務を思い出すなく。)」

「!!」

するとチエルシーとハイタッチした少年に異変が起こる。

ぶぱっ

「ぐっ・・・スネ夫くん・・・だっけ？鼻血が出てるよ。」

「え、あ、だ、大丈夫。ちよつと興奮してしまつて・・・なんでもないんだ。」

「そ、そうなんだ・・・怪我でないなら良かった・・・。」

第五章：再会を斬る

バシヤン!!

校庭を歩いていたらシエーレはいきなり水をかけられる。

「あつ、ごめんなさい!」

静香は急いで、ホースの水をとめる。

「大丈夫ですか?」

「え、ええ。平気です。」

「本当にすいません。」

静香は頭を下げて謝る。

「あつ、大丈夫です。ん?」

苦笑いするシエーレ。ふと彼女は横にあつた花壇に目を向ける。

「お花に水を?」

「はい。沢山あげてるんですけど、一つしか咲かなくて・・・。」

「お水はあんまりたくさんでもダメなんですよ。種がダメになります。」

「ええ〜!?そんな!」

シエーレの言葉に静香はシュンと落ち込む。

するとシエーレは置いてあつた花の種の袋を手取る。

「一緒に植えましょう。お花だつてお友達が沢山いた方が楽しいですからね。」

その言葉に静香は笑いながら頷く。

「じゃあ、私はこつちをやりますから。そつちをお願いします。」

「はい！」

するといつの間にか何人もの女子たちが集まつてくる。

そして放課後、

「ハア〜。」

「さつきからため息ばかり。」

「そんなにその娘のことが好きになつたのかしら。」

午後の授業でもジャイアンは相変わらず上の空であつた。

「そうだね。でも問題なのはジャイアンじゃなくて。」

そう言いながらのび太と静香はジャイアンの隣に座るスネ夫に目を向ける。

「ハア〜。」

隣に座るジャイアンとほぼ同じタイミングでため息をするスネ夫。

「どうしたの？」

「昼休みに何があつたんだろ？」

ざわざわ

するといきなり廊下が騒がしくなる。

「何、あれ？」

「スッゲー格好。コスプレ？」

「いや、そんなことより……」

廊下を歩く五人の人物に生徒たちは目を向ける。

「メチャクチャ可愛くね〜!」

「グラビアアイドルみたい!!」

「私もあんな風に綺麗になりたいなあ〜。」

「何だろう?」

「廊下で何かあったのかしら?」

「行ってみようぜ!!」

廊下に出たジャイアンはふと先頭を歩く黒髪の少女を見るなり固まる。

「ジャイアン?」

スネ夫はキョトンとする。そしてスネ夫はその隣を歩くオレンジ髪の少女を見るなり顔を真っ赤にする。

「スネ夫さん?」

今度は静香がキョトンとする。

「ハア〜!!」

のび太は欠伸をしながらカバンを背負うと、そのまま廊下に出る。

「ハア〜!!……………ん?……………えっ!」

のび太は野次馬の隙間からアカメたちと目が合ってしまう。

「み、みんな……………どうして!」

「『!』?『!』」

するとアカメたちは一目散に走り出す。

『『!』』のび太『!』』

パフ

ぎゆう

五人の美少女に抱きつかれ、のび太は苦しむ。

「やっと見つけたぞ!!」

「久しぶりだな!!」

「探したんだよ!!」

第六章：死刑を斬る

「だ、だ、だ」

「??」

「の、のび太！誰だ、その人たちは!!?」

空気に耐えきれなくなつたジャイアンが全生徒を代表して口を開いた。それにつられ、男子生徒たちが次々と質問を投げかける。

「お前にこんな美人な姉ちゃんたちいたっけ？」

「ずるいぞ、お前だけあの胸に顔を埋めて!!」

「スリーサイズを教えてください！」

「いやあ、俺はその足を……」

まずい事になつたな。のび太の感がそう告げている。

ニヤリ

「違うよ、のび太のお嫁さんは私だよ！」
嬉しそうに顔をスリスリする。

ピキッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
静香の中で何かが音を立てて砕け散る。

「違う!!! 話せば長くなるけど・・・」

のび太は必死に弁解するが、暴走したレオーネたちを止めることはほぼ不可能である。

「『変わらないよ〜♡』」

「???」

するとレオーネとチエルシーは顔を赤くしながら恥ずかしそうに死刑執行を言い放つ。

「だって私たち昨日も一緒に♡・・・」

「あんなに激しく〜♡」

「『『『なに〜』』』』
!!!!」

「のび太!!」

「??」

すると男子生徒全員から黒いオーラが滲み出る。

「厳密に言えば俺たちがお前にとやかく言う権利はないって事は知ってるんだけどな。」
「でもなんかムカつくんだよな。」

「とりあえず、のび太。一発殴らせろ!痛くしないから・・・」

獣化した男子生徒たちがチリチリと迫ってくる。

「不味い、ここは一旦……逃げろ!!」

のび太たちは一目散に走り出す。

「あつ、逃げるぞ!!」

「追え!!」

「どうしたんだろう?」

「なんで怒ってるだろうね、あの人たち?」

楽しくて楽しくて仕方がないと言う表情を浮かべるレオーネとチエルシー。

(この人たち知っててこういふこと言うんだから。しょうがない……。)

のび太はアカメたちを掴むと

「家まで飛ぶよ!」

シュン

テレポートでその場を後にした。

「あれ？どこいった？」

のび太たちが消えたことで男子生徒たちは周囲を見渡す。

第八章：水着を斬る

「すー、すー。」

部屋の中でいつも通り昼寝をするのび太。すると部屋の襖が開く。

「のび太。」

ユサユサ

誰かが体を揺さぶる。

「???」

目を開けると

「じゃーん！」

クロメがいた。しかも私服ではなく、水着で。

「……………」

「部屋水着」

クロメがくるりと回って腰に巻かれたパレオをなびかせた。

「……………なんで、僕の部屋で水着……………」

「のび太が喜ぶと思って。」

「いえ、喜びません……。っっていうか、なんか沸いてんの。」
「せっかく、見せにきたのにー」

のび太の回答にクロメはブーたれる。

「残念ですが結構です。帰ってください。」

昼寝の最中に起こされてのび太は御機嫌斜めである。

「明日が楽しみだねえ。」

「そうですね……。では、お休みなさい。」

明日はみんなで海に行く事になっている。その準備として、現在ドラえもんのきせかえカメラでクロメたちは水着を試着中である。

「のび太はどんな水着を着るの？見せて見せてっ。」

「だから眠たいんだって。少しは僕の話聞いてくださいよ……。うう……。」

現在シェーレはドラえもんと一緒に買い物に出かけていない。のび太は再び夢の中に入ろうと目を閉じたが

「のび太……」

ユサユサ

「???」

目を開けるとそこには

「私も着てきた……」

そこには赤いビキニを着て恥ずかしそうにポーズをとるアカメがいた。

「(もうヤダ。この姉妹。) 僕に見せに来てどうなるんだよ。」

「のび太が喜ぶと思って……」

流石は姉妹。考えることは同じなんだな。

「ほら、お姉ちゃんだってこんなに大胆。」

「いや、だから、喜びませんって……」

「これはっ、レオーネが見立ててくれただけだ。大胆さでいったら、レオーネやチエルシーの方がもっともっとすごいんだぞ!」

「凄い……?」

その言葉を聞いてのび太は寒気がする。

「のーびたっ。」

ビクッ

予想通り後ろで声があった。振り向くそこには

「のび太は私とチエルシーどっちの水着が好みかな?」

「おー、それは聞いてみたいねえ。」

大胆なビキニを身につけたレオーネとチエルシーが迫ってくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「さあ。」

ずいっ

「どーっちだ。」

大胆にもその豊かな胸を押し付けてくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

のび太は目を閉じ、再び夢の世界に入ろうとする。

「あつ、逃げた!!」

クロメは畳んであったのび太の水着を眺める。デザインからして去年使っていた物のようだ。だが去年着ていた物が今年着れるとは限らない。

「のび太も着て見てよー!」

「何で？やだよ！」

クロメの願いを即答するのび太。

「ちゃんと試着しないと、後で困るぞ。」

「つーん。」

アカメの忠告を無視し、横になるのび太。

「……………」

するとアカメはのび太に近づき着ていたシャツを剥ぎ取る。

「なっ…………何だ！何すんだ！」

「チエルシー、クロメ。おさえて！」

「オツケー。」

「うん。」

「お！なんだか面白そうだな。」

アカメの指示でチエルシーとクロメはのび太の体を押さえつける。そしてアカメとレオーネはのび太からズボンを剥ぎ取ると、今度はパンツに手をつける。すると

『『お邪魔します!!』』

部屋の襖が開き、ジャイアン、スネ夫、出木杉が姿を現す。

『!!?!?!?!』
『?!』
パンイチののび太が四人の水着美女に襲われている光景にジャイアンたちは唾然とする。

第九章：説明を斬る

「のび太、お前……」

「羨ましくい……いや、やらしい奴だ！」

「何でみんないるんだよ!？」

「みんなプールに誘いに来たんだよ!!」

普段なら誘わなくせに、何で今日に限って。しかも勝手に家にあがらないでほしいものだ。不法侵入だぞ。

「それで何やってんだよ、お前?」

「いや、これはその……」。

「何でみんな水着きてるんだ?」

「……え……そ……はっ!」

するとのび太は出木杉の後ろで啞然としている静香に驚く。

(し……しずかちゃん!? 不味い、何でこんな時に限って……)

「どういことだのび太……!!?」

「ちゃんと説明しろー!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

するとタイミング良く玄関から声がした。どうやらシェーレたちが帰ってきたよう
だ。

「・・・・・・・・つまりこの人たちとのび太は親戚で、幼馴染みである・・・・と・・・・」

「・・・・・・・・そういう事・・・・」

「いい加減にしろよおまえー!!なんだよ、幼馴染みの美人って・・・・!!しかも五人って!!」
そう言いながらジャイアンとスネ夫はのび太に食ってかかる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それじゃあ、婚約者っていうのは!?!」

「(帰ってくれないかなあ〜)・・・・事情があるんだよ、事情が・・・・他人にはかん

けないけど。」

「な、なんだとお．．．!?」

するとスネ夫たちはアカメたちに詰め寄る。そして「考え直すんだ!」とか「騙されてるぞ!」とかのことを言いだした。どす黒いまでに顔面を充血させて、まさに口角沫を飛ばす勢いといった感じだ。

「．．．．．」

ジャイアンたちの質問詰め、ため息をつくのび太。

「羨ましいぞのび太!!!」

「こんな美人たちと一つ屋根の下なんて!!!」

(さつきから同じことばっか言ってるよ．．．)。εε。

「いいなく毎日一緒なんだろう? 幼馴染みのお姉さんと共同生活なんて禁断だよ禁断．．．!」

今度は泣きながら訴えてくるジャイアンたち。さすがののび太もヤレヤレといった感じで口を開く。

「いくら幼馴染みとは言え、僕たちは本当の兄弟みたく育ってきたんだ。今更異性としてなんて観れるワケないよ! (嘘だけど)」

『』．．．．．『』

その言葉にジャイアンやスネ夫だけじゃなく、出木杉や静香も呆然とする。

「……………本当に？」

すると今まで黙っていた出木杉がジト目で口を開いた。この目はまったく信じてないな。すると静香は

「……………そういえばのび太さん。シエーレさんたち今居候中なんですよ？変なこととしてない？」

「??？」

静香の質問にジャイアンたちは息を呑む。

「大丈夫。のび太とドラえもんは紳士だよ。」

クロメの言葉にスネ夫たちは心から安心する。

だがすぐにとんでもないことを口走る。

「でも昨日ののび太の布団は寝心地よかったなあ。今夜も寝ちやおうかな〜♡」

「『『『なに〜』』』』
!!!!!!
『『『』』』』」

「今のはどういう意味だ〜〜〜!!!!!!」
「事と次第によつてはお前〜〜〜!!」
「布団・・・寝心地・・・」

第十章：計画性を斬る

「そろそろあがつてのび太たちと交代してあげませんと。」

そう言いながら湯船から立ち上がるシエーレ。ちなみに、今入浴しているのはナイトレイドメンバーの五人だけである。

「!!!」

するとアカメは面白いことを思いつく。

「気配を遮断してゆっくり近づいてみないか？のび太に気取られないかゲームだ。」

「あ、面白そう！」

「気付かなかつたら皆でのび太をニセモノ（エスパー）呼ばわりしやおう！」

「それは名案!!」

ナイトレイドは楽しそうに笑みを浮かべる。

その頃、部屋では

「さあ、さあ、三人共。遠慮しないで食べてよー」

「そう言いながらお皿一杯のポップコーンを差し出すスネ夫。

「ちえっ、ポップコーンなんかで遠慮するかよ。」

「そう言いながらポップコーンを口に入れるジャイアン。

「それで話つていうのは何？」

「そう言いながらドラえもんもポップコーンを口に運ぶ。

「あつ、そうそう、それなんだけどね．．．。．．．あのね、僕。」

『『『???』』』

その頃、部屋の外では

「これ、のび太気づいてないんじゃない?」

「だとしたら自分に自身もてるわね。」

着替えを済ませ、階段を音を立てずに登るアカメたち。

スネ夫は恥ずかしがりながら体をクネクネさせる。

「僕、好きな子がいるんだ。」

「『!?!』」

その言葉にジャイアンはスネ夫に掴みかかる。

「まさかお前もアカメさん狙いか!?!」

「違うって！」

「……じゃあれオーネさんか？胸はあの中で一番だからな。」

「いや違う……」

その言葉を聞いてジャイアンは掴んでいたスネ夫の袖を離す。

「……………チエルシーさんなんだ。実は最近気になってる。」

『……………』

すると再びスネ夫の顔が赤くなる。

「実は僕、大人になったらチエルシーさんと……………その……………けっ……………けっ……………」

「けっ……………けっ……………結婚したいんだ！」

「結婚!!!?」

「スネ夫が!!!?」

「嘘!!!?」

その頃、部屋の外では

「……ッ!? (スネ夫が私のことを……!全然気づかなかった。)」
すると隣にいたクロメが小声で口を開く。

「よかったねチエルシー。」

「う……」

その言葉に多少動揺するチエルシー。

「スネ夫がチエルシーことを……これは面白くなってきた。」

レオーネは笑みを浮かべる。

「何言ってるのスネ夫？」

「俺たちまだ学生だぜ！」

「そうそう。」

そう言つて笑い出すドラえもんたちにスネ夫は呆れる。

「君たちは分かつてないな。」

『「??」』

「いいかい? こういう事は今から準備しとかないとダメなんだ。大人になつてからじゃ、手遅れなんだよ! 人生にはそれくらいの計画性が必要なのさ。」

『『計画性!?!』』

「.....」

「そこでチャンスがあつたらそれとなく彼女に知らせて欲しいんだ、僕がいかに優れた少年であるかを。」

『『優れた少年!?!』』

「頼んだよ。」

第十一章：告白を斬る

「あつ、いた。スネ夫とジャイアンだ！」

スネ夫はいつもの空き地で誰かと待ち合わせをしている。そして土管の後ろで待機しているジャイアン。のび太とドラえもんレオーネは空からその成り行きを見守っている。

「何これ？告白現場？どうなるの？どうなるの？」

「・・・なんでアカメよりテンパってるのレオーネ？」

そして数分後、空き地にアカメが現れる。

「スネ夫。なんの用だ。」

「こんな所に呼び出しちゃって、ゴメンなさいね。あの実は・・・ジャイアンの事なんだけど・・・」

「武の？」

「ジャイアンはさあ……この町一番の男の中の男。」

「男の中の男？」

聞き慣れない単語に??を浮かべるアカメ。

「そう！弱気を助け、強気を挫く！優しくって、強くって、頼りになる僕らのヒーロー。」

「嘘ばっかり！」

「よくもああペラペラと口から出任せが出るもんだ！」

「なに、のび太？ヤキモチ？」

「違う！」

「まっ、アレはアレで凄い才能だけどね。」

そう言うドラえもんは四次元ポケットに手を入れる。

「ウラオモテックス!!」

ドラえもんはウラオモテックスをスネ夫の背中に投げつける。

「見た目はちよつと怖そうなんだけどね．．．」

ピタッ

ウラオモテックスが背中に張り付く。

「実は本当に怖いんだ！．．．あれ？」

「??？」

スネ夫が発した言葉にアカメだけではなく、当の本人も驚く。

「あつ、そう、それでね。頭が悪い癖に、馬鹿力で乱暴なもんだから始末におえないんだ！本当にあんな嫌な奴はいないよ！」

「．．．．．」

「おまけにワガママで意地汚くて、いつも威張ってるくせに．．．」

「．．．．．」

すると土管の後ろから黒いオーラが滲み出る。

「家じゃあ、『母ちゃんゴメンよ!』って逃げ回ってんだ!」
「……………」

「ハハツハハアハツハ!!!あれ?何言ってるんだ、僕は?」

すると土管の後ろから

「スネ夫!!!」

鬼神と化したジャイアンが飛び出してきた。

「なんてこと言ってくれたんだ!!!待て~~~~っ!!!」
「な、何であんな本当の事言っちゃったんだろう?!」

スネ夫は泣きながらジャイアンから逃げ、ジャイアンは烈火のごとくスネ夫を追いかける。

「……………」

そして空き地には大量の???を頭に浮かべたアカメだけが残された。

そしてその夜、玄関では

「突然やってきてなんの真似だよ！」

ジャイアンとスネ夫は大きな荷物をもってやってきた。どうやら今日から玉子とのび助がしばらく家を留守にすることを嗅ぎつけてきたようだ。

「見れば分かるだろう、俺たちも今日からこの家に泊まるんだよ！」

「何だって!?!」

「バカタレ、同じ家にチエルシーさんとお前を二人つきりにさせるわけにはいかないんだよ、アホタレ！」

そう言いながら靴を脱ぎ、勝手に上がりこむジャイアンとスネ夫。

(二人つきりじゃないよ、ドラえもんたちもいるだろう。)

ちなみにナイトレイドメンバーは全員、のび太たちとは別の部屋で寝泊まりしている。

「冗談じゃない!! あんな狭い部屋に四人も泊まれるわけないだろう!!」

ジャイアンたちの発言にドラえもんは声を上げる。すると突然玄関の扉が勢い良く開く。

「私も泊まるから五人よ!!」

「???」

振り向くとそこには……

「静香ちゃん!?!」

第十三章：眠りを斬る

「ハア〜っ。」

深夜、部屋を追い出されたのび太はあくびをしながら居間でテレビを見ていた。当然真夜中なのでアニメはもちろんニュースもやっていない。そして

「すー、すー。」

そんなのび太に後ろから覆い被さるように寝るクロメ。どうやらまた寝ぼけてのび太の所にやって来たようだ。すると襖が静かに開くと

「眠れないのか？」

「??？」

寝衣姿のアカメが入ってきた。

「う、うん。最近色々忙しかったのに変だよね。」

「やっぱり迷惑だったか？」

そう言いながらアカメの表情が暗くなる。

「ううん。寧ろアカメたちが来てくれて嬉しかった。」

「……そうか。」

その言葉にアカメの表情が明るくなる。

「でもいいの帰らなくて？」

「新国家は成った。もう私の居場所はない……新国家が殺し屋を使っていた事実などあつてはならない。それに……」

「??？」

「言つたはずだ、ずっとお前の側にいると。」

「……うん。」

そう言いながら二人とも笑みを浮かべる。

「……………」

その様子をコツソリと覗く一人の少女。最近、のび太が自分の側にいることがやけに少ない。たまに会う時になにをしているのかを聞いても、うやむやにされてしまう。強引に聞き出そうとしてもしてみたが、静香ちゃんには関係ないの一点張りである。そんな日が続いて行くにつれ、彼女の機嫌は次第に悪くなっていった。そして、彼女はアカメた

ちとのび太の関係を疑い始める。そしてこうやって度々探りを入れていたのである。今日泊まりにきたのも、その為である。

すると後ろで寝ていたクロメが

「……………もう食べられない。」

その言葉にアカメたちは笑い出す。

「寝言だ。一体どんな夢を見てるんだろう?」

「きつとアカメの夢を見てるんだよ、きつと。」

そう言いながら二人はクロメの寝顔を覗き込む。

「お前には感謝している。」

「???」

「ありがとう。かつてクロメを救いだししてくれたこと、本当に感謝している。妹が今も元気であるのはお前のおかげだ、のび太。」

「……………」

するとクロメは再び

「すー……………のび太……………すー。」

「……………何、クロメ?……………」

自分の名前を呼ばれ、少々照れ臭くなったのび太は思わず返事をしてしまう。

するとクロメはとんでも無いことを口にする。

「のび太．．．．．大好き．．．．．」

「．．．．．のび太は唾然とする。」

「
のび太の顔色が徐々に青くなる。」

「のび太……大好き……お姉ちゃんよりも大好き……」

ゾクッ

「!?」

殺気と寒気が同時に体を駆け巡った。のび太が恐る恐る顔をあげると

カチャ

日本刀を構えた灼眼の鬼がいた。

第十四章：寝起きを斬る

「ハア〜っ。」

朝6時、ドラえもんはあくびをしながら台所に入ってくる。テーブルにはアカメが作った朝ご飯が並べられていた。アカメ、のび太、チエルシーはそれぞれ自分の席にいていた。クロメも席についているが意識はまだ夢の中である。

「……………」

ドラえもんはよろけながら自分の席に座る。

「ドラえもん、気分悪いの？」

「……………ううん、そんなんじゃないよ。ただ……………」

「ただ？」

全員の視線がドラえもんに注目する。

「変な夢を見たんだ。」

「夢？」

するとドラえもんは恐ろしいことを口に出す。

「うん。アカメがバスロープ一枚の女の人をベッドに押し倒して、襲いかかっている……。」

「!?」

その言葉を聞いてアカメは持っていたオタマを落としてしまう。そしてその顔が徐々に青くなっていく。

「あれ?それってもしかして・・・『バシツ』」

何かを発しようとしたチエルシーの口がアカメによって塞がれる。するとドラえもんは夢の中でみたアカメの行動を的確に真似し始めた。

「・・・私は自分で動く方が好きだよ。だから・・・私がする。トオ!!!
ブチュー、スリスリ・・・もっともっど!!」

しばらくお待ちください

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

のび太たちは驚いて声が出ない。すると

バン！！

「やめろ！！！！私はそこまでやってはいない！！！！」

顔を真づ赤にしたアカメが大声で抗議する。こんなアカメを見るのは初めてかもしれない。

「まつ、そんなに怒らないでよ。夢の話でしょう？」

「あつ・・・・・・・・そ・・・・・・・・そうだな！その通りだ！」

のび太の言葉にアカメはいつもの冷静さを取り戻す。

「でも夢のような、本当のような・・・・・・・・」

納得がいかないドラえもんへのび太は笑いながら口を開く。

「夢に決まってるでしょう？ホントだったら、怖すぎるし、気持ち悪いよ。」

「そうだね。」

のび太とドラえもんはクスクスと笑い出す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その光景にただただ苦笑いをするしかないアカメ。そして何故か隣でチエルシーはニヤニヤと笑っている。

そして朝食、

「のび太さん、私のは食べられないって言うの？」

「そ、そんなことはないけど……。」

「だったら私のサンドイッチ食べて！」

そう言うのと静香はのび太の口にサンドイッチを押し込む。

「そんなのより私のサラダの方が美味しいよ！」

そう言うのとチェルシーはのび太の口にレタスを押し込む。

「私の野菜ジュースの方が栄養がありますよ！」

そう言うのと何故かシェーレものび太の口にジュースを流し込む。

第十五章：転校生を斬る

「ジャー————ン!!!」

スネ夫は何かを自慢げにバッグから取り出す。その取り出した物にジャイアンと静香は目を輝かせる。

「それって日曜日から公開の映画、スターウォーズのチケットか!」

「うん、パパがスターウォーズのプロデューサーと友達で特別に貰ってきたんだ!」

「凄い!!」

「俺見たかったんだ、この映画!!」

「私も!!」

朝、学校でスネ夫がいつものように何かを見せびらかす。スネ夫の父親は色々な人と友達なのでしょっちゅうこういうことが起こるのである。

「スネ夫、俺も連れてってくれよ!」

「いいよ、ジャイアンなら。」

「私も!!」

「もちろんだよ、静香ちゃん!!」

「ハア〜っ。」

そしてあくびをしながらそんな様子を見守るのび太。どうせこの後の展開は分かっている。またいつもみたいは何かと理由をつけて僕を仲間ハズレにするんだ。そういえば日曜日はアカメたちと海に行く約束してたっけ？どっち道、映画にはいけない。僕には関係ないか……。そう思っていると

「悪いけどのび太は……。」

予想通りスネ夫が口を開く。その後の展開は勿論、『チケットは三枚しかないんだ』と言いついで出す。これも毎度のことである。すると

キーンコーンカンコン!!

「みんな、席に付け!!」

タイミング良くチャイムが鳴り、先生が教室に入ってくる。先生の言葉に席を立っていた生徒は散り散り自分の席へとついていく。

「え、急なのですが、今日から皆さんと一緒に勉強をすることになった転校生を紹介し
ます。」

「え、転校生？このクラスに？」

「しかもこの時期になって珍しいね。」

「家庭の事情とか、色々あるんじゃない？」

先生の急な申し出にクラスのみんなはざわざわと騒ぎ出す。そんなクラスメイトたちを尻目にのび太は今朝の出来事を思い出す。何故か自分の顔を見るたびニヤニヤと笑うレオーネとチエルシー。何かを隠しているのか決して自分と目を合わせないドラえもん。玄関で『また後で！』と見送るシェーレ。そして何より弁当を七人前用意するアカメとクロメ。今思えば、あれは嵐の前触れだったのかもしれない。

「さあ、三人とも。入って来なさい!!」

先生の言葉で一瞬静かになった教室に扉が開く音が妙に大きく響いていた。

「三人？」

「どうやら転校生は一人ではないらしい。転校生たちは教室に足を踏み入れる。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

転校生を見たのび太は嘩然とする。そして今朝から感じていた違和感が全て繋がった。謎は全てとけた。

第十六章：変わらない心を斬る

「転入生のアカメさん、クロメさん、チエルシーさんだ。彼女たちは帰国子女でこの春、日本に来たそうだ！みんな仲良くしてやってくれ！」

「うわあ、すげえ美人……」

「俺、このクラスでよかった!!」

「でも、どこかで見えたような……」

教室はアカメたちの登場で盛り上がっている。アカメたちは周囲を見渡し始める。

「あっ！」

「!!!」

「いた!!!」

そして最悪にもものび太の姿を見つけてしまう。

『『のび太!!!』』

嬉しそうに大声で手を振るアカメたち。

「ちよつと、待って。何でみんながここに!?!」

もっともらしい疑問をのび太が三人に投げかけた。

『だって……』

のび太を含むクラス全員の視線が三人に集中する。

「いつものび太の側に居たかったんだもくん！」

笑顔のままクロメはそう答える。するといきなりのび太に男子全員の殺気が突き刺さる。

「ゴメン、のび太。でもどうしても我慢できなくて〜♡」

そう言いながら態とらしく顔を赤らめるチエルシー。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「何を赤くなっている？」

アカメの問いにのび太は吐き捨てるように答える。

「えっ!? …… なっ …… なんでもないよ。」

「ハア〜ツ。」

屋上に疲れた様子で寝っころがるのび太。

(ああ、そうだ。アカメに弁当を貰ってこなきゃ。)

そう思い、疲れた体に鞭を打つ のび太。すると

スツ

「お疲れ様です。」

のび太の分の弁当が横に置かれる。体を起こすと

「シエーレ? どうしてここに?」

「のび太が心配だったのでつい……」

シエーレはそう言うとのび太の隣に座る。

「……………うん、ありがとう。そうだ、せっかくだから一緒に弁当食べようよ

!!」

「いいんですか?」

「勿論!!」

そう言うとお弁当箱を開け、お昼を食べ始める二人。すると

「……………安心しました。」

「???」

「やっぱりあなたは変わってませんね。私の良く知る強くて優しい人です。」

「……………」

「正直不安だったんです。タツミを倒した時、のび太も人を憎んで信じなくなってしまうんじゃないかって。」

「……………」

するとシエーレは前にドラえもんが話した事を思い出す。

「地球に帰ってきた次の日、のび太くんは学校に行つたんだ。けど白い髪や赤い瞳のせいでみんながのび太くんを気味悪がつたんだ。そしてしばらくして容赦ないイジメが始まつたんだ。来る日も来る日みも、机に悪戯書き、体操着の紛失、下駄箱にゴミの山。いつもボロボロになりながら家に帰つて来たよ。僕が怒りながら、『秘密道具で仕返ししよう』って言うってけど。のび太くんはそれを止めたんだ。何故って聞いたら……『これは報』だつて……………」

「信じていたからね。」

「??？」

「アカメたちにまた会えるような気がしたんだ。だからその時まで僕は僕で居続けよう
と思ったんだ！」

「……………」

「来てくれてありがとう、シエーレ！」

のび太の言葉に自然と笑顔になるシエーレ。

「こちらこそそのび太……………」

おかげで役に立てることをもう一つ見つけました。

第十七章：嫉妬を斬る

のび太たちがお昼を食べてる姿をコッソリ屋上の扉から覗く少女。

「……………」

彼女は屋上で楽しそうな声を聞いたので、今こうして弁当を持ってやってきたのである。そして扉を閉め、物思いにふけっていると

ギーッ

「静香ちゃん?」

「えっ!?!……………のび太さん!?!」

お昼を食べ終えたのび太たちが教室に戻ろうと屋上の扉を開けた。

「何してんの?」

すると静香はワナワナと震えだした。

「どうしたの、プルプル震えちゃって? トイレなら今のうちに……………」

「のび太さんだったら、私と一緒に昼を食べられなくても、シエーレさんだったら食べるのね!!」

「??」

「アンタって何考えて生きてるの!？」

「それは・・・『何ーっ!!』」

怒りのあまり乱暴な言葉遣いになる静香。彼女が何を言いたいのかさっぱり分からず混乱するのび太とシエーレ。

「もうのび太さんなんかしらない!!!」

そう言うのと静香は怒って階段を降りて行った。

「……………」

そして後には大量の???を頭に浮かべたのび太とシエーレだけが残された。

「もうーっ!!何よあの態度、のび太さんったら!!デレデレしちゃって、情けない!!」

彼女の機嫌はますます悪くなっていく。

「シエーレさんもシエーレさんよ、出木杉さんなら納得できるけど、何が良くてのび太さんなんかと。」

すると突然声をかけられる。

「あ、あの・・・すいません。」

「ああん、何よっ!？」

おずおずと切り出してきた声の主を思い切り睨みつける。ひい!?!と怯えた声をあげたが、男性は勇気を振り絞って告げた。

「あの・・・職員室はどういったら・・・。」

「そこの角を曲がって左よ!」

そして放課後、

「キーンコーンカンコン!!」

「さて。帰ろうか、みんな。」

そう言って振り向くのび太だったが

「チエルシーは目が綺麗だよなー、私もカラーコンタクトにしようかな?」

「あんたねえ、鏡を見てから言いなさいよ。」

「でもほんと、いいよねー。羨ましい。」

「みんなの瞳も、すごくキレイだよ？」

「それに、アカメちゃんって日本語上手だよね。」

／＼／＼／＼あ、ありがとう。／＼／＼／＼／

「おいみんな！もう放課後だぞ！質問は全部明日だ。解散解散！質問忘れそうなら手にも書いて！」

「なんだよー。独り占めするつもりか？」

「帰ったら一緒なんだろう？だったら、学校じゃ俺たちを優先すべきだろ」

「なんか野比くん、マネージャーみたい。」

放課後になって30分。まだ質問責めが終わらない。一人で勝手に帰ってもいいんだろうけど……この三人、見張っておかないと、何言うかわかったもんじゃやない。

明日登校したら、すでに3人の子持ちぐらいの誤解が生まれそてそうだ・・・。

「とりあえずあとちよつとだけだから、ね？ね？いいでしょ？」

(15分前にもそんなこといってたよね・・・。)

そんなことを思っていると、

ビシッ!!!

いきなり教室のドアが開き、大勢の生徒がドツと入ってきて、のび太は驚きから言葉を飲み込んだ。

第十八章：部活を斬る

「なんだ？ いったい？」

彼らは教室を見渡すと、まっすぐこちらにやって来た。

「アカメさん、クロメさん、チエルシーさん！是非、我が野球部に入ってください！」

「え？」

「……………」

「……………」

のび太たちが何か言う前に、脇から別の生徒が割り込んできた。

「いやここは是非バスケ部に！ マネージャーとして世話してくれたら、勇気100倍です！」

（そういうことか……………）

「いやいやサッカー部に！」

「なにおう、柔道部こそ！」

「テニス部！」

「囲碁とか将棋とか興味ありますか？」

「文化系にマネージャーは必要ねーだろ!？」

(……………)

連中ときたら、すっかり美人な女子マネージャーに世話されたい気分になっているようだ。のび太たちが何かを答える前に部員たちは勝手にヒートアップして、今にも掴み合いに発展しかねない勢いだった。

「なんだこれは？」

アカメたちはのび太の側にやってくる。

「んー、まあ部活の勧誘かな。」

「部活……………」

「なるほどねえ……………」

「ねえ、みんな。」

のび太はジャイアンたちを含む部員たちに呼びかけた。

「マネージャーとか言ってるけど、今だってマネージャーくらいいるでしょう?！」

「まあ美人な方が嬉しいしな。」

「そうそう。」

「……………」

そのとき、ドアのところにシエーレが顔を見せた。彼女が中に入ってくると、まさに金魚のフンという感じに、男子生徒がゾロゾロついてくる。どうやら部活仲間のようで、部員たちが親しげに声をかけた。

「シエーレも？」

「はい、部活……というのに誘われたのですが、どうしたらいいか分からなかったもので……………」

シエーレは困ったような顔をしていた。のび太は頷くと改めて部員たちに向き直った。

「返事は明日以降出すから、取りあえず帰ってくれない？みんなちよつと戸惑ってるから。」

するとジャイアンたちは途端に激高した。

「なんだよそれ！」

「お前が仕切るな！」

「そうだそうだ！」

バン!!

「うるさい!!」

机を叩いて怒鳴り返すと、のび太は相手のことを睨み付けた。

「みんなの学校生活のことでは、僕が窓口みたいなものなんだ。その僕が帰れって言ってるんだから、帰れ。」

「窓口だとあ……? いったいなんの権利があつてそんなこと言うんだ、のび太!」

「僕は婚約者だからな。」

『『『………』』』』

のび太が言い放つと、連中の顔が一気に険しくなった。そしてその言葉を聞いてアカメやチェルシーたちも驚く。

「お、お前……!」

するとジャイアンは指を鳴らし始める。

「やるかつ?」

のび太は思わず身構えた。のだが、ジャイアンたちはのび太を無視して、アカメたちに分散して取りすがった。

第十九章：お世話を斬る

帰り道、のび太は部活の何たるかを説明した。

「マネージャーと言っていましたか、それは・・・？」

「まあ、世話をしてくれる人、かな。運動系は試合とかあつて忙しいから・・・たぶん。」

「はあ・・・お世話、ですか・・・」

「ええ、世話？私、好きでもない男子の世話なんか、やだ！」

クロメのストレートな物言いに、つい笑ってしまう。

「ま、それが仕事だからさ。マネージャーの。」

「献身というわけか・・・」

「そこまでたいそうなものでもないんだけど・・・」

「のび太は何か部活をしているの？」

「ううん、何も。」

「あんまり部活動とか興味ないの？」

「あー、うん・・・まあね。」

本当は興味がないこともなかったのだが、アカメたちに何か問題が起こったとき、す

ぐに駆けつけられるようにしたい。そんなことを思つて帰宅部を選択したわけだけど、そんな押しつけがましい心情、明かせるはずもない。

「じゃ、部活は当面は見送りつてことで、俺から言つておくよ。」

「お願い。」

「でもさっきののび太カッコよかつたな」

「???'

「だつて、やつて来た奴らにちゃんとやつて。のび太が怒つたところつて、あんまり見たことなかつたけど・・・やつぱりやるときはやるんだね。」

「本当です。やつぱりのび太は頼りになると・・・そう思いました。」

「//////.....//////」

クロメたちにそう言われ、顔を赤くするのび太。

「ま、何かトラブルがあったら、僕が助けるからさ。そんなに心配しないで。」

「うん。」

「ええ。」

「は、はい・・・あの・・・ありがとうございます。」

「相変わらず頼りになるのび太は。」

そして次の日、

「ヤバイ、遅れた。(なんで今日の授業に限って、みんな着替えるのこんなに早いんだよ……って、理由は一つしかないけどさ。)」

思った通りプールサイドには、すでに二重の輪が出来ていた。内側の輪は、女子。そこから一定距離を置いて広い範囲で男子が輪を作っている。男子たちの鼻息は、もうヤバイくらい荒ぶってた。

「……………」

そして女子たちのキャツキャツとした黄色い声が聞こえてくる。のび太は何気なく女子の方に視線を向ける。

「お？のび太がこつちを見てる？普段は朴念仁ぶってるくせにやっぱり男の子なんだね」

チエルシーはニヤリと笑みを浮かべる。

「ふっふっふっ。あのむっつりめ、そういうことなら私が特別サービスしてあげなくもないかな♪」

チエルシーはのび太の目線の先に立つと

「おりや悩殺っ♡」

そう言ううと体をクネらせて色々なポーズを取る。

「??？」

第二十章：ポーズを斬る

大胆な水着を着て、のび太の目でグラビア級のポーズを取るチエルシー。だが「チエルシー……」勉強のしすぎで頭おかしくなったのかなあ。救急車呼んだ方がいいかなあ……」

残念なことにこの男にはそんな色仕掛けが通用するはずがない。

ブチッ

「ねえ、誰か投げる物持ってない？なるべく硬いヤツか、なるべく刺さりそうなヤツがいんだけど。」

「えっ？どうした急に……」

隣にいるアカメは???を浮かべる。

「お、おい、見たかよチエルシーちゃんの悩殺ポーズ。本物のグラビアだったぜ！」

「ほんと最高だよな、文句の付けようがないスラツとしたスタイル。そしてあの豊かな胸！」

「クロメちゃんのスラツとした健康的な足と、くびれたウエスト。」

「水に入ったらピツチリ張り付いたりしねーかな？」

「アカメちゃんだつて負けてないぜ。あのお尻から足にかけてのラインはマジで芸術だよ。しかも、やつぱり……でかい。」

「なんたるわがままボディー！へそ出し生足マーメイドだぜ！」

「のび太さん。」

「??？」

突然声をかけられ、振り向くと

「静香ちゃん。」

水着姿の静香が立っていた。

「のび太さん、どう?」

「??」

のび太は首を傾げる

「私を見て、なにか言うことない?」

「……? ああ。この前は一緒にお昼を食べれなくて」

ブチッ

「違うわよっ!! 違うでしょ!」

「??」

「あるでしょ! 私を見て、ほら、なんか、言うべきことが!!」

「し、静香ちゃんを見て……」

そう言いながらのび太は静香ちゃんの姿を改めて確認する。

「……ああ……」

「……」

「うん、とつてもよく似合ってるよ。」

「本当!?! 嬉しい!!」

のび太の反応に静香は嬉しくなる。すると

「のび太！」

「???'」

今度はアカメとクロメが現れる。

「じゃじゃーん」

「じゃーん」

「……………」

「うわっ、反応薄ーい。せつかくの水着姿なのにーっ。」

「この間、さんざん見せたでしょう……………」

「そ……………そうだったな……………」

「えー、でも海辺で見ると、プールで見ると、また印象違うの？」

「まあ、若干違うかもしれないが……………うーん。」

そう言いながら眉間にシワを寄せて考える。

「また難しい表情してる……………」

「海辺の時の印象を思い出してるんじゃないのか？」

「そうなのかな？えっちなこと考えてるのかも……………」

するといきなりチエルシーが会話に入ってくる。

「のび太の呼吸が荒くなってきた。このままアカメちゃんに遅いかかー」

「襲わないよ!!」

「じゃあ、誰になら襲いかかるの?」

「誰にも襲いかかりません!!」

「私たちじゃ、襲いかかるほど魅力ないって。クロメちゃんだって、こんなに可愛いのに。」

「あはーん。」

そう言いながらセクシーなポーズを取るクロメ。

「……………」

のび太の反応が薄い。するとクロメは慌てた様子で

「チエルシー、もしかして、のび太って……………」

「え、まさか……………」

「??」

「のび太…………? 武たちなら、あっちにいるわよ?」

ブチッ

「どういう意味だよ!!!」

「きやーっ!!」

「きやー」

クロメとチエルシーは楽しそうに逃げていった。

第二十一章：唇を斬る

「ねえ、あれ見て？もしかしてあの娘、溺れてない？」

その言葉にのび太は勿論、隣に座っていたアカメも立ち上がる。視線の先には水の中で、もがき苦しむ静香の姿があった。

「た、大変だ！」

「!!」

のび太は走りながら勢いをつけ、頭からプールに飛び込む。

「あぶ……つ、うぶうつ!」

その間、静香は必死にもがいていた。先程の一件が原因で準備運動を忘れていたのである。そのせいで、両足をつってしまったようだ。すると静香の意識は徐々に薄れていった。

数分後、

・
・
・
・

やわらかい

くちに なにか さわつた

何が起こつたんだろう?

唇に柔らかい感触を感じ、意識を取り戻した。すると同時に飲んでいた水を吐い

た。そして目に光を受け、ゆっくりと瞼を開けていく。ハアハアと息をつきながら、ようやく体を起こし、周囲を見た。

「おおおおおおおーっ!!」

「すげー!のび太、よくやった!!」

「オレは最初から、やる時はやるヤツだつて思つてたぜ!」

「(嘘つけ。)大丈夫、静香ちゃん!」

心の中でツツコミを入れたのび太は静香の背中を優しく摩り、アカメはバスタオルを静香に被せる。

「……う……うん……ありがとう。」

すると生徒たちが全員集まつてきた。

「キヤーツ!あんなことされたら、そりや女子としてはたまりませんなあ。」

「そうだねそうだね。野比くんつてば、以外と筋肉しつかりしてるし、さっきの飛び込みとか格好よかつたし。」

「すごいイケメンつてわけじゃないけど、うちのクラスの仲じゃ結構上の方だよね?」
何故か女子たちが顔を赤く染め上げている。静香は首をひねつて考えた。そういえば、目が覚める時、何か口に触れて、体が熱くなつてたような。

（口……唇……濡れた………てことは……あれは、まさか、き、キ……）

静香は真つ赤になった。それと同時にのび太も真つ赤になる。そしてそれを何故か面白くなさそうに見守るアカメたち。

「／＼／＼／＼／＼／＼　ご、ごめんね……のび太さんの唇、奪っちゃったりして……」

そう言いながら、申し訳なさそうにギョツと唇を噛んでいた。理由はどうあれ、結果として幼馴染みのファーストキスを奪ってしまったのだから。

「／＼／＼／＼／＼／＼　き、気にしなくていいよ、事故だからさ、ノーカン！／＼／＼／＼／＼」
 「／＼／＼／＼／＼　そ、そうよね……！事故だものね！カウントするのは、おかしいわよね、は、あははは。／＼／＼／＼／＼／＼」

そう言いながら照れ隠しに笑うのび太と静香。すると眉間にシワを寄せたチエルシーが口を開く。

「そうそう！ほら、別にファーストキスでもないしね！」

「えっ!?!」

ピキッ

「.....」

静香の中で何かが音を立てて碎け散る。

しゅん

周囲の空間が凍りついたように動かなくなる。

第二十二章：ファーストキスを斬る

「の、のび太さんは、初めてじゃなかったのね……?」

「えっと、まあ……その……うん……」

ワナワナ

すると静香は烈火の如くのみ太に詰め寄る。今の今まで溺れていた人間とは思えない程の気迫である。

「あ、相手は誰よ……アカメさん!? クロメさん!? チェルシーさん!? シェーレさん!? レオーネさん!? まさか、それ以外の女の子だったりしないでしょうね?」

その問いにのみ太は目線を逸らす。

「え、えーっと、それは、その……ノーコメントということ……」

すると静香の体からドス黒いオーラが溢れ出す。

「へえ……そう、そうなの……随分と経験がおありなのねえ……?」

何故か殺気がこもった目でのび太を見はじめると静香。その得体の知れない気迫に、何故か気圧されるのみ太。

「レオーネさんやチェルシーさんと話す時も物怖じしてなかったわよね……ああ、そう

ね、女性の扱いも随分と手馴れたご様子で……」

静香の声色が、明らかに冷えていて、敬語なのが、凄く怖い。

(こうなったら……)

アカメたちに助けてもらおうと振り返るが

「!？」

辺りには人つ子一人いない。どうやら緊急回避、全員逃げ出したようだ。

「ちよ、ちよつと待って、静香ちゃん？何かすごい誤解と勘違いを、なさって……ません？」

「別に？誤解も勘違いもしてないわよ？あなたが今までにどこで、何人の女の子と、どれだけキスしてようが？私には、何の関係も？ないことですしね？」

「……絶対に、誤解も勘違いもしている。こういう時、何て言えばいいんだろうか。そ……その、静香ちゃんは、初めてだった……した？」

顔色を伺うつもりで、口走ったその一言。

ガシヤン

何か割れる音がした。のび太は今、本日最大級の特大地雷を踏んづけた。

「は………は……初めてで……悪うございましたわね!」

静香は泣きながらのび太に訴える。こんな静香を見るのは生まれて初めてだ。

「い、いや、そういうつもりで言ったんじゃない!悪くなんてない!全然!真面目で、

その……!」

「まさかのび太さんがこんなふしだらな人だとは思わなかったわ!」

「ふ、ふしだら……!?そのつ、ごめん!でも、静香ちゃんはいろいろと誤解してる!」

パチン!!!

「私のファーストキスは、誤解じゃないわよ!!!」

そう言いながらのび太の顔を思いつきり叩く静香。彼女は泣きながら女子更衣

に入ってしまった。

「……………」

そして後には頬を赤くしたのび太だけが残された。

第二十五章：アイドルを斬る

「ここが……」

グラウンドから校舎を見上げる少女。ここにあの人がいる。少女は持っていた手帳を握りしめる。

「それじゃあ、翼ちゃん。お昼頃、迎えに来るからね。」

「はい。」

翼を乗せていた車は走り去っていった。

「よしー！」

そう言うのと、彼女は校舎へと入っていった。

そして教室では

「ジャー————ン!!!」

スネ夫がまた何かを自慢げにバッグから取り出す。その取り出した物にジャイアンたちは目を輝かせる。

「それって伊藤翼ちゃんのサインか！」

「パパが翼ちゃんのマネージャーと友達でね、特別に貰ってきたんだ！」

「凄い!!」

「俺にも見せろよ!!」

「僕も!!」

今日も学校でスネ夫がいつものように何かを見せびらかす。ああ、なんて平和なんだろう。最近ゴタゴタしてたから、こうやってのんびりするのも久しぶりだ。

「ハア〜っ。」

あくびをしながらスネ夫たちの様子を見守るのび太。

「伊藤翼って、そんなに有名なのか?」

隣に座っているアカメが口を開く。

「大人気のアイドルで、歌手・俳優業両方で活躍してるからね。知らない人の方が少ないよ。」

「ふ〜ん。のび太は見に行かないの?」

チエルシーの問いにのび太は腕を伸ばしながら答える。

「いいよ。別に興味ないし……」

普段からそれ以上の美女たちに囲まれているのび太にはアイドルなど、どうでもいい

ものなのである。

「そうだよ。のび太には私がいるんだから。」

そう言うときクロメが後ろから座ってるのび太に抱きつく。

ムッ

それを見たアカメはのび太の耳を掴むと、力一杯引つ張る。チエルシーものび太の足を思いつき踏みつける。

「いたたたたたたたた!!」

キーンコーンカンコン!!

「みんな、席に付け!!」

チャイムが鳴り、先生が教室に入ってくる。先生の言葉に席を立っていた生徒は散り散り自分の席へとついていく。

「え、急なのですが、今日から皆さんと一緒に勉強をすることになった転校生を紹介し

ます。」

「え、転校生？また？」

「何でいつもこのクラスなんだろう？」

先生の急な申し出にクラスのみんなはざわざわと騒ぎ出す。

「さあ、入って来なさい!!」

「はい。」

先生の言葉で一瞬静かになった教室に扉が開く音が妙に大きく響いていた。転校生は教室に足を踏み入れる。

「おい、あれって!？」

「嘘だろう……」

「まじか!？」

転校生を見た生徒たちは驚く。

「初めまして、伊藤 翼といいます。これからよろしくお願いします。」

わああああああああ!!!

クラスの男子全員が泣きながら喜ぶ。

「へえーっ、あの娘が。」

チエルシーたちは興味なさそうな視線を彼女に向ける。翼は教室内を見渡すと

「あっ！」

嬉しそうに大声で手を振りだす。

「野比くくん!!」

「!?」

第二十六章：逢い引きを斬る

翼はのび太の机の前までやってくる。

「何？」

「二人つきりで話がしたいの、一緒に来て！」

「今、授業中。」

「二度も言わせないで。」

すると翼は先生の方を向くと、

「特別に許可して貰えるわよね、先生？」

「……どうぞ。」

「えっ？」

先生の有りえない答えにクラス全員が目を丸くする。すると

「ちよつと、待って。のび太に用があるならここでいいでしょう。」

そう言いうとチエルシーは翼を睨みつける。

「あなたとは関係ない話よ。私はノイズの無い所で話したいの。」

二人の間に火花がちらる。のび太はため息をつくど、

「分かったよ。」

そう言うとのび太と翼は教室を出て行く。

!!!?

「大婆だ!!! アイドルの伊藤翼ちゃんがのび太に告白する。」

「何!!!」

「嘘だろー!」

「何ぞ!?!」

「俺の心の花嫁が!!」

「翼ちゃんすっごい大胆!」

「キヤアゝツ!! 流石、アイドル!」

そして場所は変わって学校の校庭

グラウンドで見つめ合う二人の男女。そしてコソコソ何かを話している。そんな二人を教室の窓から見守るクラスメイトたち。

そして放課後、

「のび太。明日、デパートに行くわよ！」

チエルシーはカバンを片手にそんなことを言った。

「あつ、ごめん。明日は無理なんだ。」

「用事でもあるの？」

「うん、まあ……ねえ……。」

「……。」

そして次の日、

「随分、オシヤレしてるね。」

のび太の気合が入った服装に全員が驚く。

「もしかして……デート?」

「そんなんじゃない……『ガシャン!!』!?」

すると台所で何かが割れる音がした。

「お姉ちゃん、大丈夫?」

「あつ、ああ、何でもない。大丈夫だ。」

すると**のび太**は改めてネクタイを締めると

「それじゃあ、行ってきます!!」

家を出て行った。

「何か、怪しいな……」

レオーネは笑みを浮かべ、アカメは眉間にシワを寄せ、クロメはほっぺをプクーツとふくらませる。そしてチエルシーは

「……………」

無言でその様子を見つめる。

そしてデパートの入り口

「あつ、いた。」

帽子とサングラスをかけて、遠くからのび太を監視するアカメたち。そしてしばらくすると、同じく帽子とサングラスをかけた少女がやってきた。

「あつ、あれつて……。」

「伊藤翼だ。」

「間違いない。」

すると壁に寄りかかっていたチエルシーは

「ねえ……尾行なんてやめない?」

そんな彼女にレオーネたちは

「何言つてんだよ! 婚約者として私たちには知る権利がある!」

「そうだよ、チエルシーは気にならないの?」

「うっ……うっ……」

のび太と翼は何かを話した後、デパートの中へと消えて行った。その後を必死で追いかけるアカメたち。

最終章：聞き耳を斬る

そして再び太たちはその後、色んな店を回った。そしていつもよりその表情は楽しそうであった。そんな様子を遠くから見ているアカメたちは何故か複雑で、悲しい気持ちになつていく。しばらくすると二人は喫茶店に入つていった。二人は席につくと、飲み物を注文する。

「ん、声は聞こえないけど、中々良い雰囲気だな。」

「そうですね。」

そしてそんな二人の様子を遠くから双眼鏡で見守るアカメたち。

「まさかのび太、あんな女と本気で？」

「そう言いながら不安を隠しきれないクロメ。」

「しかし、何とか聞こえないものかな？」

「無理ですよ。こんなに離れてるんだから……。」

「……………」

するとレオーネは

「私に任せとけ！」

ライオネルを付けると獣化する。彼女は耳を動かしながら二人の会話を聞き取る。

喫茶店の中：

「実はその、私好きな人がいたの。」

「えっ!?!」

翼の発言にのび太は驚く。

喫茶店の外：

ピクピク

「えーと、なになに……『実はのび太、好きな人はあなたなの。』」

「『『『えっ!?!』』』」

レオーネの発言にアカメたちは驚く。

喫茶店の中：

「好きな人？」

「ええ。」

喫茶店の外：

ピクピク

「えーと、なになに……『ぼ、僕も好きです。』」

『『『『えっ!?!』』』』

レオーネの発言にショックを隠しきれないアカメたち。

喫茶店の中：

「その好きな人って？」

「昔、一緒に仕事をした俳優さんよ。昔はとってもカッコ良かったんだけど……会うたびにメチャメチャな性格。あつ、いや。元からメチャメチャだったんだけど……。」

喫茶店の外：

ピクピク

「えーと、なにになに……『その好きなところって？』『好きな所は若旦那で、可愛い所で、もうメチャクチャに。いやもつとメチャクチャにしたいんだけど。』」

「『『……』』」

レオーネの発言に唾然とするアカメたち。

喫茶店の中：

「でも好きだったの？」

喫茶店の外：

ピクピク

『なら好きはして！』

ガシャン！！！！

「！！！！」

レオーネの発言にアカメたちの頭の中で色んな物が音を立てて崩れ落ちる。

喫茶店の中：

「向こうがどう思っていたかは分からないけど、気持ちって中々変えられないわよね。」
「そうだね、気持ちは中々。」

喫茶店の外：

ピクピク

『私は思いのほかテクニシャンで、気持ち良くなるよう変えてみせるわ。』

『『『『／／／／／／／／／／／．．．．．／／／／／／／／／／／』』』』

アカメたちの顔はまるでオーバーヒート寸前の様に真っ赤である。

『それはいい気持ちいいなら!!!』

ブチッ

「もう我慢できない。」

アカメは村雨を鞘から引き抜く。

「アカメ、落ち着いてください!!!」

「そうだよ、お姉ちゃん!!」

クロメたちは必死でアカメをなだめる。

文化祭

プロローグ

放課後、珍しくジャイアンたちと下校するのび太。

「おい、いよいよ来週だな。」

「そうだね。」

「えっ？来週ってなんだっけ？」

「何だのび太、忘れたのかよ!?今度の文化祭でやる『ロミオとジュリエット』の劇のー」

「配役を決めるオーディションの日じゃんかよ。」

「ああ、そうか。」

「問題はロミオ役だけど．．．．．まっ、のび太は無理だとして。」

「ムカツ。ハイハイ、僕じゃ無理ですよ！」

「ほー、良く分かってんじゃん！」

「関心関心。」

そう言いながらのび太を馬鹿にするジャイアンとスネ夫。

「まっ、となるとロミオ役はこのー」

「俺様だな。」

「!?」

「!?」

ジャイアンの発言に周囲が凍りつく。

「『え——————つ!?』」

「!?なつ、何だよ!?何か文句でもあるのか!?」

「いやいやいや。」

「本気かなって思つて。」

「どういう意味だ!!!」

のび太たちの反応に顔を真っ赤にして怒るジャイアン。

「だつて……」

「デブのロミオじゃあ……」

「何だと——————!!!」

「!!!!!!」

「ジュリエット役はやっぱりアカメちゃんだよな。」

「違うよ、チエルシーちゃんだよ。」

「アカメちゃん!!」

「チエルシーちゃん!!」

二人の意見が対立し、にらみ合うジャイアンとスネ夫。

「……………」

ヤレヤレという感じでその様子を見守るのび太。

その頃、

「アカメさん！」

「??？」

アカメが振り向くとそこには真剣な顔をした静香がいた。

「何の用だ？」

「勝負よ！私が勝ったら、今後一切のび太さんに近づかないで！」

この前のプールでの一見で静香は人生最大の大勝負に出るのであった。

「勝負？」

「来週の劇の配役を決めるオーディション。私はジュリエット役に立候補するけど……………」

「??」

「そのオーディションでどっちがジュリエット役に相応しいか、勝負よ！」

「それは……」

「できないの？」

挑発するような態度でアカメを見下す静香。

「で、出来るぞ！ やつて見せる！」

その言葉に何故かやる気を出すアカメ。普段気まぐれな彼女には珍しい光景である。

「それじゃあ、決まりね！（掛かったわね、こっちはこの日の為に猛練習してるんだから。

これなら勝てる、フフフ。）」

そう言うのと静香は笑みを浮かべる。

「ろみお、ろみお。ドウシテ……あなたは……ろみおなの？ おとうさまとかめいを入れてくれるなら、それがだめでも、ワタシをアイするとちかかってくれるなら、ワタ

シもカメイをス

てるのに。」

帰るなり、アカメは本を読み始める。

第一章：居眠りを斬る

「ん、何だろう?」

クロメは階段を登り、自分の部屋に入る。

「ろみお、ろみお。ドウシテ……あなたは……ろみおなの?」

明らかに挙動不審なアカメにクロメは

「何やってんのお姉ちゃん?」

「／／／／／!? ／／／／／／／／／／」

ビクッ

突然声を掛けられ、ビククリするアカメ。

「さつきから変なこえだしてさ……」

「……。。。」

「??」

「……..へんな声……?」

この時、アカメは自分が演劇に向いていないことに気づいてしまった。何故もつと早く気づかなかつたのだろうか。

その頃商店街では、

「チエルシーちゃんの恋人役だろう、まさに役得じゃん！」

「これをキツカケにただのクラスメイトから、気になるあいつに昇格できるかも知れねえ!？」

「なんだお前、普段はクロメたんとか言ってるくせに、こんなときだけ調子いい事いってんじゃねえぞ！」

「そうだそうだ！ロミオ役はチエルシーちゃん一筋の俺がもらう！」

学校帰りの学生たちがそんな話をしている。そしてその様子を遠くで伺うドラえもんたちは

「うわー、予想通りとはいえ、男子全員が名乗りでたね。どうする、チエルシー？」

「男子全員って言っても、のび太はどこ吹く風だけだね。」

「のび太くん、立候補しないだね・・・」

「あんにやろく、私には興味なしってか、むかつくう。」

そして次の日、

「はい、では次の段落から誰か読んで。それじゃ……アカメさん。」

「……………」

教師に名前を呼ばれたのに何故か返事をしないアカメ。

「アカメさん。アカメさーん。」

(……………?)

のび太は視線をアカメの方に向ける。すると

「……………くう……………すう……………」

(……………ね、寝てる? 不味い、担任の授業はヤバイって!)

机に教科書を立て、そこに隠れた状態で机に突っ伏すという、見事な居眠りスタイルを実行しているアカメ。

(……………テスト勉強、かな? でも夜にやって授業中に寝てたんじゃ意味がないなあ……)
すると教師はため息をつく。

「……………しかたない。責任取って、野比が読め。」

「……………はい？僕が？」

「婚約者なんだから当然。イヤなら断ってもいいけど、単位落とすぞコノヤロー。」

「アンタ、ホントに教師か。」

「それ以外の何に見えるのよ。教室じゃ私がルールで法律だ。文句言うな。」

「お見合いがダメになったからって僕に当たらないでくださいよ!!」

「なんだと!?!もう一回言ってみろ、ぶっ殺すぞ!!」

「……………。」

「ほれほれ、お昼前でお腹へって気が立ってんのよ、私は。早くしないと呼んでも単位減らすわよ。」

「……………。」

第二章：前触れを斬る

「のび太……」

「ん……？」

「アカメ、起きたの？」

「すまない……私のせいで。」

そろそろお昼でも、と準備しかけたところで、しゅんと小さくなったアカメがやってきた。

「ちなみに、どのあたりから意識がなかったの？」

「……先生が教科書を読み始めたのは、覚えているのだが……寝たらダメだ、寝たらダメだと思って……気付いたら、チャイムが鳴っていた。」

「……うん、何となくわかった。」

一応、睡魔と戦おうとしていたらしいので、これ以上は何も言うまい。

「頑張るのはいいけど、夜はちゃんと寝ようね？」

「ああ……ホントにすまなかった。」

そして夕食、

「アカメ、今日も食べないの？」

「なんか部屋でやることがあるんだって……」

アカメが夕食を食べないなんて天変地異・の前触れだ。それ故、みんなアカメの事を気にかけている。

「夕食だけでも、部屋に持って行ってあげよう。」

「あつ、私が行くよ！」

夕食を即食べ終えたクロメが名乗りを上げた。クロメは夕食が乗ったトレイを受け取ると階段を登っていく。クロメはキョロキョロと辺りを見渡すと

コンコン

「……………」

「お姉ちゃん、私だよ！」

「……………入れ……………」

カチャ

クロメは夕食の乗ったトレイを持ちながら部屋へと入っていった。

「アカメ、本当に大丈夫かな。」

するとソファーに座っていたレオーネが口を開いた。

「ここはのび太にコツソリアカメの様子を見て来てもらおうかなーっ。」

ブーッ

のび太は飲んでいたコーヒーを吐き出す。

「な、何で僕が!?!」

すると全員の視線がのび太に集中する。

「何でって、婚約者のお前以外に誰が適任だって言うんだよ。」

レオーネのもっともらしい言い分に反論出来ないのび太。

「それは言えてる。」

「そうだよね。」

「のび太、お願いします。」

ドラえもんたちは目をウルウルさせながら迫ってくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

そんな光景にのび太はため息をつく

（アカメ大丈夫かな。体壊さなきやいいけど・・・・・・・・）

のび太はアカメの部屋の前までやってくる。

（勉強してるのかな？）

そう思いながら借りてきた通り抜けフープをドアにつける。

シユン

「アカメ、あんまり無理すると体に……」

そう言いながらのび太はアカメの部屋に入る。すると

「!?」

「!?」

のび太は唖然とする。部屋の中ではアカメとクロメが抱き合っていた。しかも顔の位置があと一ミリという距離で唇同士が接触するというものだった。

「／／／／／!?／／／／／」

二人ものび太に気づき、一瞬で距離をとった。

「お邪魔しました。」

そう言うと、のび太は即部屋から退散した。

第三章：男らしいを斬る

アカメは瞬時に通り抜けフープの輪に手を突っ込み、のび太の袖を掴むとそのままのび太を部屋に引っ張り込む。

そして30分後、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アカメの部屋で向かい合うようにして床に座る一組の男女。そしてその横でお菓子

をほうばるクロメ。気まずい空気が部屋全体を包み込む。そして、ようやく顔を真っ赤にしたアカメが口を開いた。

「のび太、落ち着いて聞いてくれ。」

「大丈夫、誰にも言わないから……僕、これでも口は硬いから。それに恋愛は人それぞれだしね。」

「違うんだ!!あれはその……あの……なんだ……」

アカメの声が徐々に小さくなっていく。

「??」

すると横で見ていたクロメがヤレヤレという感じで口を開いた。

「私たち劇の練習をしてたんだよ。」

「ク、クロメ!!」

「劇?」

「ほら、今度文化祭でやる劇……」

「ロミオとジュリエット?」

「そう。その劇でお姉ちゃん、ジュリエット役をやりたいんだって。」

「へえ〜っ。」

「でもお姉ちゃん、大根役者でさ。だからコッソリ私と一緒に部屋で練習してたんだ

よ。」

「それならそうと、最初に言ってくればいいのに。」

「恥ずかしいんだって。」

「……………」

アカメは膝を抱え地面にのの字を書いていじけてしまっている。

「……………」 私だって女だ。たまには女らしく振る舞ってみたい。／／／／／

「……………」

「チエルシーみたいに可愛いか、綺麗とか言われてみたい。」

のび太はジュリエットの衣装を着たアカメを想像してみる。まあ、これで中々可愛い

かもしれない。だがアカメに関していえばジュリエットよりも

「いいんじゃない。」

「??？」

「アカメのジュリエット、見てみたい!!僕も協力するよ!」

「のび太……………」

のび太の言葉に心から礼をいうアカメ。

「でもアカメは今でも十分女らしいよ。それに……………」

「……………」

!!!!

……………」

のび太の言葉にキュンとするアカメ。

「『男らしい』のがアカメのいい所の一つでしよう？」

ピキツ

「……………」

その一言でアカメの中で何かが音を立てて碎け散る。

「……………男……………みたい……………」

どす黒いオーラがアカメから溢れ出る。

「ア、アカメ……………」

「お、お姉ちゃん……………」

ギロリ

「……私が一番気にしていることをよくも……」

『ヒー!!』

アカメの気迫に後ずさるのび太とクロメ。

「大体私のどこが男だと言うんだ!!!」

顔を真っ赤にしながらアカメは抗議する。

「うーん、そうだね。」

のび太は眉間にシワを寄せて考える。

「まあ、女は……女だよね。」

そう言いながらのび太はアカメの胸に視線を向ける。

「じーーーーーーーーーーーーーーーーっ。」

ドン!!

視線に気づいたアカメはのび太の頭にチョップを下す。

第四章：優しい味を斬る

キンコーカンコーン

・「のび太さん！」

「何、静香ちゃん？」

放課後、静香がのび太の所にやってきた。

「今日、家に来ない？美味しいケーキを焼くんだけど。」

「えっ、あつ……うん……。」

そう言いながらのび太はアカメの事を思い出す。休み時間も昼休みも、ずっと一人で台本を読んでいた。

「……………」

「何か用事でもあるの？」

「えっ、あつ、うん。それじゃあ、カバン置いたらすぐ行くよ！」

「うん、待ってるわ！」

アカメは大急ぎで家に帰る。いつもより体が重く感じるのは、目眩がするのは気のせいだろうか？

『男らしい』のがアカメのいい所の一つでしょう？

先日ののび太の言葉がずっとアカメの頭を過っていた。
(くっ、見ている、今に女らしくなってる。)

アカメは部屋のドアノブに手を掛ける。

(うっ……)

するとアカメの視界がいきなり暗くなり、アカメは意識を失う。

バタン

「ん？」

どれくらいたったのだろうか、アカメが目をさますと

「あっ、気がついた。」

「のび太……？私は一体……」

そう言いながら辺りを見渡す。アカメは自分の布団に寝かされ、おでこには濡れたタオルが置かれていた。

「部屋の前で倒れてたんだよ……うわ、40度もある。」

体温計をアカメの脇から引き抜く。

「お前、静香の家に行ったんじゃないの？」

「うん、でもアカメの事が心配だったから……」

「??」

「『いつも通り』振る舞ってるアカメを見ると、どうにも嫌な予感がしてなかったんだよ……」

「そうか……心配かけてすまない。もう大丈夫……」

ぐうぐう

「……………」

「……………」

「一応おかゆ作ってみたんだけど……食べる？」

「……………」

のび太はおかゆが乗ったトレイを取り出す。

「ママみたいによくできなかつたけど……」

のび太はレンジにおかゆを掬うと、それをアカメの前に差し出す。

「ハイ、あ〜ん！」

ハムッ

「!？」

アカメはのび太の腕ごと、かぶりついた。

確かに温度は低い。塩のかけすぎ。醤油が少ない。卵がご飯と混ぜっていない。おかゆとは呼べない品物だ。だが、

「とても優しい味だ、とても……」

「……………」

作った人の心が良く分かる。のび太らしいな。

「のび太。」

「うん？」

「ありがとう。」

そう言うとアカメの表情は自然と笑顔になった。

「／／／／／ あ、そうだ！おしほり取り替えないと・・・／／／／／」
アカメの言葉にのび太は急いで部屋を出ようとするが

ガラんツ!!

バシヤン!!

「ゴメン、すぐ片付けるよ。」

ガン!!

「わあ、こぼしちやった!!」

その光景にアカメは再び笑みを浮かべる。

のび太、私頑張る。

第五章：オーデイションを斬る

「そのコトバ……たしかにちようだいしました。ただひとこと、ぼくを鯉びととよんでくれたなら、そのことはこそあしきせんめん、きようからはもう、ぼくはロミオでなくなりませう。」

クスクスクス

ジャイアンの演技にクラス全員が笑いを堪える。

「お嬢さん僕と一緒に踊らない？」

クスクスクス

「変な顔！」

「何、あのメイク？」

スネ夫の顔にクラス全員が爆笑する。

「何だよ、ハリウツドのプロ用メイクだぞ！」

（もうすぐだ……。）

アカメは椅子に座りながら自分の出番を待っている。

（大丈夫、あれだけ練習したんだ……。落ちるわけがない……。）

元殺し屋とはいえ、人前に立つのはやっぱり恥ずかしい。

ドクン

ドクン

（どうしよう……。ドキドキしてきた。）

「うまいわねー!!」

「流石源さん!!」

緊張の余り他人の声が全く頭に入っていない。

「次は誰かな？」

（苦しい・・・心臓が喉から飛び出しそうだ!!）

「
.
.
.
.
.
ねえ
.
.
.
.
.
.
ちゃん
.
.
.
.
」

(
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.)

薄つすらと聞こえる誰かの声。

「お姉ちゃん!!」

「!？」

「お姉ちゃんの番だよ！」

「えっ、あつ、ああ．．．。」

アカメは急いで立ち上がるが

ギー

ガシヤ

ギー

ガシヤ

手と足が同時に動いている、まるで一世代前のロボットだ。

クスクス

クラスメイトたちはアカメを見るなり笑い出す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黒板の前に来るとアカメはそのままうごかなくなる。

（お姉ちゃん、頑張って！）

クロメの願いとは裏腹にアカメの視界ははつきりしていない。頭の中も真っ白であつた。

「／＼／＼／．．．．．／＼／＼／＼／」

「どうしました、アカメさん？どうぞ、始めてください！」

「あつ．．．．．あつ．．．．．」

教師の指示に口を開くアカメだったが言葉がうまく出てこない。すると

ガラッ

「すいません！遅れました。」

教室の扉が開き、のび太が入ってくる。

「野比、今までどこに行つてたんだ!？」

「すいません．．．．．。お昼休みにトイレに行つたんですけど、鍵が壊れて閉じ込められてたんです。」

するとアカメの表情が変わる。それはまるでナイトレイドにいた頃のような真剣な顔。

(のび太、見ていてくれ!!)

その様子を嬉しそうに見守るのび太。

(アカメ、頑張って!!)

「葬る!!」

第六章：努力の結果を斬る

「ロミオ、ロミオ。どうしてあなたはロミオなの？その家名をお捨てになつててくれたなら、私も家名を捨てるのに。」

静寂の教室に、アカメの声が満ちていく。するとアカメは向かい側になると

「その言葉、確かに頂戴いたします。ただ一言、僕を恋人と呼んでくれたなら、その言葉こそ新しき洗礼、今日からはもう、僕はロミオでなくなります。」

キリッ

「『『『!!!』』』』」

アカメの凜々しい顔がクラス全員の視線を釘付けにする。

「・・・・・・・・・・ふう」

演技を終えると、水を打ったような静けさが満ちた。

パチパチパチ

そのなかに、やがて、ぽつぽつと拍手がうまれて。

それはやがて、心踊るような祝福の音となった。

「すごい・・・・・・・・わたし、演技を見てこんなにドキドキしたのはじめて・・・・・・・・」

「うん、私もっ……」

「どうしよう、なんだか震えてきちゃった……」

拍手に混じって聞こえる感想の呟きに、なんとも言えず、照れくさくなるアカメ。だけど、素直で飾らない反応だからこそ、その言葉は拍手の音とともに、彼女の胸に染みていった。

「いやあ〜っ。素晴らしい、素晴らしいよアカメさん！こんな素敵なお『ロミオとジュリエット』は初めて見た。」

「先生……」

褒められたアカメは嬉しそうに笑う。当然だろう、この日の為に眠いのを我慢し、食べ物も口々に食べず、ひたすら練習だけをしてきた。

そしてその努力がこうして報われた。

かに思われた・・・。。先生は嬉しそうにアカメの肩をポンと叩くと

「うゝん、ロミオの役は君しかないな！」

「えっ……!!? (今、何て……?)」

「みんな、どうかな!?!」

「賛成!!!」

先生の言葉にクラス全員が声をあげた。

「え

アカメの声が校舎中に響き渡った。

っ

!!!!!!」

そしてその日の午後、

「あははははははははは、ロミオ役だって!!!流石帝都最凶殺し屋と言われていたアカメ!!」

のび太から話を聞いたレオーネが腹を抑えながら大笑いする。

「レ、レオーネ、そんなに笑っちゃダメだってアハハ!」

(そう言うドラえもんだって笑ってるじゃないか。)

のび太たちはアカメに視線を向ける。アカメは部屋の隅で膝を抱えながら丸くなっていた。その表情は聞くまでもなく暗い。

「.....」

気の毒すぎて声もかけられない。のび太とクロメはアカメに向かって手を合わせた。

チーン

「『ご愁傷様。』」

第七章：引きこもりを斬る

トントン

「アカメちゃん、もう7時だよ。早く学校、行こう！」

しゅん

「出てこないな……どうしよう……」

「大丈夫♪」

そう言いながらレオーネは得意げに胸をはる。

「アカメは食いしん坊だからな、こうしてここに食べ物を並べておけば……」

そう言いながらレオーネはグルメテーブルかけを床にひき、アカメの好物である肉料理を次々と出し始める。

「さあ、早く出てこい。」

「……………」

レオーネたちは離れた場所から静かにその様子を見守る。

「
十分後、
.
」

三十分後、

「出てこないね。」

「おつかしいなく。」

そう言いながらのび太たちは部屋の前までやってくる。

「あれ!？」

「うそ……。」

料理があつたはずの場所にはひたすらに空の皿が並べられていた。しかも見事にグルメテーブルかけまでなくなっている。

のび太の部屋、

「うーん、ここでも異常ない。」

部屋の様子をモニター越しに見るドラえもんたち。

「それじゃ、今度はスロー再生。」

クロメを見張りに残し、先ほどの出来事をタイムテレビで分析するのび太たち。「うくん、やっぱり異常ない。」

スロー再生でも部屋のドアが開いた様子はない。

「それじゃあ、今度はコマ送りで。」

ポチッ

「・・・えっ・・・!!?」

「まさか・・・!!?」

モニターにはドアの前で食事をするアカメの姿が映し出された。

「何て・・・早さだ・・・」

「映っているのは、この一コマだけ!?!」

のび太は拡声器を取り出す。

「アカメ、いい加減に学校行こうよ!!」

「うるさい!!行かない!!私が行かない!!断固行かない!!」

部屋から怒りと悲しみに満ちたアカメの声が聞こえてきた。

「何?!出てこい!!出て来ないんだったら、こつちにも考えがあるぞ!!」

「アカメサイド」

あの日以来、部屋に閉じこもってしまった私。でも私は何も悪くない。嫌いな学校なんてこつちから願い下げだ。止せばいいのに意固地になる私。そんな自分がだんだん嫌いになっていく。それでも、のび太は

トントン

「アカメ!!」

毎日部屋のドアを叩いた。次の日も、その次の日も。そして・・・その次の日も。

あれからどれくらいたっただろうか？何やら話し声が聞こえてくる。

「でも、アカメが……」

「もうお姉ちゃんなんかほつとこ。」

すりすり

「それよりのび太、今から私とデートしようよ！」

ピクッ

「二人だけでさ！この間、新しい焼肉のお店が出来たんだって!!あそこのお肉、すつごく美味しんだってさ!!」

「そうだね……」。

「本当、嬉しい〜♡」

バタン

私は反射的にドアを開けてしまった。何故かは知らない、でも開けられずにはいられなかった。するとそこにはのび太の首に腕を回しているクロメがいた。

「ほら、出て来た!」

「・・・・・・・・・・。」

私は敗北感を感じながら膝をついた。

「お姉ちゃん、捕獲完了！」

そう言いながらニッコリと笑うクロメ。

第八章：代役を斬る

「ようやく行く気になったんだね！」

「……………」

そう言うと、のび太はアカメと一緒に家を出た。だがアカメの表情が暗い。恐らくこの数日間、のび太たちにかけて迷惑、その罪悪感をいま感じているのだろう。

「本番まで一週間しかないんだ、頑張ろう！」

「……………」

ウキウキ気分で歩くのび太の後をアカメは無言で追いかける。すると

ザツ

「やい、のび太！女と登校して良く恥ずかしくないな！」

「!?」

いきなり目の前にジャイアンとスネ夫が現れる。

「お前、それでも男かよ！」

「まるで女の子よ、のび太さん！」

「何ーっ!? 僕のどこが女だって言うんだ！」

「ふん！考えてもみる遊ぶのはいつもアカメちゃんたちとばっか。」

「スポーツはまるでダメ、特技はアヤトリ。ハハハハッハ！！」

「男らしいトコなんか一つもないじゃないかよー！！」

「アハハハハハハ！！」

「……………」

「女と一緒なんて恥ずかしい。」

ブチッ

ジャイアンの一言で何かが切れる音がした。

バコン

するとのび太はジャイアンの顔面にその拳を叩き込む。

「痛っ！！」

その威力にジャイアンは尻餅をつく。

ワナワナ

「……なんかない……」

「??」

「恥ずかしくなんか無いっつたら!!」

のび太は顔を赤くしながら叫んだ。

「な、な……なんだよ……」

その気迫にジャイアンとスネ夫が後ずさり、逃げていった。

「二度と来るな!!!」

二人を追い払うとのび太はアカメの方に振り向く。

「早く行こう。」

(のび太の顔が赤い、本当は物凄く恥ずかしかつたんだろう。)

「男らしいとか、女らしいなんて関係ない。僕は僕。アカメはアカメだよ。」

「……………」

のび太の言葉にアカメの顔が少しだけ明るくなる。

そして学園祭当日、

ガラン

「おはよう………って、何かあったの？」

教室に入ると、クラスが呆然としていた。

「何かってレベルじゃねーって！源さんが熱をだしちゃったんだよ！」

「なんだって!?!」

ジュリエット役の静香が本番当時体調を崩したらしい。

「ここに来てジュリエットの離脱はピンチどころの話じゃないよ！代役を立てるにしても……」

「そうだよ、衣装は詰めたりしてなんとか誤魔化せてもセリフとかあるし。」
すると男子たちが騒ぎだす。

「つてことは！アカメちゃんの相手役になれるチャンスってことか!?俺、ジュリエットやります！」

「待て待て、アカメちゃんの相手役はこの俺様だ！」

「ジャイアンたちは名乗りを上げた。女装してまでアカメと一緒にになりたいのか。この間、男らしいくないとか云々言ってたのは誰だよ。すると女子たちは全員ため息をつく。」

「もう男子ったら馬鹿ばかり言ってるじゃないで！今から台本覚えられるの？」

その言葉に男子たちは後ずさる。

「そ、それはいくらなんでも……無理だろ。」

「だよな。さすがに……なあ？」

「でもジュリエットなしでなんて、どうやっても劇にならないよ。」

「いくらアカメさんでも相手役なしでロミジュリは無理でしょ。せめて違う内容だったら……。」

「内容を変更する方がよっぽど無理だつて！セットだつて衣装だつて専用で作つてんだぜ？」

みんな黙り込んでしまう。重苦しい空気がクラスに広がっていく。

第九章：もう一人のロミオを斬る

「じゃあさ、アカメちゃんがジュリエットをやるのはどうかな？」

「???」

チエルシーの一言で、みんなの視線が一気に集まる。

「そうだねっ、お姉ちゃんならなんとかなるかもっ！」

彼女の提案にクロメは大賛成する。すると女子たちは

「ちよ、ちよっと待ってよ。アカメさんがジュリエットやったら、誰がロミオ役をやるのよ？」

「そ、そうよ。アカメさん以外にロミオのセリフを覚えてる人なんていないのよ！」

すると壁に寄りかかっていたチエルシーが歩き出す。

「ロミオなら、ここにいないじゃない。」

そう言いながら、チエルシーはのび太の肩をポンと叩く。

「えっ、僕!？」

「アカメちゃんに付き合っただけで散々練習したでしょ？」

「えっ、まあ……ね……。」

そんなのび太に男子たちは

「のび太が？冗談じゃない!!」

ジャイアンは首を横に振る。

「のび太がロミオなんて劇が台無しになるに決まってる！」

「そうだ、そうだ！」

そんな男子たちを背に、女子たちは

「じゃあ、今からいくつか適当にセリフを読み上げるから、続けて言ってみて。『このよ
うに夜の闇にまぎれて私の秘密を立ち聞きするあなたは、いつたいたれなのですか?』
「だれかと名まえを聞かれても、なんとあなたに名乗ってよいかわからないのです、わた
しの名まえは、なつかしい聖者さま、わたしには憎いものなのです。」

「いえ、月にかけてお誓いなさってはいけません、あの不実な月、丸い形をひと月ごとに変えてゆく、変わりやすい月にかけてはいけません、あなたの愛がそれと同じように変わってしまうといけませんもの。」

「それでは何にかけて誓えばよいのです？」

「キターーーッ!!友人のピンチに颯爽と駆けつけるもうひとりのロミオ！」

「すごい！すごいよ!!さすがのびただよっ!!」

「ビューッ!!これには私もびつくりだぜ！ナイスよナイス！ヴェエエリイイナイス!!」

当の本人を前にして勝手に盛り上がる女子たち。

「あの・・・僕、演技には自信が・・・」

そんなのび太の言葉を無視して勝手に話は進んでいく。

「そうと決まったら衣装のサイズ直さないと！アカメちゃんと野比くんじゃ、全然違うから。」

「そうだね、時間もないし応急処置になっちゃうけど、やるつきやないよね。」

「衣装チーム集合っ！まずはウエストを絞るところから始めるよ！」

「合点承知！制服、邪魔だからひんむいちゃうね！」

そう言いながら女子たちはのび太の制服を掴む。

「ちよまつ!?!まだやるなんて言つて・・・」

「あくもう、時間ないんだからさっさと脱ぐ!!」

「ちよつ、ま、待つてそこは・・・らめえええーっ!!!」

第十章：本番を斬る（前編）

「……………」

本番五分前、のび太はジュリエットの衣装を着たアカメに心を奪われる。

「何をしている？もうすぐ本番だぞ！」

「えっ!? ああ、うん。」

アカメの言葉で我にかえり、彼女の隣に立つのび太。するとアカメはふっと笑い出す。

「??」

「こうしていると帝都にいた頃を思い出す。あの頃もこうやってお前と一緒に戦っていた。お互いに背中を、命を預けながら。」

「そうだね……………あれからもう三年経つけど……………君は全然変わらないね。大食らいでマイペースなアカメのまま。」

「お前も……………意気地なしでのんきな のび太のままだ。」

そう言いながら二人は見つめ合い、笑みを浮かべる。

「さっ、行こう。」

「ああ。」

こうして劇の本番が始まった。

観客席に座るのはドラえもん、レオーネ、シエーレ、のび太の両親、スネ夫の母、そしてジャイアンの母。

「楽しみだなく。」

そして舞台の幕が上がった。

「おっ、出てきた。あれ？随分派手な衣装だな。」

「本当だ、まるでロミオみたい。」

のび太の服装に違和感を覚える野比助たち。

「ロミオみたいじゃなくて、あれロミオなんじゃないの？」

「そんなはずは……ロミオはアカメのはずじゃあ……」

「ロミオ、ロミオ。どうしてあなたはロミオなの？その家名をお捨てになつててくれたなら、私も家名を捨てるのに。」

観客は静まりかえる。アカメのジユリエットに彼らの心が引き込まれていく。

「その言葉、確かに頂戴いたします。ただ一言、僕を恋人と呼んでくれたなら、その言葉こそ新しき洗礼、今日からはもう、僕はロミオでなくなります。」

そして観客席では

「それにしても、なんでのび太くんロミオやってるんだろう……」

「いいじゃん、理由なんてどうだって。」

そう言いながらレオーネたちはアカメに視線を向ける。

「そうだね。」

「アカメつたらとつてもいい顔してますね。」

「フフフ、ホント。よかったわねアカメちゃん。」

劇の内容に玉子たちは満足する。

「すごい息びつたり！これは嬉しい誤算だわ。」

「本当だね。源さん相手の時はどこかぎこちない感じだったのに、今はすごく自然な感じ。．．．本当の恋人みたいに見えるよ。」

「アカメちゃん嬉しそうにびつたりくつついてる．．．すごいね、本番になるとさらに恋人同士って感じが出ててさ。」

「二人の恋にもう夢中だよおっ！台本見るはずなのに、先がきになるうっつ！」
「学園祭の劇だからって、舐めてたけど、とんでもねえよ。」

舞台袖や客席から、声が聞こえてくる。

第十一章：本番を斬る（中編）

ナレーター：屋敷から抜け出そうとするロミオ、召使の制止も聞かず……ジユリエットの元に行こうとします。すると

「ロミオだな。」

「??？」

呼ばれて振り返ると、やけに屈強な男たちが数人立っていた。

「我々はキャピュレット家の親戚であり、同時にチエルシーさんの親衛隊である。用件だが……言わなくてもわかるだろう？」

「??？」

「チエルシーさんにまとわりついている虫がいますと聞いてな、駆除に来たんだよ。」

「虫？」

「大体貴様、源さんという存在がありながら、チエルシーさんとも仲良くするとはどういうことだ！」

「……………」

のび太と静香は幼馴染みということで、一緒に行動することが多い。学校においてそ

んなのは、カップル以外にはあり得ないわけで、だから勘ぐられもするのだろうか……。でもそれは今では昔の話、アカメたちが来てからというもの、静香と関わることはめつきり減ったのである。

「いいじゃん別に……。友達なんだから。」

その言葉に親衛隊は激怒する。

「くっ、この野郎！ チェルシーさんにちよつと優しくされたからって、調子に乗りやがって！」

「やはり教育が必要なようだな。殺っちまえ!!」

だがそれをロミオは「慌てるな」と制する。

「悪いけど、これから用があるんだ。またにしてくれ（時間も押していることだし）。」

「随分と余裕があるようだが、俺たちをすこし舐めすぎじゃないか？ こう見えても全国空手大会出場の強豪と言われているんだぜ。」

話を聞いてくれそうにない。

「しようがないな〜」

ロミオは大きなため息をついた。

そして数分後、

「くう……つ、ま、まいった……」

「な、なんだこいつ……なんでこんなに強いんだ……？」

ナレーター：ロミオは倒れている男たちの体を踏みながら、先を急いだ。

「待て……！！」

ナレーター：森を出たところで、また体育会系っぽい男共呼び止められる。

「誰？」

「我々はキャピュレット家のものだ！同時にレオーネさんの親衛隊でもある。」

「・・・・・・・・・・。」

観客席ではレオーネが必死に笑いをこらえているのがわかる。

「なんか用？」

せつかく劇が上手くいつてたのに、これでは台無しである。

「決まってるだろう！ロミオ、お前は！お前というやつは！常に我が校の美人どころを周りにはべらせている！それはいつたいたいどういことなんだ！」

「・・・・べつにはべらせてなんかないけど。」

「昼はいつも一緒にメシを食っているだろう！」

「それだけじゃん。」

「朝も一緒に登校しているだろう！」

「それだけじゃん。」

「レオーネさんを始め、100万ドルの笑みがお前だけに向けられているだろう！」

（あのね・・・・・・・・）

怒りを通り越して呆れてくるロミオ。

「あつ、ああつ・・・・それに引き換え俺たちは・・・・！し、親衛隊であるところの俺たちはあつ・・・・！声もかけられない、笑みも向けられない・・・・ただ残り香を嗅ぐことだけしかできない・・・・！」

「……………」

「ふふふ、これから我々の力をみせつけてやるとしよう。」
そう言いながら腕を鳴らす親衛隊。

そしてまた数分後、

「ぐわあああつ!?!」

「我々が…………全滅…………だと?」

「こいつ……一体何者なんだ？」

ナレーター：ロミオはまた倒れている男たちの体を踏みながら、先を急いだ。

「待て——————い!!」

ナレーター：町を出たところで、またまた体育会系っぽい男共に呼び止められる。

「我々はキャピュレット家のものだ！同時にシエーレさんの親衛隊でもある。」

「……………」

「ろ、ロミオ……！俺たちはだなあ……！女神のようなシエーレさんの優しさを、

お前ばかりが独り占めしている……！それがまったく許せんのだあつ！」

「……………」

そしてまたまた数分後、

ナレーター：林を抜けたところで、またまた体育会系っぽい男共に呼び止められる。
「我々はキャピュレット家のものだ！同時にクロメさんの親衛隊でもある。」
「……………」

第十二章：本番を斬る（後編）

ナレーション：ようやくジュリエットの家の前にたどり着いたロミオ

「待て、ロミオ!!!」

「??」

「ウフフフ……。」

するとその陰からジャイアンが現れる。

「随分息が上がっているようだな。」

「??」

「お前をジュリエットに会わせるわけにはいかない。俺様はジュリエットの兄、フレイドリイ。」

「……。」

「こっちは体力満タンだ。はじめから隠れていたからな。」

「相変わらずセコイな。」

のび太は昔やった「拳銃王コンテスト」を思い出す。あの時もこうやってジャイアンは戦わずに、のび太が全弾弾を撃ち尽くすまで待つていたのだ。

「うるせえ。勝ったものの勝ちだ。」

そう言うのとフレイドリイは持っていた拳銃をのび太に向ける。

「どこをねらってほしい？ 頭か？ 胸か？」

「……………」

のび太は後ずさる。さてどうしたものか。

「フフフフ……………フフフフ。いくぜ!!」

フレイドリイが銃の引き金を引こうとしたまさにその一瞬、のび太は後ろに飛ぶと、落ちていた親衛隊の銃を手に取り引き金を引いた。

ドン!!

バタン!

フレイドリイはそのまま後ろに倒れこむ。ロミオは頭上にいるジュリエットに視線を向ける。彼女の表情はいつもより嬉しそうだ。それはジュリエット役になれたからではない。かといって女らしく振舞えたからでもない。彼女自身も気づいていない、彼女は今ロミオに

ロミオはロープのハシゴを登り、ジュリエットが待つバルコニーへと向かった。するとバルコニーにから声がした。

「ロミオ。どうしてあなたはロミオなの？あなたがモンタギュー家のロミオでなければ、私たちの愛を邪魔するものはないというのに。そのロミオと言う名の代わりに私の全てを受け取ってください。」

「頂戴しましょう。その代わり、私を恋人と呼んでください。そうすれば私は今日からロミオではなくなります。」

そう言うロミオは自身の手をジュリエットに差し出す。

「愛しのジュリエット……」

「ええ。私も愛していますわ、ロミオ様。」

ジュリエットはロミオの手をとり、彼に抱きつく。そして二人の唇が徐々に近づいていく。

ドクン

ドクン

観客が見守る中、彼らの唇が触れ……

「まだだ、まだ終わっていない!!」

倒れていたはずのフレイドリイがよろけながら立ち上がると、息を大きく吸い込む。

「せーの！おーれはじゃいあーんがーきだいしよー!!!」

な、なんて大きな声の歌なんだ。ひどすぎる、これは人間の声じゃない。あまりの

酷さに観客がバタバタと倒れていく。

ミシッ

『!?』

するとバルコニーにヒビがはいる。

ドオーーーーーーーーーーーーーン!!

セットの家がロミオとジュリエット諸共跡形もなく崩れ去った。

最終章：勝負の結果を斬る

「いててててて……っ。」

ナレーション：瓦礫の山から何とか起き上がるロミオ。身体中を打つてもうフラフラ状態。

「ロミオ様！」

ナレーション：そこへ心配そうな顔をしたジュリエットがやってきた。

「よかった。私を置いて先に行ってしまったかと思ってたわ。」

アカメはのび太の手を取ると、そっと寄り添ってきた。

「愛しいジュリエット。君を置いて僕がいくわけなんてないだろう。（ん？）」

するとのび太は何か違和感を感じた。何か変だ。さっきまで一緒にいたアカメと何かが違う。

「そうね、愛しいロミオ。そんな貴方だったから、私は恋に落ちたの。」

この先は、追加されたキスシーンだ。

（落ち着け……あくまでフリだからな。時間がなくて打ち合わせもしてないし、アカメの演技力にすべて任せればいい。）

心臓が早鐘のように鳴り響き、今にも胸板から飛び出してしまいそうだ。つややかな唇から目が離せない。

「……………じつとしてね。」

のび太にだけ聞こえる声で、そっと囁いてくる。息をのみつつ、なんとか頷く。

「……………。」

吸い込まれそうなほどの大きな瞳には、ロミオを演じているのび太が映っていた。のび太の瞳にも、ジュリエットを演じているアカメが映っているんだろう。

「ん……………」

のび太の顔を映している瞳がゆっくりと閉じていく。アカメが身を乗り出す気配を感じて、のび太もゆっくり目を閉じた。

(これでおしまい。すべきことはすべてやり遂げた。後はアカメに任せてー)

「ロミオ!!」

「??？」

突然後ろで声がした。振り向くとそこには、

「えっ!?アカ……じゃなくて……ジュリエット!?何で?」

ジュリエットが立っていた。

ナレーション：これは、どうしたことだ?ジュリエットが二人、どうなっているの
しょう?

(どうなってるんだ、こんなの台本にないぞ。)

もう一人のジュリエットの登場に混乱するのび太。

「……大好き。」

「えっ?」

するとジュリエット（アカメ？）の周囲を煙が包みこむ。煙が晴れると、そこには「フッフッフ。いただきだにゃーん♪」

見知った顔が立っていた。

『チエルシー!?』

チエルシーは腕を伸ばすと、

「やっぱり我慢は体に毒だね。まあ、恋は戦争だし。早いもの勝ちだよ。うん、あたしのび太を奪う事に決めたから。アカメちゃん！つまりあたし達はこれからライバルってことになるねっ！改めて、よつろしくうっ!!それじゃ、これからは隙あらばガンガン仕掛けるからね。」

チエルシーはのび太の腕を掴むと

「さっ、行こう。」

「えっ、あつ、ちよつと……。」

走り出した。

「それじゃあね、アカメちゃん！」

残されたのは、いまだ呆然としたままの観客と、

「なッ、なッ、なあッ、なんでだああッツツツツツッー!!!」

大絶叫を上げるアカメだけだった。

校内新聞

プロローグ

「来てくれて、ありがとう。」

ある日の放課後。

「とても大事なことなんだ．．．聞いてくれるかな？」

青年に手紙で呼び出され、美女は今誰もいない学校の屋上に来ていた。青年はだれから見てもかなりのイケメンで、成績優秀、スポーツ万能。その上性格がいいと学園でも評判になっている。

「．．．．．」

「今までもそれとなく伝えてはいたんだけど、うまく伝わっていないくて．．．」

「．．．．．」

「だから、今日は真剣に伝えるよ。」

すると青年の顔は今までにないような真剣な表情になる。

「．．．．．俺は．．．俺は．．．」

大きく深呼吸をし、青年は少女を見つめる。

いつ
!??????
」

青年は泣きながら膝から崩れ落ちる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

毎日イケメン男子から告白を受けては、それを即断る美女。彼女にとつてはこれが習慣になっていた。美女はそのまま崩れている青年をよそに屋上の扉を開ける。

「あの一!!」

「???
」

青年の言葉に美女は少し振り返る。

「クロメちゃんの好きな人って・・・・・・・・やっぱりのび太なの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

青年の言葉にクロメはニコリと笑う。

「そうだよ!」

「ただいま。」

クロメは玄関で靴を脱ぐと、居間の襖を開ける。

「おかえり、今日は随分遅かったのね。」

「うん、ごめんなさい。」

そう言うときクロメはいつものようにのび太に抱きついた。彼女によるとこれはエネルギー充電らしい。抱きつかれたのび太も初めは顔を赤くしていたが、最近では無反応である。

「それにしてもモテるのね、クロメちゃん。」

「ううん。そんなことないよ。」

そう言いながら顔をのび太にスリスリするクロメ。

「今月で98回だな。」

レオーネの言葉にチエルシーは得意げに胸を張る。

「まあ、でも私の120回には及ばないけどね。」

その様子にのび太とドラえもんは

(みんな騙されてるな。)

外見はいいとして、問題は中身なのだ。二人は心の中でつぶやく。すると隣に座って
いたアカメの頭に180回と言う言葉が浮かび上がる。

第一章：立候補を斬る

「今から校内新聞をつくる人間をこの中から一人決めたいと思う。」

「校内新聞……?」

先生の言葉に男子全員がため息をつく。

「でだ、さっそくだがこの中で誰かやりたいやつはいるか?今立候補すれば即決だぞ?」

「新聞ねえ……」

教室を見渡しても誰も立候補なんてするやつはいなかった。まあこんな面倒な役、自分からやりたいなんて言い出すキャラは少なくともこのクラスにはいないだろう。

「なんだいいいのか。だったら不本意だが強制的に私が指名させてもらう。おい野比。」

「??」

先生はのび太に視線を向ける。

「今回はお前に担当してもらう。」

「な、なんで僕なんですか?」

いきなり指名されて慌てるのび太。

「なぜと言われても困る。私は先に不本意だが強制させてもらうと言ったからな。今さ

らお前に否定権は無いぞ。」

「……………」

先生の言い分にのび太はため息をつき、頭を抱える。そもそもストレートに自分が指名されたのが納得いかなかった。

「まあいいじゃん。どうせ誰かがやらなきゃいけないことなんだし。」

「きゃあ、のび太さん。がんばって！」

そう言いながらジャイアンとスネ夫はのび太をバカにする。

「なんだ野比、そんなにやりたくないのか？せつかく私が気をきかせてやったと言うのに。」

「??？」

問答無用で指名しといて気を利かせるも何もあつたもんじゃない。

「新聞は各学年2名ずつでつくることになっている。つまり新聞作りはお前一人でやる訳じゃない。」

「え？じゃあまだもう一人決めるんですか？」

「いや、もう一人は既に決まっている。昨日立候補したやつがいるからな。」

するとジャイアンが慌てて口を開く。

「え？先生っ!!それって女子ってことですか!？」

「ああそうだ。お前らの大好きなクロメが元気よく立候補した。」

「えっ!？」

のび太が振り向くとクロメが嬉しそうにこちらに手を振っていた。先生の言葉に男子たちは声を上げる。

「ちよつと待つてくれ先生!それ先に言うてくださいよ!!」

「お、俺やります!!」のび太の代わりに俺立候補しますよ先生!!」

「馬鹿お前何調子こいてんだ!先生っ!俺も立候補します!!」

クロメとペアになりたいがために、次々と後出し立候補者が続出する。すると先生は笑いながら口を開く。

「残念だったな。クロメは野比をこそ望んだ。つまりお前らは全員振られたことになる。諦めろ。」

「そんなの当たり前じゃないツスカ!!二人ペアになるのに婚約者指名しない子なんて普通じゃないよ!!」

「だーから最初に立候補者はいないかって聞いてやったんだろ?お前ら本当にチャンスを棒に振るのが好きだな、はっはっは!」

「.....」

「まあそう言うわけだから、二人で頑張つてくれ。学園内はどこでも好きに取材してい

いからな。」

それだけ言って教室を出て行く担任。

「.....。」

クラスメイトからは嫉妬にまみれた視線が飛んでくる。

第二章：記事を斬る

「何を記事にすればいいのかなあ……」

夕食を食べ終わったのび太は今朝のことでクロメと一緒に頭を悩ませていた。

「新聞作りって難しいね、いざ作るとなると何を書いていいのかな。」

「何か大きく記事に出来るような大事件とか起きればいいんだけどな。」

「大きな事件？殺人事件とか？」

帝都で暮らしていたクロメにとつては事件イコール殺しなのだ。

「そ、そんな怖い新聞はダメだよ！どうせなら明るい新聞にしよう！」

「明るい新聞？」

のび太の提案に首を傾げるクロメ。

「校内新聞だから、僕たちの好きなことをそのまま記事にした方が良いよ。」

「好きなこと……」

すると隣に座っていたアカメが口を開く。

「のび太の言うとおりで。お前たちが作る新聞なんだから好き放題楽しんで書いてらいい。」

振り向くとクロメは目を輝かせている。

「それなら私にも、良い記事が書けるような気がするっ!!」

「あ、あの……クロメさん？」

「私、たくさん素敵な記事を書いて、のび太の魅力をみんなに伝えたい!きつと色々な人が興味を示してくれる新聞に出来上がると思う。」

のび太を置いて、クロメは一人で先に突っ走っている。

「ほ、本当にやるの?」

「大丈夫!私に任せて!」

笑顔で答えるクロメ。

「……………」

嫌な予感ののび太の頭を駆け巡る。

「それじゃあ、明日からさっそく取材を開始するね!」

そう言つて、頑張ろうとクロメから手を握られるのび太。そのわくわくしながら楽しそうに笑う自分の婚約者に、のび太はこれ以上何も言えなかった。

第三章：質問を斬る（前編）

そして昼休み。机をくつつけて、向かい合いながら座る一組の男女。

「やっぱり、本気でやるの？（インタビュって何答えれば良いんだ？てか僕芸能人でもなんでもないし、コレと言つて人様に自慢できるような特技も……!!）」

「もちろん！」

そう言うときクロメはカメラとマイクとボイスレコーダーを取り出す。一体どこから持ってきたんだが……。

「そ、それじゃあ質問するね？聞きたいことを予め全部紙に書いてきたんだ。」

「質問状か。」

クロメはボイスレコーダーのスイッチを入れる。

「しよ、正直に答えてね？絶対嘘ついちゃ駄目だよ？」

「う、うん。わかった。」

「それじゃあ……最初の質問。」

なぜかのび太よりも緊張しているクロメ。

「の、のび太は……のび太は……」

目をウルウルさせながらのび太の答えを待つクロメ。そんな彼女にのび太は

「胸の小さい子が好みだ（嘘）。」

「／／／／／ほ、本当!?!／／／／／」

ぱああつと表情が明るくなるクロメ。なんとなく気持ちは察したけど、メチャメチャ嬉しそうだ。

「／／／／／良かった。胸の小さい子が大好きなんだ!／／／／／」

「その言い方はちよつと・・・」

((嘘つき。))

二人のやりとりをジト目で観察するアカメたち。

「でもなんで急に胸の話なんかー」

するとクロメの表情が暗くなる。

「……………前にのび太がレオーネの胸に顔を埋めた時、鼻の下を伸ばして喜んでたから……………だから……………」

「……………ええ!!ちよつと……………ちよつと待つて、僕は別にレオーネにそんな事されたからつて……………!」

顔を真っ赤にしながら取り乱すのび太。するとクロメの表情がますます暗くなる。

「……………私の胸じゃ……………やつはり……………レオーネより……………」

「ち、ちちち違うよクロメ!!そんな事ない……………そんな事ないよー!」

「本当?」

「胸なんて関係ないよ。僕は今のままのクロメが好きなんだ。」

「……」

第四章：質問を斬る（後編）

クロメの質問は続く。

「そ、それじゃあ次の質問。」

「うん。」

「私の……どこが好き？」

「えっ……？」

「……………」

クロメの質問にのび太は空いていた口が塞がらない。

（どうしよう……………何て答えればいいんだ……………?）

のび太は汗を流しながら慌てふためく。

「み、み、見た目はもちろん。クロメの優しい、面白い、甘えん坊で可愛いところ……かな……………」

するとクロメはほっぺをプクーツとふくらませる。

「面白いは余計、のび太が勝手に私をからかって遊んでいるだけだよ。」

そんな彼女を見て、のび太は苦笑いする。

「そうやって全然怖くないのにぶんぶん怒るところも好きだよ。」

「……………うつ……………!そ、そういう事言わないで!!!!……………」

「??？」

するとものすごい遠慮がちにのび太の手を握ってくるクロメ。

「……………わ、私が……………その……………」

「??？」

「／＼／＼／＼／＼抱きつきたくなっちゃうから……／＼／＼／＼／＼」
耳が赤くなるクロメ。その表情は早くも二人きりになって甘えたい気持ちがいっぱいだった。

「……………」

その後も続いた、普段は中々聞けないクロメの質問タイム。もう何が取材で何がプライベートな質問なのかは不明だが、二人はずっと教室の真ん中で、昼休みが終わる直前まで取材を続けていた。そして放課後の屋上、

「空が赤いね。」

「うん。」

そうやってフェンス越しに町の景色を眺めるクロメ。夕日に染まったこの場所で見せるそんなクロメの涼しげな表情は、たまにのび太が本気でドキッとするほど大人びて

見えることがある。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・？どうかした？」

「あ、いや・・・・・・・・なんでもない。（きつとクロメはこれから先も、僕が驚くほど綺麗な女性になっていくんだろな。）」

「??？」

「たまにさ、本当に僕には勿体ないと思うよ。」

「勿体ない・・・・・・・・？」

「うん。ちよつと情けなく聞こえるかもしれないけどさ・・・・・・・・。」

「??？」

「クロメには僕みたいな男より、もっとふさわしい人が他にいるんじゃないかなっ

て・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

するとクロメはのび太の頬をつかみ、彼の顔を引き寄せる。そして

チュッ

二人の唇が重なった。

「えっ……!?」

頭の中が真っ白になるのび太。クロメは唇を放すと

「そういう事言うのは禁止。」

「??？」

「私には、宇宙中どこ探したって、のび太よりも素敵な男の人在ると思えない。」

「でも……そんなのわかんないよ？」

「わかるよ。」

急に強く抱きついてくるクロメ。やはり自分にはこの人しかいない。そう再確信する彼女であった。

「私の心の中には、のび太一人分のスペースしか空いてないよ。」

「……………」

「これから学園を卒業しても、お仕事をするようになって、私の気持ちはずっと永遠に変わらない。」

「クロメ……………」

「私は、のび太のことがずっとずっと大好き。出来ることなら、もつと早くからのび太とこうしていたかった……………」

「僕、本当に好かれてるんだな……………」

「今気づいたの？ふふっ、鈍感だね。これからはちゃーと自覚してよね。」

「……………」

「私……………」

「??？」

「甘えん坊だけど…………嫌いにならないでいてくれる？」

「うん……………もちろん。」

「本当？これから先もずっとこうして私にベタベタされちゃうんだよ？」

「……………」

「もつともつと大人になって、子供の授業参観にも出るようになって、家事もいっぱいして、子供が自立した後もずっと甘えん坊だよ？私。」

「……………もしかしてクロメは僕と結婚する気満々な……………」

「？」

「私じゃ……駄目？」

そう言いながらクロメは上目遣いでのび太を見つめる。

「……………」

最終章：新聞を斬る

そして次の日、

バン!!!

「いたっ!!!」

クラスに入るなり、いきなり弁当を顔面に投げつけられる。

「何だよ!?!いきなり……」

「のび太さんの嘘つき!!!クロメちゃんとは何でもなかったんじやなかったの!!!」

「??」

顔を真っ赤にしながら静香は声をあげる。

「せつかく早起きしてお弁当作ったのに……見損なつたわ!!!」

「それだけ言う」と静香はどこかに行ってしまう。のび太は何のことだかさっぱり分
 らず、

「??」

首を傾げる。すると突然後ろから声をかけられる。

「のび太。」

「……………」

「……………」

「いや別に？何でだ？」

(な……………なんだこの感じ……………!?明らかにいつものアカメと違うぞ……………!?一体何が……………)。

そして昼休み、廊下に何故か野次馬ができている。
「??？」

のび太は野次馬の中をくぐり抜けるとそこには

出会いは運命!!今だから語れる二人の純愛ドキュメンタリー。いくつになっても甘えん坊っ!!将来は夫婦揃って子供の授業参観へ行くのが夢。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

のび太は壁に貼ってある記事に釘付けになる。

(な、なんだこの新聞!!!)

クロメが書いたとは思えない、デカデカと派手に装飾された文体の見出し。どうやらこれが今朝のトラブルの原因らしい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

するとのび太は昨夜、レオーネに言われたことを思い出す。

夏休み

プロローグ

夏、それは大概の男子にとって喜ばしい季節。夏、それは虫が活発になる時期。夏、それはこの男にとって最も最悪な時なのである。

「海だー!」

水着に着替えたジャイアンとスネ夫は叫び出す。目の前には大きな海、光り輝く太陽。そして何より水着美女。

「……………」

そんな上機嫌な二人とは違いのび太はため息をつく。夏休みをのんびり過ごす筈だったのになぜこんな事に……。アカメたちを海に誘ったジャイアンとスネ夫だったが、のび太はこないという理由から彼女たちはその誘いを断ってきたのだ。それ故に二人はのび太を無理やりにここに連れて来たのだ。

「お待たせー!みんな!」

『あ!!／／』

「……………」

オレンジ色のワンピースを着た静香が走りながらやって来る。そして三人の前に来る

と
ジャーン!!

豪快にポーズをとる。

『おぉー!!!』

スネ夫とジャイアンの口から驚きの言葉が飛び出す。

(良かった。)

二人の反応に静香は内心ホツとし、数ヶ月前の事を思い出す。

「えーーーーーっ!?!」

送られてきた書類を見て静香は愕然とする。それは毎年学園で行われている身体測定の結果である。

チーン

結果を見た静香は思わず石化する。そして数時間後、ことの重大さを理解し、決心した。

ダイエツト

そしてこの日から彼女の苦しい戦いが始まった。甘い物を経ち、毎朝ジョギング、ストレッツチ、そして筋トレ。その甲斐あって元の体型に戻ることができた。

「のび太さん、どう?」

「うん、とっても良く似合ってるよ!」

「ホント!?!嬉しい!」

静香は顔を赤くし、喜ぶ。それは彼女が異常なまでに上機嫌になった事を現していた。

「お待たせ！」

『／／／おおーーーーー！！／／／』

ジャイアンとスネ夫の叫びとともに、海にいた全員の見線が一人の美女に注がれる。

「……………」

そしてのび太も思わず言葉を失う。帝都にいた頃に見た物とはまるで次元が違う彼女の水着。

「そ、その水着にしたんだ……………」

先日、デパートに新しい水着を買いにいったのび太たち。その際に何度も試着室に入り、のび太に感想を聞いていた。

「だって、のび太、すごく気に入ってたみたいだから……………」

適当な感想を述べていたのにまさかこんな刺激的な水着を選んでいたとは。こんな水着を着た子がいたら、老若男女問わず誰だってガン見してしまう。

第一章：誘惑を斬る

「うわ、なにあの人、めっちゃイケてねえ?」

「すっごくスタイルいいんだけど・・・モデルさんかな?素人じゃないよね?」

元殺し屋という点を除けば、普通の一般人です。聞こえてくる彼女を褒め称える賛美の声に、何故か誇らしくなってしまう。

「モデルさんだって・・・大袈裟だな。」

笑いながら言うレオーネにのび太はようやく口を開く。

「大袈裟でもないよ。グラビアアイドルなんかより、レオーネの方がずっと綺麗。」

「え・・・」

「ここにスカウトの人なんていたら、声かけられちゃうんじゃないかな?」

「嫌だよ、グラビアアイドルなんて・・・ああいうのって水着を着て、えっちな格好するんだろう?」

「うーん、まあ・・・そうだね。」

レオーネの言葉にのび太は以前スネ夫に見せて貰ったグラビア写真を思い出す。胸の谷間を寄せたり、寝っ転がったり、不自然にアイスを啜えたまま垂らしたり。裸まで

はならないにしても、肌色多めの格好で、扇情的なポーズで男を誘うのが仕事だ。そう思うと、なんだか、もやもやする。

「のび太は、私の体、他の人に見せたいの……?」

「／／／／え?／／／／」

「カメラの前でえっちな格好、してもいいの?」

ニヤニヤした表情でのび太を揶揄うレオーネ。

「……」

「どうなんだ?」

「……すごく嫌だ。」

レオーネはのび太の腕を取り、ギュツとしがみついてくる。

「ん、だったら、お前以外、誰にもみせない。」

「／／／／うっ!／／／／」

お互いの肌がぴったりと密着して、特にふよふよと柔らかい彼女の胸が二の腕に当たって、しかも谷間に挟まれて。

「／／／／ ちよ、ちよっ、あ、レオーネ、胸、当たってるんだけど……!／／／／」

「のび太が喜んでくれると思って、当ててあげてるんだよ。私の胸、いつもあんなに見て

「るんだし、好きなんでしょう？」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

のび太にくつつき誘惑し始めるレオーネ。

ビュ——————————

すると突然、ビーチボールが二人目掛けて飛んできた。光の速さで飛んできた殺人

ボールは見事にのび太の顔面にヒット・・・するはずもなく、横に移動して避け、

バチ————————！！！！

後ろにいた静香の顔面に打ち当たる。

「ぐめ——————ん！ つい手が滑っちゃって！」

「『！』」

その声に反応し、全員その声の主に視線を向ける。

「あつー！」

「／／／／／／／／／／／／／／／！！／／／／／」

のび太たちの目の前に現れる五人の美女たち。まさに百花繚乱。

第二章：ビーチボールを斬る

「そーれ!!」

「えい!!」

チエルシーが両手で打ち上げてきたビーチボールをクロメへと送る。今は、波打ち際でパシヤパシヤとビーチボールという優雅な時間だ。

「いやーっ、いい眺めだなくっ。」

「ホント、ホント。」

この遊び、なにが面白いって、ボールを打つたびにこう……ぼよんぼよんと震えるのが堪らないな。なにが震えるのかは言えないが。レオーネはもちろん言うにおよばず、チエルシーも、シエーレも、アカメも、そしてクロメだって、なかなかどうしてたいしたものだ。それ故にいつの間にかビーチバレーコートの人に人だかりが出来ていた。これが水着の効果というものか……。

(……………)

アカメ、チエルシー、クロメ、シエーレ、レオーネに欲情する男子客。気持ち悪い。不気味な息遣いまで聞こえてきた。

「あんまりジロジロ見るなよな……。」

そう言いながらのび太は無粋な連中に睨みを利かせるが

「は？なにお前ゲイなの？」

「そうなのか、のび太？」

「違うよ！」

意味はなかった。

「それにしても静香ちゃんって意外に胸あるんだな、知らなかった！」

「バカ、あんなもん偽物にきまつてるだろーが。よく考えてみるスネ夫、巨乳とあの腰つき、明らかにおかしいだろ？」

しん

すると生命の危機を感じざるを得ない視線がジャイアンに向けられる。

ビューーーーーー

バーン!!

バタン

「ジャイアン!？」

いきなり飛んできたボールがジャイアンの顔面に激突する。

「ごめんささい、武さん！つい力が入っちゃって……。」

眉間にシワを寄せた静香が倒れたジャイアンに謝罪する。

パチン!!

「いくよー!!」

「おっけー!!」

静香は拾い上げたビーチボールを真上に放り投げた。

ふるんーっ。

(・・・?今までと、揺れ方が違う・・・?というか、何か今、ふわりとー)
静香を見ていたのび太は何か違和感を感じる。

「そー」

落ちてくるボールをアタックしようと伸ばされる右腕。そして、そのつけ根当たり
に、ヒラヒラとはためくヒモ…………。

「・・・ヒモ?」

「つれ!」

パン!!

「!?」

そのアタックと共に、はらりと小さな布きれが地面に落ちた。だが、ボールを追いかけていた面々はそれを見てはいない。そしてのび太はのび太で地面に落ちたものなど見てはいなかった。

「もう、静香飛ばしすぎですよ!」

「あはははははっ、シエーレさん、ごめんなさい!」

「フフツ、静香もまだまだ元気があま・・・つて・・・」

「ん?どうしたの、チエルシーさん?」

のび太たちの視線は、その布きれが今まで覆い隠していたものに、釘づけにされていたからだ。

「し、ししし、静香っ!!」

「なななななになになになにつ!」

「かかくしかくしかくして!」

「え・・・四角・・・?」

「なるほど。これが噂に聞くポロリ……」

アカメの言葉に静香はようやく視線を下に移す。

「／／／／／はあー／／／／／!!!」

静香の顔がみるみる赤くなる。

「お前は見るなあああああっ!!!」

バコン

チエルシーは格闘技の才能も持ち合わせているのだろうか。美事な飛び蹴りがのび太の顔面に減り込む。

「き……キヤー……!!!のび太さんのエッチ!!!」

そして数分後。

「のび太……蹴り飛ばしたのは悪かったけど……さすがにじっくり見過ぎ……」
流石のチエルシーもバツが悪いと感じたのかのび太に謝罪する。

「び、びっくりし過ぎで……思考が停止していた……」

「そういうことにしておいてもいい。」

「うん。」

そう言うもののび太をジト目で睨むアカメとクロメ。

「うぐ……ごめんなさい……」

「私たちに謝ったってしょうがないでしょ！」

「……すぐに追いかけて、謝ってきてください。」

「みんな……」

「あ、でも静香が逃げ出すようなら、追い詰めちゃダメだぞ？ 静香だって恥ずかしいんだから。」

「分かった、行ってくる！」

「ん、がんばってね。」

第三章：肝試しを斬る（前編）

時刻は夜の八時。場所は廃校して何十年も経つ古びた学校。

「とうわけ。やるぞ、肝試し！」

「ええくつ!!!」

ジャイアンの言葉にのび太は声をあげる。

「はいはい、文句言わない！夏の夜といえ、肝試しをするって決まってるんだよ！」

「決まってるの？」

「決まってるんだよ！」

のび太の問いを即答するスネ夫。まだのび太の弱点がオバケと思っている二人はニヤニヤと笑みを浮かべ、のび太を見つめる。

アカメたちはのび太の側にやってくる。

「のび太。」

「??？」

「肝試しって、何んだ？」

「えっ!？」

アカメたちの問いにジャイアンとスネ夫は顔を見合わせる。

「知らないの。嘘……」

静香もびつくりする。するとスネ夫は得意気に口を開いた。

「肝試しっていうのは男女一組で気味の悪い場所に来て。」

「『『『……』』』」

『ねえ、何だか私怖い!』『大丈夫、僕がついてるじゃないか。』『でも……』とその時、茂みからガサガサという音が!『いやん!いや、いや、いや!』『はっはっはは、大丈夫だよ。ほら?ただの兎さ。』『もう……びつくりした。』『慌てん坊さんだな。』『ねえ、もつと強く抱いて……』『いいとも……』『ギョツギョツギョツ。肌と肌を合わせた若い男女の衝動はもう誰にも止められない!』

スネ夫の説明にアカメたちは

「知らなかった……」。肝試しがそんなものだなんて……」

「じゃあ……。もしのび太が他の女とペアになったら……」

啞然とする。

「あの……。みんな今の説明には少しばかり間違えが……」

おずおずとアカメたちに話しかけようとしたのび太だったが

「……………」そんなのダメ!」

「???」

!!!!!!!

何を想像していたのか顔を真っ赤にしたクロメがいきなり大声をあげる。

「……………」そんなの絶対に許さない!!!!」

クロメに続いてアカメも声を上げる。すると二人はのび太に視線を向ける。その姿はまるで獲物を狙う肉食動物のようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「にしししし・・・・・・・・」

「のび太、怖くてチビリそうなんじゃないの？」

ジャイアンとスネ夫はのび太を見て笑い出す。

「まさか・・・・・・・・」

昔の自分ならビクビク怖がっていたが、のび太は知っている。この世には幽霊よりも怖いものがあることを。

「どうするんだ、のび太？」

レオーネの問いにのび太はため息をつく。

「しようがない、参加するよ！」

「そうか。」

「それじゃあ、みんなクジを引いて!!!」

第四章：肝試しを斬る（中編）

「夜の学校は薄気味悪いな。」

昼間スネ夫から聞いた怖い話が頭をよぎる。

ガサガサ

「!？」

反射的にレオーネの前に立つ。すると小さな犬がのび太たちの前を通り過ぎる。先程のクジ引きの結果、のび太はレオーネと組むことになった。

「きゃあー！怖いー！」

レオーネは叫ぶと嬉しそうに抱きついてきた。本気で怖がっていないのは分かっている。なぜなら彼女は元殺し屋なのだから。

「全然怖がつてるように、見えないんだけど……」

「えーっ？うそ。すごい怖いよ！」

「……………」

呆れた顔をするのび太。

「ほら、ほら、心臓もこんなにドキドキしてるよ？」

そう言いながら、さらに体をくつつけてくる。

ムニョン。

同時に柔らかい物がのび太の腕に当たる。

「なっ?..ふふふ..」

「////////////////////.....////////////////////」

レオーネの問いにのび太は顔を赤くしながら頷く。

シン

「!？」

殺気を感じる。

「.....」

振り向くと静香が殺気を込めた視線を送ってくる。何故彼女がここにいるかという
と、静香とペアを組むはずだったジャイアンが何故かいきなり体調をくずしてしまっ
たのである。

「のび太さん。」

「は、はい?」

「いくら怖いからって、レオーネさんにくつつきすぎよ。」

正確にはレオーネの方がくつついているんだけど。

「それじゃ、歩きずらいわよ。」

そんな静香にレオーネは

「静香も、怖かったららのび太にしがみ付くといいよ。」

「わ、私はそんなはしたない事しないわよ!!!」

「ふうん、じゃあ私ははしたないことやってるんだ?」

「えっ? あ、いや。別にレオーネさんがはしたないって言ってるんじゃないわよ。あ
の……あの……」

静香は墓穴をほってしまった。するとレオーネはのび太の腕に掴まりながらクスク
スと笑う。それにつられ、のび太も苦笑いする。

「……………」

それを呆然と見つめる静香。なんと可愛らしい姿か。二人密着した今の状態は、まる
で仲の良い恋人同士?。

ワナワナ

「のび太さんがはしたないのよ!」

「えっ?」

「美人なレオーネさんに抱きつかれて。馬鹿みたいに鼻の下を伸ばして! ヨダレ垂らし
て! 目が三日月目になって!」

「……………」。

「とにかくそんな風になっちゃってるのび太さんがはしたないのよ！」

「……………」。

「のび太さんの変態！」

「……………」。

「のび太のヘンタイ〜！」

腕を組みながらレオーネは言った。

「レオーネまで……………」。

第五章：肝試しを斬る（後編）

「ここは音楽室か……。」

そう言いながらのび太は音楽の授業で使われていたピアノに目を向ける。

「さて、次行こう！」

そう言うとのび太たちは、音楽室を後に……

♪・

いきなりピアノの方から音色が

「えっ!？」

静香が真つ先に反応した。強がってはいたが、内心怖がっていたのだ。

「な、何!？」

「何だろう……。」

静香は笑いながら辺りを見渡す。

「の、のび太さん！」

「なに?！」

「大丈夫、怖くない?！」

「えっ？うん、大丈夫。」

「嘘！本当は怖いでしょう！」

ブルブルと震えながら、他人の心配をする静香。

「平気だつて。それにしてもこの不気味な曲は何んだらう？」

「まさか先生が言つてた音楽室の亡霊つて……。や、やだ……。」

そう言うとき静香の顔が真っ青に……

「きやあああああああ!!」

のび太と静香は飛び上がる。

「怖い、怖いよ、のび太！」

レオーネは悲鳴をあげると、嬉しそうにのび太に抱きついてきた。

「レオーネ、落ち着いて。」

「私こういうのダメ！助けて、のび太！」

「あの……」。

困った顔をするのび太。

そんな二人の様子をあきれた顔で見つめる静香。

「……」。

さつきまでとは違い、その表情は嫉妬で溢れている。

「レオーネさん、いつまで引つ付いてるの。いい加減、のび太さんから離れて！迷惑でしよ!!」

「いや、それは……」

全然迷惑じゃない。むしろこのまま行こうどこまでも。

「迷惑じゃないらしいよ。」

そう言いながらレオーネは邪悪な笑顔を向ける。

「むむう！」

ピタッ

すると今度は静香が反対側から抱きついてきた。

「し、静香ちゃん。いきなり引つ付かないでよ。」

「なんで、私にはそんな態度なの!？」

「普段の行いなんじゃないの？」

「くっ、このっ……がるるるっ。」

ぐいっつと静香に引つ張られるが

「私の方が先なんだから、譲れよ。」

すると今度はレオーネが引つ張る。

ボイン

引つ張られた拍子に、腕に柔らかい感触がふにふにと伝わってくる。

「それ以上引つ張ったら、のび太に迷惑だろう？」

「そっちだつて引つ張ってるじゃない！」

「私は引つ張ってないぞ！」

確かに引っ張ってはいない、ものすごくしがみついているだけで。そう、胸をぐいぐい押し付けるほど、しがみついているだけ。

ボイン

「のび太、どうかした？」

レオーネの質問にのび太は顔を赤くしながら

「なんでもないよ、あはははは。」

答えた。

「むっ！のび太さん、こっちにも何かいるわよ！」

ヒュン

静香の胸がのび太の腕に当た．．．らない。見事なほど空振り三振だ。

「ふう、落ち着くな。」

そんな安心仕切った顔を見せるのび太に静香は

「ほら、のび太さんは私といると安心出来るんだって！」

ボイン

「そんなわけないだろう！」

「むっ．．．．．」

「むむっ．．．．．」

そしてのび太を挟んでにらみ合いが始まった。

「今日、改めて分かったことが一つあるわ。それは、あなたにだけは絶対に負けたくないとうこと。」

「それはこっちのセリフだ。」

「ふふっ。いいわその宣戦布告、受けてやるわ！勝負よ!!」

「望むところだ！」

第六章：イタズラを斬る

「ここは理科室か……」

中には色々な道具が置いてある。

「薄気味悪いところね……」

そう言うと静香は奥へと入っていく。

ニヤリ

するとレオーネは悪魔の笑みを浮かべる。

「??」

「良いこと、思いついた。」

「何？」

するとレオーネは息を大きく吸うと

「わああああああああ!!」

悲鳴をあげる。そしてのび太の両手を掴むと、廊下に出る。

ボタン

すると理科室のドアを閉めた。

「えっ!? えっ!?」

突然のことで理科室の中に取り残されている静香は混乱する。

「いいの? こんなことして?」

「いいの、いいの。」

二人は静香を理科室に残し、隣の教室に隠れていた。子供のように燥ぐレオーネにのび太は思わずクスクスとにあげてしまう。

「な、なに?」

「い、いや……。ずいぶん、たのしそうだなって思ってたね……」

「くすつ、そりゃあね。のび太は?」

「うん、楽しい。毎日全然退屈しないよ……」

「にししし、昼間はずいぶんとお楽しみだったもんねー。．．．．静香のおっぱい。」
ギクッ

「あ、あれは事故だって！」

「あはははははつ、ごめんごめん。もう静香にもちゃんと許してもらったんだもんね？」
「そ、そうだよ。」

「でもさあ、男ってやっぱり、女の胸見られたら嬉しいものなの？」

「／／／／／．．．．．／／／／／」

「あれ？聞いちやダメだった？」

「当たり前でしょう．．．．．常識的に考えて。」

「そう？．．．．．んー」

「．．．．．」

「じゃあさ、のび太．．．．」

「??？」

「私のおっぱいも見せてあげよつか？」

ぽよん

「／／／／／ぶぶーっ!!な、何言ってるんだ!!!／／／／／」

顔を真っ赤にししながら、慌てふためくのび太。

「うるさいなあ……。せっかくみんなには内緒でつて思ったのに……」

「／／／／ なっ、なに言つてんだよ!!人をからかうのもたいがいにしてよっ!／／／／

「はーいはい。つまんないの。」

「……」

「それじゃあのび太、次の質問。」

「今度は何?」

「結局、私たちの中で誰が本命なんだ?ぬふっ。」

「……ぬふっ、じゃないよ。」

「んんん?まったくとその気がないなんて言わせないわよ?ほれほれ、お姉さんに言つてごらんなさい?」

「まったくその気はない。」

しつこく質問するレオーネにのび太は面倒くさそうに答える。

「だから、そんなことはいわせないつて言つてるの。いいから言つちやいなさい?」

「……」

このまま彼女に好き勝手喋らせるのは後々面倒なことになる。そう考えたのび太。

「好きな人はいるんだけど……」

「そ、そうなの……？だれ？私の知ってる人？」

「うくん……本人にそうやって聞かれるのはさすがにキツイな……」

「レオーネ。」

「……………つ。……………」

その言葉にさすがのレオーネも顔を赤くする。いつもの頼れるお姉さんから、一人の少女のような表情になってしまう。そして教室の中を一瞬気まずい空気が支配する。

「……………じよ、冗談だよね？……………」

おずおずと質問するレオーネ。

「冗談だけど、今一瞬信じたでしょ？」

ブチッ

「……………つ!?た、たばかったわねええつ!?……………」

最終章：怖いものを斬る

肝試しコースを二人で周り、集合場所のコテージに戻るのび太とレオーネ。

「……………これからも……………」

「??？」

「これからも僕の側にいてくれる？」

「どうしたんだ、今更？」

「……………」

「大丈夫。」

「ありがとう。」

「……………それは、なにに對して？」

そう言われ、のび太はレオーネに感謝することが、すでに色々あることに気がついた。

「まあ、強いて言うなら。僕の呼びかけに応えてくれて、かな。」

「ふ〜ん。」

「僕、レオーネに会えてよかった……………おかげで僕は、自分のことが少しは好きになれたよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今思えば、全てはあの日から始まったのだ。レオーネがお金を騙しとる為にのび太とドラえもんに近い近づいて来たあの瞬間。今の自分があるのは全部この人のおかげ、そう思わずにはいられなかった。

「それにしても、のび太良く怖がらないな。」

「??？」

「お前、幽霊やお化けが苦手だったんじゃないか？」

「昔はね・・・・・・・・。肝試しをするたびにビクビク震えてた。ジャイアンとスネ夫なんか僕をおどかして喜んでたんだよ。」

すると三人はコテージの前にたどり着く。

「ふくん。じゃあ、今は怖いものはないの？」

「うくん。特にないかなあ。あるとしたら・・・・」

「あるとしたら？」

「人の形をした怪物かな・・・・・・・・。」

そう言うとのび太はコテージのドアを開けた。すると

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あつ・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこには理科室に残してきた幼馴染みが仁王立ちで立っていた。眉間にシワを寄せ、今にも爆発しそうな顔をしている。今の今まで彼女の存在をすっかり忘れていたのび太たち。レオーネにはこやかに笑いながらも、のび太には横目で睨んでくる。

「あら、のび太さん。どこへ行ってたんですか。随分探したんですよ!」

何故か敬語で話しかけてくる静香。これはかなり怒っているな。ジャイアンとスネ夫も恐ろしさのあまり、奥で真っ青になりながら震えている。

「えーと・・・・・・・・なんて説明したらいいか・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「とりあえず、静香。落ち着け。」

ワナワナ

将来

プロローグ

新年会がお開きになって数時間。時計の針はまだ朝の五時をさしており、辺りは静ま
りかえっていた。

しゅん。

誰もいないのび太の部屋。もちろん物音一つ無く、静まり返っている。

ギイイ

するといきなり引き出しが開いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

誰かが部屋の中に侵入する。その人物は辺りをキョロキョロと見渡すと、机の上の写
真立てに目を向ける。その中に入っている写真を見ると、

クスッ。

小さな笑みを浮かべた。

そしてその数分後、

「!？」

居間で寝ていたレオーネが目を覚ます。

「そのまま寝ちゃったかあ……。多分皆もそんな感じだろうなあ……。ふあ……。」「
彼女は欠伸をすると、そのまま洗面所に足を運ぶ。

「まだ、ねむ……。」「

そう言いながら鏡に映る自分の顔に目を向けると

「!？」

グサリ

バタン

レオーネはその場に倒れこむ。

ニヤリ

その人物は自身のツインテールを靡かせながら笑みを浮かべた。

「……あれ？どこだろう……」

その数分後、今度はクロメ、チエルシー、シエーレが居間で目を覚ました。

「……なんでこんな所で寝てるわけ？私達確かみんな乾杯して……」
そう言いながら辺りを見渡す三人。

「……思い出せない。」

「何か大切な事があったようなく。」

「うくん。なんでしたっけ？」

三人は居間を出ると、台所の扉を開ける。すると

「のび太！」

台所で死んだように倒れているのび太を発見する。

「のび太!?!」

三人はすぐさま、のび太を抱き起こす。

「『!?!』」

のび太の顔はまるで魂が抜けたかのように寒れてしまった。

「のび太、どうしたの?! 誰かにひどいことされたの?!」

クロメはのび太の肩を掴むと、揺さぶり始める。!!

「いや無傷だけど……こう魂的に……」

「何言ってるの、大丈夫なのび太!」

バツ

そう言うとクロメはのび太を抱きしめる。

「のび太が落ち着くまでこうしている……」

「……ありがとうクロメ。」

「うん!!」

(……はああ全然癒されない……寧ろ力が身体中から抜けていく気分だ。)

昨日の出来事を全く覚えていないクロメ。そんな人間に人が癒せるわけがない。

「みんな起きろ、遅刻するぞ!」

そう言いながらドラえもんが台所に入ってくる。

「えっ・・・？もうそんな時間。」

そう言いながら全員時計の針に目を向ける。

「不味い、急いで準備しよう!!」

「うん！」

「あれ？アカメちゃんは？」

「メガネ・・・メガネ・・・」

こうしていつもと変わらない一日が始まるはずだった・・・

第一章：完璧を斬る・

いつも通りチエルシーたち三人に加え、静香と翼を加えた5人の少女と共に学校に行くのび太。すると

(ちくしょう、のび太の奴・・・！)

(あんなに美少女に囲まれやがって・・・)

(一人ぐらい俺にも分けて欲しいぜ。)

毎日のように男子たちから嫉妬と羨望の目で見られる。だがそんな事は今更気にも止めないのび太。

「おい、あそこにいるのアカメちゃんじゃね？」

「本当だ！これは朝からラッキーだぜ。なあ、今ちようど一人みたいだしお前声かけてみるよ。」

「ムリムリ！すげえカワイイけど、ものすげえカワイイけど！あの独特のオーラを突破できる気がしねーもん。」

男子生徒たちの視線の先には、舞い散る桜をじっと見つめている少女がいた。

「あ………」

こちらにきづいたのか、身にまとっていた独特の雰囲気少し和らぐ。彼女は小走り
でのび太に駆け寄ってきた。

「あつ、アカメ！」

アカメはのび太の目の前に立つと

「おはようございます、のび太さん。朝、早いですね。」

「えっ?」

「おはよう………」

「のび太……さん?」

アカメの口調に驚くのび太たち。

「あつ、ごめんな．．．．いえ．．．すまない、みんな。」

そう言いながら苦笑いするアカメ。

「どこ行つてたの？心配したんだよ。部屋に起こしに言つたら、いないし．．．。」

「えつ、あつ、その．．．いい天気だから、朝の散歩を．．．。」

アカメが目を合わせようとしめない。それに何故か慌てている。

「まつ。無事だったからいいけど、今度は勝手にいなくなつたりしないでよ。」

「うん．．．．。」

そう言いながらのび太たちは教室に向かった。

授業中。

「それではこの問題を誰かに．．．。」

そう言いながら数学の先生はクラスを見渡す。生徒たちは先生と目が合わないように目を逸らす。何故なら目があつた瞬間、当てられるからである。すると

「ハイ!!!」

静まり返っている教室に響き渡る声。全員の視線が彼女に集中する。

(えっ!?!アカメ!?)

何故か元気良く手を上げているアカメ。

「それでは、アカメさん。前に出て解いてみてください!」

アカメは席を立ち、黒板の前に立つ。

カンコンコン

チョークで何かを書き始めた。それを不安な気持ちで見守るのび太たち。

「先生、これでいいですか?」

黒板を見て、生徒は勿論先生も啞然とする。

「完璧な答えだわ……」。

先生の呟きに生徒たちは

(ウソだろ、まだ三分も経ってないぞ……)。

(出木杉でも無理なのに……)。

そしてアカメは鼻歌を歌いながら、自分の席につく。

第二章：将来を斬る

「♪・♪」

音楽室の中から美しい音色が聞こえる。その声の主は黒板の前に立ち、先生の奏でるピアノの音色に合わせ、その美しい歌声を披露している。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

歌が終わると、観客から雨のように拍手が降り注いだ。

体育の授業：

ガキン

グラウンドに物凄い音が鳴響く。アカメはバットを投げ捨てると、走り出す。

「打った!!」

「凄い、アカメちゃん!」

「これで四打席、4ホームーよ!」

試合は99―0。ピッチャーで四番のアカメ。彼女の活躍で試合は圧勝であった。

昼休み。

「はい、のび太！あ〜ん！」

そう言いながらスプーンでよそったご飯を突き出してくるアカメ。その光景に他の生徒は勿論、チエルシーたちも啞然とする。

「のび太、こつちに口を開けて！」

今度は負けじと、クロメがウイナーが刺ささったフォークを突き出してくる。

「ちよつと、私が先でしょう！」

「違うよ、私だよ！」

そう言いながら火花を散らすアカメとクロメ。

「フォークを突き出したら、危ないでしょう！」

「のび太は、ご飯よりもウイナーの方が好きなんだもん!!」

いつもとは違う光景に驚くのが太。

「みんなは将来どんな仕事につきたいかな？」

「ハイ!!」

するとジャイアンが元気良く手を上げる。

「俺は将来歌手になりたいです!!」

「僕はデザイナー!!」

「私はスチュワードレス!!」

「僕は消防士!!」

ジャイアンに続き、次々と生徒たちは手を上げた。すると先生は

「よろしい、それでは宿題として明日までに『自分の将来』と言うテーマで作文を書いてくるように。」

『『『『えーーーーーーっ!?』』』』

先生の言葉に生徒たちは騒ぎ出す。

「静かに!!みんなそれぞれ将来どんな事をしたいのか、あるいはどんな仕事につきたい

のかを色々考えて書いてくるように!!」

「将来か……何て書けばいいんだろう?」

そう言いながら一人で下校するのび太。

「まあ、いいや。適当に『総理大臣になる』って書こう!」
そう言いながら笑みを浮かべるのび太。すると
クスクスクス。

誰かが笑う声でした。

「誰だ!!」

振り返るとそこには

「アカメ？」

アカメが鞆を片手に笑っていた。

「何がおかしいんだよ！」

「あつ、ごめん。でものび太に総理大臣なんて無理だよ。」

「なんでそんなことが分かるんだよ!?!」

「だって、のび太は将来……」

アカメの言葉がそこで止まる。

「??？」

「いや、なんでもない。忘れてくれ。」

すると、のび太はアカメに向き直る。その表情は真剣そのものである。

「それで、君は誰なの？」

「えっ!?!」

のび太の発言に驚くアカメ。

「君はアカメじゃない。一体誰なの？」

「……………」

第三章：謎の少女を斬る（前編）

「はあ、バレちゃいました？」

そう言うと少女は腕を伸ばす。

「分かりませんか？」

「??？」

「私はあなたの……」

すると少女の言葉が途切れ、彼女はため息をつく。

「はあ、もう来ちゃった……」

ザッ

振り向くとそこには

「ア、アカメ……？」

「のび太！大丈夫か！」

村雨を持ったアカメがいた。

「下がれ、のび太。こいつは私が相手をする。」

そう言うと村雨を構えるアカメ。

「ちよつ、ちよつと待つて!!一応これには深い訳が……」

「葬る!!!」

アカメはそのまま少女に近づくと

グサリ

村雨を彼女の胸に突き刺した。

「カハッ。」

ドサツ

少女はその場に倒れこむ。

しばらくすると少女は起き上がる。

「油断して近づいても来ないのか……」

「手応えが人体ではなかった。」

そう言いながら火花を散らす二人の少女。

（へえ……アカメの村雨に斬られてまだ生きているなんて……）

それを遠くから見守るのび太。

「やっぱりね。」

「??」

「ねえ、のび太さん。この人が一回怒ると、全然人の言うこと聞かなくなるのつて。この頃からずっと?」

「う……うん……まあ……そういう所があるかも。」

突然話を振られ、慌てるのび太。

「のび太!」

「うっ。でもアカメ、彼女にも事情がありそうだし。話だけでも聞いて……」

「葬る!!」

アカメはのび太の言葉を見殺し、再び少女に襲いかかる。

「しょうがない。」

少女はヤレヤレといった感じで手袋を取り出すと、それを右手にはめる。

「よつと。」

そしてアカメの攻撃をかわすと

「タツチ。」

ギリギリギリ

そう言いながら何故かアカメの首を締めるレオーネ。アカメは苦しそうにもがき苦しむ。

「今のうちだよ!!」

少女はのび太の手を掴むと、走り出す。

「それで?これからどこに行くの?」

のび太の言葉に少女は

「うくん。どこか隠れられそうな場所はないかな?」

「それじゃあ、あそこに行こう!!」

「??」

静香家：

「静香ちゃん!!」

そう言いながら玄関のチャイムを鳴らす二人。

ガチャ

「あら、のび太さん。アカメさん。いらっしやい!!」

「ねえ、一緒に遊ぼう!」

「丁度良かったわ!今、クッキー焼いたとこなの。食べていけない?」

「いく、いく。」

そう言いながら嬉しそうに頷くのび太。すると少女は

「えっ?もしかして源さんですか!?!」

「ええ。どうしたの今更、そんな他人行儀な。」

少女は静香の頭のとっぺんからつま先まで興味深かそうに眺める。

第四章：謎の少女を斬る（中編）

「へえーっ。静香ちゃんは看護師さんになるのが夢なの？」

「そうなの。看護師さんになって、病気や怪我で苦しんでいる人を助けてあげたいの!!」
「素敵な夢だね。」

「そう言いながら笑みを浮かべるのび太と静香。すると

「無理無理。源さんは将来、お嫁さんになるんだから。」

「そう言いながら少女はクスクスと笑う。

「なんでそんな事がわかるんだよ？」

「そうよ！未来はまだ白紙のはずよ。」

「それが分かるんですよ、私には♪・」

「お待たせ!!」

静香はクッキーが沢山のつたお皿を持ってくる。

「わあ! 美味しそう!」

「.....」

のび太と少女はクッキーを一つづつ取ると

「いただきまーす!!!」

「.....」

クッキーをほうばる。

「うっ.....」

のび太の顔がみるみる青くなる。

「どう?」

「う.....うん。美味しいよ.....」

のび太は苦笑いする。

「本当! 嬉しい!!」

静香は大喜びする。すると

「にがいに。」

『!?!』

のび太と静香の視線が少女に集中する。

「砂糖の代わりに塩が入ってる、油の味がする、香りも良くない、焼きが甘い……」
「……………」

次々と出される駄目出しに静香の顔色がみるみる青くなる。

「それになにより、味見をしてない。こんな物食べてると、お腹壊すよ。」

ガン

その言葉に静香は涙目になる。

「ひ、酷い！せつかく作ったのに!!」

するとのび太は怒りの眼差しを少女に向ける。その眼差しに少女は

「あつ、ご、ごめん。ゴメンなさい、おばさん!!」

ブチッ

何かが切れる音がした。

「誰がおばさんよ!!!」

静香の怒りが爆発する。

「帰ってよ!!!」

!!!!!!!

今度は周辺にあつた物を投げつけてくる。

「『わあああああああああああああ!!!』」

二人は大急ぎで静香家を後にした。

「もう、どうしてくれるんだよ! 静香ちゃんを怒らせちゃったじゃないか!!」

「???」

「言つとくけど。静香ちゃんは将来、僕のお嫁さんになるんだ。だから結婚できなかつたら、君のせいだからね!!」

「………大丈夫ですよ。のび太さんは将来、ちゃんと結婚できますよ!」
「本当?」

「ええ。まつ、誰とまでは言えませんが………」

そう言いながら少女は笑みを浮かべる。

「??？」

「ところでさあ、前から聞きたかったんだけど．．．．．」

「??？」

少女は数歩あるくと、のび太の方に振り向く。

「のび太さんの一番好きな人って誰？」

「えっ、誰って．．．．．」

第五章：謎の少女を斬る（後編）

何を聞かれているのか分からない顔をするのび太。すると少女は静かに口を開く。

「レオーネさんは大人の色気、サバサバした性格も素敵。シエーレさんはおっとりメガネ、一番優しいお姉さん。クロメさんは素直で元気なスキスキ娘！好きな人に対しては積極的に愛情表現をする。静香さんは絵に描いたようなツンツン娘！けどそこがいい！チエルシーさんはさっぱりでやんちゃなイタズラっ子、好きな人に対しては積極的にかまって光線を発射する。」

「そ．．．．．そんなこと言われてもな．．．．．（え、あれ、アカメは？）」

「さあ！誰?！」

そう言いながら少女はのび太に詰め寄る。

「誰って．．．．．言われても．．．．．僕たちまだ学生だし．．．．．」

その言葉に少女はため息をつく

「はあ．．．．．仕方ありませんね．．．．．」

ポケットから何かを取り出す。

「変装服!!」

少女は取り出した服を着ると、のび太に視線を移す。すると

ドン!!

「あっ!?!」

少女はのび太そっくりに変身した。

「どう?そっくりでしょう?」

「うん!」

「それじゃあ、行こうか?」

「行くなって・・・どこへ?」

「あつ、とその前に・・・」。

そう言うと、のび太の姿をした少女はのび太に何かを手渡す。

そして数分後、

「ねえ、何で僕がこんな格好するの?」

現在、のび太は緑色のズボン、白いTシャツ、そして帽子とマスクを着けている。

「だって野比のび太が二人いたら不味いでしょう？」

そんな会話をしながら歩く二人。すると

「のび太!!」

振り向くと見知ったオレンジ色の少女が小走りで駆け寄ってくる。

「あつ、チエルシー……………」

「……………」

二人もチエルシーの方へ駆け寄って行く。

「誰？」

チエルシーは変装したのび太に視線を移す。

「えっ、あつ、僕の親戚の……………」

「野田です……………ゴホツ……………ゴホツ……………」

のび太（少女）は野田（のび太）の肩に手を置く。

「風邪引いてるんだよね……………」

「う、うん。」

「ふ〜ん。」

チエルシーはジト目で野田（のび太）の姿を眺める。すると、のび太（少女）はチエル

シーの手を取ると、

「ねえ、チエルシー。一緒に遊ぼう！」

「えっ！……うん。いいけど……。」

その言葉に違和感を感じるチエルシー。

「チエルシーって素晴らしいね！」

「……………えっ!?どうしたのいきなり……………」

チエルシーの顔が徐々に赤くなる。

「僕、大好きだ!!!」

「……………そ、そ、そんなこと……………」

チエルシーの顔がリングゴのように真っ赤になる。すると野田（のび太）はのび太（少女）に耳打ちする。

（ねえ、もうそれくらいにしといてよ！チエルシーを怒らせたら大変だよ!!）
「……………」

第六章：あなたを斬る

場所が変わって今度のはのび太家。

「お待たせ!!」

のび太（少女）はスープが盛られたお皿を持つてくる。

「わあ！美味しそう！」

「ほう……」

チエルシーとクロメはスプーンを掴むと

「『いただきまーす!!!』」

スープをほうばる。

パクッ。

「美味しい。」

「うん、こんな美味い物食べたの初めて。」

そう言いながら感心するチエルシーと大喜びするクロメ。

「……………」

野田（のび太）は自分の分のスープを味見する。

「美味しい……」

悔しいが美味しいということしかできない野田（のび太）。

数分後、残っていたスープを全て完食したチエルシーたち。

「『ご馳走様！』」

あまりの美味しさに笑みを浮かべる二人。するとクロメは

「こんな美味しいご飯なら毎日食べたいな〜！」

そう言いながらのび太（少女）に視線を向ける。

「それならこれから毎日作ってあげようか？」

「いいの？」

「うん、もちろん！」

「ありがとう!!!」

クロメとのび太（少女）の会話にチエルシーと野田（のび太）は

「!？」

「ぶっ!?!」

ガシャン!!

思わず持っていたコップを落としてしまう。すると再び太（少女）は笑みを浮かべると

「僕、クロメ大好き!!」

いきなり爆弾を投下した。

「私ものび太の事が大好き!!」

クロメは嬉しそうにのび太（少女）に抱きつく。彼女は嬉しくて嬉しくてたまらないという顔をしている。

「ちよつと、何勝手な事言ってるのよ!!」

そんな光景をチエルシーは黙って見ているわけもなく。彼女はいきなり声を上げる。すると

するとクロメはさらに強くなるび太（少女）に抱きつく。

「何が『あ・な・た』よ！のび太から離れて!!!」

「そうよ！のび太さんは私の物のなんだから!!!」

そう言いながらのび太（少女）とクロメを引き離そうとするチエルシーと静香。

「だからチエルシーさんもクロメさんと一緒に早くここから出て行ってよね!!!」

「出て行くのはあなたでしよう！」

「大体一番付き合いが長いのは私なんだから！」

のび太（少女）の体が左右に強く引っ張られる。その痛みに流石の本人も

「みんな出て行って」

!!!!!!!

却下された。

「嫌だ」
!!!!!!!!!!!!

声を上げる。
だが

第七章：アルバムを斬る

「大丈夫？」

のび太は少女をおんぶしながら歩く。

「うん、ありがとう。」

先程の騒ぎでボロボロになった少女。

「だからやめた方がいいって言ったのに。」

「……………」

「……………」

「のび太さんっていつもこんな目にあってるの？」

「うん、まあ……………」

5人の肉食動物たちと暮らしているので、のび太の毎日はいつも命がけである。すると

「のび太さんの背中って、結構広いのね。」

「ああ、まあ僕も一応男だからね。畳二畳分ぐらいある。」

「そんなに背中広くてどうするのよ。それだと、あなた身長3メートルは超えるわよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ふふっ、でもこうやって、毎日登下校はあなたの背中に乗るのも悪くは無いわね。」

「えっ？」

「冗談よ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

するとお互い自然に無言になる。

「またこうしておんぶしてもらって良い？」

「??？」

「・・・・・・・・私、男の人におんぶなんてされたこと、今まで一度も無かったから・・・・・・・・。」

「そうなの？」

「うん。ママたちにはされたことあったけど、パパには・・・・・・・・」

「??？」

「私のパパは、私が小さい頃に死んじゃったから・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「だからね、やっぱり少し不思議なの。」

「??？」

「こうして今、あなたに会って当たり前のようにあなたに甘えてる自分のことが、本当にちよつと不思議に思うの。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「だから今日、あなたに会えて良かった。」

「??？」

少女の言葉にのび太は首をかしげる。

「君って一体、誰なの？」

「知りたい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん。」

ギユウ

すると少女の腕に力がこもる。

「教えない♡」

「えーっ、何だよ、それ！」

少女は笑みを浮かべる。

「大丈夫、あと数年後に分かることだから。」

「数年後？」

「うん。あつ、あれは・・・・・・・・。」

すると正面から見知った顔が歩いてくる。

「シエーレ、なにしてんの？」

のび太は小走りで彼女の元にやって来た。

「夕飯の買い物です。あつ、アカメ！どうしたんですか？」

シエーレは後ろにいる少女に視線を移す。

「あつ、シエーレ。この娘はアカメじゃなくて。」

「??？」

すると少女はのび太の背中から飛び降りる。

「シエーレって……もしかして先生？」

「??？」

少女は興奮気味にシエーレを観察し始める。

「わあく、凄い!!!アルバムで見た通り!!」

『『アルバム?』』

少女の言葉にのび太たちは首を傾げる。

第八章：膝枕を斬る

「パン買ってきたんですけど、食べます?」

そう言いながら一つのフランスパンを取り出すシエーレ。

「ありがとう!」

「……………」

シエーレは持っていたパンを三つに割ろうとするが

むしっ

「あ……………」

『……………』

明らかに平等じゃない大きさにパンが割れる。

「……………どうぞ大きい方を、私なんてカケラで十分です。」

「……………」

「そんなに悲しまなくても……………」

シエーレからパンを受け取り、それを食べ始める二人。そんな二人にシエーレは

「慌てなくても大丈夫ですよ。それに食事中でも周囲には最低限の警戒を忘れないこと

です。」

するといきなりカラスがシエーレの目の前を横切る。

がしっ

カラスは彼女の手からパンを奪い取ると、そのまま飛び去っていった。

バサッ

「……でないと、こうなりますよ。」

「……………」

「食いかけだけど僕のパンいる？」

「さて、帰ろうか！」

パンを食べ終え、ベンチから立ち上がろうとするのび太だったが

こてん

「???

何かがのび太の膝の上に落ちる。

「お休みなさい……………」

シエーレはのび太の膝の上に顔に乗せている。世間で言う膝枕である。

「……………」

「これ落ち着きます……………」

「そうなの?」

「ええ、落ち着くというか……………安心します。」

「……………」

「こんなに無防備になって誰かと接する機会なんてまずありませんし、だから不思議な気分なんです。」

「???

「親でも親戚でも友達でもない。婚約者だからこそ甘えられるって、こういうことを言うんだなって思ってた。」

「そんなに僕に甘えたいの?」

「わかりませんが、多分そうなんだと思います。私が自覚していないだけで……………す……………す……………」

そのまま眠りの世界に旅立つシエーレ。そんな彼女にヤレヤレと呆れるのび太。膝枕をするということは、お互い信頼し合っているということである。

「大変だね、のび太さんも。」

「まあね。」

ベンチに座りながら会話を始めるのび太と少女。

「時々喧嘩をする時もあるけど、みんな僕の大切な人たちだよ。いつの間にかみんなと一緒にいるのが当たり前になっていったんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「クロメやチエルシーは可愛いし、レオーネやシエーレは一緒にいると楽しいし……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

第九章：大好きを斬る

「アカメは一緒にいると安心する。男らしいとか、女らしいとか関係ないよ。僕は今のままのみんなが好きなんだ。」

「つまり、のび太さんはマ……アカメさんのことが大好きなんだね?」

「……うん、大好きだよ?」

「大、大、大好きなんだね?」

「んな……そ、そうだよ!大、大、大好きだよ!」

すると少女はクスクスと笑い出す。

「??」

その様子にのび太は首を傾げる。

「だつてさ、いい加減隠れてないで出ておいでよ!」

「??」

ガサゴソ

すると座っていたベンチの後ろの草むらから人影が

「アカメ?」

何故か顔を真っ赤にしたアカメが現れる。

(うつ……………。しまった……………。今の話を聞かれたのか……………。)

顔を真っ赤にして目を逸らす二人。

「……………」

「……………」

気まずい空気が周囲を囲む。少女は腕を伸ばす。

「ヤレヤレ、仲良しなこと……………」

「??？」

「それじゃあ、私は帰るね！」

「えっ!？」

「!？」

「二人とも、一つだけ教えておくね。」

「『??』」

「あなたたちはこれから何度もつまづく。だけどそのたびに立ち直る強さももっている。帝国を救った時のように、真っ直ぐ、一歩ずつ進んで。」

「ちよつと、待て！」

「君、名前は？」

慌てふためくアカメたちに少女は

「数年後に分かるよ！それじゃあ!!」

すると少女はどこに行つてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

残されたのは、呆然としたままののび太とアカメであつた。

「・・・・・・・・一体、なんだった・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

(なんかあの娘、アカメに似てたな．．．)

(のび太に似ている．．．)

のび太とアカメに似ている少女。彼女は一体何者なのだろうか？

「な、なあ、一つ聞いてもいいか．．．」

「ダメ。」

「．．．．．」

「ごめんなさい、嘘です。聞きます。聞かせてください。」

するとアカメは深呼吸すると

「これからも．．．私はずっとお前の側にいていいのか？」

するとのび太は笑みを浮かべる。

「もちろん、そんなの僕の方から頼みたいぐらいだよ！」

その言葉にアカメの顔も自然と笑顔になる。

「ふふふ、そんなこと、お前は私に頼まなくても大丈夫だ。」

「??」

「私は．．．『のびくん!!!』!?!」

すると突然後ろで声が出た。振り向くとそこには

「翼ちゃん!」

・映画のロケで外国にいるはずの伊藤翼がやってきた。

「いつ帰ってきたの?」

「今よ。空港から直接ここに来たの!」

「そうなんだ。でも大丈夫?」

「何が?」

「トップアイドルがこんな所に来て。マスコミとか、カメラマンとか……」

「ああ、それなら大丈夫!」

「???」

「だって私……」

「アイドルやめてきたから!!」

第十章：渡さないを斬る

「なぜ辞めたんだ？」

「じゃあ、翼ちゃんはまだアイドルじゃないの？」

翼にそれぞれ質問を投げつけるアカメとのび太。今売れっ子ナンバーワンのアイドル、伊藤翼。彼女の突然の引退宣言。果たしてその動機はいかに。

「ええ。明日から私も普通の女の子よ。」

「翼、私の質問にまだ答えてないぞ。」

「ああ、そうだったわね。私がどうしてアイドルを辞めたのか……だったかしら？」

「ああ。」

「そんなの決まってるじゃない。」

そう言って、翼はいきなりのび太の腕を手に取り、高らかに告げる。

「野比くんのお嫁さんになるためよ！」

「なっ!？」

「えっ!？」

その言葉にアカメとのび太が同時に声を上げる。

「と、とつぜんなに言ってるの。お嫁さんって．．．」

慌てふためくのび太。すると背後から声がした。

「．．．．．お嫁さん？」

「うおっ!?なんでレオーネまでいるの?」

いきなりレオーネが現れ、驚くのび太。

「公園が騒がしかったから、見に来た。」

するとまた背後で声が出た。

「『見つけた!!!』」

振り向くとそこには血相を変えたクロメ、チエルシー、静香がいた。

「それでのび太。お嫁さんってなんだ?」

「いや、なについて言われても……」

レオーネの質問にたちろぐのび太。

「お嫁さん……ですか……お嫁さん……」

いつの間にか目を冷ましたシェーレがなにやら考え込んでいる。

「のび太さんっ!お嫁さんって何よ!?一体なにがどうなってるのか説明しなさいっ!」

空気に耐えきれなくなった静香が声を上げる。

「いや、説明しろって……むしろ、僕のほうが説明してほしいぐらいで……」

するとその様子を見ていた翼がクスクスと笑う。

「相変わらずモテモテだね、野比くん。」

「翼ちゃん、そんなのんきな事言っていないで!早く誤解をといてよ。」

涙目で翼に訴えるのび太。

「誤解もなにも、さつき言ったことが全てよ。特に訂正する部分なんてないわ。」

「待て!!!」

「『『『『『?!』』』』』」

すると今まで黙っていたアカメが声を上げる。ありがたい、助っ人だ！これで状況は良くなる

と、思いきや、そうではない。

「私はのび太とずっと一緒にいたい。のび太の妻は私だ!!」
「・・・・・・・・アカメ~~~~っ!?!?・・・・・・・・。」

アカメはのび太に飛びかかると

ムニユ一

「ふん(ふん)ふん(ふん)……アカメ……」

二つの柔らかい感触をのび太の顔に押し付けてくる。こんな大胆なアカメは今まで見たことがない。まるで今まで抑えていた感情が爆発したかのようなようだ。その光景にクロメたちはムツとする。

「のび太は私のものだもんっ。」

クロメが後ろからのび太に抱きつく。

「ちよつと！クロメさん何を勘違いしてるのか知らないけど、のび太さんは別に誰のものでもなくて……」

「にしししし、なら私がもらう。」

「私よ、のび太には色々責任とってもらうんだから。」

「あの一、私も……」

今度はレオーネ、チエルシー、とシエーレが抱きついてきた。

「あら、それは聞き捨てならないわね。野比くんは私がいただくわ。」

「ああ、もうっ！とにかくのび太さんは……」

ギユ一……一。

のび太の体がアカメたちによって色んな方向に引っ張られる。
ムニユーーーーー。

と同時に柔らかい物が色んな方向から押し付けられる。

「のび太はーーーーー」

「のび太はーーーーー」

「のび太はーーーーー」

「のび太はーーーーー」

「のび太はーーーーー」

「のび太さんはーーーーー」

「野比くんはーーーーー」

「『『『『誰にも渡さないんだから！』』』』」

最終章：実力行使を斬る

「見てあれ、すつごいモテモテってか中国雑技団みたいになってる男の子がいるんだけど……」

「ほんとだ。何あれ、合体でもするつもりなのかしら。」

「ちよつとあの男女比率おかしくない？ねえおかしくない？ってか何なの、あの中心の男の引力がすごいわけ？ねえ？」

「しかもあのレベルの女の子をあれだけ装備してるとかなに？可愛い女の子は装備品だと勘違いしてるんじゃない？」

公園での騒ぎを聞きつけて人が次々と集まってきた。

「みんな、離れてよ!!!」

のび太の叫びにアカメ、クロメ、チエルシー、レオーネ、シエーレ、翼、静香は

「絶対に離さないぞ!!!」

「やだ、離れない!!!」

「私も!!!」

「私だってそうだ!!!」

「負けられません!!」

「同じく!!!」

「のび太さんは私の物!!」

必死にのび太の体を掴み、引っ張る。

「おい、あれって伊藤翼だ!」

「えっ、今朝引退宣言したあの・・・?」

「あの男・・・もしかして彼氏か!?!・・・・これはスクープだ!!!」

新聞記者たちがカメラを持って集まってきた。不味い、のび太の感がそう告げた。このままでは色んな意味で取り返しがつかなくなってしまう。

「のび太、私はお前のためなら何でもできる。だから・・・・!!!」

「ちよつと、のび太さんとは私が一番付き合いが長いんだからね!!」

「のび太は私の方が好きなんだよね、ね?・・・・のび太!」

「違うわよ、私だよね!?!」

「うっ・・・・それは・・・・その・・・・」

「『『『ハッキリしなさい!!!』』』」

少女たちのバトルもヒートアップしてくる。

!!!

のび太の顔に七つの柔らかい感触が押し当てられる。
チュッ
チュッ
チュッ
チュッ
チュッ
チュッ
チュッ

「ドラえもん~~~~~ん」

!!!!!!

心に隠してた想い 静かに言葉で刻んで

踏み出す手探りな明日へ 強く迷い無い瞳で

どんな未来でも受け止める私でいたくて

今はもう振り向かない

走る衝動に任せて広がる世界へ
変わる運命に答えがあると信じて
あの日鮮明に描いた変わらない夢は
触れた限界も必ず超えて行くから

揺るぎない声にして届けるきつと
いつか辿り着くその時まで

ドラえもん のび太のアカメが斬る！

設定 1

登場人物 1

名前：ドラえもん

種族：最強の帝具、英雄、元子守用ロボット

好きなもの：どら焼き

趣味：漫画を読む、ネコ達との交流

メモ：のび太が帝国革命の為、クロメと共に子守用ロボットから帝具に改造した。オリハルコン等の稀少な金属をはめ込むことで、所持者想像を基に好きな能力を創造でき、最終的にバージョン8まで変形することができる。

名前：野比のび太

種族：帝国最強、超能力者、英雄

年齢：10代

血液型：A型

好きなもの：???

趣味：昼寝、漫画を読む、あやとり、射撃

メモ：アカメたちとの修行の中で視力が回復、メガネをかけていない。エスデスとの戦いで白髪になっている。

名前：アカメ

種族：のび太の妻

年齢：10代

血液型：A型

スリーサイズ：B81—W56—H83

好きなもの：肉料理

趣味：食事、ペーパークラフト

性格：真面目

メモ：のび太たちと一緒に住んでいる

名前：クロメ

種族：のび太のお嫁さん

年齢・：10代

血液型：A型

スリーサイズ・B80 | W51 | H81

好きなもの：のび太

趣味：のび太と一緒にいること、お菓子を食べること

性格：甘えん坊、大胆

メモ：のび太たちと一緒に住んでいる

名前：チエルシー

種族：のび太のファイアンセ

年齢・：20代前半

血液型：B型

スリーサイズ：B83 | W54 | H84

好きなもの：イタズラ

趣味：紅茶、ヨガ、のび太をからかう

性格：寂しがり

メモ：のび太たちと一緒に住んでいる

名前：レオーネ

種族：のび太の婚約者

年齢：20代前半

血液型：O型

スリーサイズ：B90 | W57 | H86

好きなもの：おでん、地酒の冷酒

趣味：飲酒、賭博、のび太にプロレス技をかける

性格：やんちゃ

メモ：のび太たちと一緒に住んでいる

名前：シエーレ

種族：のび太の許婚

年齢：20代前半

血液型：AB型

スリーサイズ：B86 | W55 | H88

好きなもの：???

趣味：仲良くなった人と一緒にいる

性格：おっとり

メモ：のび太たちと一緒に住んでいる

名前：源静香

種族：のび太の幼馴染

年齢：10代

血液型：O型

スリーサイズ：B68 | W54 | H77

好きなもの：焼き芋、お風呂

趣味：お風呂

性格：暴走機関車

メモ：アカメたちの存在にヤキモキしている、のび太のお嫁さんになりたい

名前：伊藤翼

種族：のび太の彼女

年齢：10代

スリーサイズ：B??—W??—H??

好きなもの：歌、ダンス

趣味：歌

性格：おだやか

メモ：のび太のお嫁さんになるためにアイドルを引退。

名前：剛田武

種族：ガキ大将、男の中の男、アカメ親衛隊隊長、アカメファンクラブ会員

年齢：10代

血液型：B型

好きなもの：アカメ

趣味：歌、料理、野球、サッカー

性格：馬鹿力で乱暴、ワガママで意地汚い

メモ：のび太の存在にヤキモキしている、アカメを自分のお嫁さんにした

名前：骨川スネ夫

種族：世界一いい男、チエルシー親衛隊隊長、チエルシーファンクラブ会員
年齢：10代

血液型：A B型

好きなもの：チエルシー

趣味：ラジコン、テレビゲーム、デザイン

性格：ナルシストかつイヤミ

メモ：のび太の存在にヤキモキしている、チエルシーを自分のお嫁さんにした

野比のび太暗殺計画

プロローグ

東京のある学校のとある教室。

「これより、裁判を行う。」

張り詰めた空気の中、裁判長が声を上げる。

「罪人まえへ。」

そう言われ少年は前にでる。

「ジャイアン、なんなのこれ？僕が何かした？」

「黙れ、この虫ケラが!!!」

「虫ケラって……なんのこと？」

そう言いながら首を傾げるのび太にジャイアンを含む他の男子生徒たちは

「分からないだど？なら、教えてやろう！被告人に前へ!!!」

「はい!!」

すると一人の少女が証言台に立った。

「あれは今朝のことです……」

少女は今朝起きた出来事を話始める。

〔回想〕

「あら、静香ちゃん。おはよう!!」

「おはようございます、おばさま。のび太さんいますか?」

早朝、一緒に登校するために私はのび太さんの家に行きました。時間は午前六時です。

「のび太は二階にいるわよ。」

「わかりました。では行ってみます。」

ルンルン気分で二階上がり、そして私は障子を開けました。

「のび太さん、おはよう。早く準備しないと学校に……」

「そして私は見てしまったのです。」

「ほう、何を見たのですか？」

「罪人が……………」

〈回想〉

「な、なななんなのよ、これっ！！！！！！」

「ふあ〜っ。もう朝……………」

！！！！！！

私の声でレオーネさんはあくびをしながら目を開け、アカメさんたちも次々と目を覚ましました。

「どうしてアカメさんたちがのび太さんの布団に!!!」

最もな質問に彼女たちは

「何でって……………」

「そりゃあ……………」

「妻が夫の布団で寝るのは当然でしょ？」

「です。」

「そういうこと。」

「当然だ。」

とささも当然のように答えました。

「『『『死刑!!!!!!』』』」

男子生徒だけでなく、男子教師たちも声を上げる。

「これより、この件に関して詳しく聞く。罪人は正直に答えること!!」

「.....」

「質問その一.....」

ゴクリ

その言葉にその場の全員が息を飲む。

「抱きつかれた感触ってどうだった？」

「……………」

質問の内容にのび太は呆れる。

「いつも抱きつかれてるけど、そんなにいいもんじゃあないよ。」

「『』『』『』」

「……………」

「『』『』『』な、なんて羨ましいんだあああああああ!!!」

「なんでそんなこと聞くんだよ？」

「だって気になるじゃん、あと刑罰のランクが上がる。」

「あっそう……………」

第一章：裁判を斬る

(まいったな。もうすぐスーパーのタイムセールが始まっちゃう。)

そう思いながらのび太は部屋の時計に目をやる。時計の針は午後の六時を刺そうと
していた。

「次の証人!!!」

「はい!!」

すると一人の少年が証言台に立った。

「あれは「昨日のことです……」」

少年は「昨日起きた出来事を話始める。」

〔回想〕

「あら、スネ夫くん。おはよう!!」

「おはようございます、おばさん。いつも見てもお若いですね!」

「一昨日、一緒に登校するために僕はのび太の家に行きました。時間は午前六時半です。」

「これから朝ごはんなんだけど、一緒に食べる?」

「はい、いただきます!」

「ルンルン気分で家上がり、そして僕は台所の椅子に座りました。そして手を合わせいただきます!!!」

「食事をはじめました。」

「そして私は見てしまったのです。」

「ほう、何を見たのですか?」

「罪人が……」

〔回想〕

「おい、寝るな。ちゃんと起きろ。」

罪人は隣に座っていたクロメちゃんの体を揺すりました。

「んんう……のび太」

すると彼女の顔が罪人の顔に近づいていったかと思うとー

チュツ

罪人のほっぺに彼女の唇が接触。しかもそれだけではなく。

「ちゅっ……ぺろぺろっ」

そのまま彼女は罪人のほっぺを舐めはじめました。

「『『『何』』』」

「??????」

「!!!!!!」

男子生徒だけでなく、男子教師から黒いオーラが滲み出る。

「ほっぺにキス……………」

「しかも舐められる……………」

「ペロペロって……………」

「な、なんて羨ましい……………じゃない、不謹慎だ!!!これは最高ランクの刑を与えなければならぬ!!!!!!」

男子たちの勝手な言い草にのび太は

「だからみんなさつきから誤解してるとて!みんなが思っているような関係じゃないって!!!愛とかそんなのあるわけないよ!!!」

のび太の言葉にジャイアンたちは

「愛とかないって……………」

「それって……………」

「彼女たちとは単なる……………」

「遊び……………?……………」

「ひでえ……………」

「最低だな……………」

「鬼!!!」

「悪魔!!」

「人間のクス!!」

するとスネ夫はのび太の前に来ると

「おい坊主、お前は知らんかもしれんけどな……」

黒板に五枚の写真が貼り付けられる。

「アカメちゃんは素直でクールな肉食女子。とぼけたところもご愛嬌！レオーネさんは大人の色気、サバサバした性格も素敵。シエーレさんはおっとりメガネ、一番優しいお姉さん。クロメちゃんは素直で元気なスキスキ娘！好きな人に対しては積極的愛情表現をする。チエルシーちゃんはさっぱりでやんちゃなイタズラっ子、好きな人に対しては積極的にかまって光線を発射する……」

スネ夫の説明にのび太はため息をつく。

第二章：判決を斬る

太陽が沈み、窓の外は既に真つ暗。人っ子一人歩いていない。そんな中、ある教室では張り詰めた空気が部屋中を支配する。そしてついに裁判長が声を上げる。

「陪審員、判決を!!」

五人の男子生徒たちが椅子から立ち上がると口を揃えて

「『『『死刑!!!』』』」

と言い放った。満場一致でのび太の死刑が確定した。

カンカン

「判決!!!」

五時間の話し合いの末、裁判官の下した結論は

「被告人、野比のび太には死刑よりも恐ろしいジャイアンのリサイタルの刑を言い渡す
!」

その言葉に陪審員たちは

「『『『おおおおお!!!』』』」

と言いながら騒ぎ出し、顔色を変える。

「何て残酷な……」

「恐ろしい……」

「あんなヘタクソな歌を半日も聞くなんて……」

「死んだ方がマシだよ……」

「容赦ない……」

「情けはないのか……?」

「人間というのはここまで残酷になれるものなのか……?」

「悪魔?……それとも神?」

全員ジャイアンの歌の恐ろしさは十分に知っている。それ故にこの判決がどんなに恐ろしいものなのかを瞬時に理解した。そしてそれと同時に被告人に哀れみの気持ち
が湧き出す。

「それでは……罪人を……あれ?」

全員部屋の中を見渡す。

「あれ? 罪人はどこだ?」

のび太の姿が見当たらない。一体何処へ?すると陪審員の一人が声をあげる。

「裁判長、罪人は用事があるとのことですが、戻りました!!」

「なに……」

!!!!?!!

「『『『なんだと!?!』』』』」

男子たちの叫びが校舎中に響き渡った。

そしてその数分後、悪夢が彼らを襲った。

{剛田家}

「タケシー……………」

女性はホウキを持ちながら少年を追いかけて、少年は頭を抑えながら必死で逃げる。
「こんな夜中まで何処ほつつき歩いてんだよ!!!」

バコン

バコン

「痛い!!!母ちゃん、やめて!!」

〔骨川家〕

「ママー……………」許して、ママー……………」

!!!!!!!

!!!!!!!

ドン

ドン

少年は泣きながら玄関のドアを叩く。

「夜遊びする子はうちの子じゃないぞまはす!」

「ママー……………」

!!!!!!!

第三章：暗殺を斬る

とある場所に向かう一人の人物。男は厚めのジャケットを着て、マスクとサングラスで顔を隠している。男はある建物の前で足を止め

コンコン

ドアをノックする。すると

「合言葉、ジャイアンの足は．．．」

「臭い。」

ギイ

「入れ。」

ドアが開き、男は中に入っていく。

「諸君、良く集まってくれた。」

部屋の中には奇妙な仮面をつけた男たちが集まっていた。そして彼らのリーダーら

しき男が口を開く。

「田中くん、例の映像を．．．」

「はい。」

カチツ

スイツチを入れるとスクリーンに映像が映し出される。そこには皆が知っている美少女の姿があった。

「野比チエルシー、我がO X高校一年B組に在籍。身長157センチ、バスト83、ウエスト54、ヒップ84（推定）。」

「[[[[[.]]]]]」

「. 諸君!!我々は皆この美しく純情華麗な彼女に心を奪われた同志である。」

「[[[[[.]]]]]」

「しかしだからと言って、チエルシーさんの愛を巡って、我々が争う事は不毛であり、慈愛に溢れる彼女の心をむやみに傷つけることにもなりかねない。」

そう言うのと全員首を立ててに振りながら頷く。

「よって我々はここに結成する、皆で平等にチエルシーさんを愛でる紳士が集う、CMC」

「!!!」

!!!!!!

リーダーの言葉に男たちは声を上げる。

「諸君、知つての通り彼女は今まさにケダモノの毒牙にかかりつつある。!!我々の手で救出するのだ!!!」

「『『『『』』』』』」

「同志たちよ、今こそあの恐ろしい計画を実行に移す時が来たのだ!!!」

「『『『『』』』』』」

「今こそあの男に正義の鉄槌を!!!」

!!!!!!

「『『『』』』』』」

!!!!!!

野比のび太、暗殺計画

その頃、のび太家では

ハックション!!

「大丈夫、のび太?」

「うん、平気。」

クシャミをするのび太をチエルシーは心配そうに見つめる。

「それよりチエルシー、この問題なんだけど・・・」

そう言いながらのび太は自分のノートに視線を戻す。するとチエルシーはのび太のノートを覗き込み

「これは、この公式を使って・・・」

むにゅ

「／／／／／うっ・・・・・・・・／／／／／」

二つの体が密着する。そのたびにのび太の顔が赤くなる。そして二人は知らなかつたこれから彼らに起こる残酷な悲劇を。

第四章：排除を斬る

同じ頃、別の薄暗い部屋の中では、

「野比のび太、過去にO X小学校に所属。クラスでは目立たない、大人しい生徒……。ひどく無気力で、自分のやりたいこと以外は、やらねばならないと解つていても、進んでやろうとはしない。注意力が極めて散漫。ぼんやり道を歩いていて石につまずき、空き缶で滑つて転び、足を踏み外してドブや工事現場へ転落するなど、日常茶飯事。その上、運動音痴で泳ぎも全く出来ないカナヅチ。非力でけんかも弱い。そしてなにより、テストの成績は極めて悪く、『ビリから二番』」

その言葉に全員首を立てて振って頷く。

「勉強は駄目、スポーツも駄目、結論から言つて何をやらせても冴えない少年。しかし……」

「『!』」

「ある日を境に彼は変わった。あれ程嫌いだった勉強、スポーツ、家の手伝いを自分からやるようになり……」

「『!』」

「今では崖っぷちだった成績も今は中の上。何より噂ではあのジャイアンより強いという報告が!!」

その言葉に全員顔を見合わせ

「嘘だろう……?」

「そんなまさか……」

「あのダメ男ののび太が……」

「一体何があつたんだ……!?」

ヒソヒソ話を始める。

「危険は今までにない所まで来ていると断言していい。だがまだ間に合うかもしれない。この男からあのお方をお守りするのだ!!」

『『『……』』』』

その言葉に全員が再び首を立てに振って頷く。

「我々、シエーレフアンクラブ、SFCがな!!」

『『『おおおおおおお!!』』』』

「我が女神に近づく者は誰であろうと排除する、野比のび太を排除せよ!!!」

【次の日】

「……………」

いつも通り学校から帰宅するのび太。

「ハア……………ハア……………ハア……………」

すると突然誰かが後方から突っ込んでくる。

「……………おらっ!!」

「……………」

「わ、わわっ!?!」

のび太は体当たり気味に寄ってきたところを、体を引いて避ける。勢い余ったのか、男子生徒は地面に転落してしまった。

「大丈夫?」

「……………ちっ。」

手を伸ばしたのにもかかわらず、舌打ちを残して走り去ってしまった。

「ヤレヤレ……………またか。」

そう言いながらため息をつくのび太。このような嫌がらせも今では日常茶飯事。

(こんな事なら、イエーガーズやワイルドハントの方が何倍もマシだな……………)

そんな事を考えながらのび太は再び歩き出す。

第五章：一難を斬る

「ただいま！ん？」

のび太は何故か玄関に置かれている大量のダンボールを見て驚く。

「おかえり、のび太くん。」

「おかえり、のび太。」

「遅かったな。」

「おかえり！」

「おかえりなさい！」

「おかえり！」

「おかえり！」

玄関で靴を脱ぎ、居間に入るのび太をいつものようにドラえもん、玉子、アカメ、クロメ、シエーレ、チエルシー、レオーネが出迎える。だが今日は一つだけ違う事があった。それは

「あれ？翼ちゃん来てたの？」

「おじやましてます！」

そう言いながらニコリと笑う元トップアイドル伊藤翼。

「たまたま野比くん家に用事があったから……」

「用事？」

「翼ちゃん、お茶のお代わりはいかが？」

「あつ、いただきます。」

玉子は翼のコップにお茶を注ぐ。

「それにしても野比くん・家って中広いんだね、私びつくりしちゃった！」

「うん、まあ……（流石にあのままだと九人は住めないからね……）」

家そのものを改築すると近所迷惑になるので、ドラえもんの道具で現在家の中はアパート並に広くなっている。

「それにしても大変だったな。」

「そうだね。」

そう言いながら全員昨日の事を思い出す。それは『人気トップアイドル突然の引退』の原因を突きとめたテレビ局や新聞記者たちがわんさか押しかけてきたのだった。そしてあまりにもしつこいのでドラえもんの秘密道具の力でなんとか事なきを得たのだった。

「ごめんね。みんなに迷惑かけちゃって……」

「別にいいよ。」

「うん、いつもの事だしね。」

アカメたちが来てから、毎日がトラブルの連続なのでのび太やドラえもんも慣れてしまった。

「みんな翼ちゃんからお肉を貰ったから、今夜はすき焼きよ。」

「『『すき焼き!!』』』」

玉子の言葉に全員目を輝かせる。玉子そのまま台所に向かい、のび太はふと何かを思い出す。

「そういえば、玄関に荷物があつたけど……」

「あれは翼のだ。」

「翼ちゃんの？　そういえば用事があるって言ってたけど……」

翼はたちあがるとのび太の手を掴む。

「野比くん、部屋に荷物を運ぶの手伝って。」

「『『部屋？　荷物？』』』」

何を言っているんだこの娘は。翼の言葉に全員混乱する。

「あつ、そういえばみんなにはまだ言っていなかったね！」

翼はニコリと笑う。

「今日から私もこの家に住むことにしたの。これからよろしくね、だ・ん・な・さ・ま♡」
そう言いながらのび太にウインクする翼。

ガーン

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

のび太の顔色が急激に悪くなり、ほぼ同時にアカメたちから殺気のようなものが翼に向けられる。一難去ってまた一難。

第六章：オットセイを斬る

キーンコンカーコン。

ガララ

「おはよう、静香ちゃん！」

「おはよう。」

「おはよう！」

「おはよう。」

「おはよう、のび太さん、アカメさん、クロメさん、チエルシーさん、翼さん！」

静香と挨拶をするとのび太たちは全員自分の席につく。

「随分お疲れのようね。大丈夫？」

「うん、大丈夫……」

顔色が悪いのび太を案じ、静香は声をかけてきた。

「ゴメンね、夜遅くまで手伝ってもらっちゃって……」

「いいよ、別に。」

すると翼とのび太の話聞いた静香は

「荷物？　そういえば、昨日のび太さん家に引っ越しのトラックが止まってたけど……」
　　そう言いながら首を傾げる静香にアカメは口を開いた。
「昨日から翼は、私たちと一緒に住むことになったんだ。」

ピキツ

「えっ………」

アカメの言葉に教室が北極と化し、クラス全員の視線がのび太たちに集中する。すると静香は震えた声でおそるおそる口を開く。

「それっていわゆるハーレム状態じゃない！あんたはオットセイか!!!」

(オットセイじゃない、エスパーだ。)

「もうみんな手込みにしたの!? あんなことやこんなこと、出来たらいいなまでしちやったり!？」

「……………」

静香が暴走し始めた。正直こんな静香ちゃんは見たくなかったなどのび太は思った。すると近くで話を聞いていたスネ夫が

「見た目は中の下くらいかと思ってたけど、精力は特上だったわけか……………」

そう言いながらスネ夫はアカメたちの所に行く

「アカメちゃん！クロメちゃん！チエルシーちゃん！翼ちゃん！」

「『『『?!!』』』」

「……………もうされちゃった？」

「『『『???』』』」

スネ夫が何を言っているのか分からず、首を傾げるアカメたち。するとスネ夫はアカメたちの耳元へと口を近付けた。

「のび太と裸であーしたりこーしたりするよな、えっちなこと。」

(スネ夫……………お前、耳元で話してる意味が全くないくらい声がでかいぞ……………)

第七章：キューピッドのやを斬る

「ピギヤアアアアア!!!」

アカメたちの様子に男子たち全員が爆発した。

「クロメちゃんか・・・クロ・・・クーーーーーっ!!!」

「俺のチエルシーがーっ!!!」

全員口から魂が抜け出ている。

「うわわくん、アカメちゃんがまさかのび太になって!どうりで処女膜から声が出てないと思っただよお!!」

何故か話がどんどんオーバーになってきている。そしてふと廊下に視線を向けると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

大変な騒ぎになっていた。今の話を聞いて、幼児のように泣きわめく男子生徒たち、怒りのあまり持っていた教科書を投げ出す教師、何故か服を脱いで裸になっている校長。

【そして放課後】

源家の部屋で互いに向かい合いながら座る少女とネコ型ロボット。そして朝の出来事を語り終える少女。

「ふくん、クロメとのび太くんがねえ……（のび太くん、君ってどこまで運が悪いんだ。）でも婚約者同士仲良くするのはいいことじゃない？」

「そりゃあ、悪いとは言わないけど……」

「その気持ちは分かるけど、そんな事でウジウジヤキモチを焼くなんてみつともないと思わない？」

「うっ……」

「分かればいいんだ。さっ、明るく笑って忘れろ！」

「ヤア！ハアハアハア、なんでもないこんな事……ハアハアハアハア!!!」

ドラえものの言葉になんとか笑みを浮かべ、ムリに笑おうとする静香。だがしばらく

すると目から涙がこぼれ落ち、

「うわあああああああああああ!!!」

泣き出してしまふ。まるで昔ののび太を見ているようだ。のび太も以前は静香と出木杉が仲良くするたびに嫉妬して、このように泣き出していた。なのでドラえもんには今の静香と昔ののび太がダブって見えているのだ。

「よわったな………。じゃあ、どうすれば気がすむの?」

「だからあれを貸して欲しいの!」

「しようがないな。」

ドラえもんはポケットに手を入れると

「キューピッドのや!!!」

「ありがとう、ドラちゃん!!」

嬉しそうに道具を受け取る静香。その反対にドラえもんは浮かない顔をしている。

「まあ、無駄だと思っけど………」

出会った時から強い絆で結ばれているのび太とクロメ。二人の絆の強さを知っている為、ドラえもんにはいきなりオチが読めた気がした。

「いいの。何もしいよりはましよ!」

そう言いながらウキウキした気持ちで道具を片手に家を飛び出し、目当ての二人を探

す
少
女。
。

第八章：放送を斬る

「あの、すいません！」

「??」

廊下を歩いていたらアカメに一人の少女が駆け寄ってくる。

「アカメさんですよね？」

「……うん。」

アカメは首を縦にふる。

「実はおりいって頼みたいことがあるんですけど……」

「??」

【食堂】

「はい、のび太！あくん！」

そう言いながらスプーンでよそったご飯を突き出してくるクロメ。

「のび太、こつちに口を開けて！」

今度は負けじと、チエルシーがウイナーが刺ささったフォークを突き出してくる。

「ちよつと、私が先でしよう！」

「違うよ、私だよ！」

そう言いながら火花を散らすチエルシーとクロメ。この光景も日常茶飯事、ただ今日はいつもと少し違う。

「あれ、アカメは？」

いつもののび太の隣に座っているアカメの姿がない。

「どうしたんだろう？」

「トイレかな？」

食事の時間にアカメが遅れるなんて今までなかったこと。それ故にのび太は胸騒ぎを感じた。すると

♪

どこからともなく、音楽が流れくる。

「こんにちは、お昼の校内放送の時間です。」

いつものように放送されるお昼のニュース、と言っても内容は三組の田中くんがコン

クールで優勝した、二組の鈴木さんの犬が子供を産んだなど、途方も無い事ばかりなのである。のび太はそんなことは気にも止めず席を立ち、アカメを探しにいかうとするが……

「今日のゲストは学園が誇る四大美女の一人、アカメさんです！」

「ぶっ……」

アナウンサーの言葉に全員使っていた箸を止める。

「今日は宜しくお願ひします！」

「……」

アカメの事が気になるのか、全生徒主に男子が放送の内容に耳を傾ける。

「アカメ……大丈夫かな？」

そう言いながら心配そうに聞き耳を立てる彼女の婚約者。

「それでは、最初の質問です。アカメさんは家では普段どんなことをなさっているんですか？」

「私は家では炊事担当だ。だから朝食、夕食、弁当は私が作っている。」

「なるほど……とても家庭的ですね。それでは次の質問です、どういう男性が好みなんですか？」

「よく分からない。ただ焼肉は、肉汁がしたたっているのがいいな。」

「……………」

その後も質問は続き、アカメはシンプルに答えていくが、いつの間にか話題が食物に変わっていた。

「それでは最後の質問です！あなたは野比のび太さんの事をどう思っていますか？」

「『!?』」

その質問に生徒たちだけでなく、のび太たちも聞き耳を立てる。

ゴクリ

食堂が静まり返り、皆が息を飲む。しばらく経つとアカメの口が開いた。

「私のはのび太が好きだ。できればずっと一緒にいたい。」

「いきなりの大・胆・発・言・言
!!!!」

ガシヤン

ガシヤン

ガシヤン

食堂のあつちこつちで茶碗が割れる音がした。

「も、もう少し具体的に！」

「………私の全てはのび太のもの、そしてのび太の全ては私のものだ。」

昨日見た恋愛ドラマの台詞をカッコよく真似るアカメ。

カチャカチャ

「ジャイアン、それパンじゃなくてお皿だよ。」

何故か泣きながら空になった茶碗に齧り付くジャイアン。

第九章：あいすボツクスを斬る

【そして放課後】

剛田家の部屋で互いに向かい合いながら座る青年とネコ型ロボット。

「さあ、えんりようしないで食べてくれ！」

そう言いながらジャイアンは大量のどら焼きが乗ったお皿を差し出す。そんな彼にドラえもんは

「で、用つていうのはなに？」

ドラえもんは皿のどら焼きに手をつけず、そう言った。なぜならあのケチなジャイアンがただで物をあげるなんて理論上ありえないのだ。なぜならこのゴリラのモットーは「オマエのものはオレさまのもの、オレさまのものもオレさまのもの」なのだから。

「実は頼みがある。」

「.....」

ドラえもんには大体見当が付いていたが、一応話を聞くことにした。そしてジャイアンは昼の出来事をドラえもんに話した。『またか』という大きなため息をつくドラえもん。

「ふうん、アカメとのび太くんがねえ……（のび太くん、君ってどこまで運が悪いんだ。）でもアカメはのび太くんの婚約者だよ。」

「そりゃあ、そうだけど……」

「その気持ちは分かるけど、そんな事でウジウジヤキモチを焼くなんてみつともないと思わない？」

「うっ……それは……」

「男なら好きな女ぐらい自分の力で振り向かせたらどうなんだい！」

「それができれば苦労はしないって言うの!!」

そう言うとジャイアンは暗く落ち込む。

「そりゃあ、俺だって自分で何とかしようとしたさ。でもいざアカメちゃんを前にすると緊張して思うように体が動かないんだ。」

「……（口下手だしね）……」

まるで昔ののび太を見ているようだ。のび太も以前可愛い女の子と友達になりたいところのように自分に泣きついてきた。なのでドラえもんには今のジャイアンと昔ののび太がダブって見えているのだ。

「しようがないな。」

ドラえもんはポケットに手を入れると

「あいすボックス!!!」

ドラえもんは取り出した道具の説明をするジャイアンにする。すると

「おお心の友よ!!!」

そう叫びながらドラえもんを力一杯抱きしめ、嬉しそうに道具を受け取るジャイアン。その反対にドラえもんはまた浮かない顔をしている。

(まあ、無駄だと思っけど……)

ナイトレイドの中で一番強い絆で結ばれているのび太とアカメ。そんな彼らの絆が壊れることは絶対にありえない。ドラえもんにはいきなりオチが読めた気がした。

「これさえあれば、怖いものなしだ!」

そう言いながらウキウキした気持ちで道具を片手に笑い出すガキ大将。

第十章：体育祭を斬る

今日は体育祭。運動音痴の生徒が学校を恨み、教師を殺意の目で見る日だ。

「次は借り物競争です！」

借り物競走は、主に運動会で行われる競技の一つ。通常の徒競走と違い、走者は指定された品物を友人や観客から借り、それを持ってゴールする。アナウンサーからの知らせでのび太はスタート位置に付く。その隣には彼の幼馴染みの一人のナルシストがいた。

(ぬふふふふふ、のび太相手なら楽勝楽勝!!!)

そう思いながら笑みを浮かべるスネ夫。

「位置についてーっ、よーい、ドン!!!」

合図とともにのび太たちは走り出し、コースの途中に置かれている紙を拾う。

『水筒』

「やったあ！楽勝だ!!」

簡単な課題にスネ夫は思わずガッツポーズをし、勝利を確信する。そしてウキウキしながらのび太の方に視線を向ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スネ夫とは真逆にのび太は拾った紙切れを見て、青ざめてる。まるで一年分の給料を落としたサラリーマンのようだ。あの様子じゃあ余程大変な課題なのだろう。スネ夫はクスクスと笑いながらその場を後にした。

そして数分後。殆どの選手がゴールし、水分補給やタオルで汗をふいている。

「やったね！」

スネ夫は1位の旗を持ちながらカメラにピースをし、高笑いをする。『僕は何をやっても凄い』そう思っていた矢先、突然叫び声が出た。

「うん？」

振り向くとそこには

「のび太、頼む私を連れてってくれ!!!」

「ちよつと、のび太さんが選ぶのは私なんだからね!!」

「のび太は私を選ぶよ、ね?・・・のび太!」

「違うわよ、私だよね!」

「.....」

のび太の体にしがみつくと七人の美女。一人の男を巡って争う日本一の美女たち。その光景に観客と選手たちは呆然とする。

「のび太.....」

「のび太.....」

「のび太.....」

「のび太.....」

「のび太.....」

「のび太さん.....」

「野比くん.....」

「『私を選んで!!!』」

そう言いながら全員のび太に詰め寄る。するとそのび太が拾った紙切れが風邪で飛ばされて、スネ夫の足元に落ちてくる。スネ夫は紙切れをひろうとそこには

『一番大好きな人』

と書かれていた。

(何だろう．．．．僕が勝ったのに．．．．羨ましすぎて涙が出てくる．．．．)。
スネ夫の目から大量の涙がこぼれ落ちる。彼は試合に勝って勝負に負けてしまったのだ。

第十一章：あなただけのものガスを斬る

【次の日、放課後】

骨川家の部屋で互いに向かい合いながら座る青年とネコ型ロボット。

「さあ、えんりようしないで。どんどん食べて！」

目の前には美味しそうな料理が並べられている。だが

ブチッ

「あのねえ……僕は悩み相談所じゃないんだからね!!」

そう叫びながら文句を言うドラえもん。流石に三度めとなると、どんなお人好しでもきれるのである。これを世間で言う『仏の顔も三度まで』である。するとスネ夫は勝手に昨日の体育祭の出来事をドラえもんに話し始めた。当の本人はどうでもいいのか漫画を読みながら話を聞き流している。

「へへっ、チエルシーとのび太くんがねえ……（もうどうでもいいや。）そりやあ、大変だったね。」

「うん、そうなんだよ。……」

「どうでもいいけど……こうやって都合が悪い時だけ人を頼るなんて図々しいとは思

わない?」

「うっ……それは……」

「いつものび太くんをバカにしたり、仲間外れにしたり……」

グサツ

ドラえもんの言葉がスネ夫の胸に突き刺さる。

「嘘はついたり……」

グサツ

「法螺を吹いたり……」

グサツ

「他人が困っているのを知ってて、意地悪したり……」

グサツ

「大体自分のことだろうか?自分だけの力で解決したらどうなんだ!!!」

「うっ……わあああああ!!!」

とうとうスネ夫は泣き出してしまう。その様子にドラえもんは呆れ、ため息をつく。

「そりゃあ、僕だって自分で何とかしようとしたさ。でもどうしてもうまくいかないだ。」

「……ヤレヤレ……」

静香、ジャイアンに続いて今度はスネ夫か。

「しようがないな。」

ドラえもんはポケットに手を入れると

「あなただけのものガス!!!」

ドラえもんは取り出した道具の説明をスネ夫にする。すると

「ありがとうドラえもん、恩にきるよ!!!」

そう叫びながら一杯ドラえもんの手を握り、嬉しそうに道具を受け取るスネ夫。その反対にドラえもんはまたまた浮かない顔をしている。

(まあ、時間の無駄だと思っけど………)

チエルシーの目線の先にはいつものび太がいる。彼女はいつものび太の隣をあるいている、それはこれから先もずっと。そんな彼女が他の誰かに振り向く事など天地がひっくり返ってもありえない。ドラえもんにはいきなりオチが読めた気がした。

「これさえあれば、チエルシーちゃんも僕のものだ!」

そう言いながらウキウキした気持ちで道具を片手に笑い出すナルシスト。

第十二章：きつかけを斬る

「あれ〜っ？のび太さんたちどこに行ったのかしら？」

そう言いながら周りをキョロキョロする少女。すると

「どうかしました？」

突然後ろから声をかけられ、振り向く。

「あ、あなたは!!!」

そこには見知ったメガネを掛けた女性が立っていた。

【近くの公園】

「……………」

（…………相変わらずキレイな人。のび太さんはこんな美人と毎日寝起きしてんのよね。家にいる時の二人ってどんな感じなのかしら…………）

そう思いながらシエーレをさりげなくガン見する静香。それを知ってか知らずか、シエーレの口が開いた。

「いつものび太と仲良くしてくれてありがとうございます。静香みたいな子が側にいてくれると安心します。」

「そんな……私は別に……」

「二人はいつからのつき合いなんですか？」

「えーと……幼稚園の時からです。」

「長いんですね。」

それから二人の会話はどんどん進んでいく。

「のび太って昔はどんな子だったんですか？」

「そうですね……」。

何故か目的を忘れてシエーレとの会話に花を咲かせるO X高校の女子学生。

「でもアカメたちがいるから大変でしょう？」

「そうなんですよー！いつもいいところで邪魔して、本当にめいわ……あつ？」

その反応にシエーレは苦笑いする。

「やっぱり？」

「いえ、今のは言葉のアヤ……じゃなくて……その。」

墓穴を掘ってしまったのか、静香の顔がますます赤くなる。

「みんなずーと前からのび太の事が好きだったんですよ……だから離れ離れになっ

た時、何度も諦めようと思いました。もう彼には大切な誰かが出来てるかもしれない。もう私たちの入るスキなんてないのかもしれない。でももしまた再会した時まだ彼の隣が空いていたら。その時は・・・勇気をだしてみようかなって・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・それで静香はのび太の事が好きなんですか？」

「・・・・・・・・そつ・・・!!そそそんな事ないですよ・・・のび太さんとはただの幼馴染で・・・・・・・・」

するとシェーレはニコリと笑う。

「・・・・・・・・私は好きですよ。ずっとずっと前から一人の異性として。」

「えっ!？」

「彼は純粋で、単純で、意気地なしで、怖がりで、泣き虫です。ですがそれは同時に彼の良いところでもあり、私たちが好きになった理由でもあるんです。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その言葉に静香は啞然とする。

「それでは、私はこれで。今日はあなたと話せてよかったです。」

「え・・・・・・・・あの・・・・・・・・」

「お姉さん負けませんから。」

それだけ言うと、シエーレはその場を立ち去る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

あっけに取られて、動けなかった。見ているこつちがドキドキしてしまうような純粹で真つ直ぐな気持ち。

第十四章：久々を斬る

OX高校では校門の前に人集りができていた。それに凄い数のパトカーが止まっている。

「あの、どうかしたんですか？」

スネ夫は野次馬の一人に声をかけた。

「なんでも銃を持った男たちが人質と一緒に学園にたてこもっているらしいよ。」

「銃？」

その言葉に唾然とするジャイアンとスネ夫。だがしばらくすると

「これだ！」

ジャイアンが何かを閃いた。その様子にスネ夫は

（・・・ジャイアンの閃きなんてまたロクなものじゃないぞ。）

「ジャイアン、やめようよ!!」

「何言つてんだ、これはチャンスなんだぞ!!」

ジャイアンは塀を乗り越え、校舎へと侵入する。そしてそれを止めようとするスネ夫。

「お前、いつものび太にいいカツコされて悔しくないのかよ!?!」

「そりゃあ、悔しいけどさ……」

「ならここで手柄を立てれば、のび太を見返せる。」

「……………」

「それにチエルシーちゃんもお前の事を……………」

その言葉にスネ夫は黙り込む。

「チエルシーちゃん……………」

頭も顔も良い。お金だつてある。力もある。だがアカメとチエルシーの目線の先にはいつものび太がいる。彼女たちはいつものび太の隣をあるいている。彼女たちだけじゃない。クロメも、レオーネも、シエーレも。全てにおいて自分たちより劣っているのび太の隣を歩きたがる彼女たちをジャイアンや他の男子たちは理解できなかった。

のび太たちの学校がテロリストたちにとられてから数分後。

「急がないと。」

「ええ。」

早朝、飼育小屋のウサギに餌をあげてたおかげで難を逃れた男女、出木杉 英才と源

静香。すると彼らは突然横から声をかけられる。

「どうするんだ？」

「もちろん、ドラちゃんに知らせるのよ。ドラちゃんに頼めば、テロリストの一人や二人……!!？」

突然声をかけられたことに驚き、二人は視線を横に向ける。

「レ……レオーネさん!？」

「どうしてここへ!？」

そこにいたのはのび太の婚約者である金髪の女性。

「騒がしかったから見に来た。ところでこれはなんの騒ぎだ？」

「なんでも銃を持った人たちが人質と一緒に学園にたてこもっているらしいんです。」

「銃?」

出木杉は状況をレオーネに説明する。

「よし、久々に楽しめそうだな！」

そう言うレオーネは校舎に向かって歩き出す。

「ま……待つてください!!今がどういいう状況か分かってるんですか?」

そんなマイペースな彼女の後を二人は慌てて追いかけた。

【校舎の中】

「ああっ!!」

「これは……」

校舎の中には教師たちの死体が転がっていた。

「おええええええ。」

その酷さに静香は突然吐き出してしまった。

「気をつけろ、二人とも。犯人はまだ近くにいます。」

レオーネの言葉に出木杉は落ち込む。

「ど……どうして僕たちが命令される方に……」

年下とはいえ、校舎の事は自分たちの方が詳しい筈なのに。そんな二人をよそにレ

オーネは腕を回し始める。

「さーて、始めるか！」

「『??』」

「変身、ライオネル!!!」

パキッ

レオーネのベルトが光り出す。

「!?!」

ズツ

「よしっ、この格好になると昂ぶる昂ぶる!」

久しぶりに獣化し、笑みを浮かべるレオーネ。

「・・・・・・・・・・。」

その様子に二人は啞然とする。

「ぐあっ」

レオーネは見回りに来ていたテロリストの一人を瞬殺する。

バタン

「あー、バッチイ。バッチイ。」

そう言いながら手を振るレオーネ。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

一方で、静香と出木杉は愕然としていた。ただの美人だと思っていた彼女が、何かとてつもない力を秘めていた。しかも、この上なく強い。頼れる味方だったという喜びよりも、もし彼女が牙をむいたら、という恐怖が、二人の胸の中に広がっていく。静香は思わず身震いした。

（アカメさんたちもそうなのかな・・・？もしそうなら・・・これからどう接すればいいんだろう。

そんな疑問を抱えながら、静香はレオーネの後を追うのであった。

第十五章：事件を斬る

「ま、待つてくださいいっ！これ以上は危険ですよっ！」

そんな出木杉の言葉を無視して先に進むレオーネ。

「二階に行ってみるか。」

「戻りましょう！ここは警察に任せるべきです……………」

レオーネは静香たちの方に振り向くと

「なんとも言わせるな。私のことは放っておけ。」

「しかし……………」

だがそれでも引き下がらない出木杉。

「はくあ、こんな時にのび太がいればな．．．．．」

そう言いながらレオーネはため息をつく。すると

「聞かせてください！」

「??？」

だんまりを決め込んでいた静香が突然声をあげたので、レオーネと出木杉の視線が彼女の方に向く。

「どうしてのび太さん何ですか？」

「．．．．．」

「他にもいい男性はたくさんいます。出木杉さんや武さんみたいな．．．．．けどのび太さんはただの『ふくん、．．．』ひっ!？」

「．．．．．お前．．．．．のび太の何なの？」

レオーネの気迫に静香は思わず悲鳴をあげてしまう。

「あ．．．．．アタシは．．．．．のび太さんの幼馴染です。」

「ふくん、それだけ？」

「うっ．．．．．」

するとレオーネは静香に近づき

ペロッ

頬を舐めた。

「ひゃあああああつ。」

静香は頬を抑えながら顔を真っ赤にする。そんな彼女にレオーネは

「・・・心配ないよ。もう決めてるから、のび太は私のモノ・・・ってね。」

と笑みを浮かべる。

ガタツ

その言葉に静香は勢い良く立ち上がる。

「のび太さんは!!! 誰のモノでもないわ!!!」

「静香ちゃん・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「あなたが何者なのかは知らない・・・!!・・・けど! どうせいなくなるのにのび

太さんに変な期待させるのはやめて欲しい!!」

「・・・・・・・・・・。」

先程の事で静香はのび太とドラえもんが大変な事件に巻き込まれているのではないかと推理する。するとレオーネは突然

「あ、危ない! テロリストだー! ー!」

「『え!?!』」

二人はパニックになる。静香は咄嗟に本棚にあった本を手に取り、出木杉は本棚の後ろに隠れる。

「ど……ど……どこにいるの!?!」

「ぶっ……ぶっ……」

「……………」

その様子にレオーネは思わず吹き出す。

「殺人犯には本で立ち向かうのがいいのか? さすがだな。」

「……………ふ、ふぎけないで!!」

静香は顔を真っ赤にしながら持っていた本を放り投げる。

「私は……私は真剣なの! 茶化さないでよ!!」

第十六章：最後を斬る

「何だ、お前たち！」

「わっ!?!」

「あっ!?!」

レオーネたちが校舎に侵入した、ほぼ同時刻。

「ど・・・・・・・・どうしよう・・・・・・・・。」

「み・・・・・・・・見つかっちゃった・・・・・・・・。」

レオーネたちとは別ルートで校舎に侵入した四人組。

「スネ夫、お前のせいだぞ！お前が『のび太の鼻を明かそう』なんていうから！」

そう言いながらジャイアンはスネ夫の袖を掴む。

「い、いったのはジャイアンじゃないか!!」

「何だと!?!」

相変わらず一方的に人のせいにする剛田武こと、ジャイアン。そしてそんな二人の隣には

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

見つかったしまったことに顔色一つ変えない、元殺し屋姉妹。

「うっはーっ。可愛い女もいるじゃねえか。」

「たまらねえなあ、連れ帰って楽しもうぜ。」

テロリストたちは彼女たち二人を見てニヤニヤと笑みを浮かべる。

「さあ、大人しくしろ。」

そう言うのとテロリストの一人が銃を彼らに向ける。ジャイアンとスネ夫はその場へへたり込み

「ママーーーーーっ！！！！」

「母ちゃんーーーーーっ！！！！」

大声で泣き出してしまふ。

「さあ、いっしょに『ザシツ』うあっ!?!」

テロリストはその言葉を言い終える前に首から血をながしながら
バタン

その場に倒れた。

「『!?!?』」

その光景にジャイアンたちは勿論、他のテロリストたちも啞然とする。

「このお!!!」

ドドドドドドド

別のテロリストが少女に向かって銃を構え、引き金をひく。

「標的……」

少女はそんな銃撃をかわし、

「葬る!!」

グサツ

「がはっ……」

バタン

銃を持った相手を一瞬で倒した。その光景にジャイアンとスネ夫は

(スッゲー。)

(どうなってるの?)

驚き過ぎて開いた口が塞がらなかった。

ザシツ

グサツ

その間にもアカメとクロメは次々とテロリストを倒していく。そんな彼女たちの華麗な動きに彼らは目を奪われる。

グサツ

そして最後の一人もその場に倒れこむ。

「スゲー、スゲーよ。アカメちゃん！」

「凄いよ、クロメちゃん！」

目をキラキラ輝かせながら、近寄ってくる。そんな二人にアカメは

「……きちんと任務を遂行し、報告を終えて初めて立派と言える。この時点でいい気になってるようでは死ぬぞ。」

「えっ……?」

「最後つてのはあつけないものだよ。」

「……。」

それだけ言うとかアカメたちは歩き出す。そしてその場に残されたのは二人の言葉に呆然とするジャイアンとスネ夫であつた。

第十七章：好きな人を斬る

【数分後】

「まさかスネ夫たちとはぐれちゃうなんて。」

そう言いながらアカメの後ろをソワソワしながら歩くジャイアン。するとジャイアンはあることに気づく。

（これってチャンスじゃないか!?!）

ジャイアンは緊張している体に鞭を打って、口を開いた。

「あ……あの……アカメちゃん……」

「!?!」

バツ

アカメはジャイアンの口を塞ぐとそのままロッカーの中に身を隠す。すると廊下をテロリストたちが通り過ぎる。

「……………」

ロッカーの中から外の様子を伺うアカメ。

「……………」

二人の体が密着するたびに女の子独特の柔らかな香りが漂ってくる。密着しているおかげで、彼女の重みも体温も柔らかさも全てが手に取るようにわかる。それゆえに思わず後ろから強く抱きしめたい衝動にかられる。ジャイアンは必死で煩惱と戦っていた。そしてしばらくすると

ガタン

アカメはロツカーを開き、外に出る。

「……………。」

その後ろからジャイアンが息を切らしながら出てくる。

「……………ハア……………ハア……………。」

天国にいった気分を味わったジャイアンはそのまま地面に膝をつく。そんな彼にアカメは心配そうに近寄る。

「どうした？ 顔が赤いぞ。」

「……………まあね……………それは……………ハア……………ハア……………ホラ……………。当然だよ。……………。」

「??？」

「……………好きな人と一緒にいるからというか……………はは……………。」

「……………。」

「／／／／お、驚いたでしょ？俺はアカメちゃんのことを好きなんだ。／／／／／」
「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

アカメは心の中で顔を顰める。まさか知っていたとは言えない。

「・・・・・・・・そこまで言ってもらえて嬉しいが・・・確認だがクロメではなく私が好き・・・なんだよな？」

「ああ。俺はアカメちゃんが一番好きだ！」

そう言いながら笑顔で胸を張るジャイアン。

「そ、そうか・・・・・・・・。」

その反対にアカメは困った顔をする。

「そつ、それであるその・・・・アカメちゃんは俺のことはやつぱり・・・・その・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「と、友だち・・・・みたいな感じかな？男には・・・・見れないかな？」

「すまない。その通りだ。」

「!!」

キツパリしかも即答するアカメ。

「私には好きな人がいるんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

その言葉にジャイアンは拳を強く握りしめる。すると彼はポケットから何かを取り出す。

「アカメちゃん、これあげる。」

「??？」

彼が取り出したのはドラえもんから借りた製氷皿を模した道具。しばらくポケットに入れていたせいか氷はすぐに解け始め

♪

同時にどこからともなく甘酸っぱい空気が流れ

「ぼくは武。好き、好き、愛してる！とつても愛してる〜!!」

と音声メツセージが流れる。それを聞いたアカメは呆然とし、固まる。

「……………」

ニヤリ

その様子にジャイアンは笑みを浮かべ

(やった!!)

ガッツポーズをする。

【同時刻】

アカメたちとはぐれてしまったクロメとスネ夫は

ぼりぼり

かりかり

お菓子を食べながらテーブルに座るクロメ。そしてその様子を横からガン見するスネ夫。

（改めてみると本当に可愛いな。まつ毛も長いし、髪も整ってる、瞳の色も綺麗。そして何よりあのジャイアンより強いし、かつこいい。チエルシーちゃんとはまた違うタイプだな。）

スネ夫は先ほどのクロメの戦いを思い出し

（ハア〜っ。）

うっとりする。

（これがあののび太のお嫁さんなんて信じられないよ！）

「!？」

スネ夫の視線に気づいたクロメは

「このお菓子はあげない！」

お菓子の袋を抱きしめる。

「……」
 「なに？」

「そんなにお菓子が好きなら。僕が毎日食べさせてあげるよ。」
 「スネ夫には無理だよ。」

素っ気なくスネ夫の誘惑を即答するクロメ。

「でも僕の家にはお菓子よりお『余計なお世話』うつ……」

そう言いながら再びお菓子を食べ始めるクロメ。

「もう少し栄養のある物を『したらスネ夫みたいなマザコンになっちゃう。』なっ!?」
 取り次ぐ暇もなく再び引き剥がされてしまう。

(そうだ、あれを試してみよう!)

するとスネ夫はポケットから何かを取り出し、

プシュ

「!?」

それを大量にクロメに吹きかける。それはドラえもんから借りたガス状の秘密道具。

「やったー……っ!!!」

するとクロメは呆然とし、固まる。

「……」

ニヤリ

その様子にスネ夫は笑みを浮かべ
(成功だ!!)

ガッツポーズをする。

第十九章：文句を斬る

ギロリ

「私も真剣だ。帰るならお前が帰れ。」

その言葉に静香は言葉を失いシユンとなる。

「……………」

「お前こそすぐ死ぬぞ。弱くせに何でもかんでも突っこんでいきやがって。」

「……………」

(地球人はみんなのび太みたいな奴らだと思っただけど、そうでもないんだな。まっ、こいつの言う通りのび太たちをナイトレイドに入れたのは私だけ……ん!?)

レオーネの視線が天井に向く。

「静香逃げろ!!上だっ!上にいるぞっ!!」

レオーネの必死の叫びに静香は

「いい加減にして!!」

先ほどのイタズラがお気に召さなかったのか彼女の言葉に耳を貸さない。

「二度も同じ失敗するものですかっ。そんな間抜けじゃないわよ。」

すると頭上から手が伸びてくると

ガッ

静香の首を掴む。

「あ……うう！あぁっ……！」

いきなりの事で出木杉は腰を抜かす。

「うるせーぞ、お前ら。さつきからドタバタドタバタ『ガアン』ぐはっ!」

バコン!!

レオーネの蹴りで男は吹き飛びそのまま壁に激突する。

「一丁あがり！」

「……ケホッ……ケホッ……。」

そんなレオーネに静香は

「あ……あの……ありがとうございました。本当になんと……おれ……」

静香の言葉が急に途切れる。

「??」

「よ……余計なことをしないでくださいっ！私は逃げるといいませんでしたか？」

「はっ。」

「このぐらいの相手、私だけで十分でした。これからは私の命令に従ってください。」

「えと・・・命令した奴がアツサリ捕まった時は・・・」

「あ、あれは・・・油断させてから攻撃する作戦だったのです・・・」

「ウソつけ!!」

そして数分後。

「ふいーっ到着!」

やっと思的地に着いたレオーネたち。

「こつちこつち早く来いよ!」

そう言いながら天井の板を外し、中の様子を伺う。

「見てみる。」

『!?!』

部屋の中央に縛られた女子生徒たちと女子教師たちが集められていた。そして彼女たちを囲むように銃を持ったテロリストたちがそれぞれの場所で待機していた。

「さて、さっさと始末しよう！」

そう言いながら指を鳴らすレオーネ。

「ダメです!!」

出木杉はとっさにレオーネの両足を掴んだ。

バタン

そのせいで彼女はバランスを崩し、顔から地面に激突する。

「な、何すんだコラー。」

「強い相手と言ったはずですっ！正面から向かって行って、勝てると思っっているのですか！」

「関係あるか離せ!!」

「いけませんったら!」

第二十章：仲間外れを斬る

二人がコソコソと屋根裏で争っている

ミシツ

レオーネたちが立っている場所から変な音が

「!?!」

ドコン

いきなり天井の床が落ちてきた。

「『!?!』」

突然の事に全員慌てふためく。

「ハアアッ、たく。お前のせいで見つかったじゃないか！」

天井から突然現れる元殺し屋。

「侵入者だ！始末しろ!!」

突然の侵入者にテロリストは慌てて銃を構える。

「しょうがない、まとめて逝かせてやる。」

気を取り直して指をならすレオーネ。

ドン

ドコン

バタン

テロリストたちを次々と始末するレオーネ。人質がいるのに御構い無しである。だが

「そこまでだ!!」

「!？」

後ろを向くと、そこには出木杉の頭に銃口を向けた男がいた。

「コイツの命が惜しければ、大人しくしろ!!」

「くっ！」

その言葉にレオーネの動きが止まる。

「それでいい。やれ！」

テロリストの一人がレオーネに銃を構え

バン

バン

発砲する。

バタン

レオーネはそのまま仰向けになって倒れる。

「やったぜ。まずは一人。」

そう言いながらゆっくりと倒れたレオーネに近づくと男。

「出木杉さんを離しなさい!!」

『!?!』

そう言いながら静香はハサミを武器に後ろから襲いかかる。

「おっと。」

ゲシッ

男はそれを難なく交わすと静香を蹴り飛ばす。

「きゃあー!」

バコン

壁に激突して倒れこむ静香。

「わ・・・わたしは・・・」

それでも何とか立ち上がろうとする彼女の頭に蘇るある光景。

【やーい、ダメ男ののび太くん!】

【テストは？全部赤点！運動は？のび太のいるチームはいつも負け！】
【何で、のび太ってあんなにバカなんだ？】

いつも私の隣でみんなからバカにされていた男の子。

・ 【ゴメン静香ちゃん。約束守れなくて・・・】

【えっ・・・？なんの話？】

【いや・・・だから・・・その・・・ほら・・・プール付きの家さ。】

【ああ！あてになんかしてないわよ！のび太さんの言うことだもん！】

そして私も一緒になって虐めてた。のび太さんが仲間外れにされた時だって、いつも置き去りにしていた。そう、私はただ見ていただけ。そしてある日、彼の前に現れた五人の女の子。彼女たちとのび太さんは何か強い力で繋がっている。いつの間にか彼は私の方に振り返らなくなった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
心に穴が空いたみたい。今ならのび太さんの気持ちが良い分かる。これが仲間外れ・・・・・・・・痛い・・・・・・・・苦しい・・・・・・・・そしてなにより寂しい。ごめんなさい、のび太さん。

第二十一章：変わるを斬る

仲間外れになって初めて痛みを理解した。それと同時に今までの自分がいやになった。変わりたい。こんなダメな自分から。自分に胸を張れる自分に。

「どう？今までバカにされてた奴にやられる気分は？」

「変わりたい？本気で言ってるの？」

「散々他人を見下してきておいて、今更凶々しい。」

そう、今までも何度も決意した。でもやろうとしなかった、逃げてばかりいた。いつかはできるようになってると未来の自分に無責任な期待を込めて。・・・でもやらなきゃ、変わらない・・・変われないんだ！

ガタガタの体に鞭を打って何とか立ち上がる静香。

「私は……私は……」

「??」

「もう逃げない、前に進むんだ!!!」

そう言いながら静香は再びハサミを片手に突撃する。

「おい、また来たぜ。」

「ああ。」

静香の様子にテロリストたちはクスクスと笑い出す。テロリストが自分に向かってくる静香を再び足で蹴り飛ばそうとするが

「!？」

動けない。何かが両足を抑えている。そうこうしているうちに静香が迫ってくる。

グサリ

ハサミが男の脇腹をかすった。

「くっ!?!このアマ!!」

怒ったテロリストは静香をなぎ払うと、そのまま銃口を彼女に向ける。

(やったわ!どう?のび太さん、みんな、凄いでしょ!?)

最後の力を振り絞った少女はそのまま倒れこむ。それと同時に銃口の引き金が引かれ

バン

バン

弾丸が彼女の体をかんつう

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」。

しなかった。

「!?!」

「何者だ!?!」

突然テロリストと静香の間に現れた白髪の少年。

「のび太さん・・・・?」

目の前に立つ幼馴染の少年。だがその目は普段の彼からは想像もつかないほど鋭く、冷たい。

「よく頑張ったな、静香。」

彼は後ろを向きながらそう言った。すると

バキン

部屋の窓ガラスが割れ

「いい悪態だ。精神的にはお前の勝ちだな。」

「うん。」

そう言いながら部屋に飛び込んでくる元殺し屋姉妹。

「アカメさん、クロメさん……」

テロリストたちは焦り始める。

「まだだ……こつちにはまだ人質が……なに!？」

辺りを見渡すと人質が一人もいない。

「人質はもう全員逃げたぞ。」

ゴキン

そう言いながらテロリストの一人の首を握り潰すレオーネ。

グサリ

それと同時に別のテロリストの上半身と下半身が真っ二つになる。

「すいません。」

姿を表す見知ったメガネの女性。

のび太は最後の一人にジワジワと滲みよる。

「あつ、そうだ。俺たちと手を組まないか!?俺たちはある国の『グサリ』なっ!」

最後のテロリストはその言葉を言い切ることなく

(な・・・なんて目をしてるんだ。人を殺すのに一茶の迷いが無い・・・)

バタン

その場に倒れた。

第二十二章：違いを斬る

のび太たちの活躍で人質は全員無事に救出された。そして数分後、機動隊が突入し、現場検証が行われていた。

「大丈夫？」

「うん。それより人質の救出ありがとう。」

「僕にかかれば、お安い御用だよ。」

学校のベンチに座り、寛ぐのび太とドラえもん。

「おーい。のび太、ドラえもん！」

大声とともに現れるガキ大将と赤目の少女。

「のび太、大丈夫か？」

アカメの言葉にのび太の声が段々小さくなる。

「うん、大丈夫。それよりごめんね、アカメ。また助けられなくて……。」

地球に態々来てもらったのに、また殺しをさせてしまった。そんな罪悪感からか申し訳なさそうな顔をするのび太。

バコン

そんな彼の頭にアカメはチョップを下すと、

「何度だって助けるさ。妻だからな！」

優しく微笑みかける。そんなアカメの涼しげな表情は、みている者全員がドキツとするほど大人びていた。これはのび太にしか見せないアカメの隠れた一面なのである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな二人の姿にジャイアンは啞然とする。

しばらくすると。

「おーい、みんな。」

「スネ夫、それにクロメちゃんだ。」

大声とともに現れるスネ夫と黒髪の少女。

二人は小走りでのび太たちの元までやってくる。

「みんな無事だったんだね。」

「良かった・・・・・・・・」

そんな二人にのび太は

「スネ夫も、チエルシーも無事で良かった。」

「えっ!？」

のび太の言葉にスネ夫は驚く。

「チエルシー……ちゃん……?」

そう言いながらスネ夫は視線を隣の少女に向ける。視線を向けられた当の本人も目を見開いている。

「………なんで一瞬で分かったの?」

するとクロメ?の周囲を煙が包みこむ。煙が晴れると、そこには

「も………何よ、つまんないの……!!態々ドラちゃんから道具を借りてまでリアルに変装したのに。」

変身を解除するなり文句を言い出すチエルシー。

「…… あわ……あわ……あわ……あわ……」

今まで一緒に行動していた相手が愛しのチエルシーだったことに驚くスネ夫。

「なんで分かったの?今まで誰にも見破られなかったのに。私なにかミスった?」

そう言いながらのび太に詰め寄るチエルシー。今まで何度もこの変身を彼に見破られてきた彼女にとって今回の変身には自信があった。なぜならドラえもんの道具を使い、クロメの戦闘能力までもコピーしていたのだから。そんな彼女にのび太は

「どれだけ一緒にいると思ってるんだよ?わかるに決まってるでしょ?長い付き合いな

んだからさ。」

「素っ気無く答えるのび太にチエルシーは顔を赤くしながら言葉につまる。
／／／／／．．．．．うっ．．．．．（つままないの．．．．．）／／／／／。」

最終章：前言撤回を斬る

「あの……………」

『!?!』

突然声をかけられて振り向くのび太たち。

「ごめんなさい、何もできなくて。」

「アカメさんたちだけを怖い目に合わせちゃって……………」

そう言いながらおずおずと声をかける生徒たち。そんな彼らにのび太は

「虫のいい話だな……………」

『!?!』

「生死の栄目で怯え。何もできなかった事を恥じる。」

のび太の言葉がグサリと生徒たちの胸に突き刺さる。

「そんなこといわれても……………」

「ねえ……………」

生徒たちは段々小さくなっていく。すると

「みんな怖かったんだよ。」

『「!」』

今回一番の被害者が現れる。

「静香さん。」

「源さん。」

包帯姿の静香はのび太たちの前に来ると

「のび太さん、ドラちゃん、アカメさん、クロメさん、チエルシーさん、シエーレさん、レオーネさん、ありがとう。」

助けてもらったことに心から礼を言う静香。礼を言われ、のび太たちは笑みを浮かべる。

「よく頑張ったな。」

「静香ちゃんこそ。」

「偉いぞ。」

「うん。」

「頑張ったわね。」

「こちらこそ。」

「たいしたもんだ。」

「ドラちゃん、これ返すわ。」

そう言いながら借りていた道具を差し出す静香。

「俺も。」

「僕も。」

静香に続きジャイアンとスネ夫もそれぞれ差し出す。

「気が済んだかい？」

そう言いながらドラえもんは道具を受け取り、ポケットの中にしまう。

「分かったかい？愛は物に頼っちゃダメなんだよ！」

ドラえもんの言葉に三人は頷く。

「ええ、アカメさんたちを見てて分かったわ。人の気持ちは物では動かせないのね。」

「俺たちどうかしてたぜ。」

「僕なんかハッキリいわれちゃったよ、『機械で友だちを作ろうなんて可哀想な人』ってね。」

そう言いながら恥ずかしそうに顔を見合わす三人。ドラえもんの道具をもつてしてものび太への気持ちは変えられなかったそうだ。

「俺だつて男だ。これからは正々堂々勝負するぜ。」

「僕もチエルシーちゃんに似合う立派な男になるよ。」

「私も。」

好きな人を振り向かせたかったら、まず自分自身が変わらなくちゃいけない。みんなそれを分かってくれたようで何よりだ。そんな三人の様子にドラえもんは満足そうに笑みを浮かべる。

『「だからドラ（ちゃん） えもんー!」』

「えっ?」

いきなり三人同時に声をかけられ目を点にするドラえもん。

『「道具だして!!」』

「.....」

前言撤回。どうやら分かってもらえなかったようだ。

初夢

プロローグ

場所とはあるホテル。

ホテル内に設置されたチャペルには、パイプオルガンの重厚な音楽が鳴り響き、大きな扉が開く。すると、タキシードを着た凛々しい青年と、純白のドレスに身を包んだ、ドレスに劣らない色白な美人が現れ、無数のカメラのフラッシュが向けられた。2人が十字架の前まで進むと、次第に沿って神父が進行を始める。

「汝、あなたは、この女を妻とし、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかな時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

「誓います！」

「汝、あなたは、この男を夫とし、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかな時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、夫を想い、夫のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

「誓います！」

二人はうつすらと目に涙を浮かべ、見つめ合う。式の最中だから声には出せない。月並みな言葉になってしまいが、この瞬間、二人ははつきりと「以心伝心」した。そして二人は、人生で一番神聖な口づけを交わ・・・

「うわあああああああああああああ!!!!!!」

青年はいきなり大声をだしながら布団から起き上がる。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・夢か・・・」

肩で息をしながらその場にへたり込む。時計をみると、まだ真夜中である。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

初夢、新年になって最初にみる夢。その年の吉凶を占おうとする夢占の一種である。もし今のが初夢なら今年も平和には終わらないということである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

青年は夢で見た光景を思い出す。あれは間違はなく結婚式、そしてそこにいたのは間

違いなくタキシード姿の自分。そしてなにより問題なのは自分の隣にいた人物。ウエ
デイグドレスに身を包み、自ら誓いの接吻をかわそうとした女性。だが残念ながら彼女
の顔が思い出せない。何故かそこだけ霧がかかってかのようにぼやけている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すると青年は振り向き、隣で寝ている彼女たちに視線を向ける。青年とは反対に幸せ
そうな寝顔で眠っている。どうやら彼女たちも初夢を見ているらしい。一体どんな夢
を見ているのだろうか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

青年はゆっくりと起き上がると、そのまま部屋を出て行った。

第一章：初夢を斬る

次の日。何故か朝早く目が覚めるのび太。

「はぁーーーーー」

あくびをしながら上半身を起こすのび太。すると

「あつ、のび太。おはよう。」

隣で寝ていたチエルシーが目を覚ます。

「うーーーーーん！」

腕を伸ばしながら上半身をおこすチエルシー。

「あつ、おはよう……ん？」

すると、のび太にある異変が起こる。何故か彼の目にはウエディグドレスに身を包ん

だチエルシーの姿が映し出される。

「……………」

「どうかした?!!」

そんな彼を心配そうな顔で見つめてくるチエルシー。

「……………」

顔を近づけてくる彼女にのび太は真っ赤な顔をしながら後ずさる。

「わあああああああああああああ!!!」

のび太は慌てて一階へと降りていった。

「???」

その様子に残されたチエルシーは啞然とする。

そして二階から慌てて降りて来るのび太。

「おはよう、のび太。」

いつものように朝の挨拶をされる。

「あつ、おはよう……ア……カメ……？」

するとまた昨日見た夢の光景が頭をよぎる。

「??？」

アカメの顔があゝの夢の中の花嫁の顔と重なり合う。

「////////////////////うっ////////////////。」

顔を真っ赤にして目を逸らすのび太。

「どうした？」

「////////////////////な、なんでもないよ……////////////////////」

何とか誤魔化す事が出来た。すると

ムニユウ

「??？」

いきなり柔らかい感触が顔面に押し当てられる。

「おはよう、のび太。そして今年もよろしく〜♡」

そう言いながら胸をグイグイと押し付けてくる。

「う……う……う……う……」

「あれ？」

するとレオーネはあることに気づく。いつもならこの辺で『やめろ』とツツコミが返ってくるはずなのに、今日は違う。それどころか……

「おい、のび太？おーーーーーい？」

顔を真っ青にしながら動かなくなっている。

「ありやあ、窒息してる……………」

「……………」

その光景にレオーネもアカメも驚く。

「あら、どうしたのクロメちゃん？随分、嬉しそうね。」

「何かいいことでもあったのか？」

朝食の時間。何故かうキウキ気分でいるクロメに玉子とのび助は声をかけた。

「うん、昨日結婚式の夢をみたの!!」

(うっ!?)

クロメの発言に思わず食べていた物を喉に詰まらせるのび太。

「まあ！結婚式!？」

「それってもしかして正夢かもしれないな！」

玉子とのび助の発言にクロメは

「もちろん正夢だよ、ね？のび太。」

「／／／／えっ？な、な、何で僕に聞くの？／／／／／」

「だって私とのび太の結婚式だったんだもん♡」

そう言いながら嬉しそうにのび太に抱きつくクロメ。しかし

「正夢じゃないよ！だって私だって見たもん、結婚式の夢!!!」

「あっ、私も私も。」

「私も見た。」

「私もだ。」

「すいません、私も・・・。」

翼、レオーネ、チエルシー、アカメ、シエーレは真っ向からクロメの意見を否定する。

第二章：初詣を斬る

「これで、よし!!」

「ありがとうございますー!」

玉子はシエーレの帯を強く締める。

「キツくない?大丈夫?」

「いえ、大丈夫です。」

「//////////////////////」

シエーレの着物姿をマジマジみるのび太。

「どうですか、のび太?」

シエーレは反時計回りに回りはじめた。

「//////////////////////」

夢の印象がまだ頭に残っているのか、のび太は目線を逸らす。

「やっぱり変ですか・・・?」

のび太の反応にシエーレの顔が暗くなる。

「//////////////////////いや・・・似合ってるよ・・・うん・・・すっごく似合ってる!!」

／／／
「そうですか。」

のび太の言葉にシェーレは明るくなり、安心の笑みを浮かべる。すると

「のび太、シェーレだけじゃなくて私たちのことも見てよ！」

振り向くとそこには同じく着物姿に身を包んだクロメたちがいた。

／／／／／／／／ あっ、うん。みんなとってもよく似合ってる！／／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

のび太の言葉にクロメたちは顔を赤くしながら笑みを浮かべる。

しばらくすると

『『の・び・た・くーーーーーん!!!』』

玄関から声がした。どうやらジャイアンたちが来たようだ。

近所の神社。

「おい、見ろよあそこ!!!」

「スツゲー、美人……」

初詣に出かけるのび太たちだったが、外に出た途端注目の的になってしまった。

「思っていたより人が多いな。」

「そうだね。はぐれちやいそう。」

元旦のせいか沢山の人たちが神社に集まっていた。

「それじゃあ、逸れないように手を繋ごうよ。」

そう言うとき静香はのび太の手を握ろうと手をのば……

バチン

ベチン

伸ばした手をチエルシーとクロメがしつぺで叩く。

「痛〜い!!何するのよ、いきなり!!」

涙目になりながら怒り出す静香。

「どさくさに紛れてなにしてんのよ?」

「懲りないね。」

そう言いながらジト目で静香を睨む二人。そんな事をしていると

「逸れたら、大変ですね。」

「そうだな。」

「逸れないようにしないと。」

「そのためには……。」

そう言うトシエーレはのび太の右腕、翼は左腕、レオーネは背中、アカメは胸に強く絡みつく。その光景に初詣来ていた全員が唖然とする。当然だろう、傍から見るとそれはまるでどこかの合体ロボのようである。

「／／／／／／／／うっ……／／／／／／／／／／」

みんなの視線を感じ、恥ずかしくなったのか、のび太は急いでその場を立ち去る。

ガシヤン

ガシヤン

その姿はガンダムそのものである。

「ちよつと、みんな!!!」

「何してるのよ!!!」

そしてそんな彼らをクロメたちは急いで追いかける。

第三章：おみくじを斬る

チリンチリン

パン

パン

御賽銭にお金を入れ、手を合わせ、お祈りするのび太たち。

「のび太さんは何を願ったの？」

「あつ、私も知りたい。」

「教えて。」

「お願います。」

静香の言葉にチエルシーたちも同意し、全員期待に満ちた瞳を向けてくる。そんな視線を感じながらのび太は静かに口を開く。

「世界平和。」

「『』……『』」

のび太の返答に全員哀れみの視線を向けてくる。

(何これ？僕が悪いの？)

実際のび太の本当の願いは毎日のように繰り返すハチャメチャな騒動がなくなりま
すようにと、世界平和以前に自分自身の平和を願ったのである。

「のび太は相変わらずのび太だな。」

そう言いながらのび太をバカにするスネ夫。

「僕なんかしよう『あつ、あそこでお守り売ってるよ！』・・って聞いてよ、みんな!!」

スネ夫の自慢話が始まった。だが全員『聞くだけ無駄』という事を今までパターンか
ら学習している。

「あつ、ラツキー大吉!!」

そう言いながらレオーネは大喜びする。

「あつ、私も。『思いを告白しなさい、会うにつれ、想いは深まり、全ては幸せな将来がある』だって。」

「私は『結婚はいつのときか神に感謝するでしょう』だ。」

おみくじで何故かアカメたちは全員、大吉を引き当ててしまう。しかも書かれている内容がほぼ恋愛関係のことである。そんな彼女たちを尻目に

（くくり

「.....」

のび太は自分のおみくじを開く。

大凶：災いはすぐ側まで迫ってきています。用心しないと、命を落とします。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

書かれていた内容にのび太は呆然とする。今年こそ、平和な日常をおくれると期待していたのだが、どうやらそれはかなわないようだ。

「全く、この着物というものは何でこんなに動きづらいの？」

少女は大急ぎで神社の階段を降り始める。だが

「あっ!!」

バランスを崩し、てんとう・・・

バサッ

「大丈夫?」

少女は体を支えられ、起き上がる。

「／／／／／ ええ、何とか。／／／／／」

そう言いながら少女はのび太の顔をマジマジと観察する。

「どうしたの?」

「あっ、あの・・・ありがとうございます。」

するとのび太はあることに気づく。

「あっ、鼻緒切れてる。そのままじつとしてて。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「はい、これでしばらく持つと思うよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「それじゃあ、僕はこれで。」

そう言いながらのび太はアカメたちとの待ち合わせ場所へと向かった。

第五章：緊急会議を斬る

次の日。いつものように二階から降りて来るのび太。

「おはようございます、のび太。」

そしていつものように朝の挨拶をするシエーレ。

「／／／／／ あっ、お、お、おはよう、シエーレ。／／／／／」

「??？」

明らかに挙動不審な彼にシエーレは

「どうかしました？」

「／／／／／ な、な、なんでもないよ。／／／／／」

そう言いながら目線を逸らすのび太。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

そんな彼を不安そうな顔で見つめるシエーレ。

「おはよう、のび太！」

そう言いながらいつものように抱きつくクロメだったが

サッ

「えっ!？」

間一髪それをかわすのび太。その行動にクロメは勿論、アカメたちも

「『』……『』……『』……『』」

驚く。

そしてその数時間後、のび太がいない野比家では緊急会議が開かれていた。

「レオーネ。のび太に何したの？」

クロメは可愛く頬を膨らませて怒る。

「へ?何だよいきなり……」

「のび太、最近明らかに態度がおかしいでしょう。」

「……まあ、確かに……。」

「のび太が何かするとは考えづらいし……。だとしたらレオーネが何かしたんじゃないの?」

そう言いながらクロメたちはレオーネをジト目で睨む。

「おい、ちよつと待て!!何で私なんだよ!!」

慌てて弁解しようとするレオーネにチエルシーは

「レオーネはスケベだからね、どうせまたロクでもないことじゃないの?」

「////// ち、違う!何言ってるんだ!私がそんなことするわけないだろう!大体、私よりチエルシーの方がスケベだろう?//////」

今度はチエルシーに疑いの目が向けられる。

「////// な、なに言ってるの!?!そんな訳ないでしょう!?!//////」

「昨日だって、布団の中でのび太に抱きつきながら、色々スケベな寝言言ってぞ!!」

「////// なっ!?!そんな事言うんだったら、いつも異常なまでのスキンシップをするクロメちゃんの方が怪しいよ!!//////」

すると今度はクロメに疑いの目が向けられる。

「異常じゃないもん!『あめりか』とか言う国では一般的な挨拶の仕方だって、本に書い

てあつたよ!」

「ここは『あめりか』じゃない。『につぼん』だ。」

「そういうお姉ちゃんはどうなの? いつも興味ない顔して、色々エッチな妄想してるじゃない!」

「/// /// なっ!?! /// ///」

そして今度はアカメに疑いの目が向けられる。

「/// /// まあ、アカメったら・・・ /// ///」

「それは言えてる。」

「アカメはこれでムツツリだからな。」

「/// /// ち、違う! そ、そんな事はない!!!!
/// ///」

第六章：すれ違いを斬る（前偏）

キーンコンカーンコン

いつものようにお昼の時間がやってくる。生徒たちがそれぞれ購買、学食、中庭へと向かうため席を立ち上がる。

「の、の、のび太……」

「!？」

席を立とうとしたのび太にいきなりアカメが話しかける。

「アカメ？今日は学食に行く日だよ。」

今日は金曜日、決まりとして今日は弁当ではなく学食で食べることになっている。

「あ、いや……その事なんだが、もし良かったら一緒に弁当を食べないか？」

「弁当？」

アカメはソワソワしながら二人分の弁当を見せる。

「その……昨日の夕食の残りだ。今日中に食べないといけないから弁当に詰めてきた。」

「……………」

「・・・・・・・・・・ダメか？」

「あつ、うん『おい、野比！ちよつとこつち来て揭示物剥がすの手伝つてくれ！』あつ、はーい！」

するといきなり先生に呼ばれる。

「・・・・・・・・つてことだから。ごめん、野暮用ができたから先に食べててくれない？」

「あ・・・・・・・・ああ、分かった。」

「ごめんね。」

そっくりながらのび太は教室を出て行った。

「・・・・・・・・・・のび太。」

「先生の手伝いじゃ仕方ない」そう自分に言い聞かせながら、アカメは自分の席に戻っていった。

そして美術の時間。

「今日はペアになってで写生をしてもらう！」

ザワザワ

先生の言葉に全員ざわめきだす。

（どうしよう．．．絵は昔から苦手だ．．．。へ々に美形の奴と組んだら、とんでも無いことになるぞ。）

のび太は急いで席を立つと

（出来るだけ普通の顔した奴と．．．。）

あたりを見渡し、知り合いのガキ大将に目が止まる。

（よし、あれにしよう！）

まるで漫画に出てくるような顔。『あの顔なら自分でもかける』と喜んでいると横から声をかけられる。

「あ、あの、のび太．．．」

「!?」

見ると今度はがソワソワしたチエルシーが立っていた。

「もし相手が決まってるのなら、その．．．良かったら一緒にやらない?」

（断る!）

「私も相手が見つからなくて．．．」

（嘘つけ、そんなことあるはずがない!）

そんな事を考えていると、後ろから

「チエルシーさん、僕と組みませんか？」

「いや、俺と。」

「いいや、ここは美術部である僕と。」

（ほら、見ろ！）

クラスの男子たちがチエルシー目当てにやってきた。

「あつ、ごめん・・・僕、ジャイアンと組む事にしたんだ。だからまた今度ね。」

遠慮がちに彼女の誘いをけるのび太。

「・・・そ、そ・・・そうなんだ。その・・・ごめん、無理に誘っちゃって・・・」

「うん、また今度ね。」

そういうながらもび太はその場を後にする。

「・・・のび太。」

「相手が決まってるじゃ仕方ない」そう自分に言い聞かせながら、チエルシーは自分の席に戻っていった。

第七章：すれ違いを斬る（後偏）

そして家庭科の時間。

「今日の調理実習はケーキ作りだ！」

ザワザワ

先生の言葉にクラスが再びざわめきだす。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

のび太は調理台の上にある卵と泡立て器を手取る。すると

「あ、あの、のび太・・・・・・・・」

「!？」

隣を見るとソワソワしたクロメが立っていた。

「//////////////////////もし良かったら一緒に作らない？//////////////////////」

そう言いながら上目遣いで見てくるクロメ。

「うん、いいよ！」

「//////////////////////本当ー!!!やったあ!!!//////////////////////」

顔を赤くしながら大喜びするクロメ。

「ん？」

のび太はクロメの服装に視線を向ける。

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

するとのび太の頭にある光景が浮かび上がる。

何故か家の玄関でスーツ姿の自分が立っている。

「お帰り貴方♪」

そして何故かエプロン姿のクロメが台所から顔を出す。

／／／／／／貴方、お風呂にする？お食事にする？それとも・・・わ・た・し？／／／／／

「／／／／／ うっ……／／／／／」

あまりに過激なイメージだったのか、顔を真っ赤にするのび太。

「どうしたの？」

「／／／／／ な、なんでもないよ。あつ、ごめん……僕、気分悪いから保健室に行つてくる！／／／／／」

「えっ!?大丈夫!?私も付いて行こうか？」

そう言いながら心配そうな視線を向けるクロメ。

「／／／／／ 大丈夫、一人で行けるよ。それじゃあ!／／／／／」

そういうしながらのび太は教室を後にする。

「………のび太。」

「体調が悪いんじゃない?仕方ない」そう自分に言い聞かせるが、クロメはしゅんと落ち込んでしまう。

放課後。

「雨だ。」

傘を忘れたので立ち往生をするのび太。すると

「あ、あの、のび太……」

「!?」

振り向くと、そこにはソワソワしたシエーレが立っていた。

「もし良かったら一緒に帰りませんか？」

そう言いながら傘を取り出す。どうやら中に入れてくれるらしい。

「えっ? あつ、うん。いいよ。それじゃあ……」

すると後ろから

「どうしよう……傘、忘れちゃった……」

「??」

振り向くと静香が自分と同じように途方にくれている。

「……」

それを見たのび太はある事を思いつく。

「ごめん。僕、先に帰るね！」

「えっ?」

彼の言葉にシエーレは哑然とする。

「代わりに静香ちゃんを送って行って。それじゃあ!!」

のび太はカバンを傘代わりにするとそのまま外に走っていった。

「.....」
残されたシエーレは何故か寂しそうな表情を浮かべる。

「……………どうしたのアカメ、そんな顔して？」

「……………。」

訳を聞いたが、何故か黙りを決めるアカメ。

「みんなも。何か、あったの？」

「……………。」

そしてアカメと同じ行動をとるチエルシーたち。

しばらくすると

「のび太……………」

ようやくクロメが口を開く。その目からは次々と涙がこぼれ落ちている。アカメとシエーレも今にも泣き出しそうに潤んだ目をぎゅつと細めていた。チエルシーとレオーネは顔を赤くしながら気まずそうな態度を取っていた。

「……………のび太、お願い……………」

「??？」

「もう、あんなことしないから……………私のこと、嫌いにならないで……………お願い……………」
クロメは泣きながら必死に訴える。

「……………あんなこと?」

「この頃ずっと、私のことよそよそしく避けてる……………」
「??？」

話が良く分からず混乱するのび太。するとチエルシー、レオーネ、シエーレたちも「武やスネ夫、静香とは普通に話しているのに、私たちが話しかけても目も合わせてくれないし……………」

「あ、あんなことしたのは私たちだから……………私たちのこと、軽蔑されても仕方ないとは分かってる……………でも」

「でも、もう二度とあんなことしませんから……………その……………」

口を開く。

「お願い……のび太に嫌われたら、私……!!」
シクシクと涙を流しながら泣くクロメ。

「……いや、別にみんなのこと避けてないし、そもそも一ミリも嫌ってなんかないけど……」

「え……?」

のび太の言葉に全員驚く。

「で、でも……じゃあ何で、あんまり目も合わせてくれなかつたんですか……？」

「い、いやそれは……その……」

「……やっぱり怒ってるんだな……お前は、優しいからはつきり言わないだけで……」

「ち、違うって！別に怒ってなんか居ないってば！」

「じゃ、じゃあ、どうしてあんなに素っ気無い態度だったの？全然目も合わせてくれないし……私、すごく不安で……」

「そ、それは……だから、その……」

気まずそうに顔を赤らめるのび太。

「……違うんだよ、みんな。変な誤解をさせてたならごめん。」

『『『』』』』

こうなつては仕方がない。少々危険だが、『正直に全てを話そう』、のび太はそう思っ

た。

「初夢って知ってる？」

「え……あ、ああ……新年になって最初にみる夢。その年の吉凶を占おうとする夢占の一種。」

のび太は夢で見たことを話した。内容が結婚式だったこと、花嫁が誰だが分からなかったことを全てを彼女たちに。

「その時から妙にみんなのこと、意識しちゃってさ……」

『『『……』』』

「……その、みんながあんまりにも可愛いから……何か気恥ずかしくて、まともに見れなかったただけなんだけど……」

『『『……』』』
「え？』』』

さつきまで泣きそうだったみんなの瞳が、これでもかかってくらいに丸くなる。そしてゆっくりと口元に手を当てながら、首からどんと赤く染まっていく。

『『『……』』』
「そ、それって……』』』

『『『……』』』
「え……？え……もしかして、私たち……？』』』

『『『……』』』
「……ああ、言いづらいけど……』』』

『『『……』』』
『『『……』』』

この後、しばらく気まずい空気が部屋中を支配していた。

第九章：本音を斬る

「のび太ー!!!!!!」

「ちよ!? クロメ!?!」

さっきまで泣いていたクロメが嬉しそうに抱きついてきた。

「良かった！本当に良かった！」

そう言うのと抱きついている腕に力がこもる。

「でもほつとしました……。のび太に嫌われてるわけじゃなくて。」

「うん。」

「そうだな。」

「……………」

シエーレの言葉にチエルシー、レオーネ、アカメも頷く。

「僕がみんなのことを嫌いになるわけないだろ？」

するとクロメは笑みを浮かべ

「私ものび太のこと嫌いになんてならない！世界で一番大好き!!!」
叫んだ。

「「え!?!/ /」」

クロメの発言に・アカメたちは顔を赤くしてしまう。

「.....」

クロメの告白に当の本人はヤレヤレとため息をつく。

そして夕食後、居間で寛いでいると

「生放送！男同士が語る男の本音暴露スペシャル!!!」

ピクッ

「『『『本音!?!?!』』』」

番組のタイトルを聞き、急いでテレビの画面に視線を向けるアカメたち。

「今日は放送出来ないレベルの過激なボーイズトークを強引に放送しちゃいますよー！
テレビの前の女子たちも、是非参考にしてみてね！」

不味い、嫌な予感がする。そしてさつきから頭の中で危険信号が煩く鳴り響いてい
る。

「あつ、そうだ！今日は確か甲子園の決勝戦だったんだ……」

そう言いながらチャンネルを変えようとするのび太だが

バシッ

「ダメ。」

だがその腕をいきなりレオーネに掴まれる。

「で……でも……」

「何を慌てている?」

アカメもジト目でのび太を見る。

「いやでも、これ夕食後に見る番組じゃあないし……」

「あたしたちはもうオトナだから大丈夫。」

「私もそういうのには理解ある方ですから。」

「の、のび太は違うって信じてるから大丈夫！」

チエルシー、シエーレ、クロメの言葉にのび太は内心焦り出す。

「いや、そういうことじゃなくて……」

そうこうしている内に、番組が始まった。

「男なんてね、いくら取り繕つても本音はやりたいただけ。女とかちよつと甘い言葉かければすぐその気になつちやうから。」

「やっぱスレた女の空気って言うんですか？ ヤンキーみたいな女とか真面目な女ってのは屈服させたくなくなるよね。頭悪そうで尻も軽そうっていうのかなー」

『コーナー』

するとアカメとレオーネがジト目でのび太を睨む。

「な、何だよ？ その目は……」

【男で女子学生とロリが嫌いなやつなんていないね。自分より一個でも若い方がいいよ。もう色々と違うから。】

【学生時代のクラスメイトなんて可愛い子はみんなオカズ。クラスの連中、集合写真で全員イケるかとかやってましたよ！】

「『じとー』」

今度はチエルシーとクロメがジト目でのび太を睨む。

「だから、何だよ？その目は……」

「……エツチなこと、したいだけなのか？」

最終章：物色を斬る

「??」

アカメの言葉にのび太は首を傾げる。すると

「……………チョロい女だと、思ってたのか？」

「??」

「若いっただけで……………それが理由になるの、のび太？」

「??」

「のび太も、クラスの集合写真でそんなことしてんの？」

話がどんどん大きくなり、のび太は内心焦り出す。

「いや、ちよつと、皆さん落ちて着いてくれますか？これテレビだからね？面白おかしく取り上げられた一部の意見だからね？」

なんとかみんなを落ち着かせようとするのび太。だが

状況は更に悪化する。

「マジで男の部屋とか机の中なんてマジでエロ一色だから！しかも趣味特濃！見られたら人間引退ですわ！」

「『『!!』』』」

その言葉に五人の美女が同時に反応した。

「さてと、もう遅いし。今日はもう寝よう！」

そう言いながら慌ててテレビのスイッチを切る。

「ふう．．．．．あれ？」

安心したのも束の間、アカメたちの姿が見当たらない。そして何故か二階の自分の部屋から足音が聞こえてくる。それとほぼ同時に嫌な予感がした。

「あれ？どうしたのみんな？」

何故かのび太の部屋に集まっているアカメたち。

「だ、大丈夫だ．．．！わ、私は何が出て来ようとも、のび太を見損なったりなんてしない自信がある．．．！た、ただ．．．その、ど、どういふものだけか．．．その、心の準備だけはしておかないといけないから．．．！」

「???

「すまん、のび太．．．分かってるから、私は信じてるから。でも、私には．．．のび太が間違つた道に進まないかを見守らないといけない使命があるから．．．!」

「???

「悲しいけど、これは仕方がないことなのよ。もう賽は投げられてしまったの。」

「．．．．．」

「大丈夫です、私たちは全身全霊を持ってあなたの全てを受け止めます。」

「．．．．．」

「ドキドキドキ。」

「．．．．．」

予感的中し、アカメたちはのび太の部屋を物色し始める。

「とりあえず枕の中じゃないか？」

レオーネは枕の中

「こういう時は『押入れの中』と決まっているんです。」

シエーレは押入れの中

「ま、まずは机の中じゃないか？」

アカメは机の引き出し

「本の間とかも、きよ、興味あるって言うか・・・！」

チエルシーは本棚

「のび太、心配しないで！怖くないから、大丈夫だからね！あ、ここに変な紙切れが！！」

クロメはバックの中

「あつ、ちよつと止めて！！それは違うから

！！！！！！

」

ドタドタバタン

がんばれ！ジャイアン！！

プロローグ

「すー、すー、すー。」

「……ねえのび太。」

ゆさゆさ

「……。」

「のび太ってば！」

ゆさゆさ

「??？」

部屋で日課の昼寝をしているのび太の体を誰かが揺さぶる。目を開けるとそこには「どっか遊びに行こーよお!!そんな暗い顔してたら体が腐っちゃうよ!!」

婚約者の一人がのび太の顔を覗き込んでいた。

「……。」

そんな彼女を無視し、夢の世界に戻るとするのび太だが

ゆさゆさ

彼女がそれを許さなかった。いい加減しつこいと感じたのび太は

「ヒマならデートでもしてくれればいいでしょ？クロメが声かければ、喜んで来る奴いっぱいいるよ？」

と彼女に提案する。だが

「ヤダ、わたし決めたんだ。」

即答で却下された。

「??？」

「デートはのび太としかしないって!!!」

そう言いながらまっすぐ見つめるような視線をのび太に向けるクロメ。

「……そんな迂闊なこと言うと、襲っちゃうぞー」。――

「別にいいよ?」

「……………」

「……………」

クロメの返答に場の空気が気まずくなる。

そして居間では、アカメが刀の手入れをしていた。そしてそんな彼女に夢中になっているジャイアン。

「スツゲー……」

ジャイアンはアカメの膝の上に乗っている村雨に目を輝かせる。

「これって、アカメちゃんがいつも使っている刀……」

村雨。傷口から呪毒が浸食し、それが心臓に到達することで確実に相手を死に至らしめるという強力な能力を持つ。ほんのかすり傷でも付けられればそれで効果が表れる。

故に手入れのときなどは微々たる傷も付けないよう細心の注意を払わなければならない。

ゴクリ

ジャイアンはアカメが以前、村雨をふるっていた時を思い出す。あの姿に彼は憧れと好意を寄せていた。

(これさえあれば……俺も……)

ジャイアンの村雨への興味が益々深まっていった。

そして夕方。

「謝って済むと思ってるのか!?! どう落とし前つけてくれるんだ、ああ!?!」

「あ、えっと、その・・・」

「なによ!?! ぶつかって来たのはそっちでしょ!?!」

帰り道、不良グループに絡まれている女の子たちがいた。するとジャイアンは

「おい、やめろ!!」

声をあげる。

「何だ、お前は?」

不良の視線が彼に注がれる。

「俺様が相手になってやる!!」

そう言いながら木刀を構えるジャイアン。この数日間寝る間も惜しんで、鍛錬したジャイアン。その顔は自信と強さに溢れていた。

第一章：欲しいものを斬る

ドサツ

「いいか、これに懲りたら二度と俺たちに逆らうなよ!!!」

そう言う不良たちは笑いながらその場を去って行つた。そして後には

「うゝ。うゝ。」

全身傷だらけのジャイアンだけが残された。そして彼の心には悔しきだけが残つた。あれだけ訓練したのに、あれだけ練習したのに、それなのに。それなのにいとも簡単に負けてしまった。しかもそれがアカメやクロメではなく。唯の不良たちに。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

これではのび太に追いつくどころか、距離は広がる一方だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

するとジャイアンは昼間の事を思い出す。アカメの膝の上で磨かれていたあの妖刀。

(いいなあゝ。俺もほしいなあゝ。・・・・・・・・・・・・・・・・。)

するとジャイアンの顔に段々と笑みが生まれる。

「欲しいものはどんな手を使ってでも手に入れるのが俺様だ!」

ジャイアンはこの時あることを決心する。

そして次の日。

コンコン

ガチャ

「『こんにちは!!!』」

「いらつしやい。」

朝早く野比家の玄関を叩くジャイアンとスネ夫をシエーレが出迎える。

「のび太はいます?」

「のび太なら出かけましたよ。アカメとクロメも一緒です。」

幸運な事にのび太はクロメに連れられて、遊び（デート）に出かけたらしい。そして何故か二人に監視役と良い、付き添うことにしたアカメ。

ニヤリ

チャンスとばかりに内心笑みを浮かべる二人。

「実はこの間、のび太の部屋に忘れ物しちゃって、取りに行ってもいいですか？」

そのお願いにシエーレは少し考える。友だちとはいえ、他人に自分の部屋を荒らされるのは気分が悪いものだ。たとえどんな理由があろうとも。

「……………」

コクリ

ジャイアンは目線でスネ夫に合図するとスネ夫は頷く。

「あの…………シエーレさん、これ。」

スネ夫はお見上げ用のケーキを取り出す。

「みんなで食べましょうよ！」

そう言いながらスネ夫はシエーレを玄関から台所へと誘導する。そして二人が台所に入ったのを確認するとジャイアンは急いで階段を上がり、のび太の向かいにある部屋に入った。

「!!!」

部屋には女の子独特の香りが漂っている。最近何故かオシヤレに気を使うようになったアカメ。それは彼女が『恋をしているから』ともつぱらの噂だ。それ故に彼女が以前よりも可愛く、美しく見えているのだ。

「いい匂いだ〜。」

部屋の香りにジャイアンは癒されている気分になる。そして数分後、我に返ると部屋の中を見渡す。そしてダンスの上に置いてある刀に目を向ける。

第二章：御祓を斬る

「綺麗だ………」

早速、家に帰って盗んだ刀を眺める。

「これさえあれば……俺様にもアカメちゃんを守れる。彼女を笑顔にできる。」
頭に浮かぶ、愛しの彼女。世界の・男子たちがどんな事をしてでも手に入れたい。そして独占したい。そんな事を思っている

「お兄ちゃん！いる？」

突然部屋の障子が開き、妹のジャイ子が入ってくる。

「どうしたの……その刀？」

刀を眺めている兄に妹は驚きながら問いかける。

ニヤリ

するとジャイアンは妹を見るなり不気味な笑みを浮かべる。

【その頃】

「カアアアアアアアア!!キエエエエ!!」

「.....」

のび太の前で奇妙な踊りと祈りを捧げる人物。彼はこの地方では有名な霊能力者でこの神社の神主でもある。

「見えるぞ!見えるぞ!!」

「.....」

日を追うごとに大胆になっていくアカメたちの誘惑。そんな彼女たちに困りはてたのび太はお祓いの為、この神社を訪れていた。

「今の御主には悪霊が取り憑いておる!」

「悪霊?」

神主の言葉にのび太は驚く。

「そうだ、赤い靴を履いた少女の亡霊だ!!」

「赤い靴?」

「御主、昔その少女に酷い事をしたことはないか？」

「……あるような……ないような……」

そう言いながらのび太は頭の中で昔の記憶を手当たり次第に探す。

「ハッキリ致せ！」

「……あつ、ある！」

するとのび太は昔のことを思い出す。あれはのび太が幼稚園児だった頃、野比家の隣には栗色の髪の女の子、のんちゃんがお母さんと2人で住んでいた。当時からおとなしい性格だったのび太は、のんちゃんと毎日のようにおままごとをして遊んでいた。そんなある日、のび太を待ち構える幼き日のジャイアンとスネ夫。二人にのんちゃんとのことをからかわれたのび太は、つい「のんちゃんなんてきらいだ！」と言ってしまう。すると二人は「それならのんちゃんにイジワルしてみろよ」と言う。その日のおままたいで、のび太はジャイアンとスネ夫に監視される中、おままたいで道具をめちやくちやにし、のんちゃんの赤いくつを片方だけ持って逃げるように立ち去る。のんちゃんの泣き声だけが、いつまでものび太の耳にこびりついていて……。その後ののんちゃんは病気になるてしまい、会えないまま一週間が過ぎた雨の日。幼稚園から帰ってきたのび太に、のんちゃんが病気で死んでしまったことをママが教える。

「恐らくその時の少女が怨念となって御主に復讐しているのだ!!」

「どうすればいいんですか？」

「懺悔し、心から謝るのだ。そうすれば彼女の魂は成仏し、この世を去るであろう！」
のび太はその場で頭を下げ、心から神に祈るのであった。

第三章：愛想を斬る

キンコンカンコン!!

「ごめん、のび太。今日も先に帰ってくれない?」

そう言いながら手を合わせ、謝罪するクロメ。

「あつ、うん。分かった。」

彼女の願いを承諾し、チエルシーに視線を向ける。

「チエルシーはどうするの?」

「私も今日は寄るところがあるんだ。」

「.....」

「こちらも断られてしまった。」

「アカメ、帰ろう!」

そして今度は隣に座っているアカメに声を掛ける。

「すまない、私も今日は用事が.....」

「.....」

昼休みのシェーレと同じ事をいう三人。最近、何故か付き合いが悪い。家でも彼女た

ちは自分とは少し距離を置いている。しかも夜遅くまで台所に閉じ籠り、なにかをしている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

のび太は鞆を片手にそのまま教室を出て行く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

その姿に三人は切ない顔をする。自分たちが決めた事とはいえ、とてもやりきれない気持ちになってしまう。

そして帰り道。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「気にすんな。これまでが良すぎたんだよ。」

「そう、そう。」

そう言いながらのび太の肩にぼんと手を置くジャイアンとスネ夫。

「大丈夫。チエルシーちゃんは僕が責任を持って幸せにするから!!」

「アカメちゃんの事は俺様に任せておけ!!」

アカメたちに愛想つかされたと思ひ、のび太を慰める苛めっ子二人。

「……………」

だがのび太は内心喜んでいた。何故なら、お祓いの効果が現れ始めていたのだ。これで女難の相から解放された。

「……………」

でも何故だろう?今、自分の心には安心というよりも不安が残っていた。このままでは終わらない気がする。まるでこれは嵐の前の静けさだ。

「あつ、そうだ!!家に来ない?新しいゲームソフト買ったんだ!!」

「えっ?いいの!!」

「うん!何なら出前でお寿司でも取ろうか!!」

「いいのか!」

「勿論!!めでたい時には派手にお祝いしなくっちゃ!!」

スネ夫は上機嫌である。そんな彼にのび太とジャイアンは

「それじゃ、ピザも頼んでいい!!??」

「俺、前から欲しかったものがあるんだけど……」

そんな二人にスネ夫は

「いいよ、いいよ!!遠慮せず何でも好きなものを言いなさい!!」

そして数分後。スポーツショップでは

「これ、本当に貰っていいの？」

「いいよ、いいよ!!」

「『後で返せ』とか言うなよな！」

「言わない、言わない！」

のび太とジャイアンは大きな箱を持ちながら店を出た。

第四章：俺様の時代を斬る

ジャイアンはいつものように家で店番していた。すると
「離してください!!」

店先で不良グループに絡まれている男子生徒がいた。

「なあ兄ちゃん、小遣い少し貸してくれないか?」

「持ってません!」

「なかつたら、家に取りに行けよ!」

「家にもありません!」

「何だ!?!おちよくつてるのか?痛てえ目にあいたいか?」

するとジャイアンは急いで家に帰り、部屋から刀を持ってくると

「おい、やめろ!!」

声をあげた。すると全員の視線がジャイアンに注がれる。

「何だ、お前!」

「リーダー、アイツこの前の……」

「まだ懲りてねえのか!」

「どうやらこの間と同じ不良グループのようだ。」

「俺様が相手になつてやる!!」

「そう言いながら鞘から刀を抜こうとするジャイアン。」

「何だ!? やろうつて・・・うっ!?」

すると突然リーダー格の不良に異変が起こる。

（不味い、かき氷の食いすぎで腹が!!）

腹痛の痛みでお腹を抑える。

「お、覚えてやがれ!!」

「あつ、リーダー!! どうしたんですか!？」

「待つてください!!!」

不良たちはそのまま去っていった。

「俺様の強さが分かったか!？」

何もしてないのに威張り出す。すると男子生徒はジャイアンに近づき、

「助けていただき、ありがとうございます!!」

頭を下げる。

「当然のことをしたまでだ!!」

ジャイアンは照れ隠ししながら、胸をはる。

(きたーっ!! ついに来たぞ!! 俺様の時代が!!!)

そしてその翌日。

「おい、のび太。」

「……………なに?」

休み時間、机で寝ていたのび太をジャイアンとスネ夫が叩き起こす。

「見ろよ! あれ!」

「教室の外に、怪しげな人影があるんだ。」

「人影?」

「ほら。あそこ、見てみろよ。」

「???」

教室の扉の辺りに視線を向けるとそこには

「……………女の子?」

「ああ、そうだ。」

「このクラスの人じゃないね。でも、ちゃんと学園の制服を着てるし……」
「変だろ？用もなく、ジツとあの扉のところにいるんだぜ。」

「……………」

「……………」

「でも立ち去らない。かといって、誰かに話しかけるわけでもない。」

「……………」

「な？変だろ？」

「確かに……………」

のび太は再び、視線を扉部分に立つ女の子に向けた。

「そういえば……………」

「やつぱり、スネ夫もそう思うか!？」

「……………」

「あつ、でも。僕が彼女を見ているから、そう思うだけかもしれない。」

「いや、あながち間違いないかもしれないぜ。」

「??？」

「……………」

「……………」

ガタン

するとのび太はいきなり席を立つ。

「何か困っているかもしれないから、声をかけてみる。」

そう言うと女の子の元へ歩き出す。

「ちよつと待て、俺も行く。」

「僕も。」

第五章：恋を斬る

「……あの」

おずおすと女の子に声をかける。

「え？あ、あの……」

女の子は驚いたようにこつちを見る。

「もしかして、何か御用ですか？」

「いえ、その別に何でもありません。」

「けど、さつきからずっと俺らを見てただろ。」

ジャイアンの発言に彼女は

「きつ、気づいていらしたのですか!？」

顔を真っ赤にする。

「すみません、すみません。何でもありませんので、失礼致します。」

それだけ言って、彼女は走り去ってしまった。

「あの反応……まさか……いや、断言するにはまだ早いか。」

「……?何が?」

「お前、約束でもあるのか？」

「あるのか？」

そう言いながらニヤニヤした顔を向けてくる。

「……………」

約束はない。何故ならアカメたちには今日も一人で帰れと言われた。

「特にないけど……………意外と寂しがり屋なんだね。」

「バーカ。お前が一人で帰るのが寂しいだろうと思って、声をかけたただけだ。」

「感謝しろよな。」

すると校門前で

「ーんっ？」

「あっ!？」

「アンタは……………」

今朝の女の子とバッタリ会ってしまう。

「……………!!!!!!
彼女はまたしても真つ赤になり、そのまま走り去ってしまった。」

「おい……………今の子、見たか？」

「今朝の人だよね？」

「俺様が気付くと逃げていったな。」

「顔怖いもんね。」

「頭も悪いし。」

のび太とスネ夫の発言にジャイアンはため息を付く。

「お前ら、何を見てたんだ？あの顔は恐怖で強張ってたわけじゃないだろ。アレは……………」

「『あれは?』』」

「照れだな。」

「照れ？」

「言われてみれば、確かに顔が赤かった気がする。」

「ヤバいな、可能性が高まってきた。」

「何の？」

「お前らは本当にお子ちゃまだな。ここまでいえば、普通は気付くだろう。」

「『???』」

「ほら、とりあえず、店に行くぞ。あつちで全部説明してやるよ。」
ジャイアンの言葉に首を傾げるのび太とスネ夫。

そしてカフェのオープンテラス席。

「アレはズバリ恋だ!!!」

「『恋?』」

「そう、恋だ! アレは恋する乙女の反応で間違いない。しかも、恋した相手は—————俺様!!」

そう言いながらドヤ顔するジャイアン。

「まいったな。俺にはアカメちゃんって人がいるのに……モテる男は辛い。」
ジャイアンの発言にのび太とスネ夫は必死に笑を堪える。

第六章：話の裏を斬る

「大切な人の為に、自分に好意を持っている人を傷つけるだなんて……」

「……………」

「断るの？」

スネ夫の問いにジャイアンは当然と言わんばかりに胸を張る。

「そりやそうだろう、俺にはアカメちゃんっていう大切な人がいるんだから。」

するとのび太とスネ夫は頭をかかえる。毎日のように顔を合わせているアカメとジャイアン。だがアカメの反応を見る限り、脈はなさそうに思える。そしてこれからもチャンスがあるとは到底思えない。

そんなことを思っていると

「ハイー！」

「??？」

「お困りのようだな、青年たち。お姉さんが力を貸してやろうか？」

珍しい顔が姿を現す。

「レオーネ。」

『レオーネさん。』

「それで、一体何を話してたんだ？」

「ええ。それが・・・困ったことになりました。」

「困ったこと？それって・・・」

チラリとのび太の方に一瞬目を向けてきた。その視線に対して肩をすくめて、大したことないとアピールする。

「それで？その相手は一体どんな奴なんだ？」

「さあ、クラスも名前も知らないんだ。」

そして次の日。学園にコツソリ忍び込み、話の裏を取るレオーネ。

「いたー！」

特徴と一致する少女を発見。頬を赤くして、何かを見ている。彼女の目線の先にはジャイアンたちがいた。

「ん？」

するとレオーネは眉間にシワを寄せて何かを考える。何かがおかしい。ひよつとするとこれは……。

「そういう事か。」

レオーネは何かに納得すると、謎の笑みを浮かべる。

「こりやまた面白くなってきたな。」

第七章：いざという時を斬る

「あの……」

空き地の土管の上で昼寝をしていたジャイアンに例の少女がおずおずと話しかけてきた。

「私、松浦梨華と言います。どうかこれを……」

そう言いながら少女は顔を真っ赤にしながら、オズオズと手紙を差し出す。

「……………」

ジャイアンも顔を真っ赤にしながらそれを受け取る。

「探したぜ!!」

「??」

振り向くとそこには

「この間は世話になったな！」

「お前たちは……」

この間の不良グループが増援をつれてやってきた。明らかに戦力はあちら側の方が上。勝ち目がない。だがジャイアンは自信満々の顔をして少女の前に立つ。

「ふん！」

そして土管の中に隠してあつた刀をとり出す。

「いくぜー！」

そう言いながら、鞘から刀を引き抜き、構える。だが

「うっ！」

突然ジャイアンの体に異変が起こる。

(体が重い……とても苦しい……気持ち悪い。目が霞んできた。)

良く見ると刀が光っている。だがただ輝いているわけではない。何か禍々しい力が刀を覆っている。そしてその力がジャイアンの命、生命力を吸い取っているのだ。

ガクツ

ジャイアンはそのままうつ伏せに倒れこむ。

「きやつ!?!いや、離してください!!!」

「へっへっへ。」

「彼女、可愛いね。少しくらい俺たちと遊ぼうぜ!」

男たちに取り押さえられ、悲鳴をあげる梨華。

「やめろ!!」

ガス

フラフラの状態で立ち上がったジャイアンは不良の顔面に一撃を当てる。

「てめーっ!!!やりやがったな!!」

ガス

「ぐわっ!!」

すぐさま反撃を受ける。

「やっちまえ!!!」

ガス

ベス

ダス

うずくまったジャイアンを不良たちは蹴り始める。だが一方的に殴られるジャイアンではない。

「このーっ!」

ジャイアンは勢い良く立ち上がり、反撃し始める。

「おっと、そこまでだ。」

すると不良の一人がナイフを梨華の顔に近づける。

「これからお前が避けたり、反撃したりしたら、この女の顔に傷がつくぜ!」
「なっ!?!」

その言葉にジャイアンは同様する。

「ゲームだよ、ゲーム! お前が何発耐えられつかのゲーム!」

「もし気絶したら、ゲームオーバーでレイプだぜ! ひえっひえっひえっ!」

そう言うのと不良は笑いながら梨華の顔を舐め始める。

そして場所は変わり、人気のない工場。

「さあ、何発耐えられるかな？」

そう言いながら不良たちは笑みを浮かべ、指を鳴らす。

「一発で気絶させてやるぜ……ほら、よっ!!」

ゲスッ

「ぐあっ！」

キツイ一撃がジャイアンの鳩尾にヒットする。

「武さんっ!!!」

ジャイアンは何とか踏ん張った。

「大丈夫、心配しないで梨華ちゃん！おいあんた！約束は守れよ!?!」

「あ？」

「俺が避けたり、反撃したり……気絶もしなければ、梨華ちゃんには手を出さない。そういうルールだろ？」

「……………はっ！おもしれえっ！！いい男だな、お前！！いいぜ、約束してやる！おまえたちも聞いたな！！」

「おお、聞いた聞いた。」

「どうせすぐに気絶すんだから関係ねえだろうがっ！！」

「早くしろよ！俺、めっちゃ溜まってんだよー！」

せっかちな仲間を尻目に不良は

「さあ、いくぜ！！」

再びジャイアンを殴り始める。

そして数分後。

「やめてっ!!もうやめてよおっ!!武さんが死んじゃうっ!!」

ボロボロになったジャイアン。体中アザや傷だらけである。

「私のことは好きにしているからっ、だから彼には、もうなにもしないでよおっ!」

そんな彼女の叫びに不良は

「だとき。どうする?」

ジャイアンの方を向く。だが当の本人は

「まだだ、まだ終わってない!」

しぶとく立ち上がる。

「なんでよ!なんで、私なんかのためにそこまでするのよ!もうやめてよ……私はどうなったっていいから!!」

泣き叫ぶ梨華にジャイアンはお決まりのあのセリフを吐く。

「当たり前だろう!だって……お前のモノは俺のモノ!俺のモノは俺のモノだ!」

「なっ……なによそれ!意味わかんない!!!」

「止めだ、止め!!」

このままではラチがあかない。そう思った不良はジャイアンから奪った村雨を取り出す。それを見た梨華は

「なっ……なによそれ!? 卑怯よ!!」

焦り出す。

「あ? 武器を使わないなんてルールは言っていないよなあ?」

「そんな……武さん! もうー」

その言葉に梨華の顔色が真っ青になる。

「ひえっひえっひえっ……どおおりやつ!!」

不良は刀をジャイアン目掛けて振り落とす。

「やめて……っ
!!!!!!」

ガ
チ
ン

すると何かか村雨を受け止めた。

「そんじゃあ、選手交代。」

目を開けるとそこには見知った顔が立っていた。

「だ、だ、誰だ、お前!？」

突然目の前に見知らぬ青年が現れた事で不良たちは混乱する。

「のび太、お前………」

「人の物を取り上げるからこうなるんだよ?」

「のび太は鋭い目でジャイアンを睨む。」

「うつ………」

「のび太の言葉にジャイアンは言葉を失う。」

「でも流石ジャイアン、いざという時は頼りになるね。」

ジャイアンの格好良さに今度は笑みを浮かべるのび太。

「何だ、あいつ？」

「おい、あの白髪……」

「あいつまさか、噂の……」

不良たちが突然焦り出す。

「さてとそれじゃあ、始めるか。」

そう言うとのび太は不良たちに向き直る。この後、どうなったのか言うまでもない。

第八章：不可能を斬る

そして数日後、怪我也完治し、何事もなかったかのように空き地で野球をするジャイアンたち。するとそこへ

ザツ

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

梨華が姿を現す。彼女に気づくと、ジャイアンたちは動きを止める。

「あれって・・・・・・・・。」

「うん、多分ね・・・・・・・・。」

梨華が包みを大事そうに抱えている。その包みに何が入っているのか三人は知っていた。何故なら今日はバレンタインデー。世界各地でカップルの愛の誓いの日とされる日だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

のび太は数日前のジャイアンの姿を思い出す。体を張って女の子を守ったジャイアン。あんなカッコイイ所を見て、惚れない女性はいない。なのでのび太は梨華がジャイアンの勇姿に心を奪われたと推測した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

告白現場にのよな甘い空気が空き地を包み込む。のび太とスネ夫は気を効かせ、ジャイアンから少しづつ距離を取っていく。

「おめでとう、ジャイアン。」

「うん、お似合いだね。」

少し寂しい気持ちになるが、別に構わない。なぜなら彼ら三人はずっと『心の友』だ。それは変わらない。そしてこれからは『ジャイアンの恋を応援しよう』と心に誓う二人であった。

そしてしばらくの沈黙の後、梨華はジャイアンの元へと走り出す。その表情は少し赤らめていた。ジャイアンも頬を赤くしながら照れ臭そうにその場に立ち尽くす。

すとす

その場にいた誰もが予想していない事が起こった。

「『あれ？』」

三人の声はハモった。

梨華はジャイアンの真横を通り過ぎると

「これ受け取ってください!!!」

のび太の真正面に立ち、包みを差し出す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

のび太は無言でその包みを受け取る。

「野比のび太さん、好きです！どうか私と付き合ってください！」
そう言いながら顔を真っ赤にする梨華。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女の言葉に三人は啞然とする。

(何で? どうして?)

のび太の頭が混乱し始めた。つまり彼女の目線の先にいたのはジャイアンではなく自分だった。でも仮にそうだったとしても、あのジャイアンの勇姿を見て何とも思わないのかこの娘は?

「はっ!」

のび太は一瞬我にかえり、ジャイアンに視線を移す。

「.....」

ジャイアンはその場に固まったまま動かない。

「あの.....ジャイアン.....?」

スネ夫はジャイアンに近づき、呼びかけるが反応がない。すると

「遅かったか.....」

後ろで声がしたのでスネ夫は振り向く。するとそこには神主がいた。

「あ、あなたは？」

「彼奴についている悪霊は一体だけではなかった！」

「えっ!？」

そう言うときスネ夫はのび太に視線を移す。

「数十、いや数百体はおる。あれ程の霊を祓うのはワシには不可能じゃ!!」

「!?!」

神主の言葉にスネ夫とジャイアンは呆然とする。

「そ、それじゃあ……………のび太はこれからもずっと女の子に……………」

「……………」

スネ夫とジャイアンは愕然とする。これから先何十、……………いや何百という女性から告白され続けるのび太。ますます拡大していくのび太ハーレム。すると固まっていたジャイアンは

(おれは……………おれは……………猛烈に!!!!!!)

ワナワナと震えだす。

1

2

最終章：ダーリンを斬る

夕食後、アカメたちはのび太の部屋にやって来た。

「はい、のび太！バレンタインデーのチョコだよ!!」

クロメは嬉しそうにのび太にチョコレートを渡す。

「私も!!」

「私もです!!」

「私もだ!!」

「大好き!!」

クロメに続いてチエルシー、シエーレ、アカメ、翼もチョコを渡す。この数日間、彼女たちは暇を見つけてはチョコレート作りの研究をしていた。故にのび太と過ごす時間を削っていたのだ。

「.....」

全員からチョコを受け取ると、レオーネは嬉しそうに口を開いた。

「それで?」

「??」

彼女は嬉しそうに笑っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

するとのがび太は今朝の出来事を思い出す。何故か出かける時にジャージとスポーツシューズを履いていけと勧めるレオーネ。

「!!」

そしてある疑惑が浮上する。

「レオーネ、もしかして・・・・・・・・。」

「ああ、知ってたよ。全部！」

「!？」

この女は知っていた。梨華のことも、ジャイアンのことも全て知っていた。そしてこうなることを知っていてワザと言わなかったのだ。

「・・・・・・・・。だったら早く言つてよ!!何で黙つてたんだよ!!」

「いや、あ、黙つてた方が面白いから！」

その言葉にのがび太は漫画を持った手を振り上げる。

「ちよつ、待て、暴力反対っ！」

慌ててのがび太から逃げるレオーネ。彼女の背中をポカポカ叩くのがび太。そして

「『』のび太、説明して!!」
「『』」

そんなのび太を追いかけるアカメたち。

「何でいつもこうなっちゃうの〜っ!？」

「はっはっはっ、なんでだろうね？」

のび太とは違い能天気なレオーネ。

「バカっ!!!レオーネのバカっ!!」

「ああ、私はバカだ！」

「でも……」

レオーネはのび太の方を向くと

「むぐっ!？」

隠し持っていたチョコレートをのび太の口に突っ込む。

「私はお前を愛してるぞ、ダーリン♡」

ギロリ

レオーネの言葉に五つの殺気がのび太に突き刺さる。

「やめろーっ!こんなところで愛してるとか言うのやめなさいっ!」
のび太の叫びが町中に響き渡る。

燃えよ！静香！

プロローグ

「おっはよう、のび太さん！」

いつも以上に元気良く挨拶をする静香。実は昨日美容院に行ってきた彼女。髪型を変え、つけ爪をし、リップクリームを塗り、イメチェンした彼女にのび太はのんびりと視線を向ける。

「ああ……おはよう静香ちゃん。」

それだけ言うと再び机で眠りにつくのび太。

「……………」

その反応に彼女は呆然と立ち尽くす。

(あれ? 何で? 何で気づかないの?)

普通なら即気づくのにまさかのスルー。

そしてお昼、食堂で定食を食べるのび太。そこへ静香が自分のトレイを持ちながら彼の向かい側の席に座る。

「ねえ、のび太さん！」

「なに？」

「今日の私、いつもと違うと思わない？」

・ そう言いながらさりげなく髪を触ったり、つけ爪を前に出す静香。

「あっ!？」

のび太は何かに気づいたのか声をあげる。

（やっと気づいた!!）

ようやく肩の荷が降りる静香。

「静香ちゃん！」

するとのび太はゆっくりと静香に近づく。

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

彼の真剣な表情に内心ドキドキする静香。

「口に海苔付いてる。」

「へっ？」

それだけ言うと、のび太は自分のトレイを持って食堂を後にした。

そして数分後。

「ねえ、のび太さん！」

「えっ？ 静香ちゃん？」

突然声をかけられ、驚くのがび太。

「今日の私、いつもと違うと思わない？」

静香の質問に少し戸惑うのがび太。

「うん、いつもと違うね。なんというか……大胆……」

「大胆……？」

のび太の言葉に静香は首を傾げる。

「静香ちゃん。」

「何、のび太さん？」

ジト目で静香を睨むのび太。

「()男子更衣室。」

「
／／／／
／／／／
へっ？
／／／／
／／
」

我に帰り自分が今何処にいるのか確認する静香。周りには上半身裸やパンイチの男子生徒たちが静香に視線を向けながら固まっている。

「はあ〜っ。」

重なる失敗にため息をつく静香。好きな異性に強引にアプローチするも失敗。何か他に良い手はないものかと考える。

「??？」

すると静香は下駄箱から落ちた大量のラブレターを拾うシエーレの姿を発見する。

「ラブレターか．．．．．私も書こうかな．．．．．」

そうすれば彼も少しは振り向いてくれるかもしれない。でも

「．．．．．」

自分は渡すよりも貰いたい。貰ってみたい。乙女なら人生で一度は貰ってみたい。もっと出来るなら好きな男子から。そんな願いが彼女に頭の中を駆け巡る。

第一章：ラブレターを斬る

そして次の日。

「おい、のび太。あの子が呼んでるんだけど……」

「??？」

教室の扉の方を見ると、顔を赤く火照らせた愛らしい少女がこちらを覗いている。制服から察するに下級生らしい。

「なんだよあれ、もしかして愛の告白か？」

「『『えっ!?!』』』」

スネ夫の言葉に静香、アカメ、クロメ、翼、チエルシーはピクリと反応する。

「そんなっ!?!」

「え、本当に？」

のび太が視線を向けると少女は目を逸らす。

「のび太、誰なの？」

クロメが不安そうな顔でのび太を見つめる。

「……知らない人……でも。」

「でもっ？」

「……結構可愛い。」

「えっ!？」

のび太の言葉にクロメたちだけでなくアカメたちも唾然とする。

「とりあえず行ってみる。」

のび太が女の子の方へ向かうと、アカメたちだけでなくクラスの男たちもワーワーと騒ぎ始めた。

「ちよつと中うるさいから廊下で。」

「はい……」

廊下に出て、男子教室から少し離れたところに誘う。目の前の少女は視線を落としたままモジモジとしている。これはまさに愛の告白。

「それで、僕に用って何？」

「あの……コレ……」

ハートのシールで留められた、白く小さい封筒がおずおずと渡された。

シュン!!

『!?!』

その瞬間二人に殺気のような物が突き刺さる。

「何を話してるんだらう?」

「ここからじゃ、聞こえないわ。」

「……………」

アカメたちの位置では二人の会話がまともに聞こえない。すると少女は顔を赤くし、首を横にふる。

のび太は腕を組みながら考える。そしてしばらくすると、のび太は諦めたように首を縦にふる。少女は嬉しそうにのび太の手を握る。

「……………」

最悪な結末がアカメたちの頭を駆け巡る。

そして放課後。

「静香ちゃん、これの事なんだけど……………」

そう言いながらのび太は昼間貰ったラブレターを差し出す。すると

「……………」のび太さん、そういうことは自分自身でしっかりと決めなさい。」

それだけというと静香は教室を出て行った。

「の、の、のび太。」

「??」

「突然の事で焦っているのは分かる。だからまず冷静になるべきだ。」

「そう言いながらアカメは机に座っているのび太に顔を寄せてくる。」

（冷静になるべきはアカメの方でしょ？）

「のび太は妙に突っかかってくるアカメをジト目でみる。」

「どうしたらいいか分からない時は他者に意見を聞くというのはどうだ!？」

「う〜ん・・・そうだね。」

「ならまず私に相談してくれ！きつと力になって見せる！」

「そう言いながら右手を自身の胸に当てるアカメ。」

「・・・アカメに相談しても無駄だと思うよ。」

「!？」

「それだけ言うとのび太は教室を出て行った。」

第二章：求愛を斬る

「静香ちゃん！ちよつと！」

「……………」

「あれ、逃げた!?なんで？」

駆け足で消えていった静香を追い掛けようと、のび太も足を速めた。

「静香ちゃんく！ちよつと待って〜!!」

「……………」

のび太の呼びかけに答えず、静香は彼の視界から消えてしまう。

そして次の日。

「どうして逃げるんだ？」

昨日と同じように静香を追いかけまくるのび太。昨日は結局まともに話す事が出来なかった。

「どうかしたんですか？」

振り向くとそこには

「あつ、シエーレ。うん、ちよつと色々あつてね……」

「静香への求愛ですか？」

昨日の出来事をチエルシーたちから聞いたシエーレ。

「なっ!？」

「噂になってますよ。」

「どうやら手紙を片手に静香を追いかけ回したせいで、いらん噂が立ってしまったようだ。」

「違う! あれはそんなもんじゃない!」

「そうなんですか？」

「うん。実は……」

のび太は本当の事をシエーレに話す。彼女は驚きながらも、何故か納得した表情をす

る。

「なるほど……そういうことでしたか。優しいんですね、のび太って。」

「それにはまず静香ちゃんを探さないと……」

「静香なら家庭科室にいますよ。」

「家庭科室？うん、ありがとう。すぐ行ってみるよ！」

「頑張ってください！」

のび太は急いで家庭科室に向かった。

そして数分後、家庭科室では

「はあ……相手の子の事を思うと、彼女でもない私が彼と二人きりになんてなれないし……」

静香は椅子に座りぶつぶつ呟いている。

ガラガラ

「静香ちゃんっ!!」

「!?」

突然名前を呼ばれ、静香は驚く。

「あ……あ……あ……あ……」

そして速攻で消えてしまった。

「……………」

のび太はそのまま後を追いかける。

「待って—————よ!!」

「もう、しつこいわよ!!!」

「話を聞いてよ!!!」

「聞かない!聞かない!聞かない!!」

（それにしても静香ちゃんって何て早いんだ!逃げ足だけならクロメ以上かもしれな

い。

どんな人間にも取り柄があるものだ。そんな言葉がのび太の頭に浮かび上がる。

次の日。

(さてどうしたものか………)

「おい、のび太。また例の女子が呼んでるぞ。」

「??？」

机で考え事をしていたのび太に来客の知らせがあった。教室の扉の方を見ると、顔を赤くさせた般若のような形相の少女がこちらを睨み付けている。

「………なにあれ？」

「………お前、なにかしたのか？」

「ジャイアンとスネ夫はのび太に視線を向ける。

「………。」

おそらく手紙の件で怒っているのだろう。そう推理したのび太は席を立った。

第三章：返却を斬る

「これは一体どういうことよ!？」

開口するなりしぶきを飛ばしながら怒りを露わにする少女。

「ごめん。努力はしてるんだけど……」

「何が努力よ! どうしてあなたが源先輩にアプローチしてるわけ!？」

「アプローチ? あつちが逃げるから追いかけてるだけなんだけど……」

「私はね、『私の手紙を渡して』とあなたに頼んだの! あなたが源先輩に告白してどうしようっていうのよ!？」

「??？」

彼女の言葉にのび太は首を傾げる。

「キミは何か勘違いしてるよ。僕は終始一貫してキミの手紙を届けようと静香ちゃんを追いかけていただけだ。」

「……でも、あなたが源先輩に告白しようとして追っているって、噂になってるんだけど。」

「いつの間にそんな……」

やっぱり学園中で声を張り上げながら追いかけてこしていたのが原因か。目撃者も多かったことだろう。

「あなた本当に源先輩と中いいの……?」

「……………」

昔ならともかく、最近ではあまり話す機会も少なくなっている。プライベートでも殆ど一緒に遊ばなくなった。さらに昨日今日とさけられてるところか、あからさまに逃げられ続けている。

「おそらく……………他人以上、友達未満くらいには……………」

幼馴染というよりも、ただの腐れ縁の関係だろう。向こうはどう思っているのか分からないけど。

「ハア?それって中がいいって言えるの?」

「……………」

彼女の言葉にのび太は段々自信がなくなってきた。

「ごめん……………コレ返す。自分で渡すか、他の人を頼って。」

そう言いながらのび太は預かったラブレターを取り出す。

「……………な、なによそれ!」

「このまま僕が持つていても一生渡せない気がするんだ。」

「そうじゃなくて、なんでこんなボロボロになっているのよ!!」

言われてみれば、ヨレヨレでシワだらけでボロボロのラブレターだった。一日中待ち歩いて追いかけてこしてれば当然か。

「……………手紙はボロボロになってしまったが、キミの気持ちはいつまでも変わらず熱いまま、大丈夫っ。」

「大丈夫じゃないわよっ! そんなのもう要らないっ!!」

「でも、僕がもつてもしょうがないんだけど……………」

捨てるに捨てられないので手紙を返却しようとするのび太。

「いらぬ、いらぬいっ! うう……………ふええ……………んっ!!」

受け取りを否定された上、泣き出してしまった。

第四章：手紙を斬る

(まいったな………)

「ちよつとのび太さん！」

「??」

泣きじゃくる女の子に困り果てていたのび太の前に、救世主『源静香』が現れた。

「あ、静香ちゃん！助かったよ、コレを………」

そう言うのと、のび太はボロボロになったラブレターを取り出す。

「………のび太さん、それはちゃんと読んだの？」

「読んでないけど………」

その言葉に静香はため息をつく。

「まだ読んですらいないのね………」

多少中身は気になったが、預かったラブレターを勝手に見るなんて、そこまでのび太は落ちぶれちゃいない。ラブレターを即静香に差し出す。

「………なによ、私に読めと言いたいわけ？」

「うん。(そうしないと、收拾がつかないからね。)」

「・・・・・・・・・・・・・・・・バカツツ
 ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「!?!?」

静香の大きな声が廊下に響き渡る。泣いていた少女も一瞬で泣き止んだ。

「私はね、あなたに頼られるのは嫌いじゃないの。むしろ、姉弟のいない私にとっては、まるで弟ができたようで、甘えられることに心地よさみたいなものも感じたわ。けれど

ね、こういったことは、まず自分自身でしっかり決めなさいと言ったでしょ！」

「??？」

静香の言っていることがいまいち理解出来ないのび太。

「この子がその小さな手紙を一つ書くときにどれだけ悩んだが、手紙を渡すまでにどれだけ不安だったか……あなたはそのを考えてみたの!？」

(考えていない。むしろ、渡す役を任命された僕が、どうやって逃げる静香ちゃんに渡そうかと悩んでいた。)

「最終的に断るのは仕方ないと思うわ。でもね、せめてその手紙をあなたが読んであげなさいよ。」

(僕が読んでいいの?)

「そして、誠意を持ってしっかりと返事をしなさいよ……」

(誰に何を?)

「こんな可愛い子に告白されて、自分一人で満足に返事もできないなんて……あなたそれでも男なのっつ……」

!!!!!!!?!!

「???

「……はい?」

静香は厳しい顔でのび太を威圧する。そんな彼女にのび太はおずおずと話しかける。

「あの……静香ちゃん……」

「あなたはまだ私を頼ろうとするの!?! 私の意見を仰がないと告白の返事するできないの!?!」

おっかない顔でのび太を睨みつける。

「そうじゃなくて、この手紙って静香ちゃん宛のものなんだけど……」

「!?! どういうこと?」

静香の表情が固まる。

「この子……手紙を書いた人、静香ちゃんに手紙を渡したくて僕に預けた人。僕……この子から手紙を預かった人、静香ちゃんに手紙を渡したい人。」

第五章：同性愛を斬る

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

静香は目をパチパチと瞬かせる。

「分かった？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

静香の顔が段々と赤くなってくる。

（こういう時、なんて声をかけたらいんだろう・・・・・・・・）

「ふええ・・・・・・・・」

整った顔は、あわあわと崩れていく。

「源先輩!! 私のことかわいって本当ですか!?!」

「あの・・・・・・・・その・・・・・・・・」

「うれしいです先輩!!」

「ひゃっ!?!」

少女は映画のラストシーンのように、静香に飛んで抱き付いた。

「大好きです源先輩!!」

「／／／／／／ いらないわよ／／／／／／っ!!!／／／／／／」

「めでたしめでたし。さてと、そろそろ帰るか……」

それだけ言うとのび太はその場を後にする。

「／／／／／／ ちよつと、のび太さー／／／／／／ん!!!／／／／／／」

「へえーっ。そんな事があったのか。」

居間で今日の出来事をレオーネたちに話すのび太。

「静香も大変だな。」

「うん、そうだね。」

何故か凄く嬉しそうな顔をするアカメとクロメ。その様子にシエーレとレオーネは

「よかった。元気が出てなによりです。」

「本当、本当。」

安心した顔をする。

「何が？」

「二人とも、さつきまで世界が終わったみたいなの顔してたのに。」

「／／／／／／／／　そ．．．．．それは．．．．．その．．．．．／／／／／」

二人の言葉にアカメは顔を真つ赤にする。クロメはそのままのび太に抱きつく
 「そうそう、そんな事あるわけないよ．．．．．」

心から安心したのかそのままのび太の腕の中で眠りについた。

最終章：満足を斬る

ラブレター、それは人生で一度は貰ってみたい物。出来るなら好きな異性から。

「……………」

そしてこの少女、源静香も先日、そのラブレターを貰った一人である。だが彼女の心は憂鬱だった。

「はあく〜っ。」

確かにラブレターを貰いたいと思ったのは自分だ。そしてラブレターは貰った、しかも好きな異性の手から。だが素直に喜べない。なぜなら自分はノーマルなのだから。

「ちよつと、のび太さん!!」

「??？」

放課後、廊下を歩いていたのび太を呼び止める。

「アナタの幼馴染としての力をテストしてあげるわ!」

「えっ?」

「最近の私の変わった所、指摘して見なさい!」

何故かその言葉に虚しさを感じる静香。

「変わった……所？」

そう言いながらのび太は静香の頭の天辺から足のつま先まで視線を送る。ここで下手な答えを出したら殺される、のび太はそう直感した。なぜなら、それは既にチエルシーとレオーネで経験済みなのだ。なので、のび太は正直に

「……めん……分かんない……」

と正直に答えた。

カチーン

のび太の言葉に静香の頭の線が切れる。

(何でこんな奴、好きになっちゃったんだろう?)
そんな言葉が静香の頭を通り過ぎる。

「髪型?.....」

「!?」

予想外の答えに啞然とする静香。

「いつ気づいたの?」

「.....三日前。」

三日前といえば、静香が美容院に行った翌日。のび太に髪型を見せた日だ。

「えっ?まさかその事?」

「それじゃあ.....」

「つけ爪とリップの事?」

「何で気づいたときに言わないのよ!?!」

「えっ?言つて欲しいの?」

「当然よ。女の子にとつてはそういう所に気づいてもらえるかは重要な。のび太さんもモテたかつたら、そういう所に気を配れば。」

「.....」

「それともなに?やっぱり全然似合ってなかったの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「可愛くなかったって言いたいの？」

「そういう訳じゃないけど・・・・・・・・。」

「??？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まあ、良いんじゃない？良く似合ってるよ。」

それだけ言うとのび太はその場を去って行った。そして彼の返答に静香は満足気な笑みを浮かべる。

バラバラ

のび太が下駄箱を開けると、何かが床に落ちる。それはハートのシールで留められた、白く小さい封筒だ。しかも六枚。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

のび太は小さなため息をつく。そして無言で手紙を手にとると、そのまま懐にしま

う。

「の、の、のび太さん、そ、それ。」

「手紙だよ。」

慌てふためく静香に対して、のび太はあくまでも冷静である。

「だ、だ、だれから？中身見ないの？」

「いいんだ、別に。」

「えっ？」

のび太の言葉に静香は首を傾げる。

「もうわかってるから。」

「??？」

「全く……、言いたいことがあるなら直接言った方がいいのに。」

それだけ言うとのび太は差出人たちが待つ家へと帰って行った。

負けるな！スネ夫！

プロローグ

オンラインゲーム、それは主にオンラインによるコンピュータネットワークを利用したゲーム。コンピュータネットワークを介して専用のサーバや他のユーザーのクライアントマシンであるパソコンやゲーム機と接続し、オンラインで同じゲーム進行を共有することができるゲームである。

ラグノロクオンライン

「ジャー————ン!!!」

パソコンに映る題名にスネ夫・は自身満々に胸を張る。

「これって昨日発売の……………」

「いや〜っ、パパがゲーム会社の社長と知り合いだね。特別に譲って貰ったんだ。」

「いいな〜っ。」

「本当、羨ましいわ。」

相変わらず顔が広いスネ夫のパパにのび太、静香、ジャイアンは羨ましがらる。

「で、これはどんなゲームなんだ？」

「基本的には自分のキャラを高レベルにすることぐらいかな。クエストとかこなしていけば多少はゲームっぽい空気は味わえると思うけど、大抵みんな装備集めとかにハマっていく。」

とりあえず自分のキャラを動かし、町の中をぐるぐると散歩するスネ夫。すると

「スネ夫さん。サブキャラ育成ですか？早いですねまだメイン初めて一日も経ってないのに〜」

突然ローブを着たヒーラー風の女キャラに話しかけられる。

「おい、なんか話かけられたぞ。スネ夫、お前の知り合いか？」

「えっ？ああ!!僕と同じ日にプレイし始めた立夏さんだ!!」

「『立夏さん?』」

スネ夫の言葉に三人は首を傾げる。

「インターネットに繋がっているから世界中のゲーマーと狩りしたり、チャットしたりもできるんだ！」

「えーっ!?!世界中の・・・!?!」

「スッゲー!」

「この間、立夏さんに『スネ夫さんってすつごく頼りになります。』、『スネ夫さんの奥さんになる人は幸せですね。』とか言われちゃったし・・・」

そう言いながらスネ夫は頬を赤くし、興奮気味に語り出す。正直言っただけ悪い。

「『・・・・・・・・・・・・・・・・』」

その様子に三人は唾然とする。今、スネ夫は立夏に夢中なのだ。どうやらチエルシーは眼中にないらしい。

「いや〜っ、遊び始めたらもう笑いが止まらなくなつてハハハハハハ!!」

大笑いするスネ夫に三人は嫉妬深い顔をする。

「『・・・・・・・・・・・・・・・・』」

「君たちも買つて早く遊んでみなよ、楽しいよ!あつ!ごめーん!君たちパソコン持っていないだつたね!ハハハハハハハハハハ!!!」

『悔しい』

そんな言葉がのび太とジャイアンの頭に浮かび上がる。

第一章：ネットゲーを斬る

高笑いするスネ夫を尻前にのび太とジャイアンはパソコンの画面に視線を向ける。

「今日もお仕事の途中でログインしてるんですか？すごいですよねえ。ファツションデザイナーの方ってやっぱり自宅勤務なさってるんですか？カッコ良いですよね、私もそういう仕事に憧れちゃいます！」

「ファツションデザイナー？」

「スネ夫……お前……」

「どうやらこの男は二次元でも嘘をついているらしい。そんなスネ夫が癪に障ったのか、のび太はキーボードに

「ごめん、実は俺真性のホモなんだ。」

と打ち込み

ポチッ

ジャイアンが送信のボタンを押した。しばらくすると

【立夏さんはログオフしました。】

画面に映った文字を見たのび太とジャイアンは

「『冗談の通じないやつだったな。』
と呟いた。」

そして一週間後。

「う~~~~~~~~つ。うわ~~~~~~~~ん。」

昼休み。机に顔を埋め、泣きじゃくるスネ夫の姿があった。

「どうしたのかしら、スネ夫さん？」

「朝からずっとだね。」

スネ夫の姿を見てのび太たちはスネ夫が相当追い詰められている事に気づく。

「まるで大切な友だちを無くしたみたい．．．．」

「ジャイアンとのび太は覚悟を決め、席から立ち上がる。そしてスネ夫に近づき
「スネ夫元氣出して。」

「心の友よ、人生はまだまだこれからだ！希望を捨てるんじゃない！」

ポンポン肩を叩く。自分たちのせいなのに何故か他人事のように言う男たち。

「コレ、さっき買って来たアイスココアだけど……」

「スネ夫、これ、俺様がさっきまで鼻かんでたティッシュユなんだけど……」

二人は餞別をスネ夫の机の上に置く。

第二章：恋愛ゲームを斬る

ピーポーン

ガチャ

「みんな、良く来てくれたございます!!」

『『お邪魔しまーす!!』』

母親に頼まれ、スネ夫の見舞いにやってきた三人。彼らは玄関から入り、スネ夫の部屋へとやってきた。

ガチャ

「スネちやま!!のび太さんたちがいらしたございます!!」

それだけ言うとなスネ夫の母は部屋を出て行った。

『『!?!』』

「うゝつ。うゝつ。」

ベットの中で布団を被り、苦しそうに唸るスネ夫。

「スネ夫さん、大丈夫!?!しっかりして!!」

心配そうに彼に駆け寄る静香。

「……し……ず……か……ちゃん……?」

薄っすらと目を開けるスネ夫。

「スネ夫さん、元気出して!!何か私たちに出来ることはない?」

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

静香の質問に息を切らすスネ夫。どうやら彼女の質問に答えられないほど苦しいらしい。

『……』

そんな彼の様子にのび太とジャイアンは罪悪感を感じた。まさかあのイタズラがこ

んな大惨事を招くとは思ひもしなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

不味い。このままではこの男は死んでしまう。最悪な事態が二人の頭をよぎる。

「仕方ないこれを使うか・・・・・・・・。」

そう言うとのび太は袋からある物を取り出す。

「なあ、スネ夫、だったらお前コレやってみろよ。」

「??？」

のび太がスネ夫のノートパソコンの電源を入れて、一枚のディスクを入れる。自動的にメニュー画面が起動し、デカデカとそのディスクのタイトルが画面に表示される。

『ときめきメモリアル2』

「な、なんだよコレ。」

ゆつくりと体をベットから起こす。

「いいからちよつとやってみる。攻略自体もそう難しくはないから物は試しだ。」

スネ夫も少し興味が湧いたのか早速スタートの文字を押す。

「これ、ゲーム中の女の子効力するやつだろ？」

ジャイアンの質問にのび太は首を縦に振って頷く。

するとさっそく画面の中にヒカリと名乗る一人のヒロインが登場する。

『もう、遅いじゃない。朝は毎日一緒に学校行こうって昨日から約束してたでしょ？ 初日からさっそく遅刻？』

「お、おい、なんかお前さっそく遅刻者扱いされてんだけど……」

「選択肢出てるだろ、3つあるからとりあえず無難なもん選んどけ。」

「よし、ここは3番目の『うるせえハゲ』だな。」

「ないよ、そんな選択肢!!」

「ジャイアンにつっこみを入れると、スネ夫は『ごめんちよつと寝坊しちやつてさ』を
選ぶ。」

最終章：マザコンを斬る

『ふふふ、そうだろうと思った。キミさえ良ければ、私が毎日朝は起こしてに行つてあげようか?』

「ヒカリちゃん……良い子じゃん……」

そのままヒカリちゃんとの楽しい登校シーンを楽しむスネ夫。

そしてそんな彼を後ろから見守る三人。

「お、おい、ヒカリちゃんいきなり転んでパンツ全開なんだが!」

「そりゃわざとやってるんだよ。そういう設定なんだから。」

「……………」

『だって、私、君のこと好きだから!!!』

校門の前でヒカリは勇気を振り絞って叫ぶ。

『火野本さん……俺も……俺も火野本さんのこと好きだよ。』

『あ……』

その言葉にヒカリは嬉し涙を流す。

『火野本さんと離れたくないよ、俺も。もう……二度と……』

『うん……うん……もう、どこにも行かないで……ずっと』

私の側において……お願い……』

そう言うヒカリは主人公の胸に飛び込む。

「うへ、うへへへへっ♡」

「『』。『』」

やばい、ちょっと本気でやばいこいつ。

「このまま行くとスネ夫はすんなりとオタクの道へ……」

「まあそれでも別にいいか。本人が望むならそれはそれで……」

「可哀想に……」

「それにしてもものび太、良くあんなゲーム持ってたよな。どこで買ったんだ？」

「買ったんじゃない。作っただ。」

「『えっ!?!』」

その言葉にジヤイアンと静香は驚く。

「退屈だったから、昔ドラえもんと一緒に作っただけなんだけどさ……」

そう言うとのび太は前にドラミちゃんが置いていった秘密道具、ハツメイカーの事を

二人に説明する。

「それじゃあヒカリちゃんの声やってんの誰だよ。」

「スネ夫のママ。」

『へっ!?!』

のび太の発言ジャイアンと静香は衝撃をうける。

「ママって……おばさま!?!」

「すげえな。あいつの母ちゃん普通にすげえな……」

『いやだも、そんな事でいちいちこわい顔し・ない・で?』

「はあ〜い♡」

そのまま自分の母親に惚れ込んでいく可哀想なスネ夫。いつか自分に本当に彼女が出来たら、その伝手で絶対誰か一人はスネ夫に紹介してやろうと心に誓った。

初恋事件

プロローグ

それはある日の事。

ゴソゴソ

「わあーっ。懐かしいなあ。」

全員で押入れを整理していたら、懐かしいものを発見する。クマのぬいぐるみ、布団、玩具に教科書。

「これは……」

「もしかして、のび太ですか?」

「わあーっ! 可愛い!!!」

チエルシーは勝手に落ちていたのび太のアルバムを開き、シエーレとクロメと一緒に中を覗き込む。

「ちよつと、返してよ!!!」

女の子たちに自分のアルバムを見られ、顔を真っ赤にするのび太。急いで取り返そうとするが

スルツ

バタン

何かに足を取られ、転倒する。

「いたたたたたたたつ。」

「大丈夫か？」

「ん？」

するとのび太はアルバムと一緒に置いてあつた小さな箱に目を向ける。

「何、それ？」

チエルシーの言葉にのび太は首を傾げる。

「何だろう、覚えてないなく？」

そう言うとのび太は箱を開けようとするが、ビクともしない。

「どうやら鍵が必要のようだな。」

「ああ。それね……」

「知ってるのママ?」

どうしても思い出せないので、のび太は玉子に箱の事を聞いてみた。

「それは……のびちゃんが昔、大切にしていた宝物よ。」

「宝物?」

「今度、お姉さんにあげるっていつてたじゃない。」

「お姉さん?」

「忘れたの? のびちゃんの初恋の相手よ!」

「えっ!」

「『『『初恋!』』』」

玉子の言葉にアカメたちは声を上げる。そして何故か当の本人も驚いている。

「ええ。のびちゃん、大きくなったらあの人と結婚するって言ってたじゃない。」

「『『『え……』』』つ!』』』」

アカメたちの声が家中に響き渡る。

「ど、ど、どという事だ!」

「初恋って……聞いてないよ!!」

「私というものがあるがら!!」

「浮気者!!!」

「見損なつたわよ!!この女たらし!!」

「初恋・・・・・・・・初恋・・・・・・・・」

凄い剣幕でのび太に掴みかかる。

「どういふことだ、のび太!?!」

「アカメちゃんたちじゃ不満なのか!?!」

「さ、最低!!のび太さんが最低なのは知ってたけど、ここまでとは思わなかつたわ!!」

そしていつの間にかジャイアン、スネ夫、静香もその輪に加わっている。いつからいたんだ、全く気づかなかつた。

「その人の名前や住所は分からないの!?!」

「写真とかないんですか!?!」

「さあー、どうだったかしら・・・・・・・・」

クロメと翼に詰め寄られ、焦る玉子。

「『『『お願ひします、思ひ出してください!!!!!!』』』」

第一章：誘拐を斬る

「誘拐された？ 僕が!？」

玉子の言葉に何故かのび太自身も驚く。

「忘れもしない。十五年前の五月八日、怪しい三人組が家に忍び込んできて……」

「『『』のび太を連れ去った!』『』』」

アカメたちは驚き、声を上げる。

「……」

のび太はなんとかしてその時の事を思い出そうとする。だがどんなに考えても出てこない。そんな大事件に巻き込まれていたのなら、普通忘れるはずがないのだが。

「そしてのび太をその誘拐犯たちから助けたのが……」

「髪が長くて。」

「背が高くて。」

「メガネをかけている女性。」

玉子から聞き出した情報をメモにまとめる。

「のび太さんの初恋の人だから、相当素敵な人なんでしょうね。」

静香は小さく呟く。

「それじゃあ、行こうか。」

「行くつてどこに？」

チエルシーの言葉にのび太は首を傾げる。

「その人に会いにだよ!!」

そう言いながら彼女はのび太の机に視線を向ける。恐らくタイムマシンの事と言ってるのだろう。

「残念。タイムマシンは修理中なんだ。」

「そ、そんならっ。」

のび太の言葉にクロメは項垂れる。これでは過去に行つて確かめる事が出来ない。

「静香ちゃん・・・・・・・・」

余計な事を口走った静香を心の底から恨むのび太。

「でもベルトは三つしかないよ。どうする？」

「勿論。私とのび太とお姉ちゃんで行くよ。」

「何でそうなるのよ!？」

「そっだよ!!僕たちだっで行くよ!!」

「アンタたちは関係ないでしょ!?!?帰りなさいよ!!!」

「アンタもね。大体勝手に家にあがらないでよ!!警察呼ぶわよ!!」

「なんですってーーーーーっ!!!」

全員でタイムベルトの取り合いを始める。なんて醜いんだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヤレヤレまた始まった。だからベルトの事を内緒にしておいたんだ。このあと色々討論したが、結局決着がつかず、全員でジャンケンをするはめになった。

そして結果は・・・・・・・・

「勝った……」

こうしてのび太はシエーレとレオーネで過去に行くことになった。

第二章：おばあちゃんを斬る

カチツ

「ふくん。ここが十五年前の世界……」

「あんまり変わらないな……」

「そう言いながらシエーレとレオーネは辺りを見渡す。

「だ、誰です!? アンタたち!」

『「?」』

後ろから声がした。振り向くと掃除機を持った玉子の姿があった。

「おーっ、やっぱり若いなっっ。」

「当たり前だろ? 十五年前なんだから……」

レオーネの言葉にのび太はツツコム。

「／／／／／ あらっっ、そうかしら?／／／／／」

若いと言われ、玉子は頬を赤らめる。するとこのび太は

「どうせすぐ小皺だらけになるんだ。気にしない、気にしない。それよりも……」

襖を開ける。

ワ
ナ
ワ
ナ

のび太の発言で玉子の中で何かが崩れ落ちる。

ピ
キ
ッ

「何です、他所の家に黙って入り込んで
!!!!!!!」

「『わあああああああ————!!!』」

三人は、急いで家を飛び出していく。

そして数分後。玉子が出かけたのを確認した三人は
「さてと。どこにいるかな……………。無事だといんだけど……………」
裏口から中に入り、居間の襖を開ける。
「あつ、いた!!」

そこには三歳ののび太が玩具で遊んでいた。

「きゆう〜？」

子供ののび太はシェーレたちを見るなり、キョトンとする。

「さあ、おいで可愛がつてあげるよ!!!」

そう言いながらのび太は子供の自分の頭を撫でる。すると

「ママ、変なお兄ちゃんが……!!!」

子供ののび太が暴れ出す。

「大きな声出したら、ダメだよ。」

「どうしたの、のびちゃん？」

するとある人物が居間へとやってくる。

『「あつ!!!」』

それは忘れもしない。のび太の大好きな祖母である。突然の出来事に全員固まる。

「あの……突然……すいません……実は僕……」

本来なら不法侵入で怒られるところだが

「あ〜っ、いらつしやい。高校生ののびちゃんね。」

おばあちゃんは優しくのび太たちを迎え入れた。

「おばあちゃん!!」

のび太は彼女に抱きつく。

「よしよし、よく来たね。」

そう言いながらおぼあちゃんは優しくのび太の頭を撫でる。

そして数分後、庭でシエーレと遊ぶ幼い頃ののび太。

「飴食べます?」

「きゆうく?」

シエーレは飴玉を差し出す。

!!!

のび太（子供）は目を輝かせながら、飴玉を受け取る。早速餌付けされた。

「さて、これからどうしよう?」

のび太は考える。歴史通りならもうすぐ誘拐犯たちがやってきて、幼いのび太を誘拐するはず。

第三章：ダルマを斬る

「ま……ま……ま……ま……」

今度は幼い自分とお馬さんごっこをするのび太。

「すっかり懐いちゃいましたね。」

「まっ、自分同士だからね。」

そしてその様子を遠くから見守るシエーレとレオーネ。するとそこへ
「のびちゃん、とっても楽しそうね。」

隣の部屋で寝ていたおばあちゃんがやってきた。

「あつ、ばあちゃん。寝てなきやダメだよ!!」

「すみません、煩かったですか?」

「大丈夫よ。今日はとっても気分がいいの。」

そう言いながらおばあちゃんはチエルシーとレオーネの隣に座る。

「今日は来てくれ、ありがとね。」

「あ、はい。」

「ああ。」

おばあちゃんはシェーレとレオーネに頭を下げる。そして視線をのび太（子供）に向ける。

「いつも泣いてばかりいるのびちゃんを見てると心配なのよ。」

『だろうね』と言う言葉がシェーレとレオーネの頭を横切り、二人は苦笑いする。

「でも今日、高校生ののびちゃんを見て安心したわ。」

『?』

するとおばあちゃんはテーブルに置いたあつた小さなダルマを手取る。

「ダルマさんって偉いね。何遍転んでも泣かないで、起きるものね。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「のびちゃんもダルマさんみたいになってほしいの。転んでも転んでも一人で起きられる強い子になった欲しいの。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「大丈夫。のび太はもうダルマさ。笑われて、呆れられても何度だって立ち上がる強い奴さ。私が保証する。」

それを聞いて安心したのかおばあちゃん笑みを浮かべる。

「これからののびちゃんのことをよろしくね。」

おばあちゃんは再びシェーレとレオーネに頭を下げる。

「はい。」

「まかせときな。」

「お姉ちゃん、おそとへいこう!!」

今度はシエーレの手を取り、外へ出かけようとするのび太(子供)。シエーレは視線をのび太に向けると、のび太は笑みを浮かべ、頷く。

「それじゃ、いこうか?」

「うん。」

のび太(子供)に手を引かれ、シエーレは外に遊びに出かけた。残されたのび太とレオーネは

「さてと………」

「これからどうするんだ？」

「とりあえず………」

「とりあえず？」

のび太は部屋中に視線を向ける。

「この部屋を掃除する。」

よく見ると部屋中がクレヨンの落書きだらけ。いつの間に。

「わあーっ。凄い!!」

十五年前の風景に流石のシェーレも驚く。そして彼女はふと目についた見慣れない

ジュエリーショップへと入っていく。そして飾ってあつた指輪に視線を向ける。

「ねえ、おねえちゃん！これなに？」

のび太（子供）は興味心身にシエーレに聞いたです。

「これは結婚指輪です。」

第四章：秘密のおまじないを斬る

「けっこんゆびわ？」

「男の子は、好きな女の子にこの指輪を渡すんです。そして女の子がそれを受け取ったら、二人は結婚するんですよ。」

「………けっこん……？」

「ずっと一緒にいられるってことよ！」

「ずっと………いつしょ……。」

【その頃、野比家では】

「はっつ。やっと終わった。」

「草臥れた。子供の世話も大変だな。」

部屋の掃除を終え、その場に座り込むのび太とレオーネ。

「もうすぐ夕方か……」

「結局現れなかったね、誘拐犯。」

そう言いながら二人は空を見上げる。

「ただいまーっ!!」

すると玄関で声がした。

「不味い、ママが帰ってきた。」

「とりあえずどっかに隠れよう。」

そう言いながらどっかに身を隠す二人。

【その頃、シエーレたちは】

「わあああああああああーん。お姉ちゃん！お姉ちゃん!!」

のび太（子供）は泣きながらシエーレの足にしがみつく。

「どうしたんですか？」

「うわあああああああーん。!!!」

のび太（子供）は泣きながら遠くの方を指差す。

「.....」

シエーレが指差した方向に目をやると、

「やった！やったーっ!!」

「やーい！やーい！」

そこには二人のいじめっ子の姿があった。どうやら持っていた棒つきキャンディを取られたらしい。

「.....」

どうしたものか。ここで手を貸すのが、果たしてこの子の為になるのだろうか。

シエーレはそう思いながら、しゃがみ込むと、のび太（子供）の頭を優しく撫でる。

「.....」

そしておばあちゃんの言葉を思い出す。何でも泣けば、誰かが解決してくれる思っ

もらっては困る。何故ならこの子はいずれ帝国の救世主になるのだから。

「のびちゃん。」

「ふえ？」

シエーレに声をかけられ、泣き止むのび太（子供）。

「元気が出るおまじない、教えてあげましようか？」

「おまじない？」

「ナルケマレバンガカピカツピ。」

「??？」

「私の秘密のおまじないです。一緒に唱えてみましょうか。ナルケマレバンガカピカツピ。」

「ナルケマレバンガカピカツピ。」

「どうです？ 勇気が湧いてくるでしょ？」

「クス．．．クス．．．うん．．．お姉ちゃん、僕もう泣かない。」

「その調子です。」

そう言いながらのび太（子供）の頭を撫でるシエーレ。

「わあああああああーん!!!」
すると突然誰かの泣き声でした。

第五章：大騒ぎを斬る

「シエーレ、遅いね……」

「一体、どこまで行っただ？」

おばあちゃんの部屋でシエーレたちを待つが、いつまでたっても帰って来ない。外も段々暗くなり始めた。

ピーポー

ピーポー

「ん？」

すると突然。パトカーのサイレンが聞こえた。

「なんだろう？事件かな？」

そしてなぜかサイレンが段々こちらに近づいてくる。

「家に来たりして……」

「まさか、そんなことあるわけないだろ。」

そう言いながらのび太とレオーネは苦笑いする。

「あれ、しずかちゃん……」

「あつ、のびたさん。」

「どうしたの？」

「あれ……」

静香（子供）は池に浮かんでいる帽子を指差す。どうやら風で飛ばされたらしい。

「あたちのぼうし……」

静香（子供）は泣きそうな顔をする。

「……」

のび太（子供）はシエーレに視線を向けると、彼女は静かに頷く。

「よーちい。ナルケマレバンガカピカッピ。」

のび太（子供）は勇気を出して池に飛び込んだ。

「わああああ!!たちゆけて!!」

帽子を掴み、必死に水の中でもがく幼いのび太。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ!」

しばらくするとこのび太（子供）はあることに気づく。

「あさい・・・・・・・・。」

池の水はのび太の腰元までしかなく、子供一人が溺れるほどではない。のび太は急いで池から上がると、静香（子供）の元にやってくる。

「はい、ぼうちい!!」

そう言いながらのび太（子供）は静香（子供）に帽子を手渡す。

「ありがとう。のびたちやんつとつても勇気があるのね。」

「////// やあーーーーっ。//////」

静香（子供）の言葉に顔を赤くするのび太（子供）。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

そしてそんな二人を遠くから見守るシエーレ。

「あれ？どうしたんだらう？」

「??？」

何故か家の前に人だかりが出来ている。しかもパトカーが3台も止まっている。そして何故か玄関で取り調べを受けている玉子とのび助。

「最後にお子さんを見たのはいつですか？」

「お昼頃です。」

「昼間、家に不法侵入してきたという三人組の特徴は？」

「さあ……突然の事だったので覚えてません……」

どうやらとんだ騒ぎになっているようだ。

「おい、シエーレ!!」

「??？」

突然後ろから声がした。振り返るとそこには

「あつ、お兄ちゃん。お姉ちゃん。」

見知った二人の姿があつた。

「どうなってるの、これ？」

「僕がどこにもいないから、ママが大騒ぎした挙句警察に電話したらしい。」

そう言いながらのび太はため息をつく。本当に嘆かわしい。

第六章：真相を斬る

「さてと、帰るか!!」

のび太たちはタイムベルトを腰に付ける。事件の真相はこうだ。家に忍び込んだ怪しい三人組は他ならぬのび太たち。つまりのび太が誘拐されたというのは玉子の早とちりによるもので誘拐犯など最初から存在しなかったのである。

「はあ〜っ。」

人騒がせな自分の母親にため息をつくのび太。

「お姉ちゃん、帰るの?」

のび太（子供）は不安そうにシエーレを見つめる。

「.....」

「またあえるかな?」

するとシエーレはしやがみ、のび太（子供）と目線を合わせる。

「もしこの先、あなたが泣かずに転んでも一人で起きられる強い子になったら、きつとまた会えますよ。」

「ほんと!?!」

「はい。」

「おねえちゃん。ぼく、つよくなる。ころんでもころんでもひとりでおつきする……」

「……………」

その言葉が相当嬉しかったのか、シエーレはのび太（子供）の頭を優しく撫で始める。すると、のび太（子供）はもじもじと照れた様子で彼女と向き合う。

「だから……………」だから……………」

視線を逸らしつつも、チラチラとこちらの様子を窺うその仕草は、明らかに何かを言いたげな様子だった。その様子にシエーレだけでなく、レオーネたちも??を浮かべる。やがて腹を決めたのか、のび太（子供）は勇気を振り絞って口を開いた。

「こんどあつたら、ぼくとけっこんしてください!!」

『ぶっ!?!』

突然の告白にのび太とレオーネは固まる。すると二人はある事に気づく。それは今のシエーレの特徴である。

- ・髪が長くて
- ・背が高くて

・眼鏡をかけている女性

玉子から聞き出した情報にびったりと当てはまる。つまりシエーレが……彼女こそがのび太の初恋の相手。

「はい、喜んで。」

シエーレは優しい笑みを浮かべ、のび太（子供）のプロポーズに対応する。

「／／／ ほっ、ほんと!?／／／」

「その代わり、私を守るぐらい強くなってくださいね。」

「／／／／／ うん、わかった。おねえちゃんほくがまもる。／／／／／」

大喜びするのび太（子供）。

「約束ですよ!」

「うん!」

「『ゆびきりげんまん 嘘ついたら はりせんぼん飲ます♪』」

そう言いながら二人は指切りをする。

「またね!!」

「さようなら、おねえちゃん!!」

のび太（子供）は手を振りながら両親たちがいる家へと帰って行った。シエーレは名残惜しげに視線を戻す。さて、やることは一つだ。まずは、傍で固まっている二人を解凍することから始めなくては。

最終章：しばらくこのままを斬る

「おかえり、みんな!!」

「おかえりなさい!!」

何とか無事に元の時代に戻ってきたのび太、シエーレ、そしてレオーネ。

「おかえり、のび太!!」

そう言いながらいつものように彼に抱きつくクロメ。

「それで初恋の相手には会えたのか？」

「.....」。

アカメの問いに何故かのび太は答えない。

「のび太？」

ゆさゆさ

「のび太!!」

ゆさゆさ

「のび太ー.....っ!!おーい!!」

何故か真っ白な灰と化しているのび太。余程過去でひどい目に合っているのであろう。

心配になったアカメとクロメが彼の体を激しく揺らし、耳元で叫んでみる。だがどんなに体をゆすつても、どんなに大きな声で呼びかけても、反応はない。

「レオーネ、一体何があつたんだ!？」

・「うくん。」

レオーネは唸りながら眉間にシワを寄せる。

「初恋の相手には会えたのか？」

「会えた……会えたけど……」

「けど？」

「世の中には知らない方が良いこともあるってことさ。」

「『?』?」

「後、思い出は美しいまま心の中に閉まっておくべきだな。」

ため息をつくレオーネに全員首を傾げる。その後、全員レオーネを問いただすも、彼女が口を開くことはなかった。

シエーレはのび太の椅子に座り、机の上に置いてある小さな箱を眺める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

【それは・・・・・・・・のびちゃんが昔、大切にしていた宝物よ。今度、お姉さんにあげるっていったじゃない。】

【そして女の子がそれを受け取ったら、二人は結婚するんですよ。】

【こんどあったら、ぼくとけっこんしてください!!】

「この箱を開ける。それはつまり私とのび太が・・・・・・・・。」

そんな言葉を静かに呟くと、後ろにいる優柔不断な自分の想い人に視線を移す。

「のび太、どうしたんだ!? ひどいことされたのか!？」

「大丈夫。のび太には私がついているから!!」

「ちよつと! どさくさに紛れてなに抱きついてるのよ!？」

「そういう静香だつて……つて締まってるよ!!」

「あつ、ごめんなさい!!」

「大変! 白目向いてますよ!!」

「どうしよう、どうしよう!!」

「はい、これ薬。飲んで!!」

「ああーっ!! 今度は口から魂が出てます!!」

「消防士!! 110番!!」

「救急車でしょ!？」

「それより布団引いて!!」

「……つてあなたが寝てどうするのよ!!」

そんなバカ騒ぎを後ろで見守るシエーレ。

(くすっ。でもしばらくはこのままで……。)
彼女は笑みを浮かべる。

のび太のやりたい事

プロローグ

「あのー、すみません……」

突然声をかけられてのび太はドキッとしてしまう。声をかけてきたのは、格好から見て番組のレポーター。

「只今、番組の企画でカップルにアンケートをお願いしているのですけれど、ちよつとお時間よろしいでしょうか？」

「恋人？」

「いや、僕たちはそんなんじやー」

ドカツ

「は、はい！恋人ですっ！私達アツアツのカップルです！アベックなんです！近所では死んでも直らないバカップルって言われてます！」

チエルシーは思いっきり強烈に自分達が恋人だとアピールしまくっていた。しかもスリスリとネコのようにのび太の腕に頬を擦り寄せて、ラブラブっぷりをアピール。

「……………」

のび太はチエルシーの態度に苦笑いしか生まれなかった。

見ているこつちが恥ずかしくなるくらいチエルシーは幸せいっぱいな感じで話す。アンケートに答えていくチエルシー。もはや美味しいものを食べているわけでもないのに、ほっぺが落ちそうなほど表情が緩んでいた。レポターもチエルシーの、幸せでノリのいい返答っぷりにエンジンがかかってきたようで、明るい口調で次々と質問してくる。

「彼氏の方にもお尋ねします。彼女の好きな場所を教えてください。」

「サバト霊園かな。」

ドス!!

「うふふふつ……もうのび太ったら、照れてバカなこと言わないの。『完璧に理想通りの女の子』っていつてくれたじゃない!」

「言ったつけ、そんな事?」

ドスツ!!

僕に発言権！発言権を求む！

「いやー、先程から思っていました。が本当に中でいいですねえ。こつちまで幸せになりそうです。」

「そ、そんな……恥ずかしいです……」

レポーターの感想にぼつと頬を染めるチエルシー。

（貴様の目は節穴かあああつ!!どこの世界にここまで虐げられる中のいいカップルがいるのものがあああつ!）

チエルシーを持ち上げるだけ持ち上げたレポーターは『アンケートにご協力いただきありがとうございますございました』と言って、また別のカップルのところへと向かっていった。

「いい人だったね……」

チエルシーはぼーっとした様子だ。

「あ、ああ……そうだな。（僕は貴方に突かれて脇腹が痛いです。）
のび太は、ため息をつく。

「そろそろ帰ろう、チエルシー。」

これ以上、恋人ゴツコとして、チエルシーを調子・突かせてはいけない。

「えー? 『今夜は寝かせない』って言ったじゃない。もう少し見てこうよ?」
「言っただけ、そんな事?」

ドスツ!!

チエルシーは人目も憚らず、堂々と腕を組み始めた。ぼよんと、柔らかな乳房が腕に押し付けられ幸せなハズなのに、のび太の目からは涙が止まらなかった。

第一章：演技を斬る

「困ったな。どうします、監督？」

「うーん。」

公園ではスタッフと監督らしき男が頭を悩ませていた。

「どうしたんだろう？」

「何かあつてのかな？」

のび太とチエルシーが野次馬をかき分けて、列の前に立つ。

「ん？」

するとのび太とチエルシーの姿が監督の目に止まる。

「き、君たち！」

監督は椅子から立ち上がり、二人に声をかける。

「ちよつと、頼みがあるんだが……」

「『???』」

「へ？本気ですか、それ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

監督の頼み事へのび太とチエルシーは啞然とする。

「頼むよ、俳優さんが二人とも事故で入院してしまったんだ。」

「俺たち、一般人ですよ。演技なんて・・・・・・・・」

「いや、私は君たち二人なら出来ると信じている。そう、あの劇の主役を務めた君たちなら。」

のび太とチエルシーはキョトンとする。

「息子の文化祭に行った日。私は見たのだ！君たちの才能溢れる演技を!!」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

のび太は文化祭でやったロミオとジュリエットの劇の事を思い出す。

「頼む、もう君たちしかないんだ！」

監督は泣きながら、のび太とチエルシーの手を握ってくる。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・僕はなにも・・・・・・・・君・・・・・・・・から・・・・・・・・奪つては・・・・・・・・いない・・・・・・・・と。」

のび太は必死でセリフを暗記していた。こんな時、ドラえもんいればとつくづく思う。アンキパンさえあれば、こんなことお茶の子さいさいなのだから。

「ねえー！」

チエルシーに声をかけられ、顔をあげる。

「シナリオなんて、何度読んだって同じだよ。それよりそのシーンの流れを掴んでおけば、少しセリフが違つたつてかまわないんだから。」

「そんなこと充分わかつてるけど、演じる側に立つなんて初めてだから。ちよつとパニクってんだよ！」

「ちゃんとリードしてあげるからさ、あとはドン！とその場の流れでパッと行こう

よ。」

「気楽に言うなよ。」

「監督くつ、本人ヤル気マンマンでくす！」

能天気なチエルシーにのび太は不満げな声をあげる。

「言つてないよ!!」

「シーン8、カット15、よおい！スタート!!」

撮影用のカメラがチエルシーとのび太に向けられる。

「あなたは私から、肉体と意識を奪っていったわ……。でも、それで全てと思わないで。私はなにも君から奪っていない。それはあなたが気づいていないだけ……」

素人とは思えない演技。まさかチエルシーにこんな隠れた才能があったとは。

「でも、まだ残されていたものがひとつだけ……。私の存在……。あなたはわざと残していったんでしょ？存在だって手に入れようと思えばできたのに……」

チエルシーはのび太に抱きついた。

「正直に答えて……なぜ残していったの？」

「ぼ、僕は……いつも正直だよ。僕自身の考える……言葉でい、いつも……」
チエルシーとは真逆にのび太はガチガチに緊張している。

「ちがうわ、無意識の中のアナタの声が聞きたいの……」

チエルシーの豊かな乳房がこれでもかかってほど押し付けられる。

「／／／／ぐつうう……（ここで……ここで、背中に手をまわして抱き寄せ……
そしてセリフ!!）／／／／。」

そんな二人を遠くから見ていたスタツフたちは

「なにやっつてんだあいつ？動きやしねえ。」

「自分で『間』を作つてるとか？」

「そうだといいんだが……」

異変に気づき始めた。

緊張という名のストレスに支配されていたのび太はとうとう限界を迎えた。

プシューーーーーー！！

「わあっ！」

バタン！！

のび太は後ろざまに倒れる。

「どうしたあ?」

突然の事にスタツフ、監督、野次馬たちがざわめき始める。チエルシーはおずおずと監督に口を開いた。

チーン

「あの、鼻血だして気失ってます……」

「カーッと!!」

監督は呆れ果てて、撮影を中断させた。

第二章：チエルシーの凄さを斬る

「のび太。今日の放課後付き合ってくれないか？ 駅前に新しい美容院ができたんだ。」

「……美容院？」

レストランならともかく、何故アカメが美容院に行きたいのか理解できないのび太。
「のび太、わかってるでしょうね？」

だがチエルシーがのび太とアカメの話に割って入る。

「う。ごめん、アカメ……。今日は、ちよつと……。…」

申し訳なさそうにのび太はアカメの頼みを断った。

「ごめんね、アカメちゃん。のび太にちよつと手伝ってもらうことがあるのよ。」

「……そうか……。…」

誘いを断られ、肩を下ろすアカメ。

そんなやり取りを見ていた周囲の生徒たちは哑然とする。

「お、放課後の逢い引きか？やはり二人は……」

「日本っていつから一夫多妻制になったんだ。」

「最近なんか綺麗になったねアカメちゃん……」

「チエルシーちゃん、最近なんか楽しそう……」

「まったく、だらしがないんだから。」

のび太は台本を読みながら申し訳なきそうに答えた。

「ゴメン……」

「でも鼻血はないよね。なんかエッチなことでも考えてたんじゃないの？」

チエルシーはいつものようにのび太を揶揄い始めた。

「／＼／＼／＼ べ、別にそんなこと．．．．．／＼／＼／＼」

「おう、ムキになるところがますます怪しい。」

「／＼／＼／＼．．．．．このお．．．。／＼／＼／＼／＼」

「アカメちゃん、綺麗だったもんね〜？」

ぎくくつ。

チエルシーはニヤニヤした顔でのび太を見つめる。

「ナンノコトカナ？」

「あつははははははは、ホントにからかいがあるよね。」

「．．．．．でもさ、チエルシーみたいに土壇場で自分じゃない人間を演じきれるのは．．．．．やっぱり神経のズ太さ？」

「わるかったわね、神経ズ太くて。」

「のび太は頭をフル回転して考える。」

「．．．．．僕のおかげかな？」

「冗談交じりで言ってみた。」

「なに言ってるの！」

「はは．．．そうだよね。」

「はは．．．そうだよね。」

「でも、ちよつとはあるかも。」

「え．．．？」

「のび太が近くにいると思うと安心できるし、一人じゃね．．．心細いから。」

「そうか．．．よかつた。少しは役に立つてるんだ、僕。」

「なに？まだ気にしてるの昨日のこと。気にしない気にしない。」

「．．．．．。」

「もう！なぐさめがいのない奴だなあ、ホラ！元気出して！」

　　そう言いながらチエルシーはのび太の身体に身を寄せてくる。

「ありがとう、なんとかチエルシーの足を引っ張らないようにがんばるよ。」

「よおし偉い！元気が出たらおなかすいたでしょ？私お手製の料理、御馳走するから期

待してて。」

「期待してよいのやら．．．」

「あたしの料理の腕、知ってる癖に！」

「知らないよ、僕は。」

第三章：やりたいことを斬る

「・・・あのさ。」

「・・・何？」

「・・・あのさ、チエルシーは何で殺し屋に？」

「何でそんなことを聞くの？」

「いや、だって、興味あるでしょ？僕は成り行きでなったけど、チエルシーはどんなのになって思ってたさ。」

「ま、いいでしょ。教えてあげる。」

チエルシーはのび太の隣に座ると、自分の過去を話し始めた。

お前はとても優秀だな。期待しているぞ。

はい、お父様。一所懸命頑張ります。

頼んだよ。

・・・子供の頃から秀才で、器用で、お金に不十したことがなかった。

「実は私、地方の大商人の娘・・・。」

「・・・お嬢様？」

その言葉にチエルシーは頷いた。

「チエルシー・・・。」

「・・・。」

「嘘つくんだつたらもつと・・・。」

ぎゅうーーーーー

「う・る・さ・い。黙って聞きなさい!!!」

「ふいまへんへした（すいませんでした。）」

縦横無尽にほっぺをつねるチエルシーに半泣きになりながらギブを宣言しているの

び太がいた。

「でもいいなく。僕もそんな風に生まれたかった。」

「本当にそう思う?」

「勿論!!」

「.....」

ニコリと笑うのび太を尻目にチエルシーは話を続けた。

「でも私には小さい頃から出来なかったことがあったの。」

「??」

「友達作り.....。だから学校でもいつも一人で過ごしてた。けど.....」

「??」

「ある日、クラスの女子から急に親切にされ初めた。いつも一人だったから急に親切にされ始めて少し戸惑ったりしたけど。放課後みんなで一緒に帰ったり、おしやれを教えにくれたりするうちに感謝するようになって。ちよつとずつ仲よくなっていた。そ

の時は生まれて初めて友達がたくさんできて嬉しかった。背一杯彼女たちに合わせた。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でも彼女たちにとって私は・・・・友達ではなくて・・・・金蔓だった。」

「??？」

「だんだん彼女たちは私に高いものをねだるようになって・・・・それが嫌で彼女たちと一緒にいるのをやめた。そうしたら廊下で足を引っかけたり、無視をされたりするようになった。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ある時・・・・クラスメイトの財布がなくなったの。それでクラス全員で持ち物検査したら私の鞆から出てきて・・・・まったく身に覚えがないのに先生が私を疑って・・・・クラスのおちこちから私のことを・・・・あざ笑う声が聞こえてきて・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「親も、兄弟も、誰も信じてくれなかった・・・・。私は誰も信じられなくなった。結局私はお嬢様としか見られていなかった・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

友達、
アンタ本気で言ってるの？

何で私がアンタみたいなのろい奴の面倒見てたか、分かってる？
やるとねえ、内申書の足しになるからよ！

アンタの面倒みて

お金がないアンタに用はないわ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・それでヤケになって殺し屋に？」

「・・・・・・・・・・違う。私が初めて人を殺した時、皆がホツとしていた・・・・・・・・喜んでいた・・・・・・・・私は世直しをした。親の権力なんかじゃない・・・・・・・・。自分自身の力で・・・・・・・・腐敗した世界そのものを変えられるかもしれない・・・・・・・・。」

「……………」

「……………」

「……………チエルシーも結構甘いんだね。」

「うっ!?!」

ボコン

「……………痛っ。」

「違うわよ、私の精神衛生上の問題ね。」

「……………でも、チエルシーは自分の本当にしたいことが分かってるんだ。うらやましいな。僕はまだわかんないんだ、本当は何がやりたいのか……………」

「そう?…ひよつとしたらそれって案外、目の前にあるのに気づいてないだけかもしれないわよ。」

「……………目の前……………」

「それとね。さつき『誰も私を信じてくれなかった』って言ったけど。」

「???」

「一人いたの、信じてくれた人。」

「私、自分自身よ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「人は自分自身を信じられなくなった時、本当の意味で死んでしまう・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「だから私は自分を信じて殺し屋になった。誰に言われたわけじゃない。腐敗した世界そのものを変えられると信じて。」

「うん。それじゃあ僕は・・・」

「??」

「僕はそんなチエルシーを信じるよ。狡くて、お転婆で、可愛くて、寂しがりやなお姫様を・・・」

「!？」

「それが僕の『やりたい事』だよ！」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「ペチン!!!」

チエルシーはのび太の顔を思いつきり引つ叩いた。

第四章：出演を斬る

「テレビ局プロダクションの社長がぜひ出てくれつつうるさいの！」

いつものようにスネ夫の自慢話が始まった。なんと、スネ夫がテレビに出るというのだ。

「ぼく、よわっちゃって。で、まあ、主役だけはかんべんしてくれと。わき役なら出てあげてもいいですと。なぜってさ、人気スターなんかになるより学校の勉強を大事にしたいもんね。今夜七時放映されるよ。よかったら、うちのテレビで見なよ。二十四インチの大画面！迫力あるよ！でも、羨ましくてしゃくにさわって、見てられないという人には、すすめないけど。アハハ。」

のび太、ジャイアン、静香はウンザリという顔をする。

『「……………」』

そして夕方。結局スネ夫の家でテレビを見ることになったのび太たち。

「今週の話はね．．．．．エイリアンが日本に攻めてくるって話だよ．．．．」

スネ夫の説明を聞き、三人はテレビの画面に視線を移す。しばらくして円盤が街に飛来するシーンが映し出される。

「あーあれだよ、あれー！」

「どー？」

「あそこだよーあそこー！」

スネ夫は必死に声をあげ、テレビの画面を指差す。だがのび太たちにはどこにスネ夫がいるのか分からなかった。そうこうしているうちに、シーンは変わってしまう。

「あれで終わり？」

静香はスネ夫に視線を向け、口を開く。

「だから言っただろ？脇役にしてもらったって．．．．」

その言葉にジャイアンと静香は笑い出す。スネ夫の出演はものの数秒と、いつもの誇大広告な自慢一人走りであった。

「スネ夫、お前は偉いよー！お前は立派に出演を果たしましたよー！」

「クスクス。」

ジャイアンは大笑いしながら掌でスネ夫の背中を叩き始める。そして静香はクスクスと笑う。

「笑うな!!!可笑しくない!!!」

笑われたのが気に食わなかったのか、スネ夫は怒りながらテレビのリモコンを床に叩きつける。だがそんなスネ夫など気にも止めず、ジャイアンはスネ夫を揶揄い続ける。「笑うなって言っただって、これが笑わずにいられるかよ。な、のび太?」

同意を求める為ののび太に視線を向ける。

ピッ

粗同時にジャイアンは床に転がっていたテレビのリモコンを踏んづける。するとチャンネルが切り替わり

「あ—————!!!」

「のび太が!!!」

「まさか……………」

ジャイアン、スネ夫、静香は目玉が飛び出るくらい驚いた。この間のび太が出演したドラマが放送されていたのだ。画面にはのび太とチエルシーが映し出される。二人は抱き合い、頬を赤くしながら見つめ合う。なんと可愛らしい姿だろう。二人密着した今

の状態は、まるで仲の良い恋人同士。？やがて互いの唇が磁石のように……

「まずい………」

『のび太はこっさり帰ろうとするが
『のび太(さん)!!!!』』

すぐに呼び止められてしまう。

最終章：これからもを斬る

「『のび太（さん）、これはどういうこと（だ）!!!』」

ジャイアン、スネ夫、静香に問い詰められ、のび太は後ずさりする。ジャイアンは怒りで震え、スネ夫は泣きわめき、そして静香は最低だと罵る。

「それにしても昨日は酷い目にあつたな・・・」

あの騒ぎのあつた翌日の朝、のび太とチエルシーは中庭でくつろいでいた。さつきま

で学園で飼育されている兎のせわをして、今は教室に戻る前に休憩しているところだ。
「あつ、こんな所にいた！」

するとクラスメイトのなつみがやってきた。

『なつみちゃん、おはよう。』

「おはよ、野比くん、チエルシーちゃん。つて、そんなことはどうでもいいのよ。」

なつみはのび太の姿を見つけたと思ったらすぐに駆け寄ってきて、いきなりあれこれとまくし立てはじめた。

「昨日の見たわよ！よくやったわ、野比くん！」

「??？」

「何キョトンとしてるのよ。昨日のテレビのことよ。ちやうど見ててびっくりしたんだから！」

「テレビ？」

「チエルシーちゃんを助けて、悪者を撃破。そして最後は抱き合い、熱いキス……」
その言葉にのび太は言葉を失う。あ、そうか。あれ全国放送だったんだ。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

のび太とチエルシーは思わず顔を見合わせ、恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にして黙

り込んでしまった。

「何ふたりして真っ赤になってるのよ。そんなことより、早くここから逃げた方がいいわよ。」

「逃げる？」

「多分、今頃こここの噂好きのみんなが二人のことを探して……」

「あ、いたいたあそこよ！」

「本当だ！サインもらおう！」

なつみの言葉が終わらないうちに、大勢の足音と話し声がこちらに向かって近付いて来ていた。

「って、もう来た!? ほら、ふたりとも速く逃げなって。捕まったら、質問攻めにあうわよ！」

なつみに急かされ、のび太はチエルシーの手を取った。

「のび太。」

「なに？」

チエルシーはのび太に声をかける。

「／／／／ちゃんとお礼を言ってなかったことを思い出して。／／／／／」

「お礼？」

ストーリーカー事件

プロローグ

むかしむかしあるところにそれはそれは美しい一人の女の子がいました。

「翼ちゃん!!遊ぼ!!」

「翼ちゃん!!」

今日も彼女は幼稚園で男の子たちに囲まれ、人気者です。彼女は純真無垢でまるで天使のようだった……

ニヤリ

(アハツハツハハハハハハハ、もつと私に媚びろ・雄ども!!)

なんてことは微塵もなく超腹黒い悪魔だった。そしてある日

公園に男の子を呼び出す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんか・・・・・・・・二人つきりだとドキドキするね。」

ニコリ

態とらしく頬を赤らめる。

「・・・・・・・・え？何か言った？」

ブチッ

「(野比のび太・・・・・・・・この幼稚園で唯一私に媚びない変態男!! 今日こそ籠絡してやるわ・・・・・・・・!!) 暗くなつてきちゃったね。私こういうのダメなんだ・・・・・・・・」

そう言いながら少年の手を強く握る。

(このスキンシップで落ちない男はいないわ。)

発動、美少女究極奥義。だが

「うわ、手汗すごいね。」

ブチイイ

ビリッ

「え・・・・・・・・・・・・・・・・」

ビローン

運悪くスカートを木の枝に引っ掛け、破いてしまう。

「キヤアア見ないでええ!!」

顔を真っ赤にしながら、敗れた箇所を手で押さえる。

だが

スタスタ

そんな彼女を無視し、帰ろうとする無責任男。

「ちよつとは見ろよ!!」

彼女の言葉に少年は立ち止まる。

「お……置いていかないでよお……」

涙目になりながら必死に訴える。

「しょうがないな!」

少年は上着を脱ぐと、少女に被せる。

「とりあえずこれで破れてるの隠しなよ。」

「……」

「家すぐそこだから、おばあちゃんに頼んで塗ってもらおう。さっ、行こう。」

・スツ

そう言いながら手を差し出す。

「わ……私ひどいことしたのに……何で優しくしてくれるの……?」

先程の事を反省したのか、申し訳なさそうな顔をする少女。

「知り合いのお姉さんが言ってたんだ。優しさこそ本当の強さなんだって。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「僕はもつと強くなりたいんだ！そして今度またその人にあつた時・・・・・・・・」

「んん．．．．．昔の夢．．．．．か．．．．．」

布団から起き上がり、背伸びをする少女。今日も彼女は絶好調である。

第一章：友だちを斬る

むかしむかしあるところにそれはそれは凶悪で、残忍で、某着武人で、人を人とも思わない悪魔のような少女がいました。

「ねえ……なんだか寒くない？」

「そうなんだよな。オレも、さつきから寒いと思ってんだ……」

今日は待ちに待った遠足の日。みんなで楽しく山を登り、歌を歌い、お弁当を食べるはずだった。だが彼女たちは運悪く先生たちと逸れてしまった。

「お腹減った……もう一日たったのに、誰も来てくれないよ？」

「オレたち、死んじやうのかな……」

「嫌だああ！こんなところで死にたくない！」

辺りが暗くなり始め、子供たちは焦り始める。

「うるさいわね、静かにしなさいよっ!!こういう時は取り乱してパニックを起こすのが一番よくないのよ。落ち着いて救助を待ちなさい！」

ギロリ

『「……………」』

大声で怒り出す少女。すると全員の視線が彼女に集中する。

「な、何よ、その目は。私に文句でもあるの？」

すると男の子の一人が口を開いた。

「うるさいなあ。黙っててよ!!」

その言葉に少女は顔を真っ赤にしながら騒ぎ出す。

「なーっ!?だ、誰に向かってそんな口をきいてるのよきいてるのよ!?」

すると黙っていた他の子供たちも声をあげる。

「偉そうなこと言うな!誰のせいであろうなっと思っただよ!?」

「あ、あなたまで……!?私のせいだっけ言いたいの!?」

「そうだよ!全部お前のせいだろ!」

「こんなところで迷子になったので、怪我して動けなくなっただって、全部翼のせいだ!」

そして醜い罪の擦り合いが始まった。

「よ、よくそんなことが言えるわね……!あんたたちだって、一緒について来たじゃない!!先生の注意だって聞かなかったでしょ!」

「お前が無視しろって言ったからだ!オレ、本当はこんなとこまで来たくなかったんだぞー!」

「僕だって、みんなと一緒にいたかった……!」

余りの言い分に少女は声を上げた。

「ず、ずるいじゃないの!今さら文句を言っでもしようがないでしょ。こんなことになるなんて知らなかったもの。」

すると子供たち全員がため息をつく。

「じゃえ。」

「死んじゃえ！」

「え．．．．．？」

（うそ．．．どうして？どうして、みんな行っちゃうの？私たち、お友達じゃなかった

(あれから……また、一日過ぎちゃった……お腹空いた……寒い……
寒いよ……誰も……助けに来てくれない……私、ここで死んじゃうん
だ……。みんな……。酷い……。友達だったのに、みんなで一緒にここま
で来たのに、私を置いていつちやうなんて……。自分から『友達になりたい』つて
言ってきたくせにくせに、肝心な時に見捨てて言っちやうなんて……。)

第二章：腹黒悪魔を斬る

むかしむかしあるところにそれはそれは凶悪で、残忍で、某着武人で、人を人とも思わない悪魔のような少女がいました。

「うーっ、ここは……」

しばらくして目を開ける。

「あっ、気がついた!!」

「のびくん……?」

気がつく少女は少年に担がれ、暗い森の中を歩いていた。

「もうすぐ先生たちの所に着くから、頑張つて!」

そう言いながら何とか少女を励ます少年。

「うん……」

「……」。

「……………」

「気まずい空気が流れる。そんな中少女はオズオズと口を開く。

「ね、ねえ……………」

「なに？」

「のびくんは好きなの？」

「??？」

「前に言ってた『お姉さん』の事……………」

「うん。」

「……………」

「一刀両断であった。だが彼女は勇気を振り絞り最大の疑問を口にする。

「じゃ…………じゃあもし私がその『お姉さん』みたいになったら、わ…………私のこと好きになる?…」

「ない。こんな腹黒悪魔冗談じゃないよ。」

ブチッ

「なつてやるから見てなさい!!その時に惚れたつて遅いんだから!!」

少女は鬼神と化し、少年に羽交い締めをかける。今まで泣いていた少女とは思えない程の腕力である。

「いたたたたたたたた!!!」

そして数年後。

「久しぶりだね。野比くんっ!!」

二人は運命的な再会を果たす。

「で?何の用?何しに来たの?」

いきなり自分の通う高校に転校してきたアイドルに呆れた視線を向ける。

「何よ、幼馴染に対してずいぶん冷たいじゃない。」

「幼馴染って……同じ幼稚園だっただけだし……」

愛想良く振舞う淑女に対し、青年は冷たく接する。

「仕事順調みたいだな。みんなにチャホヤされて気分いいだろう?」

その言葉に淑女は

「チャホヤだなんて……そんなの……そんなの……そんなの……そんなの……そんなの……」

「
サイ
ツ
コ
オ
オ
よ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
キ
ヤ
ホ
〜
〜
〜
〜
〜
!!!!!!
」

「・・・・・・・・・・。」

「お姫様になった気分ね!!ホーホッホ!!!!」

『人はそう簡単には変わらない』青年は心からそう思った。

「猫かぶり・・・・・・・・」

ムッ

「今のコト皆には黙つときなさいよ!」

「フン・・・・・・・・」

「で?何の用?用がないなら戻るけど・・・・・・・・」

授業中に呼び出されている為、青年は振り返り、歩き出す。

「用ならあるわよ。」

「??」

「のびくん！あなた私のマネージャーになりなさい♡」
「.....」

第三章：脅迫を斬る

「ただいま!!」

『『お邪魔しまーす!!』』

靴を脱ぎ、野比家に上がりこむジャイアンとスネ夫。

「おい、のび太!」

「何?」

「アカメちゃんたちは?」

「みんなママとデパートに行ってるよ!」

「なあくん、つまんねえの!」

「本当だよ!これじゃ、なにしにのび太の家に来たんだが……」

アカメたちが留守だと分かり、がつくり肩を下ろすジャイアンとスネ夫。とりあえず三人は二階に上がり、のび太の部屋に向かう。

「!!!」

部屋に入ったのび太たちは驚いた。

「何コレ!?!」

「ど……泥棒か!?!」

「……………」

引き出しが全てこじ開けられ、玩具は全て壊され、本も全て所々破れている。まるで台風が直撃した後のようだ。

「本がメチャクチャ……………」

「玩具も……………」

「……………」

啞然としながら、辺りを見渡す。

「誰がこんな……………」

すると押入れの襖に大きく書かれた文字に視線が止める。

「な……………何だこれ!!」

【ツバサに近づくな】

「翼に近づくなって……」

「何で翼ちゃんの名前が!？」

「どうしよう……これ脅迫だよね……?」

慌てふためくスネ夫とジャイアン。すると後ろから

「どうかしたの?」

当の本人の翼が姿を現す。

「これは……一体?」

翼は部屋の様子を見て哑然とする。

「翼ちゃん、アレを見て!!」

「え?」

翼が押入れの文字に目線移す。

「……この字……」

彼女の顔がみるみると青ざめる。

「翼ちゃん？」

「どうしよう、野比くん!!あいつがここまでついて来た!!うわああああああ!!!」

泣きながらのび太に抱きつく翼。彼女の小さな体はビクビク震えている。慌てふためく彼女を宥めながらのび太は口を開いた。

「あいつついていったい……………」

「……………私につきまとう……………スーカーなの……………」

『……………』

翼の言葉にのび太とジャイアンは目を細め、振り向くと

「僕じゃないよ!!」

スネ夫に視線を向ける。顔をブンブン横に降つて否定するスネ夫。

そしてしばらくして、やっと落ち着いた翼から話を聞くことにしたのび太たち。

「元フアンの人なんだけど……二年前から部屋に侵入したり、四六時中盗撮したり……寝てる間に髪を切るなんてことも……」

翼の言葉にのび太とジャイアンは目を細め、振り向くと

「だから違うって!!」

スネ夫に視線を向ける。顔をブンブン横に降って否定するスネ夫。

第四章：囚を斬る

「これからどうする？」

と答えるスネ夫にジャイアンは、

「どうするだって!? 決まってるんじゃないか!!」

テーブルを叩く。

「『???』」

「そいつを俺たちで捕まえるんだよ!!」

「『・・・・・・・・・・・・・・・・』」

『俺』ではなく、敢えて『俺たち』と表現するジャイアン。どうやら自分たちも手伝わされるらしい。

「友達だろ！仲間だろ!! おまえのものはおれのもの、おれのものもおれのもの……な!!!」

「う、うん。」

ジャイアンの提案を仕方なく承知するのび太。だがスネ夫はおずおずと口を開く。

「あつ、でも……僕……これから塾に……」

「スネ夫!!! 塾と翼ちゃん、どっちが大切だ!!!」

ジャイアンはスネ夫の胸倉を掴む。

「それは勿論つば……。」

すると今まで黙っていた翼が声をあげる。

「やめた方がいいよ!! あいつは一筋縄じゃいかない!!」

取り乱す翼にジャイアンは

「大丈夫!!」

「えっ?」

自信満々に声を上げる。

「翼ちゃんを怯えさせるようなクズヤローは俺たちが必ず捕まえてみせる!!」

「……………」

しばらくして、野比家の居間で楽しく会話する二人の人物。

一人はこの家の長男の幼馴染、骨川スネ夫。そしてもう一人は

「ストーカーは翼ちゃんを狙っている。だから罠を置けば奴の裏をかける。」

ガイアファンデーションで翼に化けたこの家の居候、チエルシーだった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「そこを背後から捕まえてやる!!」

そう言いながら意気込むジャイアン。

「でも・・・・・・・・チエルシーちゃんには申し訳ないな。」

「仕方ないだろう。翼ちゃんがいないとストーカーの顔が分かんないし・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ザッ

しばらくすると物音がした。

「おい、誰か来たぞ!!」

誰かが野比家の庭に侵入して来たのだ。ジャイアンはタイミングを見計らい「今だ!!」

侵入者に飛びかかる。

ドス

ベス

ドコン

激しい揉み合いが続く。そしてしばらくすると

「よし、捕獲完了!!」

ジャイアンがロープで侵入者を縛りあげていた。

「あのさ……ジャイアン……」

「??」

大ハシヤギしているジャイアンにのび太は申し訳なさそうに声をかける。ジャイアンは恐る恐る視線を下に移すと

「もう武さんたら、せつかくのび太さんに借りたノートを返しに來ただけなのに……」
グルグル巻きに縛りあげられた静香が泣き出してしまふ。

「ごめん、静香ちゃん!!」

泣きじやくる静香に慌てて謝罪するジャイアン。
「ちゃんと相手を確かめなくちゃ……」

第五章：ストーカーを斬る

「キャアアアアアアア!!!」

翼の悲鳴を聞き、振り返る。

「どうしたの、翼ちゃん？」

「大丈夫？ 怪我はない？」

体を震わせ、のび太に抱きつく翼。彼女の悲鳴を聞きつけ、スネ夫とチエルシーもやってきた。

「あの子よ!!」

翼は茂みの中を指差す。

「えっ？」

「そんな……」

「……」

「じーーーーーっ。」

そこにはビデオカメラを片手に、ランドセルを背負ったツインテールの少女が立っていた。

「少女!？」

「ストーカーって子供なの!？」

「ウソでだろ!?!あんな子供が……」

予想外の展開にのび太、チエルシー、ジャイアンは声をあげる。

「怯えてる翼……萌え……ハアハアハアハア。」

そう言いながら息を切らす少女。それを見たのび太とチエルシーとジャイアンは

(うわ、これは本物だ!)

と確信する。

「その子子供だと思つて甘く見ないほうが『フツ……フツ……フツ……フツ……フツ……フツ……』えっ?」

すると突然今までビクビク震えていたスネ夫が笑い出す。

「おい、お嬢ちゃん……」

「??？」

スネ夫はゆつくりと幼女に近づいていく。

「悪戯されたくなかったら……失せな!!」

そう言いながら指を鳴らすスネ夫。そのあまりの豹変ぶりにのび太たちは声をあげる。

「なに……あれ？」

「子供とわかった途端強気になった!!」

「どう見てもスネ夫の方が悪者にしか見えない!!」

ピトツ

「ん？」

すると幼女はスネ夫に何かを押し当てて。

バリバリバリ

「アガアアアアアアアア!!」

バタン

【骨川スネ夫、気絶により戦闘離脱します。】

「スタンガン!?!」

「何で子供がスタンガン持ってるんだ!?!」

「全身に武器を仕込んでますよあの子は……」

「ふん……手が分かっていたら見切れるさ。」

ギロリ

「!?」

すると今度はジャイアンがゆっくりと幼女に近づいていく。

「武器を使うというのならこっちも容赦しないぞ。それが嫌なら……」

そして拳を振り上げるが

ビクビク

幼女はブルブル震えながら、その場で泣き出してしまふ。その姿に流石のジャイアン

も

「だ．．．だめだカワイすぎる．．．」

戦意を喪失してしまった。

ピトツ

バリバリバリ

バタン

【剛田武、気絶により戦闘離脱します。】

ダッ

「あつ、逃げた!!」

幼女は一瞬の間をついて、その場から走り去ってしまった。

「それにしてもあんな小さな子がストーカーなんて未だに信じられないわね．．．」

「あとあの二人の役に立たなさもちよつと信じられないくらいだったわね。」
三人は後ろのソファアールで横になっている二人の男子に視線を向ける。

第六章：嫌がらせを斬る

「あれ？」

キユツキユツ

お風呂の蛇口を捻るが出てこない。

「しょうがない。明日、水道屋さんに見てもらおう！」

八歩手を尽くしたが、どうやら無理だったようだ。

「じゃあ、今日は……」

「お風呂は無理ということですか？」

「ええ、そんな……」

「何とかならないか？」

「頼むよ。」

「……野比くん……」

そう言いながら不満な顔をするクロメ、シエーレ、チエルシー、アカメ、レオーネ、翼。もうすぐ夏なのか、最近蒸し暑い日が続いている。なので今すぐにもこの汗臭い格好をなんとかしたい。

「しょうがない。銭湯に行こう！」

「『『『銭湯?』』』」

のび太の言葉に全員キョトンとする。

そして数分後、近くの銭湯にやってきたのび太たち。

「いい気持ち……」

「サツパリする……」

「いいお湯だね〜お姉ちゃん。」

「ああ。」

女湯に入り、寛ぐチエルシー、レオーネ、クロメ、アカメ。

「ごめんね、みんなに迷惑かけちゃって。」

ストーカー騒動の事で申し訳なさそうな顔をする翼。

「別にいいよ、そんなこと。」

「そうそう。」

「困ったらお互い様です。」

「ねえ、もしかしたらストーカー幼女もこのお風呂に入っていたりして！」

「怖いこと言わないでよ!!」

「冗談よ。」

そして同時刻、銭湯の秘密の場所では

「おい、引っ張るなよ!!」

「抜け駆けは許さないぞ!!」

「そうだ、そうだ。」

そう言いながら覗き穴に顔を近づけるジャイアンとスネ夫、そして事情聞いてやってきたクラス男子たち。まるでハイエナである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

そんな彼らを離れた場所から観察するのび太。さっきまで気絶していたジャイアンとスネ夫。だが銭湯に行くと言った途端、飛び上がるように復活した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

こんな所においては自分も巻き込まれかねない。のび太は急いでその場を立ち去ろうとした。

ガサツ

「ん？」

すると茂みの中に何かを発見する。

「どうしたんだ？」

「何か見つけたのか？」

そう言いながらジャイアンとスネ夫が近づいてくる。

「あつ、これは・・・・・・・・。」

それはあのストーカー幼女が背負っていたランドセルだった。特徴のあるランドセルなのでこれは彼女の物で間違いない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

本来、中身を見るのはいけないことなのだが、今回は非常事態なのでやむなく、中を確認する。

「これは……」

「盗撮ビデオ、盗撮写真、録音テープ、翼との妄想デート日記!」

「やばいなあの幼女。」

中身を見れば見るほど理解する彼女の異常性。とりあえずこの物品は全て没収することにした。

「そうだ!!」

するとスネ夫に名案が浮かび上がる。

「『???』」

「代わりに僕のテレカを入れて、と。」

「『……』」

自分自身が写った特性テレカを三十枚ほどランドセルに入れようとするスネ夫ののび太とジャイアンは呆れる。

「おい、何いれてんだよ!」

「僕のテレカだよ!」

「そんなの誰も欲しがらんか。代わりに……」

ジャイアンはスネ夫のテレカを抜き取ると、代わりに何かをランドセルの中に入れる。

「俺様の新曲が入ったビデオテープを持ってきた!!」

「『えーーーーーっ!!?』」

「何だよ!!? 文句あるのかよ!!?」

「『ないです。』」

最終章：■解決を斬る

【スネ夫の家】

「だめ……だ……一睡もできなかつた……」

疲れ気味のジャイアンは居間のソファで横になる。そんな彼にのび太とスネ夫は

「どうしたの？」

「何かあったの？」

事情は大体知っているが、あえて聞いてみることにした。

「昨日の夜からずっとビデオが回ってる音が聞こえるし……どうにかなりそう
だ……」

じーーーーーーーーーーーーーーーーつ。

「ほら、今もジーって……ん？」

ジャイアンは起き上がり、テーブルの下に視線を向ける。すると

「あっ!？」

そこにはビデオカメラを片手に持ったツインテールの幼女がいた。

「あっ、お前は!？」

「昨日の!?!」

「いつの間に!?!」

幼女はテーブルの下から出てくると

バツ

「!?!」

何かをジャイアンに差し出す。それは

「て・・・・・・・・手紙・・・・・・・・?」

差し出された手紙を手に取り、中身を拝見する。

『リュックの中身見ました。はじめはビックリしたけど、あなたのオレだけを見て欲しいという気持ち受け取りました♡今まであんな風にアピールされたことなかったのうれしいかったです♡これからはあなただけをみます♡』

『・・・・・・・・・・・・・・・・。』

手紙を読み終えたジャイアンたちは啞然とする。

「ん? どういうこと?」

言葉を失ったジャイアンの代わりにのび太とスネ夫が口を開く。

「これってまさか・・・・・・・・」

「その子ジャイアンに惚れたみたいだね。」

ジャイアンは驚き、幼女に詰め寄る。

「ち．．．ちがうよな!? そんなわけないよな!?!」

ポッ

幼女は顔を真っ赤にしながら、目を逸らす。

「くっ、これじゃあ俺様に被害が．．．．．」

焦り出すジャイアンにスネ夫はおずおずと口を開く。

「ねえ、まさか．．．．．はじめから自分を犠牲にする作戦だったの?」

「へ!?!」

ジャイアンは驚くと、少し考え込む。そしてしばらくすると、意を決したように口を開く。

コホン

「これなら翼ちゃんもそしてこの子のことも傷つけないで済む．．．」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「のび太、お前はいつまでも翼ちゃん側にいてやれ！彼女にはお前が必要なんだ！」

「でもこのままじゃジャイアンがストーカーの被害に・・・・・・・・」

「へっへへーん、どうってことねえよ。だってお前のモノは俺のモノだろ？」

「??？」

「だからお前のモノは俺のモノ、俺のモノは俺のモノだ！」

「う、うん。分かった。」

カツコ良く決めているジャイアンに悪いと思い、のび太はしぶしぶ了承する。

「よし、それでこそ心の友だ！」

こうして長きに渡り翼を苦しめたストーカー事件はジャイアンの活躍？によって幕

を閉じた。

???
プロローグ

ある休日、居間で寛いでいる時のことだった。

「つてことで、商店街にある写真屋の写真モデルをお願いできないかって話があるのよ。」

突然玉子がのび太とアカメに向かってそんな事を言ってきた。何やら先日の商店街の寄り合いで、是非にとお願いされたらしい。

「それはアカメがつてこと？」

「ううん、のび太も一緒につて話だったわよ。」

「のび太と、ふたりで………」

いったいどんな写真なんだろう？のび太とアカメは思わず顔を見合わせてしまう。

「僕はアカメと一緒に撮って貰えるなら儲け物だし、別に断ることはないと思うが……」。アカメはどう思う？」

「私も別に構わない。」

「それはよかった。写真屋の人もその返事を聞いたら喜ぶわ。」

こうして、この話を受けることになったのだが……

数日後。写真屋の人が家にやってきた。

「いやあ、ありがとう！アカメちゃんに引きうけて貰えると幸いだよ。今回は結婚式の写真モデルだからね、彼氏もよろしく頼んだよ。」

「……………結婚式？」

「……………写真のモデルって結婚式のだったんですか？」

いきなり、そんなことを言われてしまう。

「つて、ちよつと待った！ママ、そんなことこの前何も言っただろ！」

「あら？言っただろ？まあ別にいいじゃない、減るもんじゃないし。それどころか役得だとはおもわない？」

「ぐつ……………それは、まあ……………」

確かにアカメの着飾った姿をみられるのは嬉しいし、その隣に立っているには自分なんだから何の問題もない。むしろかなりの役得と言っても問題は無いだろう。だが、商店街のみんなに見られるのはちよつとなあ……………。それに場所が場所だけに、学園

第一章：撮影を斬る

「いいわよ。のび太君、タキシード姿がよく似合ってるわあ！」

「あ、ありがとうございます！」

店員の指示に従って白いタキシードに着替えたのび太は、撮影場所でアカメが着替え終わるのを待っていた。

ガチャ

「では、こちらへどうぞ！」

「は、はい。」

扉が開くと、女性店員とともにアカメが入ってきた。

「!?!」

そこには、無数のバラの飾りが施されたウェディングドレスに身を包んだアカメが立っていた。その美しさを語るのに最早言葉は不要。

「いいわねえ。アカメちゃん、ドレスがよく似合っているわあ！」

「／／あ、ありがとうございます．．．／／／」

「．．．．．」

「えっと、のび太？」

「……………」

「ほら、のび太君の感想を待つてるわよ？ なにか言つてあげなさいよ！」

スタッフは肘でつつきながら、のび太に感想を言うように促した。

「あ、ごめん。……そのドレス、よく似合っているよ!!」

「……………」

アカメは顔を真っ赤にし、女性スタッフたちは両手を頬に当てながら喜びの声を上げた。

「あ……ごめん。あんまり綺麗だから。まあ、アカメは元々可愛いから、今更こんなこと言うのもアレだよな。」

「……………」

のび太は無邪気な笑顔を浮かべながらアカメを見つめる。そしてアカメは、顔を真っ赤にながら黙ってしまった。そんな二人を、スタッフたちは微笑ましそうに眺めていた。

「それでは、撮影に入ります！」

スタッフたちはカメラをセッティングし始めた。

「二人とも、カメラの前まで来てください！」

スタッフたちの指示に従って、二人はカメラの正面に立った。

「もう少し近づいてください。はい、では撮ります!!」

カシヤツ

「いいわね! それじゃあ、アカメちゃん。のび太くんの腕に抱きついてみましょう!」

「……………」

アカメは無言でのび太の腕に抱きついた。

ムニユ

「……………うっ!」

のび太の腕にアカメの柔らかい胸の感触が伝わってきた。

「いいわよ! そのままよ、そのまま!」

カシヤカシヤ

「次はのび太くんがアカメちゃんをお姫様だっこしてみて!」

「え? お姫様だっこですか?」

「そうよ!」

予想外の指示にのび太は慌てふためき、アカメに視線を向ける。アカメは顔を真っ赤にしながら、小さく頷いた。

「……………」

のび太はその場で屈むと、アカメを抱き上げた。

「／＼だ、大丈夫か？／＼／」

「大丈夫だよ、むしろ軽いかな。」

「／＼そ、そうか。／＼／」

普段からアレだけ食べているのに、この軽さ。一体食べた物は何処にいつてるのだろう？

「二人とも初々しいわね！ はい、撮るわよ！」

カシャカシャ

「うーん、私の目に狂いはなかったわね！この調子でどんどんいくわよ！」

この後、ポーズを色々に変えながら撮影は続いていた。

「それじゃ、最後にキスをお願いするわ！」

『キ、キス!?!』

スタツフの指示に、二人は驚いた。

「そうよ。キスと言ったら、結婚式の定番でしょう？」

「そ、それはいくらなんでも……ねえ、アカメ……」

スツ

「ん!?!」

アカメは、いきなり両手をのび太の首に回した。そして

むちゅっ

二人の唇が重なった。

カシャカシャ

「いいわ!、いいわよ! 最高よ、二人とも! エクセレント!」

こうして、ウエディング撮影は無事に終わった。

第二章：良い事を斬る

「ねえ、みんな最近良い事あった？」

スネ夫の机の周りにのび太たちが集まっていた。

「昨日商店街の福引でさ、こーんな大きいケーキを当てたんだ。美味しかったな！」

「へえー、私は映画の試写会の券が当たったわ！」

「ふくん。結構みんな良い事あるんだね！」

ジャイアンは慌てた様子で口を開いた。

「俺なんか算数のテストで鉛筆転がしただけで、40点も取ったんだぜ！」

「鉛筆転がしただけって？」

「なに、それ？」

「まず、鉛筆に数字を書いてサイコロ見たいにして、転がして出た数字を答えに書くんだ。」

「『』……………『』」

ガハハと笑うジャイアンとは対照的に静香たちは呆れ顔になる。すると今度はスネ夫が自慢げに口を開いた。

「僕の場合はゴーゴーレンジャーのロボットが当たったんだ!」

「えー!? ゴーゴーレンジャーの番組限定オリジナルロボットの事!」

「うん、それだよ!」

「えー!? 本当か、スネ夫!? 本当に当たったのか!」

「うん、今度持つてくるよ!」

「凄いわね、スネ夫さん。あれで確かだった五人にしか当たらないんでしょう?」

「そうなんだよ、静香ちゃん。限定五個の超プレミアム物なんだ! いや、僕って運がいいって言うか、幸運の星の下に生まれたっていうか、やっぱり運って言うのは生まれつきなんだろ?」

スネ夫はニヤリと笑い、のび太に視線を移す。

「で? のび太は?」

「??」

「いや、のび太は何か良い事あったのかって言ってるの!」

スネ夫とジャイアンはニヤニヤ笑い出す。実は昨日、スネ夫以上にいい思いをしたのび太だった。

「ほ、僕は昨日・うっ! (待て、待つんだ、僕!)」

慌てて口を閉じた。もし、昨日の事が誰かに知られたら、大変な事になる。長年鍛え

た危険察知能力がそう告げていた。

「当たったよな、のび太も！」

「??？」

ジャイアンはのび太の肩を叩く。

「確かこの前さ、俺が打ったボールが頭にガツンと・・・ハハッハハッハハッ!!!」

「『ハハハハハハハハハハ!!!』」

ジャイアンだけでなく、静香やスネ夫たちも笑い出す。

そしてその帰り道。

「ハア〜っ。危ない、危ない。」

のび太は写真屋で貰ったアカメとの結婚写真を見つめる。

「こんなみんなに見せたら何を言われるかわかったものじゃないな。」

そう言いながらのび太はみんなに写真が暴露た時の事を想像する。

『のび太さん、最低よ!』

『のび太、なんてうらやま……じゃなくて不謹慎だ!』

『悔しい、悔しい!顔も頭も僕の方がいいのに!!』

「ま、いつか。それより問題はクロメたちだ。」

もし彼女たちにバレたら、命の保証はない。アカメには誰にも言わないようにと釘を刺しておいたがいつまでもつか。

第三章：居眠りを斬る

「……………」

少し遅くなってしまった。つい担任の先生との話が伸びてしまい、予定の時間をオーバーしてしまった。

「のび太、怒ってなければいいんですけど……………」

ついそんなことを考えるも、のび太はこんなことでは怒らない人なのは知っている。でも……………そんな人だからこそ、待たせてしまったのが心苦しい。

「急がないと……………」

でも廊下を走るわけにもいかないため、シエーレはいつもよりも早足になって歩き続ける。

「失礼します。」

ノックをして声を掛けてから、シエーレは教室のドアを開けた。のび太は……………いた。頬杖をつきながら、窓から外を眺めている。

「ごめんなさいのび太、予定よりも遅くなってしまいました。ごめんなさいっ。」

シエーレは謝りながらのび太に頭を下げた。しばらく頭を下げ続けて……………のび太

からの返事がないことに気付く。

「のび太………?」

もしかして怒らせてしまったんじゃないか。でも、それだったらのび太は返事くらいはかえしてくれるはず。

「のび太………」

もう一度のび太の名前を読んでみる。だが返事どころかこちらを向きもせず、それどころかほとんど身動きを取らない。何か変だ。シエーレはとりあえず、のび太へ近づいてみた。そしてそつとその顔を覗き込んでみる。

「あっ。」

「すー、すー。」

「なんだ、寝てらしたんですね……。」

のび太は、頬杖をついた格好のまま目を瞑っていた。よく見ると頭は小さく呼吸に合わせて揺れている。なんて、気持ちよさそうな寝顔なんだろう……。

「うふふ、のび太ったら待ちきれなくて寝ちゃったんですね。遅くなってごめんなさい。と言つても、寝ていますから聞こえませんかよね……。」

のび太の寝顔を見ると、つい頬が弛んでしまうのを感じていた。シエーレはのび太の前の席を借りて、そこへと腰を下ろす。

「……………」

どうするか……。こんな気持ちよさそうなのび太を見てしまうと、起こすのがちよつと申し訳なく思えてくる……。それに、のび太の寝顔を眺めていると、ちよつとした悪戯心が芽生えてきた。思わずシエーレは、教室の中に誰もいないことを……。誰も自分達を見ていないことを確認するために、きよろきよろ辺りを見渡してしまう。

「誰も見てませんよね？」

な、なんだが胸がドキドキする……。でもこんなチャンスは滅多にない……。シエーレはそつと寝ているのび太の頬に唇を押し付けてみた。

「ちゅっ……。ん……。えへへ、のび太に、キスしてしまいました。」

自分でも、頬が真っ赤に染まっていくのが分かる。恥ずかしいけど、すごく幸せな気分だ……………」

「えつと、次は……。最近、のび太はいっぱい頑張ってくれてますから……………」
そんなことを呟きながら、のび太の頭をいい子いい子と撫でていく。

（もし今、のび太が目を覚ましたらきつとビックリしますよね。）

今度は、のび太の頭を抱えるようにして、ぎゅーと抱きついてみる。ああ、なんだかすごい幸せです……………」

「のび太……………」

シエーレはのび太の頭を抱きしめたまま、そつと名前を呟き、その頭を撫でていく。「愛してます、のび太。なんて……うふふ、寝ているとわかつていても恥ずかしいですね……。でも、何度でも言わせてください。のび太、愛してます……。」

第七章：目覚めを斬る

「のび太、いつまで寝てるの!？」

「のび太くん、起きろ！遅刻するぞー！」

野比のび太、彼は寝坊で遅刻することが日常茶飯事だった。母親、猫型ロボット、幼馴染、過去に沢山の人物が手をつくしたが、ダメだった。のび太を起こすのは一苦労なのだ。そして今、そんな無謀な試練に挑戦する人間が一人。

「……………」

アカメたちが首を長くしながらまっている。なのでそろそろ起こさないといけない。

「のび太、起きてください。」

優しい声が聞こえてきた。まずは声を掛けて反応を見るのだろう。だが、そんなことでのび太が起きるわけではない。

「すー、すー。」

「……………のび太、のび太。起きてください、のび太。」

軽く身体が揺すられていく。

「あう……のび太、起きてください……。起きてくれないと、怒っちゃいますからね。」

「すー、すー。」

「本当ですよ？私の方が、のび太よりもお姉さんなんですから。」

可愛らしく怒り始めた。だが、のび太はまだ起きずに机に突っ伏したままだ。

「もう、どうして起きてくれないんですか？」

ちよつと困ったかのようなシエーレの声。そしてまたシエーレはのび太を起こそうと、優しく身体を揺すりはじめる。

「のび太、起きてください。」

ゆさゆさ

「朝ですよ。お寝坊だと、遅刻しちゃいます。のび太、お願いですからもう起きてください。」

それにしても、さすがシエーレだ。のび太がしぶとく寝ていても、強引な手段をなかたろうとしない。もしこれがマインなら、業を煮やして暴力に訴えてくる可能性だつてあるのに……。

「もう……のび太、いい加減起きてくれないと本当に怒りますよ。」

だがシェーレの声には全然凄みがなかった。むしろ可愛らしい。

(どうしたら……)

シェーレは考える。

「!?」

そして名案を思いつく。

「起きてください、あ・な・た? ふ〜っ?」

シェーレはのび太の耳元に優しく息を吹きかける。

ガバツ

「!?」

のび太が勢い良く立ち上がり、

「・・・・・・・・え、あれ？」

キヨロキヨロ周りを見渡す。

「あつ、おはようシエーレ。」

「はい、おはようございます、あなた。」

頬を赤くするシエーレ。

「もう夕食も出来てますよ。みんな待つてるので、早く帰りましょう。」

「あ・・・・・・・・うん・・・・・・・・いつも悪いねえ、シエーレ。」

「いいえ、あなたのためですから。」

はにかみながらシエーレがそう言う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

のび太は何が起こったのか分からず混乱する。二人はしばらく見つめ合った後、家に帰っていった。

第八章：当たり前の事を斬る

「レオーネおはよう。」

「おはよう！」

「旦那さんもおはよう〜」

「旦那さん？」

旦那さんと呼ばれ、首を傾げるのび太。最近レオーネと一緒に買い出しするようになったせいか、のび太も普通に商店街の人たちから挨拶されるようになってきた。レオーネと付き合う以前はあまりこういうことがなかっただけに、今のこの状況に少し慣れない自分がいる。

「すごいな、これがレオーネワールドってやつか。」

「なんだそれ？」

「いや、最近僕まで商店街の人たちから挨拶されるようになったからさ。間違いなく以前とは僕の私生活が変わったみんだから色々新鮮で……」

「そんな、挨拶だけで大袈裟だなく。」

「そうかもしれないけどさ。」

「そういえば、最近じゃお前の話がよく私の仕事場で話題にあがるんだ。」

「仕事場って……マツサージの？」

「ああ、私の仕事場ではお前の人気は今やうなぎ上がりさ。」

「そ、そうなんだ。」

「私がお前の話ばかりするようになったのも一つの原因なんだが。」

「……」

「私とこうして出掛けたり、毎日仕事終わりに迎えに来てくれたり……最近ちよくちよく客として店に来てくれたり……メールも送ればちゃんと返事をしてくれる……。そういう今となつては私たちの間で当たり前になつてしまったことが、他の奴には凄く羨ましく見えるんだそうだ。」

「羨ましいのか。僕は未だにちよつと恥ずかしいけど。」

「そうなのか？ 私はもう完全に慣れた、今もこうして自然にお前の隣を歩けるだけで、毎日幸せでいっぱいだ。」

そういつてのび太の腕にぎゅつと抱きついてくるレオーネ。

「レオーネは本当に無邪気だね……」

のび太は苦笑いする。これが周りから羨ましく見られているのは理解できるが、それがどうして自分の人気に繋がるのかはまだ理解できない。

「でもこれが僕の人気とどう関係があるんだ？」

「それはだな。」

レオーネが勿体つけるように一歩引いてのび太のことを軽く指差す。

「お前の……顔だ。」

「顔？まさか最近急に僕のイケメンっぷりにみんなが気づき始めて僕の株急上昇ってこと？」

「違う。お前が私の事を呼ぶときや、私とこうしてぴったりそばにいるとき……お前の顔、凄く優しい表情になるんだ。」

「??？」

「私も彼氏にあんな風な幸せそうな顔で名前で呼ばれたとか、自分にだけあんな笑顔を向けてもらえるのってうらやましょね……って……」

「……………」

第八章：子供を斬る

「みんなお前のそういう優しい笑顔に惹かれてるみたいなんだ。だから私、最近になって良く羨ましいとか、あんな素敵な旦那が出来てよかったねってたくさん言われるようになったんだ。」

「僕ってそこまで有名だったのか……」

「そうだ、もう私たち二人の中を知らない人はいないくらい。」

「……………」

レオーネは小さくため息をつく。

「だから私、一つ気をつけないといけないことが出来たんだ。」

「??？」

すると今度は美人なお姉さんたちに声をかけられる。

「レオーネおはよく！ねえねえ、私たちにも旦那さん貸してよく！」

「一晩だけでいいからさ〜！」

そんなお姉さんたちのお願いをレオーネは

「ダメ、のび太はもう私の物だ!!」

即答する。

「ぶー！ケチい!!いいもん、隙を見て奪っちゃうから♪」

いつの間にかのび太はレンタル可能な商品として認識されていた。

「僕を・・・貸す?」

「違う、お前は人に貸し借りできるような物じゃない。」

レオーネが少しムツとした表情でのび太に言う。

「今みたいに、最近は私をからかうために、私からお前を取ろうとする人がいるんだ。」

「それでレオーネは僕を取られないに注意してるのか?」

「／／／／当然だろ?のび太を勝手に持つていかれたら、私・・・困るし・・・」

「寂しくてどうしたらいいのかわからなくなる・・・／／／／」

レオーネの声が段々小さくなる。

「うくん。でも僕たちまだ結婚もしてないのに・・・こんな事されたら、困るな・・・」

「んく?まだつてことはそのつもりはあるのか?」

「まあね・・・でも僕はレオーネの事嫌いじゃないし・・・レオーネさえよければ・・・」

「／／／／」

「／／／／・・・／／／／」

のび太の気持ちにレオーネは頬を赤くしながら固まる。

「それにはまず……………」

のび太は遠くの方に視線を向ける。そしてのび太の視線の先には

「いたぞっレオーネだ!!」

「溜まったツケを払ってくれ!」

「博打で負けた金清算しろ!!」

「兄貴からちよろまかした金返せ!!」

ガラスの悪そうな男たちがこちらに走ってくる。そんな彼らから二人は走って逃げる。

「ギャンブルとお酒を止めてからだね……………」

「??」

「当然でしょう? 子供にはちゃんとした親が必要なんだから。」

「……………」

「子供には何も背負わせたくない、僕たちみたいに。」

第十一章：授業参観を斬る

授業参観、学校で行われている授業の一環であり、生徒の保護者も教室に入り生徒の授業を見ることがができる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

玉子にとつてとても憂鬱な日がやってきた。今まで何度もこの行事で恥ずかしい想いをしてきたのだ。だが今回は違う。何故なら、注目しなければならないのは息子だけではないのだから。

「♪・・・」

音楽室に美しい歌声が鳴り響く。その声の主は黒板の前に立ち、先生の奏でるピアノの音色に合わせ、その美しい歌声を披露していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

歌が終わると、観客から雨のように拍手が降り注いだ。

「御宅の娘さんたちは凄いですね！」

「羨ましいわ、一体どんな教育をなされてるんです？」

「今度、一緒にお茶でも。」

保護者たちは玉子に詰め寄る。アカメたちの優秀さに感激したのだ。

「それじゃあ次、野比!」

「……………」

のび太は先生の言葉に答えない。

「野比?」

「すー。すー。」

なんとのがび太は居眠りをしている。机に教科書を立て、そこに隠れた状態で机に突っ伏すという、見事な居眠りスタイルを実行していた。

「のび太さん!!のび太さん!!」

隣の席に座っている静香が小声で名前を呼ぶ。

ゆさゆさ

体を何度も揺するが、起きる気配がしない。そんな彼に玉子は恥ずかしさのあまり顔

を真っ赤にし、担任は呆れてため息をつく。そして他の保護者たちもクスクスと笑い出す。

「なんであんなダメな奴がこの学園に通ってるだ？」

「さっさと退学すればいいのに……」

「正直、何でクロメちゃんがのび太の親戚なのかねえ……」

教室にいる男子学生のほとんどがのび太をバカにしだした。

「待って、私は、そうは思わない。」

クロメは生徒たちにちよつとムツとしたのか、少し感情的にその声を上げていた。

「だって、のび太はすごく優しい人なんだ。私が落ち込んだり困つてるときも、損得なしに助けてくれた。私はのび太に救われたし本当に感謝してる。それに私はのび太の事を愛してるんだから！」

クロメのひとりで、教室の中がにわかになぞわつき始める。だが、まだクロメの言葉は止まらない……。教室中の視線がのび太とクロメに集まっていた。なのにクロメは全然その視線に気付かず、みんなにのび太の良さを必死に訴えかけている。

「それにあの時だって、のび太は私に優しくしてくれた。……寂しいときにだつてぎゅって抱きしめてくれたり、頭を撫でてくれたり……」

どんどん、話がおかしくなってきた……。

第十二章：ベタ惚れを斬る

だが玉子には、息子がそこまで思つて貰えてるのは単純に嬉しかった。

「あ、あははは．．．なんだが、のろけ話を聞かされてみたい．．．」

「俺たち、何かマズイこと言ったのか？」

「クロメちゃんにとっては、聞き流すことが出来ないことだったんだろうね。」

「．．．．．ん．．．．．ん．．．」

のび太の意識が徐々に回復していく。

「しまった！」

大事な参観日に居眠りをしてしまった。のび太は両手で教科書を持ち、飛び起きる。

「ん?」

異変を感じ、周りを見渡す。

「『』……『』」

みんな棒立ちで固まっていた。

（な、なんだこのリアクションは？僕が居眠りをしていたのが、そんなに凄い事だったのか？）

そんな事を考えていると、

「ねえ、野比くん！」

「??？」

突然学級委員に話かけられる。

「／／／／野比くんはクロメちゃんの事、どう思ってるの？／／／／／」

ワクワクしながらそんなことを聞いてくる。

「う〜ん。」

のび太は今まで見て来たクロメの姿を思い浮かべる。

「お姫様かな。一途で、心優しく、それこそ・笑顔が太陽みたいで……」

「／／／／／ キャー……！！！！／／／／／」

「!？」

のび太が言葉を言い切る前に女子生徒や保護者が声を上げる。その声にのび太はビクつき、キョロキョロと周りを見渡す。

「の、のび太……」

「恥ずかしげに、クロメがのび太の名前を呼んだ。だがそれはいやがつている風ではなく、むしろ嬉しそうで……」

「のび太は、私の騎士様だよ……」

「クロメはのび太の手をしつかと握っていた。そしてお互いに見つめ合っている……」

「な、なんか聞いておいてなんだけど、私達ここにいるだけで罪な気が……」

「ああつ、もう本当にどうやってクロメちゃんをこんなにベタ惚れにしたの？正直不思議でしょうがないんだけど。」

「あぶない薬を服用させたとか……」

「ぐぬぬ……ええいつ、やめろやめろーっ!!」

「等々我慢の限界を迎えた担任が声をあげる。先日また合コンで失敗した故、気が立つ」

ているのだ。

「何だ、この甘ったるい雰囲気は。アタシの授業中にふたりだけの世界を作るなー!!
ちくしょう、やってられるかこんなもの。解散だ解散、みんなもう帰ってしまえ!!」

のび太とクロメの気に当てられたのか、担任はそうやけっぱちに叫び散らすのだった。

子育て

プロローグ

「さて、帰るか……」

いつものように学校の廊下を歩くのび太。すると

「おい……」

どこからか、聞いたことのある声が出た。亜空間からの誘いのような立体感に乏しい声。

「聞こえないのかなー。」

（まただ。また聞こえる。）

のび太は背中にゾクリと悪寒を感じ、立ち止まる。辺りを見渡すが、誰もいない。歩いている廊下には、時々ぱたぱたと残った学生が歩いているだけだ。

「ねえ、僕のこと、呼んだ？」

すれ違う女の子に、聞いてみるが、ふるふると首を横に振られる。気持ち悪い……。

「嫌いになっちゃうよー」

（嫌われちゃ、こまるなあ……。どっちの方向から声が聞こえてるんだろう。）

「窓！窓を見てよー！」

（窓？違う世界に僕をいざなおうって言うのか？飽くなき戦いを続けなければならない世界に。）

のび太は、声に従い、窓の方を見やる。自分の姿が映る。相変わらず漫画みたいな顔をしているなあ。

「下、下、下だよ。」

「下？」

視線を下に移す。ああ、黒髪ショートの子がのび太に向かって手をぶんぶん振っている。のび太はガラリと窓を開け、首をひよっこり出す。

「気づいてくれた？」

「最初っからきづいていたよ。」

中庭の芝生の上に立っているクロメに、声をかける。

「ウソばかり。」

「やっぱり？」

クロメにはお見通しか……。

「せっかく、のび太が見えたから、声をかけたのに、全然気づいてくれないんだもん。」
クロメが、ぷうつと頬を膨らませて、わざとかわいくない顔をする。

「今、下に降りるよ。」

膨れた顔も、いつもとは違った魅力があり、そんな表情もあるんだと、思わず笑みをこぼれそうになった。急いで階段を下り、中庭に出て、クロメのいた場所に急ぐ。

「おつかれさま。」

「やあ……」

クロメは、にこにここと屈託のない笑みを浮かべながら、にぱにぱと手を開閉する。

「冬休み、楽しみだね。何かぱあーつとどこかに行く？」

「先立つものの都合によるな。」

「まあ、そうだけど……。先立つものがない時は、安くて楽しいところへ行けばいいんだよ。」

お金がないというのは、かくもつらいことだとは。

「私は、のび太と一緒にだったら、どこだって楽しいんだから。」

「そうだな。この町だっていろいろ遊ぶところはあるしね。」

「そういうこと。ところで、のび太は、冬休みで一番楽しみなことはなに？」

「普通はクリスマスじゃないのか？」

「うーん、じゃあ、クリスマス抜きで。」

クロメは、『せえので言おうね』と言い、なにやら口の中でぶつぶつ喋りながら考えていた。

「いつせえの、せ！」

「初詣！」「くらげごっこ！」

二人の間に、沈黙が訪れた。瞬間的に凍り付いた空気。

第一章：赤ちゃんを斬る

キーンコンカンコン

「のび太さん、今日家に来ない？美味しいケーキを焼く予定なの！」

いつものように静香がのび太を遊びにお誘いする。そして毎度の事ながら彼女だけではなく。

「おい、のび太！今日のサッカーの試合、人数が足りねんだ！」

「入れてやるから、ありがたく思え！」

ジャイアンとスネ夫も現れる。普段なら喜ばしいお誘いなのだが、今日は違う。先客がいるからだ。

「のび太ー♪・」

噂をすればなんとやらだ。のび太の耳が『ご飯よー』と言われたわんこのごとく、び

くんと反応する。

「はい？」

すっかり帰り支度をしたクロメが、のび太の鞆を差し出し、

「約束でしょう？赤ちゃん♪」

と言った。クロメが公衆の面前で爆弾を投下する。

「『『『あ、赤ちゃんー』』』!!!」

静香は一瞬で石化する。

ざわざわ

ざわざわ

のび太と……クロメちゃんが……あ、赤ちゃんですと……？

ざわざわ

ざわざわ

できたのか……作るのか……

ざわざわ

ざわざわ

「語るに落ちたな……」

スネ夫とジャイアンが、顔にタテ線を入れて青ざめている。そして、のび太を上から

下へ、まるでイヤなモノを見るような目で見ていた。みんなが。みんなが、まるでのび太を欲望の権化か何かのような目で見ている。

「ちよ、ちよ、ちよつと待ってよう！違うよ？違うんだ！違うんだってば！」

のび太が、引き気味の教室全体に、手をぶんぶん振って、周囲のざわめきを否定する。「僕と、クロメは、親戚のお姉さんのお見舞いに行くだけでね？妊娠してるのはそのお姉さんで……」

ざわざわ

でも、のび太も……クロメちゃんも……あんなに中が良ければ……

ざわざわ

弁解しても無駄だと瞬時に理解する。のび太はクロメの手を取り、急いで教室を出て行った。

そしてその後。のび太とクロメは病院へと歩き出す。

「あーうー、恥ずかしいナー、もう……」

のび太は顔を真っ赤にしながらから声を上げる。

「えへへ。まさかあんなことになるなんて、思わなかったね。」

クロメが頬を赤くしながら満更でもない笑みを浮かべる。

「まったく、できても作ってもないっての！」

腹の虫がおさままらないのび太は声を上げる。するとクロメは立ち止まり、空を見上げる。

「でも、たまに思うんだ。赤ちゃんほしいなあつて。」

ーぶふう！

クロメの発言に思わず吹いてしまう。

「あ、あ、赤ちゃんは、いくらなんでも早いだろう。」

「まあね。いくらなんでも、この歳では……」

「そうそう、お母さんもまだまだ頼りないしね。」

「それは酷いよ。」

「冗談。確かに今は頼りないかもしれないけれど、僕にとっては大切な頼りがいのある人だよ。」

「うん。いつか心身共に頼りがいのあるお嫁さんになれるように、頑張るよ。」

「期待してる。」

のび太とクロメは笑みを浮かべた。

第二章：子育てを斬る

「どうやら、随分と長い時間病院にいたようだ。暗いとまでは言わないが、もうすつかり夕方近くになったいた。」

「なんだか、ホントに赤ちゃん欲しくなっちゃったかも。」

「……………」

「結婚して、子供を産んで、親子仲良く、素敵な家庭。」

のび太とクロメは、クレープ屋で、バナナプリンクレープを2つ買って、近くのベンチに腰を下ろす。そしてのび太はクロメに話しかける。

「もし、もしだよ。ホントにもし……………」

「うん。」

「もし、僕達がこのまま、付き合い始めて。」

「そんなに、もしも言うことじゃないじゃ、ないかな……………」

「いや、でも、もし、このまま付き合っつて、結婚することになってさ。」

「う……………、うん。」

「たぶん、子供も生まれるでしょう?」

「産むんじゃないかな．．．．．、たぶん。」

のび太も、しどろもどろに喋っているが、クロメもなんだかもじもじと喋っている。

「子供さ、クロメは何人くらい欲しい？」

「いっぱい、欲しいかも．．．．．」

「子供達だけで、サッカーチーム作れるくらいなの？」

「えっ、えっ、さすがに25人もいらんよお。」

．．．．．サッカーは11人です。

「とりあえず、最初は女の子がいいなあ。それで男の子と女の子の双子とか。」

今度はクロメが口を開く。

「そういうのもいいな。」

「いいよね。いろんなカワイイ服着せたりしてみたいな。」

「やっぱ、小さい頃から、計画を立てて、いい幼稚園行かせて、いい小学校行かせて、いい中学校行かせないといけないんだろうな．．．．．」

自分自身を反面教師にして、のび太はそんなことを言った。

「そうかな。別にそんなことはないと思うけど。」

「でも、よく言うじゃない。いい将来を歩ませるには、幼稚園の頃から教育を始めないとダメ、みたいなの。」

「私は、子どもは自由に育てるべきだと思う。」

「自由に育てるのもいいよね。音楽家にするとか画家にするとか、学者にするとか……あ、でもそういうのも専門学校とか必要なのか。」

「のび太、どうして、そういうことばかり言うの？」

「え？そういうことばかりって？」

「のび太、さつきからいい将来とかいい学校とか、結局子どもを縛ってるよ？」

「そうかな……。でも、やっぱり、ちゃんとした学校とか行かせないと、将来が心配じゃないか。」

「大切なのは、子どもの意志だもの。子どもは親の所有物じゃないんだからね。」

「でも、親には子どもをきちんと育てる義務があるんだ。」

「どっちにしても、押しつけはよくないよ。」

「押しつけじゃないってば。子どものことを考えてさ。」

「子どもにしてみれば、そんなのわかんないでしょう？」

「動物飼うのとは訳が違うんだから、好き勝手にさせる訳にはいかないって。」

「好き勝手にさせるって言うてるんじゃないよ。こどもの意志を尊重した育て方をしなきゃ、ダメなんじゃないの、って言うてるんだよ。」

「僕だって、尊重しないって言うてないだろ？ただ、親は子どもの将来まできちんと考え

て育てていかなきゃいけないんじゃないかっての。」

第三章：喧嘩を斬る

「今日ののび太、ヘンだよ。いつもは私の言ってること、ちゃんとわかってくれるのに。」
「わからないのは、クロメでしょう？別に僕はクロメの言うことを無視してる訳じゃないんだしさ。」

どうしてこうなっちゃったんだろ。多分、お互いは間違ったことは言っていないのに。考えてることだって、ホントはお互いに同じなのに。

「もういいよ。私帰る。」

「何も、そんなに怒らなくなっちゃって。」

「怒ってないよ。」

「怒ってるよ。」

「怒ってないよ。」

「いや、怒ってる。」

「もう！怒ってないってば！絶対、絶対、絶対、怒ってないってば！」

クロメが、すつと立ち上がる。そして、つーんとわかりやすいふてくされ方をして、つかつかと歩いていく。

「クロメってば。」

クロメは、のび太の方を振り向くことなく、帰り道の方へ向かっていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

久しぶりに見たクロメの怒った顔。わしやわしやと、髪の毛をかき回す。わしやわしややっていると、なんだか余計に気が立つてきて、さらにわしやわしやと頭をかき回す。

（まあ、普通二人ですーっと一緒にいれば、この程度のケンカは何度もする訳で、たいてい次の日になれば機嫌は直っているものだ。うん、大丈夫。）

明日には機嫌が直ってる。自分だって、今のイライラ気分はきつと明日になったら直ってる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

でも、今日のケンカはちよつと違うような気がする。多分、親戚のお姉さんのお見舞いに行ったからだ。ああやって、これから本当に赤ちゃんを産もうつていう人を見たからだ。だから、自分もクロメも、ちよつと本気になっちゃったんだ。もし、これから二人で共に歩いていこうとするならば、避けては通れない道。クロメの言うこともわかるけど、やっぱり自分も子どものためにきちんと考えるべきだとは思う。もちろん、クロメの言うことは、子供を放つぽってってことではないとは思うけど。

部屋に帰り、布団の上に、どさりと身体を投げ出し横になる。天井を見上げながら、

「子供、かあ……」

今のままなら、きっとそれは自分とクロメの子供だろうな。女の子なら、クロメ似ですつごいカワイイだろうな。男の子でも、やっぱりクロメに似ればすつごいカワイイだろう。自分に似たらー。う、ヤな想像した。自分と同じ顔をした赤ちゃん。これが同族嫌悪ってヤツか。

「……」

明日は、ちゃんとクロメと仲直りしよう。

第四章：無視を斬る

その夜。

「クロメ、夕食の時間だ。」

夕食の時間になっても中々姿を現さないクロメを心配し、アカメは彼女の部屋を訪れる。

「いない。」

クロメは部屋の隅で蹲っていた。明らかに生氣のない様子に、アカメは慌てて声をかける。

「ど、どうかしたのか!？」

「・・・・・・・・・・。」

そして同じ頃。

「のび太くん、ご飯だよ。」

夕食の時間になっても中々姿を現さないのび太を心配し、ドラえもんは部屋を訪れる。

「いない。」

「え!?! 食べないの!?!」

のび太は毛布を被って、眠りについていた。こちらも明らかに生気のない様子に、ドラえもんは慌てて声をかける。

「どうかしたの!?!」

「.....」

結局のび太とクロメは夕食を食べずに、部屋に引きこもってしまった。

「ははは、まったく面白いな、二人とも。まあ、ケンカはわかるけどな。」

「そうね。私たちも似たようなケンカをしたことがあるわ。」

話を聞いたのび助と玉子は笑みを浮かべる。

「で、どうなったんだ？」

解決策が分からないアカメは声を上げる。

「そのうちわかるわよ。」

いい加減な返答を返す。家族が困ってるというのに随分薄情だ。

「うわあ、教えてくれたっていいのに。」

ドラえもんもたまらず声を上げる。

「別に教えるほどのことはないぞ。答えなんて無いんだから。」

「だって、パパとママは一度経験あるんでしょ？せめてその時はどうだったかくらい教えてくれたっていいじゃない。」

「聞いたって意味は無い。答えなんて人それぞれさ。のび太やクロメちゃんと思うよう行動すれば、物事はいい方向に転ぶんじゃないの？」

「いい加減だなあ………まったく。まあ、明日になれば、お互いに落ち着いているとは思うけど………」

「でしよう？だつたらいいじゃない。気にしない、気にしない。」

そして次の日、てつきりクロメの方から謝つて来て、それでめでたしめでたし、だと思つていた。が、現実はそのようではなかった。クロメは、のび太と顔を合わせると、まるで逃げるように去っていくのだった。表情を見るに、怒つているといふ訳ではなさそうだが、バツが悪そう、という風に見える気もするし、のび太のことを蔑んでいるようにも見える。

(つたく。パパもママも、昨日話を聞いたんだから、何か気の利いたことを言つておいてくれたらよかつたのに。そしたら、「ごめんね、のび太。私が悪かつたの。許してね。」つてことになつて、一番早いのに……。まあ、別に昨日のことはクロメが悪い訳じゃなかつたけど。)

仕方ない。向こうから謝つてくる線はまずなさそうつてことで、今回は自分の方から謝るとしよう。

「クロメー」

しーん。

クロメはさらりと身を翻して避けられてしまった。見事に、意図的な無視を決め込まれてしまった。信じられない。天変地異の前触れか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

結局、朝から昼休みまで、クロメとは一言も口を利いていない。目の前のジュースに入った氷がカラリと揺れる。

「はあ・・・・・・・・・・。」

思わず深い・ため息をついてしまう。そしてそんな二人の様子を男子生徒たちはニヤニヤしながら眺めるのだった。

第五章：不運を斬る

「おい、見たか!？」

「見た見た。クロメちゃん、とうとうのび太に愛想尽かしたらしいな。」

「いい気味だ。」

影でクラスメイトが影口を叩く。

「あれえ、のび太、どうしたんだ?」

「ため息なんかついて。」

顔を上げると、そこにはジャイアンとスネ夫がいた。二人とも顔がニヤついている。人の不幸がそんなに嬉しいか。

「こんにちわ。」

ジャイアンとスネ夫だけではなく、静香もやってきた。

「なんでため息をついているの？ 悩みなんかとは無縁のくせに。」

静香は、何故か嬉しそうにそんなことを聞いてくる。白々しい。

「人聞きの悪いことを言わないで。これでも結構デリケートなんだぞ？」

「じゃあ、そのデリケートなのび太さんに何があつたのか聞かせてもらいましょうか。」

知ってるくせに。のび太は堰を切つたように話し始めた。

「ちよつと子供のこと喧嘩しちゃつてさ。」

『『子供?!』』

「二人の赤ちゃんについて、ちよつと。」

「ちよ、ちよ、ちよ、ふ、二人の赤ちゃんてーちよい待ちー!! あ、あ、あた、あたし達をいくつだと思つてるのよ! この歳で赤ちゃんて。」

静香は顔を真っ赤にしながら声を上げる。彼女の揚げた掲げた拳に、炎が宿る。赤い色は、さらに揺らめき、高温の無色へと変わつていく。周りの空気が熱で歪み、空気その熱で、髪の毛や皮膚がチリチリと焦げていく。

「のーびーたーさーんー」

「待つて、静香ちゃん! 最後まで話を聞いてッ!」

「問答無用！女の敵！ここで朽ち果てろオオ！オオオツツ！！」

振り上げ、一・閃――。

ドコン！！

走馬燈。人は死ぬ時に生まれてから、今までの記憶を、色あせた部屋の中を駆けめぐる走馬燈の光のように、一瞬の間に見るといふ。

結局、放課後になっても、クロメと言葉を交わす機会は無かった。機会が無かったというよりは、機会は作られなかったというのが、正しいか。相変わらず、クロメはのび太の顔を見ると、逃げるように立ち去ったり、クラスメイトの輪の中に逃げ込んだりしていた。そして、彼女はいつの間にか教室からいなくなっていた。比較的クロメと中の

良いクラスメイトを捕まえて聞くと、「さつき帰ったよ。友達が誘いに来て」と言った。今日は一人で帰ろう。

「……………」

そして不運はまとめてやってくるものだ。

「おい、のび太！俺たちこれからサッカーの練習するんだ！」

「だから掃除当番やつといてくれ！」

突然、ぬうつと出てくる神出鬼没の悪魔たち。

第六章：助つ人を斬る

一方クロメはというと……

「ヒツク……うえ……ん。」

アカメは、クロメの頭を自分の胸にうずめる。大泣きする妹にやれやれと言った顔で、姉は妹の頭をなでた。

「私つ……のび太にひどいことしちゃった……ひつく……わたし……わたし……」

あの日以来クロメは毎日のように泣いていた。のび太は何も悪くない。寧ろ、悪いのは全部自分。

「なんであんなこと言っちゃったんだろう……のび太……ごめんね……ごめんね……」

のび太と話したい。この前の事を謝りたい。仲直りしたい。でもものび太は怒っている。話したら、一切の関わりを拒絶される。

「うっ……ううっ……ひつく……」

想い人に見放される、そんな悲しき、虚しき、寂しさが襲いかかってくる。

「……………」

これ以上は見てられないとばかりに姉は立ち上がった。

「うーん。でも、どうすれば……………」

アカメは堪らずドラえもん相談する。ドラえもんは眉間にシワを寄せ、考えた。

「あーそうだ！」

そして名案を思いついた。ドラえもんは、さつそく机の引き出しを開ける。

「どうするんだ？」

アカメはドラえもんに聞いた。だす。

「助っ人を連れてくる。」

「??？」

それだけ言うと、ドラえもんはタイムマシンに乗り込み、アカメもそれに続く。

そして数分後。

ピーンポーン！

いきなり家のチャイムが鳴った。誰かが来たのか？

ピーンポーン！

ママ！あつ、そうか……。……。買い物に行ってるんだっけ……。ならド
ラえもん出て！

ピーンポーン！

いないのか？アカメ、出て。

ピーンポーン！

アカメもいないのかな？ならチエルシー、お願い！

ピンポン！

シエーレ？レオーネ？翼ちゃん？誰もいないのか？

ピンポン！

しようがないな。さすがに居留守を使うわけにはいかない。

「はいはい。今出ますよー」

ーガチャリ

と玄関のドアを開けてみたが、誰もいない。イタズラだろうが。すると聞き覚えのな
い声があった。

「いるよー」

「どこに？」

声の主は……、のび太は視線を下に向ける。そこにいたのは……。

「パパー！」

「は、はあっ!？」

そこにいたのは、小さな少女。色白でちびっこい女の子がそこにいた。誰かに似てる
ような気がする……。

「ちよ、ちよつと、誰ッ?」

「パアパ？」

「だ、誰がパパやねん〜〜！」

のび太の頭、ただいま大混乱！そして・事態はさらに大混乱へ！

第七章：ツクモを斬る

「そ、それ……どこの子？」

突然後ろで声がある。振り返ると、そこには……

「え、あ、わ、く、クロメ!？」

そこにいたのは、クロメだった。今、一番会いたくない人物だ。クロメは、訝しそうな目でのび太を見、にじりと後ずさりをしている。

「ゆ、誘拐?」

「んなわけあるかー!」

「まさか、食べるとか?」

「食べるかーッ!意味の取りようによっちゃ、そっちもヤバイ〜!」

半分、ギャグともつかない突っ込みを受けながらのび太は、小さな少女を引きはがそうとする。

「……なーんて、親戚かなんかー!」

「あーん、やめてよう、パパあ。」

「親戚かなんかー。パッ、パパ!?」

クロメの顔に、すーっとタテ線が入る。今度は、本気だ。

「やつ、ちよつと待つてツ!僕がこの子のパパな訳ないだろツ!よく考えろ……」
のび太は慌てて弁解するが、

「そんな……、のび太が私以外に……びえええええ!!」

クロメはその場で泣き始めた。

「あつ、ママだあ!ママー!」

少女は、のび太を離れ、クロメに飛びつく。

「えっ?マ、ママつて、ママ!?!」

クロメは泣き止み、今度は目をぐるぐるとさせ、未だそう呼ばれたことのない単語に、言葉がしどろもどろになる。

「パパ、ママ、ようやく会えたねー!!」

女の子は、クロメの手を引つ張り、のび太のそばまで連れてくる。

「……………のび太、これはどういうこと?」

クロメがじい〜つとのび太を見つめる。とりあえず、冷静になつてみて、状況を考える。

「……………なんなんだろうねえ……………やっぱり迷子?」

「パパって呼んでるよ?」

「ママとも呼んでるね?」

これは、一体どういう事だ? 改めて女の子を見た。どうも誰かに似てると思ったら、アカメ……………いや、どちらかというと、クロメにそっくりじゃないか。

(クロメ、いつの間にこんな子を……………。つてムリムリ! こんな5歳くらいの子がいるのは不自然すぎる。いつの子どもだつての!)

少女はキョトンとした顔でのび太とクロメを見つめる。

「パパ、ママ、不思議そうな顔をしてどうしたの?」

「僕は君のパパじゃないよ!」

「わたしもママじゃないよ!」

「そうなんだ。じゃあ、ツクモのパパとママはどこ?」

「君はツクモっていつのか？」

「そうだよ、ツクモだよ。」

「ツクモちゃん、どこから来たの？」

のび太がしやがみ込み、ツクモまで目線を落とす。

「・・・・・・・・わかんない。」

「どうしてここに来たの？」

「だってパパのおうちだもん。」

「クロメ、この子は誰かと僕達を間違えてるみたいだね。」

口に手を添えながらぼそりと囁く。

第八章：パパとママを斬る

「当たり前だよ。私だって、こんな子知らないもん。」

クロメも同じようにぼそりと囁く。

「どっちにしても、この子の親を捜さないで。」

「そうだね。仲直りは後回し、喧嘩はいったん休戦。」

「今、仲直りしちやえばいいんじゃない？」

「ダメ！私はちゃんと自分の気持ちを伝えないと仲直りできない！」

のび太とクロメが言い争う中、ツクモはキョトンと首を傾げる。

「パパ、ママ、なんで喧嘩してるの？」

「えっ、あ、……別に喧嘩してる訳じゃないよ？」

クロメがツクモに向かってにはばと手を振ってみせる。そして再びのび太に視線を向ける。

「だから、一時休戦。」

「分かったよ。この子の親が見つかったら、ゆっくり話を聞くよ。」

「うん、それでいいよ。」

クロメが笑みを浮かべる。そしてそんな彼女を見たのび太も自然と笑顔になった。なんだか、これで仲直りしているように見えなくもないが、なかなかそうもいかないのが人生なのだ。

「さて、ツクモちゃん。これから僕とクロメで、君のお母さんかお父さんを捜すことにした。」

「だから、私たちと一緒に行こう。」

クロメがツクモに手を差し伸べる。ツクモはその手を握り、

「うん、ママ。」

と答えた。

のび太はツクモの右手を、クロメは左手をつないで街を歩く。どういう経緯でツクモがうちまで来たのかわからないけれど、とりあえずにぎやかな商店街あたりを流していれば、なにかわかるだろう。もしくは、

「交番に届けた方がいいんじゃないかな？」

「え、交番？」

この子の親を見つけたら、この子を知ってる人を歩いて探すより、その方が効率的な

気がする。

「ツクモを一人にするの?」

ツクモがのび太とクロメの顔を交互に見る。

「え、そんなことしないよ?大丈夫。」

「そ、そうそう。ツクモのお父さんかお母さんが見つかるまで一緒にいるって。」

「ありがとう、パパ、ママ。」

ツクモがにこーと笑う。

「ところで、そのパパ、ママってやめない?別に僕達ツクモのパパとママじゃないんだからさ。」

「だって、パパとママにそっくりなんだもん。」

「そっくりねえ……」

「だから、いいでしょ?」

まあ、構わないと言えば、構わないけど……。のび太は、ちらりとクロメの方を見た。

「いいよ。ツクモのお母さんが見つかるまで、私がツクモのママになってあげる。」

「ありがとう、ママ。で、パパは……?」

ツクモがじーつとのび太のことを見つめる。

「いいよ、いいよ。僕のこともパパって呼んでかまわないよ。」

「ところで、ツクモ。お父さんとお母さん、どんな人だったか教えて。」

「いいよ。パパとママはね、すつごい中がいいの。ツクモはね、パパとママのことが大好きで、パパもママもね、ツクモのことが大好きなの。」

ツクモは両手で大きな輪を作り、そのくらい好きなのだと言った。

「で、どんな二人なの？」

「ママはお菓子が大好きなの。パパはのんびり屋さん！」

ツクモは元気な声でそう言った。

「そっくりだね。」

「僕は別に似てないと思うけど。クロメはそっくりだけど。」

「というの嘘。なんでそんなところまで似てるかなあ。のび太は、バツが悪そうに、髪の毛をわしゃわしゃとかき回した。」

「この前ね、3人で動物園に言った時のお話。」

のび太とクロメは、ツクモと手を繋ぎ、商店街を歩く。

「ツクモね、象さんが大好き。象さんね、すつごく大きくて、鼻が長くて、面白いの。でね、パパと一緒に、あの背中に乗ってみたいねってお話したの。お昼は、ママの作ったお弁当。ママ、お料理作るのがすつごく上手なの。ハンバーグはすつごくおいしい

の。」

「いいパパとママじゃない。」

なのに、こんなところへ子どもを放っぱって、何をしてるんだか。

「こっちのママもお料理上手？」

「え、うん……」。結構作れる方かな。」

クロメは冷や汗をかきながら、目を泳がせる。

（嘘つき。包丁を持ったことするなくせに。）

のび太はジト目でクロメを睨む。

「えへへ。嬉しいなあ。ツクモのママはどっちも料理が上手なんだね。」

この子の笑顔はとてもかわいい。もともと綺麗な顔立ちをしているけれど、だからって訳じゃなくて、そう、笑っている表情がかわいいのだ。きっと、毎日楽しく暮らしてるんだろうな。

第九章：幼稚園を斬る

「パパは、ツクモをよく抱っこしてくれるの。パパの膝の上は大きくて、そのまま絵本を読んでもらうのが大好き。ママはね、ツクモの髪を綺麗に結んでくれるの。ツクモはママが結んでくれた髪が大好き。今度ね白の大きなリボンを買ってもらうんだ。」

ツクモは、のび太とクロメの顔を交互に見ながら、一生懸命両親の話をした。見たことも、会ったこともない人達だけれど、すごくいい人なんだろうということがよくわかる。二人とも、ツクモのことが大好きで、ツクモのことを愛していて、とても大切にしているんだろう。ふと親戚のお姉さんの事を思い出す。あの人も、まだ生まれていない赤ちゃんと対して深い愛情を感じていた。やっぱり、この子もあんな風に思われて生まれてきて、育てられたんだろうな。

「でもね、この前パパとママ、ケンカしてた。」

ツクモがちよっぴりうつむく。

「喧嘩？」

「なんだ、中の良さそうな夫婦なのに、喧嘩するのか。もしかして、ツクモがここにいないのはそれが理由だったりするのか？」

「あのね、ツクモね、来年から幼稚園に行くことになったんだけどね。パパはね、ツクモのしゅうらいのことを考えて、しりつの幼稚園がいいだろうって。しりつは、おうちからずつと遠いから、朝も早く起きなきゃいけないし、お友達ともあまり遊べなくなっちゃう。」

クロメがツクモの声を聞いて、のび太の方を見る。昨日のことだ。小さなツクモは、親が入れようとしている私立の幼稚園のことがどうも好きになれないようだ。好きになれないどころか、イヤそうに下唇を噛んでいるところを見ると、行きたくないというところだろう。親の気も知らないで、どういうつもりはないが、あまり勝手すぎるのもどうかってこと。

「ママはね、ツクモが好きなどころに行けばいいっていうんだけど、ツクモ分かんないし。そしたら、ツクモに何かやりたいことはない？って聞くの。」

うんうん、とのび太もクロメも興味深く聞き入れる。どこかの誰かさんみたいな事を言うなあ。

「ツクモね、お菓子屋さんがやりたいって言ったら、ママ、幼稚園のお菓子屋さんはないって。」

いくら、子供に任せるったって、たとえばツクモみたいに小さな子はそんなこと決められないのだ。まだ、世の中のことをそんなに知っている訳じゃないのに、そう簡単に

決められるものじゃあない。クロメとのび太の目が偶然に合う。そして彼女が苦笑いを浮かべた。

「そしたら、二人はどうするのがいいのいいか、ケンカになっちゃって。」

「困った。パパとママだな。」

自分達のこととは棚に上げ、のび太とクロメはうんうんと頷きあった。

「でもね、ツクモはパパとママ、どっちも好きだよ？ わかんないけど、二人ともツクモのことを思っていて言ってくれてるのはわかるもん。時々、うんざりしちゃうこともあるけど、パパとママはツクモのことを考えてくれてるんだもん。」

（なんだか、子供の言葉にしちゃ、すっかり過ぎてるよなあ。というより、子供ってのは、僕達が考えるよりしつかり考えてるってことなのかな。）

「ツクモね、お友達とおいしいお菓子が食べられる幼稚園がいいって言ったら、じゃあそういう幼稚園を探しとくねって仲直りしてた。」

第十章：どら焼きを斬る

随分と商店街をうろついてはみたが、ツクモを探しているような大人はいなかった。時々、街をゆく人に聞いてみたりもしたのだが、知らないという答えしか返ってこなかった。場所を変えてみたりもしてけれど、やっぱり答えは同じで、ただ街をウロウロしている時間だけが過ぎていく。

「ねえ、パパ、ママ。」

「なに？足でも痛くなつた？」

「お腹でもすいたの？」

「足も痛いし、お腹もすいたの。」

のび太は、ツクモの前に背中を出してしやがみ込む。

「はい、おんぶしてあげる。」

「うんッ。」

ツクモは、嬉しそうな声をあげ、のび太の背中にどつかりと飛び乗った。そして、お尻の方にしっかりと手を回し、ゆっくりと立ち上がった。

「わあー高い、高いー！」

背中の方から、きやつきやつと騒ぐツクモの声。なんだか、本当にツクモの父親かなにかになった気分だ。

「ツクモは、どら焼き好き？」

「好き！どら焼きとかも大好き。」

「では、このままお菓子屋へ突撃だ！」

のび太は、ギョウウウンと自動車だが、飛行機だかよくわからない擬音を出しながら、走り始めた。

「ああつ、いきなり走り出すなんて、ずるい！ちよつと待って〜」

「ツクモね、こしあんどら焼き〜」

ツクモの前に、綺麗なあんこがたっぷり入ったどら焼きが置かれる。

「あんまり急いで食べちゃダメだよ。」

「うん、わかってまふ〜」

と言いなながら、がぶりとどら焼きに食いつくツクモ。口の周りをあんこだらけにしな

がら、どら焼きをおいしそうにパクつくツクモを見てみると、なんだかそれだけで微笑ましかった。店員さんは、のび太達と同級生で、のび太達を見て、「最初はどこの若い親子かと思つたわよ。そしたら、野比くんとクロメちゃんなんでもん。」

その言葉にのび太もクロメも苦笑せざるをえなかつた。

「まさか、本当にあなた達の子供じゃないわよね。」

のび太とクロメはまだ付き合つてもいないのだ。

「迷子のこねえ。まあ、そういう事にしといてあげる。」

その子は、そう言つて、けらけらと笑いながら、お茶のお代わりを入れて、厨房に戻つていった。そういうことつてなんだつての。

「ねえ、のび太。やつぱり私達つて親子に見えるのかな？」

のび太は、ちらりとクロメを見て、ツクモの方も見る。

「見えない……とは思うけど、この状況つて、そう言われてもおおかしくないよね、多分。」

「うん。」

「パパー、どら焼き食べる？」

「え？ ああ、もらうよ。」

「じゃあ、あげる。ハイ、あ〜ん。」

のび太は、ツクモの差し出す食べかけのどら焼きに口を持つていき、パクリと食べる。

「ママもー」

「あ、はいはい。」

クロメもツクモの手からどら焼きを食べる。しかし、なんだか、『パパ』とか『ママ』とか呼ばれる度に、店の中から突き刺さるような視線を感じる。理由は分からんでもないが、誰だつて、この歳でパパ呼ばわりはされたくない。

「パパー」

「ん？どうしたのツクモ？」

「ここのどら焼き、おいしいね。ツクモ大好きだよ。」

「そっか。よかつたら。おかわりしてもいいんだよ？」

「うん、じゃあ、今度はこしあんじゃなくて抹茶どら焼き！」

……また渋いところを攻めてきますな。それとも、誰かの影響か？のび太は、懐の財布を取り出し、こっそり見たけど、微妙に足らないかも知れない。ちらりとクロメの方を見ると、クロメは小さく頷いていた。——これで安心だ。

「ツクモね、ずっと前パパとママと3人でレストランでご飯を食べただけで、それもすごく美味しかったなあ。今日みたいに、3人でご飯やお団子食べるの、ツクモだ〜い好

き。

「僕もだ〜い好き。」

なんだか、自分でも少し似合わないなと思いつつも、ツクモの口真似をしながら、頭をナデナデしてしまった。

「ママもツクモだ〜い好き。」

「えへへ。」

ツクモはパパとママに頭をナデナデされながら、どら焼きにがぶりとパクついた。

第十一章：雪だるまを斬る

外に出ると、もうすっかり暗くなっていた。ツクモはのび太の背中中で気持ちよさそうに寝息を立てていた。気温も随分下がってきたため、自分の着ていた上着をツクモの上から羽織る。

「あんまり、遅くなるようだ、交番に頼るしなくなるな……」

「そうだね……。でも、本当にツクモの両親はどこにいるのかな。」

のび太達は少しの間、とぼとぼと公園の中を歩いた。

「ツクモ、……かわいいね。」

「そうだな。」

「なんだか、ツクモとずっと一緒にいて、本当の母親になった気がしたの。」

「僕も、父親になるってのはこういうことかと思って。」

二人の間にしばらく沈黙が訪れた。そして、クロメが口を開いた。

「あのね、のび太。昨日のことなんて……」

「うん。」

「ほら、私……。両親に捨てられたでしょう？だから、子供と親の関係っていう

のに、少し敏感になってただけ。いつもみたいなのに、簡単に考えられなかっただけ。」

クロメは、淡々とまるで自分でも嘔みしめるように言葉を紡いだ。

「でも、もういいんだ。」

「もういい?」

「ツクモの話聞いてて思ったの。大切なのは自分たちが、いかに子供のことを考えてるかかってこと。どのみち、どうするのがいいのかは、結果が出てみないとわからないもん。」

「ただ、その結果が子供のために、できるだけよくなるように、頑張らなきゃいけないってことだよね。」

「あのとき、のび太と私が本当に子供の事を考えていたのなら、どっちが悪いか、どっちが正しいなんて、ないよね。」

「だよね。」

そんなことを話し合うのは、まだまだ気が早い気がするが、それでものび太とクロメの絆をまた少し強くした気がした。

「それで仲直りって事でいい?」

「うん、いいよ。」

のび太はそう言って、ツクモを片方に寄せ、手を差し出した。

「じゃあ、仲直りの握手!」

少し冷たくなったクロメの手。のび太は細くて綺麗なその手をぎゅつと握った。
「握手だけじゃ……もの足りないな。」

クロメはそう言つて、のび太の頬に、ちゅつと軽いキスをした。

「あ、パパとママ、キスしてる〜」

「わ、」

「あわわっ。」

いつの間にか、ツクモが目を覚ましていて、のび太とクロメのことを見ていた。流石に、さつと距離を取るのび太とクロメ。互いに視線をそらして、黙り込む。

「パパ、降ろして。」

「えっ?」

背中から飛び降りようとするツクモを制し、ゆつくりとしゃがんでそうつて降りさせる。
「どうしたの、ツクモ?」

ツクモはたたたと走り出し、のび太とクロメの前に、ちよん、とすました立ちポーズを取る。辺りを見回すと、時々だが雪が降り始めているのが見えた。はらり、はらり……地面に落ちてみすぐ溶けて消えてしまうような雪だ。

「ほら、雪が降ってきたよ。風邪を引くからこっちにおいで。」

「ツクモね、約束したんだ。雪が積もったらね、一緒に雪だるまを作って遊ぼうねって。パパとママとね、約束したんだ。」

雪が降る。はらはらと、次から次と降ってくる。そして、消えていく。積もることなく、消えていく。はらはらと、髪の毛の先や、鼻の・頭をかすめながら、はらはらと降ってくる。いつの間にか、雪が足下に積もっていた。積もるはずのない降雪量なのに、いつの間にか、公園にはうつすらと雪が積もっていた。世界が白く変わっていく。

「小さな雪だるまなら、作れそうぞ。」

のび太は、足下の雪をすくい、小さく丸める。

「小さいのじゃないの。大きい。すごく大きい雪だるまなの。」

ツクモがくすくすと笑う。

「ツクモ、こっちへおいで。一緒に雪だるまを作ろう。」

のび太は、丸めた雪の玉に、それより少し小さな雪の玉をくつつける。

「カワイイ雪だるま。でもー」

ツクモが、足で積もった雪を蹴る。

「でも、ツクモね、そろそろ帰らなきゃ。」

「帰る？帰るって、どこへ？」

「決まつてるでしょ？ツクモのだ〜い好きナ、パパとママのところ。」

ツクモが嬉しそうな笑みを浮かべる。

「ねえ、パパ。」

「ツクモちゃん。」

「ママ。」

「ツクモ。」

「――二人ともツクモのこと好き？」

ツクモが、頭をちょこんと右に傾げる。のび太とクロメは顔を見合わせる。

「僕は………。パパは、ツクモのことがだ〜い好きだ。」

「私も………。ママも、ツクモのことがだ〜い好きだよ。」

そう言うと、ツクモはにこーと、まるで天使のような笑みを浮かべて、

「ツクモも、二人のこと、だ〜い好き、だよ。」

と言った。

「じゃあね、パパ、ママ。ツクモは帰るね。」

ツクモはそう言うと、くるりと長い髪を翻しながらこちらに背を向けた。そして、最後にもう一度、のび太とクロメの方を向き、ぱたぱたと手を振り、駆け出した。のび太は、ふいにその姿がもう二度と見られないような気がした。

「ツクモちゃん！」

「ツクモ！」

のび太は、声を張り、ツクモの後を追いかける。白い雪がはらはらと降る公園の中を
追いかける。

「ツクモ、持つて！」

ツクモがぱたりと足を止める。のび太は、ツクモに追いつき、腰を落とす。そして、両
手で持てるほどの小さな雪だるまをツクモに差し出す。

「ツクモちゃん、どこへ行くの。ほら、雪だるまだよ、小さいけど……」

「パパ、約束したのは、もっと大きな雪だるまだよ。」

「もっと積もれば、大きいのが作れるよ。」

のび太はツクモの手を取り、雪だるまを手渡そうとする。ツクモがにこりと笑う。だ
が、雪だるまはツクモの手をすり抜け、べしやりと、地面に落ちた。

「……ツクモちゃん？」

ツクモの姿は——まるで雪が消えてしまうのと同じように、のび太の目の前から消え
てしまった。思わず、クロメと顔を合わせ、目をごしごしとこすり、もう一度ツクモの
いた場所を凝視したが、やはりツクモの姿はなかった。彼女が立っていた足跡は、降り
続ける雪でかき消えてしまった。ツクモのいた痕跡は、跡形もなくなっていた。彼女

は・・・、ほんの数時間だけ、のび太とクロメの子供だったツクモは、どこかへ消えてしまった。

最終章：未来を斬る

「のび太…….?」

「クロメ…….?」

しばらく何が起きたのかわからなくて、のび太もクロメも呆然としてしまった。

「僕は、あっちを捜すから、クロメはあっちを！」

「うん、わかった！」

目の前でいなくなっただけというのにもかかわらず、のび太はツクモが消えてしまったとは思えなくて、クロメと手分けをして、いなくなっただけのツクモを捜した。雪の降る公園の中を二人で捜したのだが、ツクモの姿はどこにもなかった。本当にツクモは消えてしまったのだろうか。目の前で起こったことを、信じるしなかないのだろうか。

ーぶるるっ。

雪は次第に強さを増していた。

「帰ろう。風邪を引いちゃう。」

のび太は、肩や頭の上に積もっている雪を払い落とし、そう言った。クロメは無言で頷いた。のび太は、降り続ける空を見上げた。

「クロメー」

「うん？」

「ツクモは、帰ったんだよ。きつと……」

「うん……」

「大好きなパパとママのところへさ。」

「そうだね。だって、ツクモ笑ってたもん。」

のび太はクロメの手を引き、公園の出口に向かう。静かに降る雪の中を、肩を寄せ合って歩く。まだ、のび太たち二人の間に、ツクモがいるような気がしていた。でも、ツクモはもういない。ツクモは自分のいるべき場所へ帰っていったのだ。

「『『『『おかえり、二人とも。』』』』」

その後、帰宅した彼らをドラえもんたちは笑顔で出迎えたのであった。

そしてその夜。

「のび太、起きてる？」

突然襖の反対側から声がした。

「クロメ……？どうかした？」

襖を開けると、そこには寝巻き姿のクロメがいた。

「のび太……、今日、のび太と一緒に寝ていいかな？」

クロメが頬を赤くしながらそう言った。

「え、そ、それは……」

「ダメ？」

さらに上目使いになった。そんな彼女にのび太は……。

「ツクモって、本当は私たちの子供だったりして。」

のび太に寄り添いながら、クロメがそう言った。

「本当……って、それヘンじゃない？」

「未来から来たんだよ。」

「うくん、未来って言われてもしつくり来ないな。」

「でも、目の前で消えちゃったし……。アレ、現実だよね？」

「それは……。多分ね。」

「だから、未来っていうのもアリだよね。」

「アリ、なのかなあ。てことは、僕とクロメは結ばれるってことなのかな。」

「あれれー？少なくとも、私はずーっとのび太と結ばれたくて一緒にいるんだけど？」

クロメが意地悪そうに笑う。

「そうだったね……。ありがとう、クロメ。」

好きだから、一緒にいたい。好きだからキスをする。好きだから触る。好きだから信じ合う。クロメはのび太の腕に抱かれながら、呟いた。

「愛してるよ、のび太。」

のび太とクロメは幸せいっぱい眠りについた。だが、すぐにこの幸せが跡形も消えてしまうことを、彼女たちはまだ知らない。

クリスマス パーティ プロローグ

「やっぱ、自分の家が落ち着くなあ。」

そう言つてカップに口をつけ、おもむろにテレビのスイッチをつける。昼間のせい
か、それほど面白い番組もやつておらず、適当なチャンネルをただなんとなく流すだけ
になった。

「のび太、思ひ出さないか？」

「え、何を……?」

隣に座つていたアカメが声を掛けてきた。

「私達が初めて再会したのも、この頃だ。」

「そういえば、そうだっけ。もうすぐ、2年だっけ?まさかアカメたちが家で暮らすよう
になるなんておもひもしなかつたよ。」

「フフフ、そうだな。」

「……?なに笑つてるの?」

「いや、のび太がいてくれたから、今の私がいるんだと思つてな。もし、あの時のび太が

そばにいなかったら…….と思うと。」

「別に、僕じゃなくても、他の人がなんとかしてくれてたと思うけどな。ナジエンダさんとか、レオーネとかシェーレとか。」

「そ、そうかな…….。私はやつぱりのび太だったからこそ、あのことを乗り越えられたんだと思う。たとえ、そうでなかったとしても、私はそう思っていたい。」

誰かの心に触れることが、人と通じ合うことが怖いと思っていた自分を闇から救ってくれたのはのび太の存在があつてこそだと。本当の心は見えなくても、わかるうとすることで相手を思いやる心が大切なのだを教えてくれたのはのび太だった。そんなのび太だからこそ、クロメは心を開いたのだろうか。もし、のび太がいなかったとして、他の誰かが自分にそのことを教えてくれたらどうか。

「いや、アカメの周りには、アカメのことを大切にしてくれる人達がたくさんいるって意味だよ。」

レオーネやチエルシーにシェーレ…….。自分のことを氣遣つてくれて、ちょくちょく困つたことはないか辛いことはないかと聞いてくる。昔から、自分の味方でいてくれる。いつも自分の話を聞いてくれて、自分と一緒にいる時間を楽しんでくれる。のび太だけじゃない。今の自分は、やはり彼女たちの存在があるからだ。のび太がいなくても、彼女たちはきつと違つた形で自分を救つてくれていたと思う。けれど、それは

それ、これはこれなのだ。自分はこのび太に出会い、のび太が自分を救ってくれたことに感謝したいのだ。

「そういえば、今年のクリスマスパーティー、のび太は何かするのか?」

「こ、今年のクリスマスパーティー!?」

明らかに狼狽えた声で、お茶を吹き出しそうになるのび太。

「何をそんなに慌てている? 今までいろいろやっていたと思うが。」

「ぼ、僕はそういうのはもう卒業したから……」

「ドラえもん聞いたが、私たちと出会うまでは散々色々な企画を立ててたそうだな。」

「色々な企画って……僕はパーティーを盛り上げようと思ってやったことばかりで……」

のび太が微妙にアカメから視線を逸らしながら、ゲフンゲフンとわざとらしい咳払いをする。

「ま、まあ、多少のお茶目があつてことは認めるけど、スネ夫ほど突飛なこととはしなかつたかな。」

「ホントに今年は何もしないのか?」

「し、しないよ………」

「本当に？」

「やらないやらない。」

「そうかあ。もしかしたら、面白いことが起きるかもって期待していたんだが。」

「そういうくだらないことは考えないの！クリスマスは厳かに祝うものです。」

のび太はそう言つて、もう一度ゴホンと咳払いをしてみせた。何か企んでるにしろ、そうでないにしろ、これ以上言うと怒られそうな雰囲気だ。企んでいるならそれはそれで楽しみに待つことにしよう。

第一章：日常を斬る

「のび太。今度の日曜日、どうするんだ？」

「え？日曜日？」

いつものように、どちらが言い出すともなく一緒に帰る。この季節の風は冷たく、私たちは温かさを求めて手を繋ぐ。手を繋ぐと、手だけでなくなぜだか身体中が温かくなる。

「ごめん、日曜日はちよつと用事があつてき……」

「大事な用事なのか？」

「いや、大切っていうか……その……いや大切な用事かな。」

「そうか。」

「ま、まあ、別にそんな全然会えてないとかそういう訳じゃないんだから、許して。」

「そうか。忙しんだな。」

「ごめんね……」

「大丈夫だ。家に帰れば、会えるわけだし。」

そう言っても、やはり一日二人きりでのんびりできる時間がなくなるというのは少し

寂しい。それにしても「大切な用事」ってなんだろう。いつもなら、簡単に説明してくれるのに。なぜか今日に限ってはわざとぼかしてる感じがしてそれ以上聞くのが悪い気がした。というより、なんだかのび太のことを疑っているような気がして少し怖かった。

私たちは唐揚げを買って食べながら、てくてくと公園を歩く。バス亭まで行く道を少し遠回りで話をしながら帰るのが毎日になっていた。

「え？何か言った？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私は話をもう一度かいつまんで教えると、のび太はくすりと笑った。私は続きを話し始めたけれど、のび太はそれも相づちを打つだけで、あまり話に乗ってこなかった。相づちも時々する具合で、たまに「え？」と聞き返すこともあった。

「のび太、何を考えている？」

「別に何も考えてないよ。」

「もしかして、私と一緒にいるとつまらないか？」

「そんなことないよ、アカメと一緒にいると楽しいよ。」

のび太はそう言って笑って、とってつけたように話を広げ始めた。それはそれで面白かったけれど、のび太がぼうつとしていたのは間違いはなかったと思う。その度に気にしすぎだろうと思うようにはしているけれど、心のもやもやはどうにもすすきりしなかった。微妙にのび太との温度差を感じつつも、私は逆に未だにこんなのにのび太のことが好きなんだなと実感していた。のび太は私のことをどう思ってるんだろうか。つないだ手から伝わる温かさはずっと変わらないけれど、のび太の心も私の心のように温かくなっているのだろうか。

「.....」

いつもと変わらない日常のはずなのに、今日はなんだか少し寂しく感じてしまった。

第二章：アカメの悩み

「――それで？アカメちゃん、それで野比くんはなんて言ったの？」

なつみがケーキをジュースで流し込みながら、身を乗り出してくる。

「だから、今日は急ぐから一緒に帰れないって。」

「そうなんだ。」

次の日、梨華となつみを誘って、カフェに来ていた。二人に私の悩みを聞いてほしかった。悩みというのはもちろんのび太のこと。ついに一緒に帰ることを断られてしまった、なんだかやたらと不安に駆られてしまったのだ。ケーキを二人におごりながら、まずはなぜ急に二人を誘ったかという話をする事になった。

「でも、それって普通のことじゃないのかな。私だって梨華ちゃんと一緒に帰らない時もあるし。」

「そうだよね。今まで一緒に帰るのを欠かしたことがないとかそういう訳じゃないよね。」

「ああ、もちろん。」

「じゃあ、別にいいんじゃないの？たまたま一緒に帰れなかったくらいで。」

「そうなんだが、なんだか最近ののび太ってつれないなあと思って。」
「そうなの？」

私は、ここ最近のび太の様子がおかしいことを二人に話して聞かせた。なんだか、二人の中をマンネリに感じているんじゃないかということ。それを証拠に、何か別のことを考えていたり、上の空だったり、デートを曖々？な理由で断ったり。

「……そんなの普通じゃない？」

「そうだよ。長い間付き合っていれば、最初みたいにラブラブじゃなくても仕方ないよ、なつみちゃん言う通り普通だと思うよ。」

「普通、なのか……」

「……それにしてもアカメちゃんって素敵よね。」

「す、素敵!？」

「だって、未だにそんなに野比くんのが好きだなんて。」

「そうだよ。2年も経とうつていうのに、そんなラブラブな気持ちのままいられるなんてある意味スゴイと思うけどなあ。」

「そ、そうなのか……」

1年過ぎようと2年過ぎようと、好きになった人のことはいつまでも好きなんだと思うのは、私だけなのだろうか。

「うん、すごくうらやましいかな。」

「クラスの子も言ってるよ。いつ見ても仲よさそうでいいなあって。一週間くらいで別れちゃう子もいるしね。」

「そうなのか……」

好きで告白した相手と一週間で別れてしまうというのはどんな状況なんだろう。付き合い方ようになって一週間というのは、むしろ一番素敵な時間のように思う。会えない時間が一日千秋のように感じ、顔を合わせるだけで口がほころぶ感じが自分でもわかる。隣を歩いているだけで、自分が世界中で一番幸せ者であるような気持ちになり、手をつなぐことはそれこそ幸せの極みのように思えたものだ。その頃の気持ちというのは、むしろ今でも鮮烈に思い出せてしまうくらい、私の中でははっきりと記憶に残っている。

「だが、やっぱり、なんだか最近のび太がつかないような気がするんだ。一緒に帰れないってだけで、胸がきゆうってしめつけられるような。」

「でもさ、もうすぐクリスマスじゃない。野比くんもなにか考えてるんじゃないの？」

「……なにも聞いてない。私から聞くタイミングも最近なくて。夜はすぐに部屋に籠るし。」

「き、きつと、ぎりぎりまで隠しておくつもりなんだよ！ね、梨華ちゃん。」

「わ、私もそう思う・・・かな。」

さすがにクリスマススの予定を何も聞いていないというのは、二人もフォローしづらかったのか、慌てた感じでわらっていた。

「そういえば、クリスマススっていつたら、この雑誌にね。」

梨花は取り繕うようにカバンから情報を取り出してペラペラとめくり始めた。

「ほら、シエルで限定スペシャルケーキを売り出すんだって。おいしそうだね。」

「へえ、こっちのホテルディナーもすぐくない？カップル向けのコースが用意されてるんだって。」

「ホテルから見える夜景は格別で、本州のカップルからも予約殺到だっけさ。」

「夜景を眺めながら七面鳥のローストとワインを傾けて・・・だっけ。アカメちゃん達もそういうのどう？」

「素敵だと思うが、さすがにそういうのはムリだ。値段だっけ・・・」

「あ・・・、そういえばそうだね。この値段じゃ一番安いコースだっけ、よほど頑張つてバイトしないと。」

「いくら野比くんでもムリよねえ。」

「私は別にそこまでじゃなくてもいいんだ。のび太のうちで二人きりで小さな肉を囲んで、楽しく過すごせればそれで。」

素敵な夜景を見ながら、豪華なディナーとお泊まりだなんてそれも素敵だが、さすがに私達みたいな学生には難しい。私はただのび太と一緒にクリスマスを過ごせればそれでいい。それだけだった。

第三章：クリスマスマス会議を斬る

その夜。

「ーもし本当にのび太に飽きられているのだとしたら、どうにかしたいと思う。それでみんなに意見を聞かせてもらえればなあって思っているだが……、どうだ。」

私は、雑誌の情報を見て、いろいろ楽しそうに話しているみんなに向かってそう言った。みんなはきよんとした表情で顔を上げ、私の方を見る。そしてにんまりと笑って、

「ふふふ、ついに本題が始まりましたね……。待ってたよ、お姉ちゃん。」

「同士ですものね、こんな時こそ力になってあげるべきですもの。」

妙に嬉しそうな顔で身を乗り出すみんなに私は思わず啞然とする。

「あ、ありがとう、みんな。」

私は急に喉の渴きを覚え、ぬるくなったお茶を飲み干した。

「ーそれ、もし飽きられているっていうことが問題なら、話は簡単だね。」

「そうなのか!？」

「飽きてるってことは、マンネリってことでしょ?いつもと同じでつままないってこ

と。」

「刺激………が足りないってことですか？」

「その通り。」

「刺激っていつても、どうするんだ？確かに最近のデートはあまり変わり映えしないってどうか、もちろんお小遣いの都合もあるけど。」

「たまには遊園地とか、遠出とかそういうデートもしたいよね。お茶を飲みながら話したり散歩だけって言うのは………」

「それはそれで楽しいんだけどね。なんだか安心するっていうか。」

バン!!!

「………私はそういうことじゃないと思います！」

レオーネは机を叩き、声を上げる。

「え、そ、そういうことじゃないって、どういうこと？」

私たちはレオーネの方を見ると、少し興奮した面持ちで真剣な目を私達に向けていた。

「女はそれでいいと思う。変わったところにデート行ったり、美味しいものを食べに行ったりするのも。」

「それじゃあ、男の人は……？」

「oooooooooooo、色仕掛けだ！」

レオーネはそう言つて、私たちの眼前に人差し指を突き付けた。

「『『い、色仕掛け………?!?』』』」

「そう！マンネリ化した男女関係を回復するにはこれしかないと思うんだ！」

私たちは思わず顔を見あわせたが、ここはとりあえずレオーネの話を聞くことにした。しかし、強気だったレオーネの表情はだんだんと赤くなり、なにか言いにくそうに唇をもごもごと動かしていた。

「あの……みんな、その……のび太とはやつぱり、その……」

急にもり始めたレオーネはちらちらと私たちの顔を見ながら、聞こえるくらいの音で喉を鳴らす。

「の、のび太とは、その……えと、し、シてるんだよね？」

「『『してるって何を……?』』』」

と言いつつこの場合してるといえばoooooooo

「oooooooooooo、やつぱり付き合ってるんだから、エッチくらいしてるんだよね？」

喉のつつかえが取れたのか、レオーネはそう言つて胸を撫で下ろす。

第四章：アカメの妄想を斬る

「『……』」

レオーネの言葉で私たちの脳裏にはぱあつとのび太とのび太のことが次々と思い出されていく。初めて唇を重ねてから、お互いにしてきたこと、求め合ったこと。色々と試したことや、ただただ抱き合っていただけのこととか。胸がきゅんとなりつつも、今の状況を思い出して耳たぶまで熱くなるのを覚えた。

「『それは……』」

私たちは、今までに見たことないくらい真つ赤な顔で視線を泳がせる。恥ずかしいけれど、考えてみれば恋人同士にとってはとても大事なことだと思つた。好きだからこそ、相手を感じてほしい、お互いを喜ばせたい、そして繋がりを・絆を感じてほしい。「それで、私としては、刺激的なエッチというのが必要なんじゃないかと思つたの。」

「刺激的なのって言われても、よくわかんないよ……？」

「私だって、よく知らないよ……」。本を読んだり友達から話を聞いたことあるくらいで……でもね、よく言うじゃない？ 普段とは違う格好で迫ってみるといいとかさ。」

「セクシーな服とかコスプレとか？」

「そうそう！」

「う、うーん、いつもと違う格好で迫ってみるのかあ……」

私は、とりあえずレオーネの言う通り、のび太が喜んでくれそうなことを考える。いつもと違う格好っていつても、あまり思い浮かばない。コスプレって、看護師とかCAとか……ってことか？体操服とか水着も……って、なんだか私すごく恥ずかしいことを考えているような……。

「……とりあえずクリスマスが近い。だからサンタっぽい恰好の服はどうだ？ほら、よく街でプレート持って立ってる女とかいるだろ？真っ赤な服で、白いぼわぼわをつけて、ミニスカートにブーツを履いて。」

と云いつつ、私の頭に浮かんでいるのはやけに露出度の高いエッチな格好のサンタだった。刺激的な格好と言われたからには多分普通の恰好ではいけないと思って、一生懸命考えてみたが、どうだろ？胸の下が見えたり、ヒールのブーツっていうのはちよつとやり過ぎかな……。でもきつとこんな感じだろう。

「それで、そういう格好で……。『のび太、プレゼント持ってきたぞ！』『わあ、アカメがサンタになってやってきた！』『ふふ、かわいいだろ？』『ミニスカートがすごく短くて、なんだか見えちゃいそうだ！』『のび太！そんなところばかり見て、プレゼン

トはいらないのか?』『でも、どこにもプレゼントがないぞ!?これはどうしたことだ!』『ふふふ、決まってるだろ?プレゼントはもちろん、わ・た・し・・・だ♪』『今日はサンタの恰好をしたアカメと・・・。なんて素敵なんだろう。僕はあらためてアカメのことが好きになったよ!』『嬉しい、わたしものび太のこと、大好きだ・・・♪
・今日はずっと一緒にいよう。』ーーーってことかなあとと思うんだけど、どうだ・・・?
』

私なりに頑張って想像してみたけど。確かにこういうのってたまにはいいかも知れないな。私も楽しい気がするし。

第五章：チエルシーの妄想を斬る

「『『『』ー全ツ然、ダメ!!』『』』」

「え、ええ!?!」

と、いきなりみんなからダメ出しを食らってしまった。

「アカメく、もつと刺激的なことをして盛り上げようっていうのに、それって普通じゃないかな?」

「え、エツチするときはともかく、別に刺激的だとは思わないかなあ。」

「そうですね………。あ、アカメにはすごく似合うと思いますけど。」

「だって、サンタのコスプレなんて普通じゃない。かわいいとは思うけどね。」

「うん、もう少しインパクトが欲しいな。」

みんなに、さっきの私の想像した恰好を伝えられたら、きっとそんなことは言えないに違いない。裏を返せば、私の想像がみんなの想像を超えるエツチなものだったということになるけど。

「それじゃあ、チエルシーはどんなのが刺激的だと思ってるんだ？」

私の言葉でみんなの視線がチエルシーに集中する。

「え、私？わたしはねえ……」

チエルシーは少しの間考える素振りをした後、口を開いた。

「やっぱり、ここは大胆にセクシー下着がいいと思う。」

「『『『せ、セクシー下着!!?!』』』』」

「セクシー下着っていつてもただエッチなのはいけないと思うの。そこはオシヤレじゃないとね。フリルやレースがいっぱいのベビードールでね、なんとスケスケ！」

「え、だ、だってスケスケだったら、見えちゃうんじゃないか……」

「しかも、見えそうで見えないのだとおもしろいかもね。」

「うん、野比くんもそういうの喜ぶ……」

「えっ、翼ってスケスケの下着とか持つてるのか……!?!」

「ち、違うよお。ただ、ちらって見えるのがドキドキするって言ってただけで。」

「チラリズムってヤツだね。重要だよ。そんな感じで、いつもと違うそこそ刺激的な下着で迫れば、さすがのび太もノックアウトじゃないかな？」

「……セクシー下着。」

なんていうか、いいとは思うけど、ちょっと違うというかなんと……。それよりも、普通に喜びそうなのび太と、妙に似合ってそうな自分の姿が簡単に思いつかんでしまった。

「あ、チエルシー、今アカメは『意外といいかも』なんて思ってるよ?」

「そ、そうなの、お姉ちゃん?」

「え? いや……それは……その……」

と言いつつも、確かにそういうのはいいのかもしれない。セクシーな下着を買うのはちよつと恥ずかしいけれど、のび太が喜んでくれるのならそれもいいかもしれない。

第六章：クロメとシェーレの妄想を斬る

クロメが目をつもり、手にあごを添えてうぐんとうなる。しばらくして、クロメが難しい顔をして、つぶやいた。

「ワフクっていうのはどうかな？」

「『』『』『ワフク？』『』『』」

「そう！私がワフクとかに身を包んで、板に三つ指付いて頭を下げるの。それから……『貴方、お帰りなさいまし？』『うん、ただいま！』『貴方、お風呂にする？お食事にする？』それとも、わ・た・し？』『……………。』そしてのび太が私の帯を掴んで、『あくれえ〜』って！」

「くるくる？？」

「こそ。襖を開けたらね、突然お布団が敷いてあつて、のび太の方を見ると、イヤらしい顔で私のことを見てるの。でもって、『お願いです、お願いですからおうちへ帰してください！』って言つても、『叫んでも誰もここには来ぬぞ』とか言つちやつて。腰の帯に手をかけられ、しゆるしゆるしゆる……………。でもって、私はくるくる回るの。『あれーお許しくださいいい……………』」

「『』……………』」

ヘンな身振り手振りの芝居が入りながらの、クロメの説明。だいたい、和服の話で、どうしてそういう話になるんだ？

「……………満足した？」

「えと、なんとなく。えへ、えへ……………」

そして今度はシエーレの番だ。シエーレも頼に人差し指を添えてうくんとうなる。しばらくして、彼女が口を開いた。

『コーヒーをお持ちしましたご主人様。』『ありがとうございます、シエーレ。』部屋で、メイド服姿の私が大量の書類に目を通してゐるのび太のところをコーヒーをお盆に持ってやって来るんです。『まだお仕事をされてるのですか？』『まあね。色々仕事が貯まっててさ。』『無理なさらないでくださいね。』『ありがとうございますシエーレ。いつもメイドとして僕の為に色々頑張ってくれてるよね。』『そ、そんな！わ、私はメイドしてご主人様のサポートをしているだけで！』『そんなことないよ。シエーレのお陰で色々助かってるよ。』

何かお礼をしないとね。』『お、お礼なんて！こうしてご主人様のメイドとして働かせてもらってるだけでもありがたいのに！』『遠慮しなくていいよ。何がいいかな・・・そうだ！』椅子から立ちあがるとのび太は、私の顎を右手でくいと上げ、互いの顔を見つめあう姿勢となる。『ご、ご主人様!?ま、まさか!!』『そのまさかだよ。』『い、いけません!!このようなどころで!!』『大丈夫だよ。今、この部屋には僕たち以外誰もいない。完全に二人つきりだよ。だからここで何をしても問題ないわけだよ。』『ふ、二人つきり!?』『いつもありがとう、シェーレ。』優しい声でそう言うとのび太は、まだ心の準備のできていない私に目を閉じながら唇を近付けていく。そして私たちの唇が重なりました。

第七章：翼の妄想を斬る

「……じゃあ、最後は翼だね。」

「えっ、私？」

「自分だけ言わないつもり？」

「そ、そんなあ、恥ずかしいよ。ねえ、アカメちゃん、助けてよ。」

「私も、翼の意見を聞いてみたい。」

「だよね、ここまで来たら言わないのはズルイよね。」

「そんなあ、みんな意地悪だよお。」

はたして、この中で一番常識人である翼はいつたいどんな刺激的なことを考えてくれるのか。私はなんだか次第に楽しくなってきた。

「刺激的……なんだよね？」

「サントのコスプレは普通だって言ってたよね。」

ああ、レオーネは意地悪だ。そうやって、逃げ道を塞ぐなんて。

「刺激的で、男の人がついムラムラ来ちゃうような格好……」

翼が、腕を組んでうんうんと唸っている。なんだか、首を何度も捻りながら、考えて

いるようだ。

「じゃ、じゃあさ、こういうのはどうかな？」

翼はやけに真剣な目で私達の顔を順番に見ていく。

「あのねー女王様ルックはどうかかな．．．．」

「『『じよ、女王様ルック．．．．!!』』』」

「刺激的っていったら、そういうのしか思い浮かばなくて。」

翼は、なんだかやり遂げた顔でえへへと爽やかな笑みを浮かべていた。

「女王様ルック．．．．（女王様ルックっていったら、エスデスみたいにレースでできたセクシーなスーツに身を包むのか。それでもって、ヒールの高いブーツを履いて、壁にムチや鎖がいっぱいかかっている部屋で．．．．『ほら、のび太。私の前に跪け!』

『ひ、ひいッ!あ、アカメ様!』『うふふ、かわいいな．．．．。怯えているのか。』『そ、そんな．．．．』『さあ、私に奉仕しろッ!!』．．．．ってこんな感じなのか。わわわ、

私はいったいどんな想像してるんだっ．．．．!サンタの服とか、セクシー下着なんか目じゃない．．．．。こんな格好、いくらなんでも恥ずかしい。ああ、なんとなく似合ってる自分が切ない．．．．。も、もしこんな格好したら、のび太はどうおもうのか．．．．。私の事を軽蔑する?すごく興奮しちゃう?『調教してください!』なんて言い出したら、どうしよう。それよりも、調教ってどんなことをするんだ．．．．。ム

チで叩いてロウソクを……。って、私はいったい何を想像しているんだ！そ、そんなので男は悦ぶのか……。」

「ーお姉ちゃん？」

「あ、アカメちゃん？」

「ーえ!？」

「なんだかすごく面白いことになってたけど。」

「うん……顔を真っ赤にして、いろんな表情してたよ？」

私ったら、そんな変なことしてたんだ……。

第八章：合コンを斬る

「――金曜の夜、予定明けときなさい。」

突然家にやってきたのは、河井伊奈子。『学校一の美人』と噂されていた隣のクラスの女子生徒だった。

「久々にモデルの仕事があつたんだけど、その時のマネージャーが大手芸能事務所の偉い人たちに話を繋いでくれるって話になってさ。で、向こうはお偉いさんたち連れてくるっていうから、こつちもそれなりに人数そろえて合コンの形にしようってなつた訳。」

「『『合コン?!』』』」

うむ、と伊奈子が力強く頷いてみせる。普通、合コンは恋人のいない人間が参加するものである。私たちに声がかかるのを疑問に思ったチエルシーとシエーレは思わず口を開いた。

「ダメダメ、ダメだよ。そんなの。今までだつて断つてるでしょう?」

「そうですよ。私たちは、今お付き合ひをしている人がいるんですから。」

まあ、これまでもイベントの度に伊奈子からはなんらかのアプローチを受けてきた訳だから、今回もそうだとおもったけれど。伊奈子の提案は毎回一日デート権だの一緒

にカラオケをする会だのという内容で、受けることができないうものばかりだった。なぜなら、今は私たちがのび太と付き合っている訳で、彼を差し置いて他の男と一緒に遊ぶのは気が引けたからだ。あくまで遊びと言われればそれまでだけど、やはり心のどこかでそれは避けたいと思っていたのは間違いないのだ。それに、当ののび太もそういう話があったことを伝えると、あまりいい顔をしない。だから、私たちは伊奈子には悪いが、ずっと断り続けていたのだ。

「またいつものような提案なら、お断りしますよ。」

シエーレの言葉を聞きつけた伊奈子は語調を強めた。

「彼氏がいてもいいんだよ。お偉いさんを接待するのが目的なんだから。うまくいけば、映画の仕事くれるって言われたんだから、絶対に成功させなきゃなんないのよ！」

「そういうのが困るんですってば！」

しかし、伊奈子は諦めた様子はなく、むしろその反応は想定範囲だったとばかりに笑っていた。

「実はみんなに参加するにあたってある人から承諾を得てるんだ。」

「ある人？それって、まさか……」

「そう、もちろん。あんたたちが良く知っている野比のび太だよ。」

私たちに普通に頼んでも、断られるのは目に見えてから、のび太の方にも交渉をして

いたわけか。

「のび太には喜んで承知していただいたわ！あんたたちの合コン参加を許可します……って。」

「そんな！のび太がそんなこと言う訳ない！」

「そうだよ！のび太が許す訳ない！アカメちゃんならともかく、のび太が私を売るようなことなんて絶対にならないんだっから！」

グサリ

……ち、チエルシー？

「飽きられているアカメならともかく、のび太は私を売るようなことはしない！」

グサリ

……れ、レオーネ？

「基本的にお肉の話しかしないアカメはともかく、のび太はとても友達思いですよ。」

グサリ

……し、シエーレ？

「大食いで気品のないお姉ちゃんだけど、のび太はそんな事する人じゃないよ！」

グサリ

……く、クロメまで……。み、みんな……。気にしている事をずばずば

と言うんだから。なんか、軽くダメージ。

「いや、のび太はそれも含めて承諾したんだよ。」

「え、そ、そんな……」

「本当だよ。そう言ってもみんなは信じないだろうから、ちゃんと念書も取ってある。」

伊奈子がそう言つて、ポケットから一枚の封筒を取り出す。私は恐る恐るそれを受け取り、中に入っている紙を取り出す。

「………のび太の字だ。」

そこには合コンへ私たちが参加するという説明とそれに同意するかどうかという文章が書かれていた。そして、紙の下の方には『野比のび太』という名前がしっかりと書かれていた。

「そんな、のび太……」

「わ、私達にも見せて。」

私はレオーネやチエルシーにもその念書を見てもらったが、そこに書いてある署名は間違いなくのび太のものだった。

「のび太が、私たちを……」

もう一度念書ををじつくりと見たが、やはり署名の字は間違えようがない。念書は、私の手から離れ、はらはらと地面に落ちていく。

「これで理解した？だから、絶対に機嫌を損ねるようなことするんじゃないわよ？胸触らても尻触られても拒否しない。ホテルに誘われたらちゃんと枕すること。詳しいことは後日連絡するから。」

伊奈子は、紙切れを拾い上げ、懐にしまう。のび太が私たちが合コンに参加することを承諾した。のび太は、私たちが合コンで他の男に触られてもいいんだ……。その上、枕するなんて……。のび太……。のび太……。どうして。本当にいいのか？本当にそれでいいのか？伊奈子が帰った後、私はなにか胸にぼっかりと穴が空いたような気分になった。なんだろう……。この気分は、なんだろう。

第九章：景品を斬る

「私、合コンに参加するよ。」

「ーーク、クロメ？」

「のび太が私に出ろというなら、私はそれに従うよ！」

クロメは強い意志でそんなことを言う。

「.....」

そして当日、外は若干の曇空。木枯らしがカタカタと窓を揺らしていた。アカメたちは六本木にある高級レストランの入口の前で伊奈子の到着を待っていた。このレストランは完全個室制と店員の質の高さが評判の店で、芸能人や議員などわけありの人間がよく利用していた。アカメたちは伊奈子の命令で、なるべく肌が露出するお洒落を強い

られていた。

「………。」

場の雰囲気気圧されて無言で伊奈子を待っていたアカメたちの前にタクシーが止まった。タクシーのドアが開き、中から春物のコートの下にチューブトップ、シヨートパンツといった格好の伊奈子が降りてきた。伊奈子はアカメたちの姿を一瞥するとアカメのシャツに手を伸ばし、首元までしっかりと締められていたボタンを2つ外して襟を開いてしまった。

「もうちよつと色気出しなさい。ほら、これでいい!」

アカメはシャツを直そうとしたが、伊奈子に睨まれ、胸元が開いた恥ずかしい状態のままクロメ達と一緒に座席に向かった。個室は真ん中に長方形のテーブルがあり、その左右と奥側に革製のソファアアが3つ設置され、それぞれのソファアに1人ずつ男が座っていた。向かって右側のソファアにはスーツ姿の若い男が座っており、伊奈子の姿を認めると立ち上がって声をかけた。

「伊奈子ちゃん、待ってたよー!あつ、その娘たちが今夜の景品?」

「はい、そうです。こつちがアカメで、こつちがクロメです。そしてチエルシー、シエーレ、レオーネ、翼。ほらみんな挨拶して!」

猫をかぶって接する伊奈子に促されてアカメたちが挨拶すると、先程声をかけた若い

男が立ち上がったって男性陣の紹介を始めた。普通の合コンだと最初は男女が向かい合って座る形式になるところだが、この合コンは明らかに男女がセットで座るようにセットイングされていた。

「それでは、誰がどこに座るのかをゲームで決めたいと思います！」

アカメたちは一箇所に集められ、大きなローブを被せられた。あまりの大きさにアカメたち全員の身体が隠される。そして伊奈子は歌に合わせて、彼女たちの立ち位置を変えていく。

「終了！」

歌が終わると、伊奈子は再びマイクを取った。

「皆様、順番にローブの中に手を入れて、景品を引き当ててください。それではゲームスタート!!」

第十章：取引を斬る

ローブに手がかけられるのがわかった。ゆっくりと布隙間から、光と一緒に冷たい心地いい空気が入ってくる。

「『』『』『』『』『』『』」

ああ、冷たい空気が気持ちいい。眩しい光に次第に目が慣れてくる。そして、目の前には――。

「みんな………」

「『』『』の、のび太………」

そこにいたのは、なんと**のび太**だった。

「え？あれ？合コンは……？伊奈子は……？」

私たちはすっかり状況を把握できないでいた。いったい何がどうなっているんだろう。

「のび太――！！！！」

「!?」

ぐしっ

いきなりのび太は頭に衝撃を受ける。

「のび太！あれは一体どういうこと!?!」

レオーネはのび太の頭にヘッドロックをかける。そしてクロメたちは心配そうな顔でのび太を見つめた。

「いたたたたた、ど、どうしたんだよ、みんな。そんなに怖い顔してさ。いてててて……」

のび太の声は少しうわずつてしまった。

「正直に答えろ！でなければ、このまま首をへし折るぞ！」

「ちよ、ちよつとよくわかんないよ。落ち着いて話をしよう。」

「みんな。ごめんね、今まで。いろいろとやりたいことがあつてさ。なんとなくみんな

を騙すような形になっちゃったけど……」

「のび太……」

「実は、みんなと今までで一番素敵なおクリスマスを過ごしたくて、伊奈子さんと取引をしてたんだ。」

『『『取引……？』』』』

「うん、ちよつと僕の方じゃ無理だったからさ、伊奈子さんに僕の希望が叶えられるバイトを紹介してもらってさ。まあ、その見返りとして、みんなを合コンに出させるっていう……」

「それで、あんな念書を……」

「のび太は私たちが合コンに出ても平気なの？」

「いや、でも……僕はみんなの保護者でも、恋人でもないわけだし……それに合コンって飲み会みたいなもんでしょ？」

「胸触らてもお尻触られても拒否しない。あまつさえ、ホテルに誘われたらちゃんと枕しろなんて、よくそんなの許せるね！」

「なっ、なにイ!?!」

「え、だから、私たちがホテルに誘われたらちゃんと枕するっていう……。のび太、

OK

出したんでしょ?」

「なんでそんな事になってるの!? 僕は、みんなにそんなことさせることまで許したつもりはない。」

「やっぱりね、なんかおかしいと思ってたんだ。いくらなんでものび太がそこまで認めるなんてさ……」

よかった。本当によかった。のび太はやっぱり私たちの信じてるのび太だった。なんだか、じんわりと胸の奥が熱くなってきた。込み上げてくる気持ちがあるまま目からこぼれ落ちる。

第十一章：バイトを斬る

「ごっつ、ごめん、そんなに悲しませるつもりなんてなかったんだ、本当にごめん。」

「違う、嬉しくて泣いているだけ……」

私はくすつと笑いながら、涙を拭いた。でも、やっぱりそれだけじゃ止まらなくて、なんだか、ポロポロポロポロと後をついて涙がこぼれていた。

「アカメ……」

私の頬を流れる涙をのび太の指が止める。そして、のび太は私の涙を拭いながら、頬にそつと手をあてがう。私の目の前に、のび太の顔がある。そして、のび太の指が私に触れている。久しぶりー。

「のび太……」

ふつと私の唇に温かいものが触れる。

「ん……」

少し、長いキスだった。ただ唇を重ねただけのキスだった。のび太が私を抱きしめる。ぎゅつと、強く、強く……。それが嬉しかった。ただ、のび太の存在を感じられることがただただ嬉しかった。

「――僕さ、みんなに喜んでもらいたい一心で、ずっと何ができるか考えてさ。それで、ずっと素っ気なくなっちゃってたんだと思う。働いてる間はずっと忙しく一緒に帰れなかったし、夜は夜で疲れててすぐ。」

「……………なんとなく私たちを避けてたのは？」

「それは……………、なんとかか……………伊奈子さんとの取引の材料に勝手に使っちゃって、後ろめたかったというか……………」

「言ってくればよかったのに……………」

「……………そうだね。」

のび太はそう言っつてバツが悪そうに苦笑した。

「……………でも、私たちがここにいて合コンの方は大丈夫なのかな。さすがに迷惑をかけてるのは悪いなあと思って。」

「いや、それについては大丈夫だよ。さつきドラえもんから連絡があつて、ちゃんと手は打つてあるつて言つてた。」

「そうなんだ。」

「――それにしても、そのドレス。よく似合うよ。綺麗だ。」

「本当？これ、合コンに参加する代わりにプレゼントなんだつて。私たちもすごく気に入ってるんだけど……………」

「ですが、合コンに出ないなら、申し訳ないことしちゃいましたね。」

「いや、そのままもらっていいんだよ。」

『『『え？』』』』

「だって、それは僕からのプレゼントだから。」

「え、だって、これ……」

「それも含めて伊奈子さんとの取引だったんだよ。実はさ、今日はクリスマススイブでしよう？ホテルのディナーと部屋を取っておいたんだ。僕のお小遣いじや無理だからさ、伊奈子さんにどうにかならないかって相談したら、割のいいバイトを紹介しようって言われて。それで、それを教える代わりにみんなを合コンに出させろ、ってさ。合コンで着るドレスも用意するからって。それを着てクリスマスディスプレイなんて素敵だろうって言われたら、僕もすっかりその気になってさ。だから、そのドレスは僕からのプレゼントなんだよ。お金もそのバイトから出したものだし、選んだのも僕。」

『『『のび太……』』』』

第十二章：クリスマスプレゼントを斬る

「みんなも気に入ってくれてるみたいで、よかったよ。ずっと似合うかどうかドキドキしてたんだ。」

「のび太、すごく嬉しい。こんなに凄いクリスマスプレゼントがもらえるなんて！」

私たちは思わずそのままのび太に飛びついてしまった。このドレスを選んでくれたのが、のび太だったなんて……。しかも私たちへのクリスマスプレゼント！今までの不安がすべてどこかに飛んでいってしまったみたいだ。

「……さて、どうにか合コンから脱出出来た訳だけど、このままここにいちやヤバそうだな……」

「そうだな。もう、このまま逃げ出しちゃおうぜ。」

「そうだね、それがいいや。」

のび太はそう言っただけで私の手を取る。すっかり冷えていた手が温かくなる。ヒユウと冷たい風が六人の傍を吹き続ける。空を見上げると、白い雲が辺りを覆い、低く辺りを包み込んでいた。きっと、今夜は降るのだろう。私たちとのび太を祝福してくれるホワイトクリスマスになるに違いない。

「さ、冷めるといけない。早く行こう。」

けれど、私は今とつても温かかった。きつと、世界中の誰よりも温かい。私はのび太の手をぎゅつと握った。

「くじ引き順にローブの中に手を入れてください。」

伊奈子の言葉に、一番のくじを引いた男がローブの中に手を入れる。そして中にいる人物の腕を掴んだ。そして思いっきりローブの中から引きずり出す。だが

「いえーい！ようこそ、俺様のリサイタルへ！」

中から出て来たのは、アカメでも、クロメでも、チエルシーでも、シエーレでも、レオーネでも、翼でもなかった。マイクを片手に派手な衣装に身を包んだ少年であった。

「なっ?!!?!! た、武くんツ!!?」

伊奈子が慌て出す。予想外の展開に社長たちはどうなっているのかと伊奈子に詰め寄る。

「みつ、みなさん、ど、どうやら、こちらのてつ、手違いがあつたようで、た、大変申し訳ありませんッ。」

「それでは、俺様の仲間を紹介しよう！」

するとローブの中からドンドン人が現れる。その数、ざっと100人。しかも全員同じ格好だ。

「100人のジャイアンだ!!」

ハイテーションで大声を出すジャイアンたち。伊奈子がこの世の終わりだと言わんばかりにその場にへたり込む。ジャイアンたちは息を精一杯吸い込むと……。

「『『『『『おーれーはジャイアン！がきだいしよう！』』』』』」

歌い出した。建物は揺れ始め、窓ガラスは次々と割れる、飾つてあつた高いワインが床に落ちた。天井のシャンデリアが支えを失い、落下する。六本木はまさに地獄と化した。

第十三章：女の気持ちを斬る

「ー雪、綺麗だ。」

「うん、そうだね。」

窓の外では、雪が降っていた。小さな白い粒がゆらりゆらりと、まるで風に乗って天から降りてくる妖精のように見えた。僕はみんなと一緒に窓の外を眺めていた。

「それにしても、素敵な部屋ですね。」

「高かったんじゃない?」

「まあ、それなりには……ね。」

「食事も凄かったし……。デザートなんて特によかったしね。あんなケーキ初めて。」

「喜んでもらえてよかった。」

「こんな綺麗なドレスももらって、今年のクリスマスは今までで一番かも。」

チエルシーはそう言っ、くるりと回ってみせる。スカートがふわりと広がって、ポーズを取るチエルシーがなんとも言えず可愛らしかった。

「でも、こんなにまでしてもらわなくてもよかった。大変だっただろう?」

「そりゃあ、大変だったけど……。もしかしてこういうのは苦手だった?」

「そんなことはない。すごく嬉しいぞ。今もとっても幸せな気分。」

「——でもね、私たちのために野比くんが身体を壊したり、無理はして欲しくないかな。」

みんなが僕にぴたりと寄り添う。胸に預けられた翼の頭から、いい香りがして鼻をくすぐった。

「私たちはね、のび太がいてくればそれでいいんだ。」

「そうそう。クリスマスだからって、特別なことがなくてもそれでいいの。」

「そりゃあもちろん、素敵なことがある方がいいに決まってるけどね。」

「今日まで、私はちよつとつらかった……」

「ごめん、そんな思いさせちゃって。」

「いや、全部私たちのためだったんだろう？嬉しいぞ、謝ることなんてない、ありがとう。」

「僕はちよつとみんなに甘えてたんだと思う。言わなくてもわかってくれるだろうって。」

「うん、でもね、やっぱり不安になるの。いくら野比太のことを信じてるつもりでも、好きな人から何もないと不安になるの。」

「女は、わかっても好きって言ってほしい生き物なんだよ？」

「そ、そうなんだ……」

「……のび太、私たちのこと、好きか？」

「そりゃあ、もちろん。」

「ダメだ、ちゃんと好きって言ってくれ。」

アカメたちは、僕の顔を見つめてふふつと笑う。なんだか、『好き』という言葉を言うだけなのにやたらと照れくさくなってしまい、僕はつい顔を逸らしてしまった。なぜこんなに恥ずかしいのだろう。

「……す、好きだよ。」

「ダメだ、ちゃんと私たちの顔を見て言ってくれ。」

アカメたちは僕の顔をくいつと自分たちの方へ向ける。アカメたちの大きな瞳の中に、僕が映っていた。

第十四章：景色を斬る

「・・・・・・・・のび太、私たちのこと、好きか？」

アカメたちの細い身体がぴたりと密着する。布越しに彼女たちの温かさが伝わってくる。

「『『のび太（野比くん）・・・・・・・・、好き。愛してる。』』』」

「うん、僕もみんなのことが大好きだよ。」

アカメたちが静かに目を閉じ、唇を近づけてくる。そして唇が順番に重なっていく。
「ん・・・・・・・・」

柔らかい唇から、アカメたちの気持ちが伝わってくる。僕のことを愛しているという気持ちがじんわりと伝わってくる。

「・・・・・・・・ふう。キス、しちゃったね。」

クロメは穏やかな笑顔で、瞳を少し潤ませながらそう言った。

「なんだか、のび太が私のことを好きって気持ちがあつく伝わってくる。」

「不思議ですね。抱き合ってキスをしてただけなのに。」

「そうだな。不思議だ。」

僕は無邪気に笑うレオーネたちのことが愛おしくて、たまらずに抱きしめたり、頭を撫でたりした。

「……そういえば、私たち……こんなにかくさんのものをもらったのに、クリスマスプレゼント何も用意してなかった。ここ最近、ずっとぼんやりしちゃってたからすっかり忘れてた。」

「いいんだよ。みんなをそんな気持ちにさせていたのは僕なんだし……。それに、僕はこうしてみんなと一緒にクリスマスを過ごせることの方が嬉しいんだから。」

「『』のび太（野比くん）……」

「なあ、この部屋って随分高いところにあるよね……」

「うん。ここじゃないと見せられないから。」

「見せられないって何を……?」

「ちよつと寒いけど、外に出てみない？」

「『『『?』』』』」

僕は窓を開けると、みんなを連れてベランダに出た。

「ーうわあ、見て！街があんなに！」

雪がはらはらと降る中、眼下にはオネンで輝く風見市の街並みが広がっていた。

「すごい……なんて綺麗なんだろう。」

僕はこの景色をみんなに見せたかった。クリスマス、このホテルのこの・階の部屋から絶景が見られると聞いて、どうにかみんなで景色を見たいと思っていた。

「ホント、綺麗だな……」

僕も思わず、眼下に広がる景色に見とれる。

「こんなところから、街をみるのは初めてだ。」

「僕も初めてだよ。」

「のび太は、ここから見える景色がこんなに綺麗だつて知ってたの？」

「ま、まさか。こんな高級ホテル、来たのは初めてだよ。」

「だよね、日本で一番立派で大きなホテルだもんね。」

最終章：サンタクロースを斬る

「のび太、今回はちよつと頑張り過ぎだろ。」

「え、べ、別に大したことはしてないさ。」

「ウソだ。いくら伊奈子の手を借りたからって、学生がそう簡単に泊まれるような場所じゃないことくらい知ってるぞ。」

「……まあ、今日までずっと、学校終わったらすぐバイト先に行つて、遅くまで働きづめかな。」

もちろん、伊奈子の紹介してくれたバイトだから、普通のバイトではない。肉体労働ではあるけれどちよつと特殊ではあった。

「……い、いや、別に法に触れたりいかがわしいようなことはやってないよ?」

「ふふ、わかっている。いくらなんでものび太はそこまではしない。」

アカメが腕を絡ませ、頭を預けてくる。冷たい風が吹く中、アカメとくつついている部分はやけに温かかった。

「……ありがとう。」

「え……?」

「ありがとうって言ったただけだ。すごく嬉しかったから。わたしは、この夜景を一生忘れない。これからどんなに凄いとこへ行っても、きつとここから見た景色が一番だ。」
「大げさだよ。」

「いいや、こんなにキラキラしてて、雪まで降ってとつても綺麗だ……」

「ゆ、雪は僕が降らせたんじゃないよ。」

「ふふふ、きつとこの雪は私たちのためにすごく頑張ってくれたのび太へのクリスマスプレゼントだ。この世界には、見えないかも知れないが、ちゃんとサンタはいるんだ。本当は子供にしかプレゼントはあげないんだが、時々一生懸命頑張ってる人にもプレゼントをくれるんだ。サンタは、ちゃんとそれを見て、プレゼントをくれるんだ。」

「そっか……。僕、頑張ったもんな。」

「そうだ、のび太は頑張ったから。」

「そうだとしたら、サンタクローズは随分と粋な計らいをするものだ。空を見上げると、真っ暗な世界から白い綿毛のようなものがふわりふわりと降りてくる。それは触れるととても冷たいのだけれど、それが返って人の温かさを知ることになる。絶え間なく降ってくる雪に、僕はアカメの温かさを強く感じた。」

「私も、なにかのび太にあげないといけない。」

隣を見ると、アカメが僕の手をぎゅつと握りながら、ネオンの街並み同様キラキラと

瞳を輝かせていた。

「とりあえず、私からは今これが精一杯。プレゼントは改めてする。」

そう言つてアカメは、ちゅつと僕にキスをするのだった。何度も何度もかわしたアカメとのキスだけれど、それはなんだか特別に感じてしまった。ああ、この幸せがずっと続けばいいのに、そう思つて彼女を抱きしめようとした瞬間――

「わあ、見てください！のび太！」

「私たちに見せたかつたのつて、本当はあれのことだったの？」

シエーレたちの言う方向には……、

「なっ!？」

なんと、ネオンの街並みから外れたビル街にある大きなビルの側面に、窓の明かりで作られた

『ナイトレイドLove』の文字。

「え、あ、あれは……」

「すごいよ、のび太……豪華ホテルだけじゃなくてあんなのまで用意してるなんて……」

「こんな素敵なプレゼントをもらえるなんて、私たちつてどれだけ幸せ者なんだろう！」

……あ、あれはいつたい誰が。

「『『『ありがとう、のび太（野比くん）！』『』』」

僕には覚えがない……」。けど——

「『『『のび太！これからもずっと一緒にいよう！世界中の誰よりも愛してる！』『』』」

きつとあれも、サンタドラえもんからのクリスマスプレゼントに違いない。うん、きつとそうだ。

そういうことにはしておこう。ははは、クリスマスにはなぜか奇跡が起こるものだ。アカメたちと出会ったあの日も——再会した日も——今日の夜も——素敵な奇跡が起こったんだ。

「『『『のび太（野比くん）、大好き！』『』』」

僕はナイトレイドのみんなと一緒になれた奇跡に感謝しながら、彼女たちもう一度キスをした。

最後のイタズラ

プロローグ

「何をごちそうしてくれるの？フレンチ？イタリアン？それとも和食？」

「誰も奢るなんて言っていないって!!」

「ええ〜っ!?女の子を食事に誘っておいて、奢りじゃないなんてありえる!?ありえないでしょ!?!こういう時に女の子が払おうとするのは、相手の自尊心を傷つけることになるのよ?奢ってもらうことで相手を立てるの。わかる?」

「わかるかっ!」

「社交術ってヤツだよ。のび太も知っておくといいわ。フフフツ。」

「勝手についてきておいて、こいつは何を言ってるんだ？」

「もういい。僕は一人で食う。じゃあね。」

「ねえねえ、のび太はお昼なに食べるつもりなの? って、あつ、ちよつと待ってってばっ。」

「うるさい。ついてこないでよ!」

「もー、拗ねないでしょ。私もお腹減った!」

「うるさいって言うてるでしょう。」

「いいじゃない。なに食べるのかくらい教えてよー。」

「和食だよ、和食っ、ついてこないでっ。」

「和食!!なにになに!?!お寿司!?!天ぷら!?!あ、私、ふぐちりとか結構好き!」

「チエルシーの好みなんか知らないよっ!」

「なによ、もー……」

チエルシーに背を向けたまましばらく歩く。だが、まだチエルシーが後ろをつけてくる気配はあった。ここで振り返れば負けだ。後ろの気配などはじめからないものとして自分は行動しなければならぬ。

「おお、なかなかの美少女。なにになに一人なの?」

「はあ?なによあなた。」

「あなただって。いいところのお嬢様って感じ。ひえっひえっひえっ。」

後ろの気配などはじめからないものとして、自分は行動しなければならぬ。

「……」

行動しなければならぬのだ。

「はふっ、お腹いっぱい。」

「……………」

「でもさあ、のび太。女の子を食事に誘っておいて、牛丼はないんじゃない？牛丼は。」「だからついてこないでって言ってるでしょう。なんなんだきみはっ。」

「なに言ってるのよ、のび太は私を食事に誘ったでしょ？誘った口で即キャンセルなんて、許されるはずないじゃない？むしろ、おとなしくついてきてあげた私に感謝して欲しいくらいね。フフッ。」

「フフじゃないー。結局払わせやがって……………」

「うん。ごちそうさまっ。」

「……………ったく。こんなことなら……………」

「あ、やっぱり助けるつもりでああしてくれたんだ。」

「う。」

「フフフ、急に私の腕を、強引に掴んで引つ張ってくんだもん。びっくりしちやった♪のび太って意外に大胆なのね。」

自分がして行動に、自分が一番驚いてる。

「なんで僕はこんなヤツを助けてしまったのだろう。」

「こんなヤツとはひどいわね。その『こんなヤツ』を会うなり食事に誘ったくせに。．．．あ、もしかして。」

「なに？」

「．．．．．のび太って実は、私に気があるんだつたりして。」

普通の人間なら顔を真っ赤にして、否定するところだが、生憎彼女の目の前にいる男は違った。

「ない。」

のび太は涼しい顔で答えた。

「．．．．．一応、『大切な家族』だとは思ってるけどね。そんな人が落ち込んでたら声くらいかけるし、困った・事態になってたら助けようと思うでしょう、普通．．．．」

「．．．．．そっか。．．．．．うん、嬉しい。ありがとう、のび太。」

「ど．．．．．どういたしましたして．．．．．？」

「．．．．．」

「．．．．．」

「ぶ。ぶ。ぶ。は。は。は。は。は。っ！な、なにそれ！あはははははははっ！ど、どういたしましたって！」

「うるさいな！別に返事としちゃ間違っていないだろうがっ！」

「ご、ごめん！確かに間違っていない。間違っていないけど、ぶくくくっ！ダ、ダメ、のび太がどういたしましてっ、くひいっ。」

腹立つが、ヘンに暗い表情見せられるよりはいくらかマシだ。

「はーっ、はーっ……あー、おかしー」

「……それじゃあな。まださつきみたいなのがいるだろうから、あんまり遅くならないうちに帰れよ。」

「あれ？どこ行くの、のび太。」

「どこって……帰るんだよ。」

「なにかやることがあるの？」

「……ある。」

というのは嘘だ。本当は家に帰って昼寝するだけ。

「それじゃあ。」

さっきのお返しのもりなのか、チェルシーは急にのび太の手を取って引つ張った。驚くほど滑らかでしなやかな指の感触に、のび太の心臓がトクンと一つ鳴る。

「ごちそうしてくれたお礼に、デートしてあげる！行こうっ♪」

「嫌だよ！僕は帰りたいんだ！」

「どうせ昼寝するだけでしょ？いいから、行くよ！」

この後二人はカラオケ、ゲームセンター、映画などのデートスポットに足を踏み入れたのだった。

第一章：想いを斬る

「のび太、はいこれ。」

「これは・・・？」

学校の休憩時間、チエルシーがノートをのび太に渡してきた。中を見たが、まだ何も書かれていない様子だ。

「これはねく・・・私達の交換日記なんだよ！」

得意げな表情でえっへんといえばる態度を取るチエルシー。そんな彼女は正直言つて可愛かった。

「交換日記・・・？何で？」

小学校に通つてた頃、静香と出木杉がやつてるのを見たことはあるけど・・・何でこの歳になってまでやる必要があるんだらうか？

「私達つて、まだお互い知らないことも一杯あるよね？」

「あるの？」

「あるの！」

のび太が疑問を感じてたのが分かったのか、交換日記の意図の説明を始めるチエル

シー。

「それで、やっぱり一緒に暮らしていく上で、お互いのことは分かっている方がいいよね。」

「それはあるね。」

「そこで、この交換日記の出番ってわけ。」

「………チェルシー、歳いくつ?」

「ムカ!歳は関係ないでしょう!?!この交換日記を続けていけば、お互いの性格も出てきて、相手がどんな人か分かると思うし、直接口に出せないことも、紙の日記帳だったら書けるかもしれないし、まさに一石二鳥なんだから!!」

「………。」

レオーネと同じでチェルシーは言い出したら聞かない。これ以上反論しても無駄か。

「分かったよ。やればいいんでしょう、やれば!」

「そうこなくっちゃ♪」

次の日の夜。のび太は、日記帳を持ちながら、自分の机に向かう。さて、と……記念すべき最初の日記で、チェルシーはどんなことを書いたんだろう。もし「今日は普

通の1日だった以上」なんて書いてたら今すぐ文句を言いに行つてやる。そう決意して、のび太は意を決して、日記帳を開いた。

「!？」

最初のページに昨日の日付や天気などが記されて……おらず、あつたのは……

『ー愛しいのび太へ』

「い、愛しいって……」

急に恥ずかしくなる。またチエルシーの悪戯か。無視して先を読もう。

『いつもやさしくしてくれてありがとう。のび太は本当に優しいね。のび太の声を聞く度、やっぱりのび太の事が好きなのだ確認する毎日。普段の態度から、こんな内容は想像もつかないかもしれない。少し子供っぽいと言われるかもしれない……。けれど、私も女の子。口に出すのは恥ずかしいから、まだ胸の奥に残る素直なままの自分の言葉を伝える。のび太は私に、恋というものを届けてくれた人。だから、私の心を聞いて欲しい。私の今までの想いを。帝国が無事に革命され、私たちはそれぞれの道を歩き出した。もう殺し屋ではなくなった私は、他の皆と同じように、恋を試してみたかった。そんな時、のび太と再会した。確かに、はじめはただの擦れちがいだったかもしれない。それとも、私が見えない壁をつくっていたせいなのかも……。けれど、のび太は

簡単に乗り越えてくれた。私の悩みも快く聞いてくれたし、色々な楽しみも教えてくれた。それが一番嬉しかったから・・・だから私はのび太に惹かれたの・・・。そんな想いがしらずしらず、心の中に広がって、いつの間にかのび太を好きになつていた。チエルシーという自分を見つけられた気がした。のび太がくれたこの想いを、大切に育てていこうと思います。

だから、ありがとうございます。

大好き。

きっとこれからものび太の事を大好きでいます。そろそろ暑くなりますが、お腹を出したりして風邪をひかないよう、身体に気をつけて。

大好きなのび太へ』

第二章：気持ちを斬る

「……………」

身体が熱い。正直言つて、恥ずかしいのと切なさで胸が一杯だ。これ、本当にチエルシーが書いたのか？いつも自分をからかったりしている彼女からは想像もつかない。でもよく見ると、明らかにチエルシーの字だ。だとしたら、またいつもの悪戯か？

「……………恋か……………」

でも、心のどこかが暖かい。どうしていいかも、なんて言つたらいいのかもわからなけれど……………。このまま部屋を飛び出しマラソンでもしそうな勢いだ。それくらい恥ずかしくて……………そして嬉しい。

「チエルシー……………」

チエルシーも相当恥ずかしかつただろう。その証拠にノートを見ると、何度も書き直した跡が……………。これがチエルシーの素直な言葉なんだ……………。色眼鏡のない、等身大の女の子。少しだけ夢見がちな少女のような……………。

「僕も書こう……………」

布団から出ると、机に向かう。ペンを握ると、今日までの出来事を思い出す。

——チエルシーの事は嫌いじゃない。

——チエルシーのそばにいるのは嫌いじゃない。

——だけど、直接顔を会わずと、緊張してしまつて話が出来ない。

——ごめんね、こんなに頼りない男で。

——本当はもつと一杯言いたい事があるのに。

——チエルシーに伝えたい事があるのに。

——いざ、面と向かうと恥ずかしくて言葉が出てこない。

——ごめんね。

——だけど、日記を読んでみて……。

——チエルシーの想いを知つて。

——チエルシーがどれだけ僕の事が好きなのか、どう想つてくれるのかわかつた気がする。

——なんか、謝つてばかりの内容になつちやつたけど、チエルシーには僕の素直な気持ちを知つておいて欲しいから……。

——これからはチエルシーに釣り合うような、しっかりして男になる。

——そうすれば、ドラえもんにも心配かけなくてすむし、チエルシーの全てを守つてやれると思う。

「ーだから、僕を信じてずっと好きでいてください。
ー僕のチエルシーへ。」

「……………」

「……………何か、すごく恥ずかしい……………やばい、何か汗かいてきた。部屋はそんなに暑く……………ないのに。鏡を見ると、顔が紅い。」

「……………チエルシーも……………こんな感じだったんだろうな。」
こうして、初めてかもしれない長い夜が過ぎていった。

第三章：トークを斬る

そして次の日の登校時間。

「うーん。最近いい天気が続くね。梅雨の季節なのにね。」

「そうですね……。」

「なに、元氣ないね。朝なんだから、もうちよつとシャキつとしなよ。シャキツと。」

「僕のこととはこの際どうでもいい。」

「ん？なあに？」

「……。」

知ってるくせに。のび太は、無言でチエルシーを睨みつける。

「はい。」

のび太は交換日記をチエルシーに手渡し、チエルシーは無言でそれを受け取る。

「ありがとう。また渡すからね！」

「まだやるの、それ。」

「当たり前だよ！というかまだ一回目だよ！」

正直内容が内容なだけにやりたくない。だがチエルシーは、のび太に半端強引にやら

せようとする。

「ねえ、チエルシーが書いた内容だけど……」

日記の内容がどこまで本気か分からない為、のび太はチエルシーに聞いただそうとする。だが……

「おはよーつす！のび太！チエルシーちゃん！」

「じゃ、じゃ、じゃ、じゃ、ジャイアン！」

突然背後からジャイアンが挨拶をしてきた。

「じゃ、じゃ、じゃ、つて俺は水道じゃねんだ！というか、チエルシーちゃんと一緒に登校とはお安くないな。」

「なんだよお安くないってのは。一緒に登校しているだけだよ。」

明らかに挙動不審なのび太に比べ、チエルシーは堂々としていた。

「あはははは、そうだよねー、一緒に登校してるだけだよねー。交換日記は始めたけど。」
「ん？」

チエルシーが呟いた『交換日記』と言う言葉にジャイアンは首を傾げるが、のび太が急いで会話に割って入る。

「なんでもないよっ！なんでもっ！それより今、学校のチャイムが鳴らなかつたか!？」
「なにいつ!?!もうそんな時間か!？」

三人は急いで学校へと走った。

そして数分後、学校に着いた。

「おはよ〜」

上機嫌で静香に挨拶するチエルシー。

「おはようチエルシーさん。今日も、チエルシーさんと一緒なのね。」

静香はチエルシーとのび太の姿を交互に見る。

「い、一緒に登校したただけだよ!」

「ふえ!? え、ええ……そう?」

いきなり声をあげるのび太に静香は驚いた。そんなのび太を見て、チエルシーはクスクス笑う。

キーンコンカーンコン

「はあ……今日は疲れた……。帰ろう……。帰ろう……。帰ろう……」

チャイムが鳴り、放課後になった。のび太は急いで帰り支度を始める。

「のび太ー。帰るなら一緒に帰ろう。」

「嫌だ。」

「一緒に下校するくらい今日がはじめてってわけじゃないじゃない。」

「僕は一人で帰りたいの。」

「あ！それと。はい、これ！」

チエルシーは交換日記をのび太の前に差し出す。

「!？」

のび太は急いで交換日記を取る。

「ちよ、何して!」

「どうしたの?」

「(どうしたのじゃないよ!交換日記の事がバレるでしょうが!)」

「(別にノートを手渡すくらい不自然じゃないじゃない。のび太がうろたえすぎなんだよ。)」

のび太は呆れる。元殺し屋とは思えないセリフだ。

「大丈夫、大丈夫。私が大丈夫って言うてるんだから絶対大丈夫だよ。安心して?」

「(安心できるか?!)」

「のび太さんとチエルシーさん、なんのお話ししてるんだらう?」

「密談………蜜談………とろりと甘く濃厚なハニートーク。」

「つまりハニートークか。エロいな。」

「エロいわね。」

「字間違ってるよって、つつこんじゃダメな雰囲気？」

のび太は鞆を背負うと、そのまま教室を出て行った。

「待ってよー！」

そしてチエルシーが後を追いかける。

(チエルシーも僕なんかには構ってないで、さっさと彼氏でもつくればいいのに。)

事実、チエルシーはアイドルが裸足で逃げ出すほどのトップクラスの美貌を持つ少女だ。周囲からも高嶺の花として認識されている。そんな彼女からのお誘いとくれば、九割九分の男は一も二もなく首を縦に振ること間違いなしといえよう。ただ残念なことに、彼女が付き合いたいと思っている相手は残りの一分にあたるのである。??

第四章：バイオリンを斬る

「あ、チエルシーさん。まだいてくれた。」

「私？なあに？」

廊下を歩いていたらチエルシーに突然クラスメイトが話しかけてきた。

「あのね、もし時間あったら、ちよつとだけわたしの部につきあって！お願い！」
そう言われ、チエルシーは半端強制的に連れて行かれる。

「うーん、じゃあ一曲だけだよ？」

チエルシーはバイオリンを片手にそんな事を言う。

「ありがとうございます！神様、仏様、チエルシー様っ！」

「みんな拍手！」

「そういうのはやめてー！弾くのやめるわよ？」

「余計なことしないでよ骨川くん！殺すわよ！」

「ころっ!?す、すみませんでしたっ。」

「……………じゃあ。」

クラスメイトの頼みは、チエルシーにバイオリンを実演してほしいということだった。その話を耳にしたジャイアンが『俺も聴きたい！』と手を挙げ、結局全員そろそろついてくれハメになった。のび太は興味がなかつたので、そのまま帰ろうとしたが、チエルシーを放置するのは危険だと判断して、つきあうことにした。先程の様子から考えて、チエルシーが交換日記のことをぼろっと言いつい出しそうだったからだ。とはいえ。

「……………うまい……………な。」

「うん……………チエルシーさん上手……………すごい……………」

チエルシーは、バイオリンのコンクールでも入選の実績があるのだ。バイオリンだけではなく、ピアノ、絵画、お茶などでも入選の実績があるのだ。待てる者と持たざる者の差を、イヤでも感じてしまう……………。チエルシー、恐るべき。いくらなんでもスベック高すぎる。

「すごい！すごい！チエルシーちゃん！すっごい素敵だった！うわあ……………」

「や、やめてっつたら……………照れちゃうじゃない。うふふ。」

クラスメイトのはしやぎようにチエルシーは少し困惑していたが、満更でもなさそう
だ。音楽のセンスの上に懐も深い。

「チエルシーさんチエルシーさん！あのね、次、次これやって！」

「ちよつとお。一曲つて言つたでしょー？」

「私ももう一曲くらい聴きたいなー。」

「弾くのはチエルシーさんだから、無理にとは言えないけど……わたしも。」

「もお……。」

ふとチエルシーが顔を上げて、のび太と目があう。のび太はなぜか許可を求められた
気がして頷きを返した。

「じゃあ、ホントにあと一曲だけだよ？」

「ありがとう、チエルシーさん！感謝感激っ！」

そしてチエルシーは再びバイオリンを演奏した。

第五章：同じ人物を斬る

「くのつ、くのつ！こうして……ていつ！きやあつ！やったやった！のび太！見た見た？今の!?私、すぐくない!？」

「見てなかった。」

「ムカ！せっかくかっこよく決めたのに。次はちゃんと見ててよ?」

「……………」

「のび太のび太！ほら、いくよ、見ててっ!」

自分の隣でテレビゲームに熱中するチエルシー。これが本当にクラスをまとめ、巧みなバイオリンを披露したチエルシーと同じチエルシーなのか？

「てえいつ!」

「……………同じチエルシー以外の何者でもないわけだが。」

「ほらっ、またできた!フフフフっ!これならのび太との対戦にも使えそうだっ。」

あんな事を交換日記に書いておきながら、なんでこの女はいつも通りなんだ?やつぱり悪戯だったのかな?あり得る。普段から人を持ち上げといて、突き落とす最低な奴だからな。思い遣りの欠片もない女。そんな事を思っていると、チエルシーはゲームをや

め、腕を伸ばす。

「ふああ……。眠くなっちゃった。先にお風呂使わせてもらうね。」

「……。チエルシー。」

「なあに？ゲームならまた明日にしょ。もう十一時回ってるよ？」

「いつの間に……。」

「対戦ゲームってつい時間を忘れちゃうよねー。男子がゲームセンターに入り浸る気持ちも、なんとなくわかつちやった。」

「……。あのさあ、チエルシー。」

「？お風呂先に入りたい？」

「じゃなくて……。チエルシー、交換日記に書いた『愛しい』って本気なの？」

「ーっ。」

「後、最後に書いた『大好き』ってー」

「お風呂入る。」

「あつ、ちよつと！」

チエルシーはプイッとそっぽを向いて、お風呂場の方へと早足で行ってしまった。

「……。。」

しばらく呆然とするのび太。ふと、自分の鞆が目に入り、中を開ける。そして問題の

物を取り出し、中を覗き込む。

『のび太と再会してそろそろ一年が経とうとしている。私は、のび太と出会えて本当に良かったと心の底から思ってるよ。私にとってのび太は一番大切な人。のび太という時間はかけがえのないもの。のび太という時間が私にとって一番幸せだから……。できることなら、これからずっと一緒にいたい。こうして日記を書いていると、寂しい気持ちがちよつとだけ楽になるから。私はのび太と再会して、のび太の良い所をいっぱい見つける事ができた。まだまだのび太の良い所はあると思う。だから、これからもそれを見つけていこうと思っています。そして、今以上にのび太の事を好きになりたい。』
そして文章の最後にこう書いてある。

ーねえ、のび太は私のことが好き？

「……好きに決まってるでしょう。」

誰もいないのに頬を赤らめながらその言葉を発する。その後、チエルシーと入れ替わりで風呂に入る。チエルシーは風呂から出てもしゃべらず、会話を拒絶するかのようにはドライヤーのスイッチをONにしていた。

「……まったく。」

そんなチエルシーもチエルシーだが、自分も自分だ。

「さっきまでここにチエルシーが……」

こんな事態だつていうのに、風呂に入つてみればそんなことばかりが頭の中を埋め尽くしていく。

第六章：二人だけの世界を斬る

そして次の日。

「のび太さん、顔色悪いけど、どうかしたの？」

「え？な、何でもないよー！」

心配した静香がのび太の顔を覗き込む。のび太は、慌てて平然を装った。どうしよう。静香ちゃんにでも相談しようかな。静香ちゃんは優しいからな。

『「ええっ、チエルシーさんがのび太さんの事を!?でも、チエルシーさんって確かあのび太さんの家に住んで。オバ様も、オジ様も、ドラちゃんもいないから、つまり、のび太さんとチエルシーさんはその……っ。」ふしゆく。ボタン。「静香ちゃん!!」
……ダメだ。

どうゆつくり説明したところで、静香ちゃんがパニックになるのは目に見えてる。真つ赤になつて倒れるだけならまだいい。下手にその内容をほかの連中に聞かれようものなら、ただじゃ済まなくなってしまう。特にスネ夫なんぞに知られようモノならーうう、考えたくもない。

「うわっ!?!何だっ!?!」

すると視界が暗くなる。

「だ〜れだ!」

背後から手で視界を覆われ、問いかけられる。

(う．．．．．誰だろう?)

声を変えているが、この気配は間違いない。

「チエルシー?」

「わお!」

のび太の返答に視界が明るくなる。そして目の前には、見知った女の子の姿。どうやら、正解したそうだ。

「すごい!なんでわかったの?」

「え?そ、そんなにすごい?」

「わざと声色とか変えたのに．．．．．。どうして?野生の勘なの?」

「うーん、なんていうか．．．．．」

「うんうん、なんというか?」

「チエルシーの顔しか浮かばなかったんだ……それで……その……」

「へ、へ……そうなんだ。」

「う、うん……」

互いに顔を真っ赤にしながら、見つめ合う。

「……あ、ありがとう、のび太。」

「う、うん……」

気まずい空気になり、何も言えなくなる。二人は恥ずかしそうに視線を逸らした。

「オホン！」

「!?!」

完全に二人だけの世界に入っているのび太とチエルシー。そんな二人にシビリを切らした静香が咳をつく。突然我に返った二人は心底驚いた。

「そ、それじゃあね……」

「う、うん……」

「ちゃんと当ててくれて……嬉しかったよ。」

逃げるようにチエルシーは去って行った。それにしても『だくれだ』だなんて、チエルシーも可愛らしいなあ……。

「のび太さん。最近、チエルシーさんと仲良くしすぎじゃない？」

静香は不機嫌な様子でのび太に問いかける。

「何で？友達なんだから仲良くするのは当たり前じゃない？」

「そ、それは……そうだけど……」

のび太の正論に静香は言葉を失った。

数週間後、

「あ!!」

静香は誤って机にぶつかり、上に乗っていたノートをや鉛筆をばら撒いた。

「大丈夫、静香ちゃん？」

スネ夫も一緒に散らばった物をかき集める。

「ん？」

「どうしたの、静香ちゃん？」

静香は床に落ちたノートを手に取り、思わず中身を見てしまう。スネ夫もノートを覗きこむ。これは交換日記・・・？内容からして相手は、のび太とチエルシーだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・つ!？」

静香の顔が徐々に赤らめていく。読んでいるだけで恥ずかしくなってくるチエルシーの大胆な文章。のび太の素晴らしさを事細かく書きしるしてある。これは最早、交換日記ではなく恋文である。

「のび太さん・・・・・・・・」

静香は指に力を入れ、ノートを破り捨てようする。

「待って、静香ちゃん!良いことを思いついたよ!」

だがそれはスネ夫によって止められた。名案を思いついたのだ。スネ夫は早速消し

第七章：喧嘩を斬る

数日後。いつものように夕食を食べていると、チエルシーがのび太に問いかける。

「そういえば……のび太はどう思ってる？」

「ん、何が？」

「のび太は私の事……どう思ってる？」

「え……？」

突然の事なので言葉に詰まる。しかし、それも束の間。

「もちろん、かけがえのない存在だよ。」

「ううん、そうじゃなくて……」

「??？」

「その……だから、なんて言うか、もつと簡単に……」

「簡単って……大事に思ってるのか？」

「だ、だからそうじゃなくて、ほら……男と女で言うと。」

「さっきから何を言ってるの？」

「もういいよ！」

チエルシーは怒りながら食席から立ち上がると、部屋に戻って行った。

「ははは、まったく面白いな、二人とも。まあ、ケンカはわかるけどな。」

「そうね。私たちも似たようなケンカをしたことがあるわ。」

チエルシーとのび太の様子を見て、のび助と玉子は笑みを浮かべる。

「どうしよう?」

解決策が分からないのび太は声をあげる。

「そのうちわかるわよ。」

いい加減な返答を返す。家族が困っているというのに随分薄情だ。

「うわあ、教えてくれたっていいのに。」

ドラえもんもたまらず声を上げる。

「別に教えるほどのことはないぞ。答えなんて無いんだから。」

「だって、パパとママは一度経験あるんでしょ? せめてその時はどうだったかくらい教えてくれたっていいじゃない。」

「聞いたって意味は無い。答えなんて人それぞれさ。のび太やチエルシーちゃんが思うよう行動すれば、物事はいい方向に転ぶんじゃないの?」

「いい加減だなあ……まったく。まあ、明日になれば、お互いに落ち着いているとは思うけど……」

「でしよう？ だつたらいいじゃない。気にしない、気にしない。」

そして次の日、いつものチエルシーに戻つてゐる、と思つていた。が、現実はそうではなかつた。チエルシーは、のび太と顔を合わせると、まるで逃げるように去つていくのだつた。表情を見るに、怒つてゐるといふ訳ではなさそうだが、バツが悪そう、という風に見える気もするし、のび太のことを蔑んでゐるようにも見える。

（つたく。パパもママも、昨日話を聞いたんだから、何か気の利いたことを言つておいてくれたらよかつたのに。そしたら、「ごめんね、のび太。私が悪かつた。許してね。」つてことになつて、一番早いのに……）

仕方ない。向こうから謝ってくる線はまずなさそうってことで、今回は自分の方から謝るとしよう。

「チエルシー」

しーん。

チエルシーはさらりと身を翻して避けられてしまった。見事に、意図的な無視を決め込まれてしまった。信じられない。天変地異の前触れか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

結局、朝から昼休みまで、チエルシーとは一言も口を利いていない。目の前のジュースに入った氷がカラリと揺れる。

「はぁ・・・・・・・・・・・・・・・・。」

思わず深い・ため息をついてしまう。そしてそんな二人の様子を男子生徒たちはニヤニヤしながら眺めるのだった。

第八章：ヘイトレターを斬る

「おい、見たか!？」

「見た見た。チエルシーちゃん、とうとうのび太に愛想尽かしたらしいな。」

「いい気味だ。」

ジャイアンとスネ夫たちは影でクスクス笑いだす。

そしてその放課後。帰り支度をしたのび太が下駄箱を開けると、そこには一通の封筒があった。可愛らしい封筒だった。おまけに良い匂いがする。のび太はゆつくりと封筒を開け、中身を確認する。差出人は・・・チエルシー!？

―私を付け回したりして、本当に迷惑

―何がしたいのか分からないけど、喧嘩を売っているようにしか見えない

―私をとにかく不幸にしたいというだけなら、今後一切近寄らないで

―もうただただ不愉快。そういう嫌がらせがしたいなら、他でやって

ーのび太の顔を見るだけで気持ち悪い、吐き気がする
ー今度近づいてきたら、ストーカーとして訴えるから
ーチエルシーより

手紙を読み終えたのび太は、その場で呆然とする。ラブレターならぬ、ヘイトレター
そんな彼をジャイアンとスネ夫たちは嬉しそうな顔で見ている。

そして帰り道。のび太は、チエルシーと会わずに帰宅することにした。

「……………」

「気にすんな。これまでが良すぎたんだよ。」

「そう、そう。」

そう言いながらのび太の肩にぽんと手を置くジャイアンとスネ夫。

「大丈夫。チエルシーちゃんは僕が責任を持って幸せにするから!!」

チエルシーに愛想つかされたと思い、のび太を慰める苛めっ子二人。だが結局の所、
慰めになっていない。

「あつ、そうだ!!家に来ない?新しいゲームソフト買ったんだ!!」

「えっ?いいのか!?!」

「うん!何なら出前でお寿司でも取ろうか!!」

「いいのか!?!」

「勿論!!めでたい時には派手にお祝いしなくっちゃ!!静香ちゃんたちも呼んでさ!」

スネ夫は上機嫌である。そんな彼にジャイアンは次々と要求する。

「そんじゃ、ピザも頼んでいいか!?!?」

「勿論！」

「俺、前から欲しかったものがあるんだけど……」

「いいよ、いいよ!!遠慮せず何でも好きなものを言いなさい!!」

(そうか……。そうだよね……。)

のび太は考える。そうだ。自分には静香がいるんだ。将来静香と結婚し、素敵な家庭を築くんだ。だから別にチエルシーになんと思われようと関係ない。そう、関係ない。関係ない筈……なのになんだろう、この胸の中のモヤモヤは……?僕は別にチエルシーのことなんて、なんとも想っていない……はず……。

第九章：メッセージを斬る

数日後、

キーンコンカンコン

「さてと、帰るか……………」

学校のチャイムが鳴り、のび太は家に帰る準備をする。

「あ……………」

のび太の目があるノートに止まり、思わず手を止めてしまう。それはチエルシーと一緒に書いていた交換日記だった。最初の数日は楽しく書いていたのだが、あの日以来二人の関係は気まぐずくなり、その後全く手不付になっていたのだ。思えば、このノートが全ての元凶だったんだな。のび太は何となく中身を見ってしまう。すると……………

野比のび太さんへ、

「あれ？」

のび太宛てのメッセージが書かれていた。それは勿論チエルシーの字ではない。気になり、続きを読む事にした。

野比のび太さんへ、

このような形で連絡する事をお許しく下さい。ですが、どうしてもあなたとお話したい大切な話がありまして。とても他人には聞かれて欲しくない内容なのです。内容というのは、他でもないチエルシーさんの事です。実は、私は以前から彼女に好意を持っておりました。ですが、彼女にはあなたという婚約者がいると知り、断念していました。しかし先日、あなたが彼女と婚約解消したとお聞きしました。もし本当なら、どうか彼女を譲っていただけませんか？勿論、それ相応のお礼は致します。

また連絡させていただきます。

Xより

「・・・・・・・・チエルシー・・・・・・・・」

のび太は突然の事で啞然とする。考えてみれば、チエルシーは美人の部類に入る少女だ。学園は勿論、町での人気は高い。狙っている男は数え切れないほどいる。聞けば、彼女は毎日のように告白されている。だが彼女は、それを全て断り、のび太と連んでい

る。でもそれは、永遠ではない。いずれ彼女も自分から離れ、別の男と添い遂げるんだ。
(そうか……。そうだよね……。)

そうだ。自分より良い男なんて、それこそ数え切れないほどいる。そういえば、チエルシーは玉の輿に乗るのが夢だった。自分と結婚しても、お金持ちになれない。そう考
えると、このまま身を引いた方がいいのかもしれない。それが彼女の為なのだから。そ
れに自分には静香がいる。将来静香と結婚し、素敵な家庭を築くんだ。だからチエル
シーを気にする必要はない。そう、関係ない。関係ない筈……。なのになんだろう、
この胸の中のモヤモヤは……？僕は別にチエルシーのことなんて、なんとも想って
いない……。はず……。

第十章：封筒を斬る

次の日、のび太は歯磨きをしながら家の郵便受けを開ける。すると
バラバラバラ。

開けた途端、大量の封筒が溢れ出る。

「!?」

地面に落ちた封筒の一つを拾い、差出人を確認する。チエルシー宛だ。よく見ると、
全ての封筒がチエルシー宛だ。悪いと思いつつ、中身を確認する。

チエルシーたんへ。

いつも君の事を見ているよ。ごはんも食べれない日もあるんだ。大好きで愛してる
から。絶対に僕の物にする。チエルシーたんは、僕じゃなきや、幸せになれない。幸せ
になれないんだよ。覚えておいて。僕はチエルシーたんのためなら死ぬるよ。どこま
でもついていくよ。一緒に幸せになろうよ。家知ってる。ごめんね。チエルシーたん
を知りたくて、知りたくて、知りたくて、たまたま何となく、暇な時があったから探し
てたらチエルシーたんの表札見つけたんだ。野比だよね？見つけちゃっ

た—————？　もうチエルシーたんと一緒になれた気がして嬉し
い—————？

Xより

そして封筒には手紙と一緒に三枚の写真が入っていた。それはチエルシーの着替え中の写真、チエルシーの入浴中の写真、チエルシーの睡眠中の写真であった。明らかに隠し撮りした物であった。

そしてその夜。のび太が居間でテレビを見ていると、

ガサガサッ!

「えっ?」

「何だ?」

突然沈黙を破る不審な物音。どうやら聞き違いじゃないみたいで、クロメが不安げにのび太を見つめてきた。

「今の……聞いた?」

「うん、庭の方から聞こえたな。」

植え込みをガサガサと掻き分けるような音だった。

「ま、まさか……」

頭の中に、今朝の出来事が甦る。ストーカー?まさかとは思うけど、目的はチエルシーなのか?

「ちよつと見てくる。」

「ええっ!?あ、危ないよ。」

「大丈夫だよ。ちよつと確認してくるだけだから。」

「でも……」

「このまま何も調べなくて、原因が分からないほうが、もつと怖いって思わない?」

「それは……」

言葉を詰めらせて、クロメが窓のほうに視線を向ける。たぶん、猫か何かだと思うけど、クロメのこんな顔、ずっと見ていたくはなかった。

「すぐに戻るよ。」

「うん……. 気をつけてね。」

不安げなクロメの視線に見送られて、のび太は庭に出た。

「……. ……。」

まさか、本当にストーカーが来てる訳はないと思うけど……. ……。ちよつとドキシしながら脚を進めていく。

ゴソゴソツ!

「(わあっ!)」

気のせいじゃない。今のはハッキリ聞こえた。

「(ぐ)くつ……. ……。」

生唾を飲み込んで少しずつ移動する。音はお風呂場の方から聞こえてきた。不味い、今チエルシーがお風呂に入っている。

「!」

ザザザツツ!!

突然飛び出してきた人影が、のび太の目の前を横切る。

「だ、誰だ!」

ダダダツツ!!

不審な二人の人物は、何かに追い立てられるように表の道路に逃げ去って、あつという間に見えなくなってしまった。

「確かお風呂場の方から来たよな……」

お風呂場に目をやると、窓が少し開いている。中からはシャワーの音が聞こえてくる。そして、地面に転々と散らばる、チエルシーのきらびやかなブラジャーやショーツの数々……。慌てて落ちている下着を拾い、干しっぱなしの洗濯物を取り込む。下着を落としていったつてことは、恐らく未遂で終わったんだろう。

第十一章：賭けを斬る

ピンポーン！

家のチャイムが鳴った。誰かが来たのか？のび太は急いで玄関を開ける。するとそこには配達人らしき男性が立っていた。

「どうも、お届けものです！」

配達人は、ダンボールを差し出す。のび太はダンボールを受け取ると、受け取りにサインをする。サインを受け取った配達人はそのまま帰って行った。

「??？」

御手先はチエルシーだ。そして差出人は……X。

ごくり

のび太は悪いと思いつつ、荷物をゆっくりと開けていく。中には大量の薔薇の花が入っていた。そして薔薇の中に埋もれていた一枚のカード。そしてそのカードには、今日もチエルシーは綺麗だの、自分のことが好きなんだらうだの、放課後の掃除も嫌がらずにやっついていい奥さんになるだとか、吐き気のような都合のいいことが延々と書かれていた。そして更に、隠し撮りしたのであろうチエルシーの写真が数枚入ってい

た。のび太は、焦っていた。もしこのまま放っておいたら大変なことになる。そう決意した彼は……………

キーンコンカーンコン

「はあ……………眠い……………」

チャイムが鳴り、放課後になった。のび太は、昨日の事が気になりすぎて上の空だった。授業にも全く集中出来ていなかった。だが今はそんな事を気にしてる場合じゃない

い。のび太は、すつと椅子から立ち上がると、諸悪の根元の元に向かった。

「チエルシー！」

いきなり声をかけられ、チエルシーは顔を上げる。

「今日は一緒に帰ろう！」

真剣な眼差しでそんな事を言うのび太にチエルシーはキョトンとする。

「『『えっ!?!』』」

様子を見ていたクラスの生徒たちも目を見開く。そしてのび太は、チエルシーの手を強引に掴むと、

「ちよ、ちよつと待って！」

教室を後にした。

そしてチエルシーはのび太に連れられ、街を歩いていた。

「なあ、あれつてのび太か？」

「のび太がチエルシーちゃんの手を繋いでる……それってまさか!？」

「嘘だろう！俺はアカメちゃんに500万賭けてるんだぞ！」

「俺なんかクロメちゃんに全財産かけてるんだ！」

のび太が誰と結婚するか賭けをしていた通行人は目を見開く。そしてチエルシー以外の少女たちに賭けていた人物たちは、その場で発狂し、怒り狂った。

「毎度あり！」

のび太は品物を受け取ると、代金を手渡す。

「今日も仲いいねえ、二人とも！羨ましい！」

店長は仲良さげにしているのび太たちに大笑いする。チエルシーは頬を赤くしながら、恥ずかしそうに俯く。

そしてその帰り道。のび太はいきなりチエルシーを呼び止める。

「チエルシー。」

「何？」

「あの……その……」

「ん？」

「僕……僕は……」

「なあに？」

「……やっぱりいいや。」

のび太の返答にチエルシーは、眉間にシワを寄せる。そして微かだが、体が少し震えていた。

第十二章：掲示板を斬る

ざわざわ

校門近くまで来ると、ふと妙な人だかりを発見する。

「ん、なんだアレ？」

人だかりは皆、掲示板に釘付けのようだった。

「へへ、あの噂の……」

「あー、くそ……羨ましいな。」

「あんなやつが俺のチエルシーちゃんを。」

「でも、こうやって見ると結構普通ね。」

生徒たちは次々と声をあげる。

「何を見てるんだ？」

登校してきたのび太は、人だかりに近づいていく。

「あ、のび太！」

「のび太さん、こんな所にいたの!？」

人だかりの中から、ジャイアンと静香が姿を現す。

「ん？一体どうしたの？」

「いいから、こつちこつち！」

「何かあったの？」

「あつたも何も……」

慌てながら詰め寄ってくる静香とジャイアン。

「のび太さん、今大変なことになってるのよ！」

「だから、何が？」

のび太は、静香とジャイアンに中庭へと連れてこられる。

「原因はコレ。」

一枚の写真を渡される。写真には、チエルシーが男子生徒と仲良く腕を組みながら歩いてた。

「へー、結構格良く撮れてるじゃないか。で、これがどうしたの?」

ガクツ

静香とジャイアンはその場でズッコける。能天気なのは相変わらずだった。

「何でそんなに冷静なのよ!」

「そうだ、そうだ!」

静香とジャイアンは、顔を近づけてくる。

「相手は高橋先輩なのよ?」

「誰それ?」

「お前、知らないのか?」

高橋先輩、この高校に通っている三年生である。サッカー部のエースで、イケメン、成績優秀、しかも誰に対しても優しい。まさにのび太とは正反対である。

「へー、凄い。ならチエルシーが好きになってもしかたないか……」

のび太の呑気な対応に静香とジャイアンは、ため息をつく。

「今なのび太には何を言っても無駄だな。」

「そうね。そういえば、高橋先輩の噂って本当なのかしら?」

「………噂?」

「ええ。あくまでも噂なんだけど、ヤクザとの繋がりがあられるらしいわ。」

のび太は声を上げて、驚く。もしかしてチエルシーをストーカーしているのも極道の人間? どうしたらいいんだ。

「でも高橋先輩が告白したら、チエルシーちゃんは付き合っちゃうんじゃねえか?」

「ええ、そうなるかもしれないわね。」

告白。のび太の頭にその言葉が浮かび上がった。

その夜。のび太は悪夢を見た。ある部屋の中で息を吐きながら、チエルシーは無機質な白いドアを見つめていた。チエルシーが身にまとっているものは、ソックスと、首輪と、そして彼女の性を晒すように、がんじがらめにしている針金だけだ。数週間前まで健康的であった肌は、ところどころ傷つき、痛々しい痣にまみれている。

「うわあああああああああああああああ

!!!!!!!」

のび太は大声をだしながら布団から起き上がる。

「ハア．．．．ハア．．．．ハア．．．．ハア．．．．夢か．．．．」
肩で息をしながらその場にへたり込む。

第十三章：気持ちを斬る

そして次の日。のび太はチエルシーと一緒に近所の公園へとやってきた。チエルシーと並んで、ゆつくりと歩く。歩く度に、二人の影も寄り添うように一緒に動く。

「チエルシー。」

「何？」

「あの……その……」

「ん？」

「僕……僕さ、最近……」

「だから、なに？」

「僕……チエルシーの事が気になってるんだ。」

「えっ……」

チエルシーは立ち止まり、のび太は彼女に向き直る。

「チエルシーの事がいちいち気になってき……もつと知りたい、もつと色んな顔を見たいんだ。」

「そ、そう……なの。」

自分の想いを伝えるって、難しい。恥ずかしいっていうか、緊張する。チエルシー……………心なしか、顔が赤い気がするんだけど……………気のせいかな？

「うん……………だから、これからも、もつと…………チエルシーの気持ちを知りたいよ。」
「……………それで？」

「それで……………って？」

「のび太が何を言いたいのかわからないよ。もつと、ストレートに、わかりやすく言ってみて欲しいな。」

「……………。」

「私の事が、気になるって……………どういう意味で言ってるの？」

「どういう意味って、それは……………」

「のび太は私の事、どう思っているのよ？」

「そ、それは、何というか……………」

「もう……………好きなの？嫌いなもの？それは人間として、友情として？」

「ち、違うよ！友情とかじゃない、僕は、チエルシーを……………その……………」

男だろう、のび太……………今こそ言うべき時だろう!!ちゃんと言うんだ、自分の正直な気持ちを……………チエルシーに!!

「ぼ、僕はさ、チエルシーが、その……………す……………」

「……す？」

「す、すす、す……ううつ。」

たった一言『好きだ！』って言えばいい。そのくらいの勇氣、ここで見せないでどうするんだ、僕!!

「僕さ、チエルシーの事がどうしようもなく、好きっ!!」

「もう、バカ……好きっ!!」

「えっ……??」

僕の『好き』という告白が彼女の声と重なった。僕が告白したと同時に、彼女も告白してくれただって事か!?

「い、今、なんて言ったの、チエルシー？」

「もうバカ、バカバカッ!!のび太が言うのが遅いから、しびれを切らしちゃったじゃない!!」

「ええっ!？」

「私を待たせるんで……のび太酷いよっ!!」

「へっ!？」

「のび太が私を気にする前から、私は……のび太の事をずっと思っていたんだから!!」

「ほ……本当に?……チエルシーも、僕の事を……?」

「そんな……わかりきった事を聞かないで!!!」

「へっ……あっ……うん……」

「私の事が、気になるって?」

「そ、そうだよ。」

「そんなに私の事が気になるなら、わ、私を好きになつてよっ!!!」

「!!」

「私だけを見てよっ!!!」

「……う、うん……もう、僕……チエルシーしか見えてない……よ。」

ちよつと肌寒いくらいなのに、凄く、熱い。どうすればいいかわかず、僕たちは固まってしまった。チエルシーは、僕を好きになれて言ったけれど、僕は、もう既に……チエルシーを……そしてチエルシーも、僕の事を……

第十四章：バイトを斬る

「今日はバイト何時に終わるの？」

「9時。あ、でも片付けもあるからもう少し遅くなるかも。」

「そっか。いつも大変だね。」

「ううん、いいの。半分好きでやってるようなものだし。」

今日は夕方からバイトのチエルシー。平日はこの時間から、休日は朝からシフトに入っているときもあるから楽ではない。立ち仕事なんて良くできるな。

「じゃあ私、もうバイト始めるから。」

「う、うん。がんばって。」

「……………」

「ん？どうしたの？」

「ちよつと……………こつち来て？」

「え？」

「いいからっ。」

少し強引に腕を引っぱられ……………頬に軽くキスされる。

「ご、ごめん……………最近バイト前になると、寂しくなるの……………」
「そ、そうなの……………」

全然気づかなかった。最近はこれでもずっとチエルシーのそばにいたつてのに……………」

「ごめんね。」

「え？なんでのび太が謝るの？」

「まあ、なんとなく。」

チエルシーの言葉が本当だとしたら、少なくとも週3回以上。自分が部屋で昼寝していた間もチエルシーは、バイト先でその寂しい思いを引きずっていたに違いない。

(僕も、チエルシーと同じ時間帯のバイトでも探してみようかな……………)

自分の彼女が外で働いている間、彼氏の自分は部屋でゴロゴロしてるのも問題な気がする。

「チエルシー……………ちよつとこつち来て。」

「え？なに？あつ……………」

周りにたくさんのお通行人がいるのも気にせず、のび太は目の前で少しきよんとして自分の彼女を抱きしめる。

「バ、バイト先、すぐ目の前なんだけど……………」

「う、うん……ごめん……」

そのままのび太の背中にチエルシーも軽く手を回してくる。

「のび太とこうしてると、今日はバイト休みたくなっちゃう……」

そう言つて更に強くのび太に抱きついてくるチエルシー。自分で店の前だからと言つておきながら、自分の彼女もずいぶん大胆になったもんだ。

「そうだ、のび太も私と同じ店でバイトしてみない？」

「無理無理。そもそもきゆうりも満足に切れない僕にあのクレープの薄い生地が焼けると思う？」

「ふふ。絶対無理だね。」

えらくハツキリと言つてくれる彼女。

「でもね、何事も結局は馴れが必要なんだから、そうやってなんでも苦手意識持つて諦めるのは良くないよ？ 私だつて最初に料理を始めた頃は、包丁もロクに扱えなくて大変だったんだから。」

「へえ、意外だな。」

何でも要領良くこなすチエルシーが何かを失敗してる場面なんてあまり想像が出来ない。

第十五章：クレープを斬る

「お待たせしました。こちらストロベリーチョコ生クリームになります。いらつしやいませーつ。クリームチーズにブルーベリーヨーグルトですね？合計で850円になります。」

「おー、やってるやってる。」

やはり休日&ゲームセンターの近くにあつてか、店は大層な混雑ぶりだった。部活帰りの学生、買い物帰りの奥様方、自分と同じくプー太郎風味の連中と、客層も特に偏りがあるわけでもなくバラエティー富んでいる。

「チエルシーさん、ごめんメイプルナッツもお願い。」

「わかりました。」

（すごいな、これだけの客を一人で捌いてるのか・・・）

店先にはチラチラとチエルシーの姿。レジ、接客、クレープ作りと、客の流れを見てはそのすべてを完璧にこなすマルチプレイヤーと化している元殺し屋。

「春の新作クレープ・・・。抹茶アイスと黒蜜入り生クリームに、苺とサワークリームのフレッシュクレープ・・・。」

やばい。昼食を食べたばかりだというのに、妙に食欲が湧いてきた。

「抹茶アイスと黒蜜クレープ……」

食べたいけど男一人であの列に並ぶのは恥ずかしい。部活帰りの女子グループに、カップルや子供連れ……

「本当に男一人で並んでる人とかいないのかな……」

残念だがここは一旦一人で突入するのは諦めることにする。

「あれ？珍しいな、お前こんなところでなにしてるの？」

「じゃ、ジャイアン……!!」

「な、なんだよ。なんて顔してんだよ。」

今まさに、偶然のび太の元に天の助けが舞い降りる。

「で。だから何でお前がこんなところに並んでんだよ？」

「そんなのクレープ食べるために決まってるでしょう。」

二人して場違いな列に並ぶのび太たち。ジャイアンの無粋な顔の効果もあつてか、最前列の方からは女性陣の密かな笑い声が……

「お、おい、なんか俺たち笑われてんだけど……」

「クスクスクス……」

「なんでお前まで一緒になつて笑つてんだよ！そもそもお前が無理やり俺様を列に引き込んだんだろうが!!」

ジャイアンは顔を真っ赤にし、のび太の頭を殴る。

「いたたた……まあまあ落ち着いて、僕だつて強引に付き合わせて悪いと思つてんだ。ちゃんと好きなモノ奢つてあげるから。」

「本当だろうな。」

レアチーズにストロベリー、デザート系のクレープならなんでも来いだ。ハンバークやらチキンが入った総菜系は値段が割高なので除外する。

「でも俺、ここは良く通るけど実際クレープ食うのは初めてだな。」

「大丈夫、僕も同じさ。そもそも男だけでクレープ食べに来る用事つてあまり無いし、むしろそれが自然だ。」

列がどんどん前に進んでいき、ついにのび太たちの順番が回ってくる。

「いらつしやいませー！」

「いらつしやいました。」

「っ!? な、なんでのび太がこんなところにいるのよ!」

「そんなこと言われてもな、僕、今は客で来たんだが・・・」

「えっ・・・・・・うん・・・」

その場で慌てふためくかとおもいきや、その場で赤くなり縮こまってしまいうチエル
シー。

「のび太って自分からわざわざクレープ買いに来るような人じゃなかったよね?」

「そうなんだよ。でも通りすがりに偶然ジャイアンに会ってき。クレープ食いたいけど
どうしても一人で並ぶのが恥ずかしいとかゴネてきて・・・」

「俺何も言っただけよ!! のび太が無理矢理クレープ食おうぜとか言っただけだろうが

!!」

「あ、抹茶アイスのやつ二つね。」

「俺様、生チョコとアーモンドが良かったんですけど!!」

馬鹿、二人して別々の物頼んだらチエルシーに余計な手間をかけさせることになるじゃないか。

「しよ、少々お待ちください．．．．．」

ぺこりと一度頭を下げ、奥のクレープ台の前に歩いて行くチエルシー。レジで小銭を補充している店員に代金を渡し、後はチエルシーがクレープを焼いてくれるのを大人しく待つ。手慣れた手つきで生地を薄く伸ばし、さつそくのび太とジャイアンの分、抹茶アイスが包まれることになる生地を焼き始めるチエルシー。時折こつちを嬉しそうに見てくるチエルシーが、なんとなく可愛くて笑ってしまった。

「すげえ手慣れてるなあ。俺なんかホットケーキすら満足に焼ける自信ないぞ。」

「うん、僕もさ。僕たち同類だねっ!」

「何そのすげえ嬉しそうな顔．．．．．。それよりお前、チエルシーちゃんがいるからここに顔出したのか?」

「ま、まあそうだけどさ．．．．．」

ジャイアンの顔色からして何を言いたいのかがすぐ分かる。いくら彼女のこと好きだとはいえ、これじゃ仕事中のチエルシーの邪魔になるだけだと言いたいだろう。

「これ食べたらずくに帰るさ。別に僕、チエルシーに迷惑かけたくてここに居るわけ

じゃないしね。」

「お前、ちよつと大人になったな。」

「お、お待たせしました……。抹茶アイスと黒蜜クレープになります……。」

「あ、ど、どうも……。ありがとう、チエルシー。」

「う、うん……。ごめんなさい、大したお構いも出来なくて。」

「いや、チエルシーはただ普通に仕事してるだけなんだから気にしなくていいって。」

「ただちよつと、一目様子を見にというか、なんか考え始めたら妙に落ち着かなくてさ。」

「そ、そうなんだ……。」

何やら照れ以外にもそわそわとしているチエルシーの様子。良く見ると店内にいる残りのスタッフから、妙に生暖かい目で見られているのび太たち。

「あ、えっと……やっぱごめんね。迷惑だったよね。」

「め、迷惑なんかじゃ……ないから……」

「え？」

「そ、その……ヘンな気を遣わなくていいから。またクレープが食べたくなくなったら気軽に顔出して？私も、その方が不思議と頑張れる気がするから。」

「う、うん、わかった……」

「……」

あ、あれ？チエルシーって照れるにしてもここまでしおらしいキャラだったっけ？

「……」

「……」

「あ、あの。俺邪魔みたいなんでもう行っていい？」

今まで黙っていたジャイアンが声を上げる。

「『あれ？ジャイアン（武）居たの？』」

のび太とチエルシーの言葉がハモった。

「居ないこと前提か！そんなに俺の存在って邪魔なのか!？」

ギャーギャーと騒ぎ出すジャイアン。煩い奴だ。

「ごめん。それじゃ僕もう行くから。チエルシーは仕事終わったらそのまま帰るんで

「しょう?」

「うん、そのつもり。のび太も寄り道しないで早く帰ってね?あまりフラフラと外出歩くと、余計な出費がかさんじゃうから。」

「うん、そうだね。それじゃ。」

「うん、また明日。」

なんでもだろう、夕食の時間になれば僕たちは顔を合わせる。時間にして何十時間もあ
るわけじゃないのに、それでも今ここで自分と別れるのをホントに寂しそうに見送る
チエルシー。

「.....」

何かどこか心に引っかかりつつも.....

「おい、行こうぜ。」

とりあえず今はこれ以上チエルシーの邪魔はしないようにしよう。そう素直に頭に
言い聞かせ、そのままクレープ屋の前を後にした。

第十六章：お迎えを斬る

「ありがとうございます」

もう何人目か分からない客に声をかけ、そろそろ閉店の準備を始めるチエルシー。

「ホントにこんな時間まで客いるんだな……」

時刻は既に8時半を回り、チエルシー以外のスタッフ達も店内の片付け作業に入っている。

「……僕、こんなところで何してんだろう。」

夕方、のび太が店に足を運ぶのは迷惑じゃないと言ってきたチエルシー。バイトに行く直前も少し寂しそうな顔をしていたので、どうも今日一日それがのび太の頭から離れない。

「それじゃ、お疲れ様でしたー。お先に失礼しまーす。」

「ん？」

仕事が終わったのか、チエルシーより先に一人の店員が店から出てくる。そんな彼女を待っていたのか、少し離れたところから手を振っている彼氏らしき人物が一名登場。

「偉いなあいつ、こんな時間にまで彼女の送り迎えか。」

疲れた表情も吹き飛ぶ勢いで、待つていた彼氏に飛びつく彼女。そのまま笑顔で手を繋ぎ、中むつまじく駅前の方へ並んで歩いて行く。

「仲良いな………」

そんな二人の後ろ姿を、少しだけ羨ましそうな目で見ているチエルシーがいた。そんなチエルシーの表情を見て、昼間言っていた寂しそうなチエルシーの言葉を思い出す。

『最近バイト前になると、少しだけ寂しくなるの……』

『またクレープが食べたくなったら気軽に顔出して?』

「そっか………」

今となって、チエルシーの考えていることになんともなく気がついた。なんでこんな簡単なこと、チエルシーが寂しい思いをする前にちゃんと気づいてやれなかったんだ。

「チエルシー！」

「っ！え．．．．．？」

突然声をかけられ、チエルシーは振り向く。

「と、突然どうしたの？のび太がこんな時間にここに来るなんて．．．．．」

「チエルシーを迎えに来た。」

「え．．．．．？」

いつもバイトが終わるとこの暗い時間に一人で帰るチエルシー。バイト仲間の彼氏は迎えに来て、自分の彼氏は迎えに来ないなんてチエルシーに取ってみれば普通に羨ましく見えるのは当然だ。

「もうバイト終わるんでしよう？早く着替えて用意してきて？」

「あ、うん．．．．．ごめんちよつと待ってて。」

店の奥に入って行くチエルシー。片付けもほとんど済んだのか、店長に頭を下げてすぐに着替える。

「ご、ごめん！お待たせ、はあ．．．．．はあ．．．．．」

「き、着替えるの早いね。」

「だって、一緒に帰ってたから……」

少しむくれて赤くなるチエルシー。照れながらもさっそくのび太の手を握ってくるチエルシー。のび太はその手をあえて一度離し、チエルシーの肩を軽く抱いて自分の方へと引き寄せる。

「あっ……」

「手を繋ぐより、こっちのが良いでしょう？」

「う、うん……」

目と鼻の先にはお互いの顔。チエルシーものび太も、そのまま自然な動作でお互いの唇を重ね合う。

最終章：自作自演を斬る

「ね、ねえ。どうして今日は急に迎えになんて来てくれたの？」

「チエルシーに会いたかったから……。」

「え？」

「バイトに行く前にさ、チエルシーが僕になんとか少し寂しくなるって言ってたろ？」

「うん。」

「よくよく考えたらさ、僕も……。チエルシーがバイトに行った後、ちよつと寂しいことに気づいたんだ。」

「そ、そうなんだ……。」

「うん、なんかちよつと遅かったけど、さつき自覚した。夕食の時間になればすぐに会えるはずなのに。頭の中はもうチエルシーに会うことしか頭に無いんだ。ちよつと馬鹿みたいでしょう？今更子供じやあるまいし。」

「ううん、全然おかしくなんてないわよ？だって私も……。」

チエルシーの目がのび太の顔を覗き込む。

「私も、今日は仕事かずつとのび太のことを考えていたもん。仕事中はもつとちやんと

集中して手を動かさなきゃいけないのに、バイト中も寝る前も。気づくと頭の中はのび太のことでホントにいつぱい……」

「じゃあ僕たち、似たもの同士だね。」

「ふふ、そうかもしれないね。」

そのままずっと体をくつつけたまま、二人の住む自宅まで二人で歩く。人通りが少な
いせいもあるのか、今日はいつにもまして甘えん坊な……

「愛してる……」

チエルシーの可愛い姿が見れて満足だった。

そしてその数日、のび太へ一通の手紙が届いた。

「野比のび太さんへ

のび太さん、もう、これで最後にします。だからこれから私が書く事にどうか怒らないで最後まで読んで下さい。私はストーリーカーのふりをして、ちよつとあなたを驚かせたかったのです。それはあなたにチエルシーさんの事を考えてもらいたかったからです。だから私のような変質者に狙われていると知ったら、あなたがもつとチエルシーさんの事に関心を持つと考えたからです。思つた通り、あなたは私の身を案じて毎日付き添うようになつてくれましたね。そう、あなたとずっと会話していたのは、私なの。こんな事をしてしてしまったのも、私がのび太の事を愛してるからです……。こういう形でしか、のび太と向かい合う事が出来なかつたの。だから嬉しかった。のび太の中に私を好きだという気持ちがあると知つて。これからのび太を愛していきたい。これからものび太に愛されていきたい。私の願いはそれだけです。だからどうか、のび太も私の悪戯を笑つて許してください。

愛するのび太へ……チエルシーより」

遊園地デート

プロローグ

ある日、ジャイアン家では……

「みんなを呼んだのは他でもない。奴がついに動き出した。」

「うん、ジャイアン。大変な事になったね。」

野比家に仕掛けられている盗聴器で、話を聞いていたジャイアンたちは声を上げる。

「それは本当なの？」

「間違いない。」

「じゃあ、ここはひとつ、僕たちもー」

そう言って続けるスネ夫の提案に、静香は迷うことなく同意するのであった。

そして次の日のび太は遊園地に来ていた。入り口の周囲をぐるりと見渡す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」
あれ？いない。腕時計で時刻を確認する。時間は11時ジャスト。約束の時間ぴつたり。

「うーむ・・・・・・・・。」

「あつ！来た！こつちこつち〜！」

「んん〜？」

まったく見覚えの無い、超絶プリチーな美少女が二人。向こうで手を振っているのがわかる。

「すごいな、周りの人間みんな見てるぞ。」

周囲の視線を一身に浴びる彼女たち。その晴れやかな笑顔がこれまた反則級に可愛らしい。

「遅いぞ、のび太。」

そういいながら不満げな顔をするのはのび太の教育係りと言い張る少女。ただ、いつもと違うのは妙に着飾っており、のび太からすれば違和感が物凄くあるということだ。馬子にも衣装とはまさにこのことである。

「あつ。・・・アカメ、髪型変えてるんだ。」

「あ、ああ。」

「えー、可愛いね！いつもと雰囲気違うけど、すっごくよく似合うなー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ポニーテール髪のアカメは頬を赤くする。

「のび太。ど、どうかな。」

今度はクロメがその場で一回転する。着ているのは、先日のび太がプレゼントしたワンピースだった。

「に、似合ってるよ。なんというか、お世辞抜きにして普通に可愛い。」
「ありがとう。」

のび太の素直な感想にクロメは嬉しそうに微笑む。

「行くうか。」

『うん。』

二人と手を繋ぎ、歩き出す。何故二人が遊園地に来ているかという点、普段から家の家事をやってもらっているお礼に玉子がアカメたちに遊園地のチケットをプレゼントしたからである。

勿論、そんな二人が平和に遊園地を楽しむはずがなく……

遠くでのび太とアカメの姿を覗いている者たちがいた。

「のび太の奴……ふざけやがって……。アカメちゃんたちは、お前の事を30分も待つてたんだぞ。そんなアカメちゃんの貴重な30分、お前の残りの人生で償ってもらうぜ！おい、ドラえもん、何か道具だせ！」

「またんかい！急ぎの用事って、のび太くとアカメのデート!?!」

ドラえもんは呆れた顔でジャイアンに声を上げる。本当に懲りない男だ。

「デートじゃねえ!!!あんな奴、俺様は絶対認めねえよ!!」

「冗談じゃないよ。僕はミイちゃんとのデートを中断してまで、来てあげたのに、のび太くんのデートを邪魔しろだって？僕、帰る！」

それだけ言うと、ドラえもんは回れ右して立ち去ろうとする。

「待て。俺がいつそんな事頼んだ？」

「え？」

ジャイアンの言葉にドラえもんは足を止める。

「俺様はただ、のび太を抹殺したいだけだ。」

「出来るか！」

「のび太にアカメちゃんを幸せに出来ると思うか？やあ、俺だつてアカメちゃんが好きになつた奴は認めてやりてえよ。悩んで、色々考えた。それで抹殺しかないという決断に……」

「色々考えすぎだろ！」

第一章：ジェットコースターを斬る

のび太たちは遊園地のパンフレットを見ながら、遊園地内を歩いていた。

「最初はどうする？」

「そうだねー、何に乗ろうか？」

「私のはび太と一緒にジェットコースターに乗りたいな！」

「え？」

「ジェットコースターか……。面白そうだな。」

「……。ジェットコースター。」

クロメの要望を聞いてアカメは賛成する。だがのび太は反対に青い顔をした。

のび太たちは遊園地で人気のジェットコースターに乗ることとなった。そして彼らの背後にいる3人はというと……

「人気のアトラクションだけに混んでるな。」

「どれくらい待つのかしら？」

ジャイアンと静香がそう呟くと、スネ夫が何かを思い出したかのように顔を上げる。

「思い出した！……このジェットコースターは確か、乗った人の8割以上が気絶する、死のジェットコースターなんだ！」

「え？ 本当かよ？」

「うん。中にはこの世のものと思えない綺麗な川が見えたっていう人もいるらんだ。」

「そんな……」

スネ夫の説明にジャイアンと静香は驚く。

「それじゃあ……のび太は……」

「うん、そういうこと。」

のび太の悲惨な結末にジャイアンとスネ夫はニヤリと笑みを上げた。

そして時は過ぎ、のび太達の順番が回ってきた。

「大丈夫か、のび太？体が震えてるけど……」

「だ、大丈夫……」

「本当か？無理しなくていいぞ。今ならまだ引き返せる。」

「本当に大丈夫！クロメがせっかく誘ってくれたんだし、断るのも悪いよ。」

「……………」

そして安全バーが自動で降り、完全にロックがかかる。するとアナウンスが始まる。

『皆様ようこそ。死のジェットコースターへ！この死のジェットコースターは世界中の絶叫マシンの要素を取り入れたジェットコースターです。楽しんでいってください。』

そしてジェットコースターが一気に動いていく。最所は時速230キロの超スピードで真っ直ぐ進み……

「助けてー！ー！」

遊園地中にのび太の叫び声が響く。そして彼の悲鳴はむなしく、次は弧を描くように急上昇していく。

「む、無理……い、意識が……」

開始30秒も経たないうちにすではグロッキー状態なのび太。そしてジェットコースターが頂点にまで上がると、そこからジェットコースターは一気に地面スレスレまで落ちていく。そしてこの時すでにのび太の意識はなかった。

そしてその後、

「のび太、大丈夫？」

「立てるか？」

「う、うん。なんとか……」

クロメとアカメがそう尋ねると、のび太は頭を手で押さえながらゆっくりと立ち上が

る。だが、ジェットコースターに乗った反動で、足元がおぼつかないず、のび太はそのまま前にこけてしまう。

「うわあ！」

『『え?』』

そして、のび太はこけた反動でそのままアカメとクロメを押し倒してしまう。そして、のび太の顔がアカメとクロメの顔に一気に近付いてしまう。

『『!?』』

「はあああああ！」

三人は押し倒された状態で顔を真っ赤にしてしまう。

「あ、アカメちゃんが!!!」

「の、のび太さん……」

「羨ましい……」

「のび太くん、大胆だね。」

ジャイアンは固まり、静香は顔を赤くして動揺し、スネ夫は嫉妬がこもった殺気を放ち、ドラえもんは面白そうな表情でその光景を見ていた。

第二章：幸せを斬る

「もう、ああいうのは無理……」

のび太は頭をおさえながら、ベンチに寝込んでいた。

「大丈夫か？」

アカメは心配そうにのび太の顔を覗き込む。

「うん、大丈夫。ありがとう、アカメ。」

のび太は顔を真っ青にしながらアカメを見上げる。のび太は、今自身の頭をアカメの膝の上に乗せているのだ。

「のび太、お姉ちゃん、お待たせ!!」

ソフトクリームを買いに行っていたクロメがソフトクリームが乗ったトレイを持って戻ってきた。

「ありがとう。」

「すまない、クロメ。」

のび太とアカメはソフトクリームを受け取り、食べ始める。

そして彼らを監視する四つの影……

「くっそー、のび太の・ヤツーツ！アカメちゃんの膝枕なんて……」

「のび太さんにあんなにベタベタして……」

ジャイアンと静香は悔しそうにハンカチを噛みしめる。

「もう止めなよ。人の恋路を邪魔しない方がいいよ。」

離れた場所からのび太達を監視するジャイアン、スネ夫、静香。そんな三人にドラえもんは呆れ気味に注意する。

「僕はのび太くんがアカメやクロメと結婚してもかまわないよ。」

ジャイアン、スネ夫、静香はギロリと目を光らせてドラえもんに講義する。

「結婚!?!なに言ってるんだ、ドラえもん!?!」

「そうだよ、あののび太だぞ！」

「そうよ!のび太さんがのび太さんでのび太さんなのよ、分かる!?!」

「ちよつとなに言ってるか分かんない。」

「あ………」

「あゝのび太にクリームついちゃった………」

「すまん……のび太………」

のび太の両頬に生クリームがついてしまった。急いでハンカチを取り出し、拭き取るうとするが……

「待って！私が拭いてあげる！」

クロメはそう言うと、のび太の左頬に顔を近づける。そして

チュッ

「っ!？」

「はい、取れた！」

突然の事にのび太は目を丸くし、固まってしまふ。

「い、今、手じゃなく、口で!!」

「ほら、お姉ちゃんも!」

今度はアカメがのび太の右頬に顔を近づける。そして

チュッ

「い、いい、いきなり何するんだよ!」

「ダメだったか?」

「だ、だめじゃないけど……うう、こんなところ誰かに見られたら……」

「うふふ、のび太大好き。一緒に美味しいもの食べて、一緒に笑って、お話して、キスできて、凄く幸せ。これからもずっと一緒にいようね?」

「う、うん、もちろんだよ。」

「ああ、私も幸せだ。のび太とクロメがいるからわたしは生きている実感がある……ふたりがいるから……楽しく毎日がおくれる……」

第三章：観覧車を斬る

「なら、コーヒーカップとかどうだ？」

ジェットコースターに乗って気分を悪くしているのび太に、アカメは提案する。

「コーヒーカップか……確かにあれなら回転速度さえあげなかつたら体に負担がないし……クロメはどう？」

「のび太がいいなら、私もいいよ。」

こうしてのび太たちはコーヒーカップに乗る事にした。

（近くない!?!）

のび太はアカメとクロメの間に座る。因みにクロメは左隣、アカメは右隣に座っていた。だが何かがおかしい。近すぎる。だがのび太はそれを口に出す事が出来なかつた。それではまるで遠回しに『気持ち悪いから近寄るな、あつちに行け』と言ってるような

ものだからだ。

「どうかしたか？」

アカメはのび太の顔を覗き込む。

「な、何でもないよ。」

「ウフフ、のび太は照れちゃってるんだよ。お姉ちゃん！デートなんだからもつとくつつかないとダメだよ！」

「そうか……」

ぎゆう

アカメとクロメに密着されたことで、のび太の心臓の鼓動が早くなり、胸が苦しくなっていた。

「おい、ドラえもん！『時限バカ弾』と『エースキャップ』を出せ！」

双眼鏡でのび太たちの様子を見ていたジャイアンは、ドラえもんを突きつき出

す。

「はー、分かったよ。」

ヤレヤレといった感じでドラえもんはポケットに手を入れると、『時限バカ弾』と『エースキャップ』を取り出し、ジャイアンに手渡す。

時限バカ弾15 cm位の時計のような形をしており、貼り付けることで指定時刻に起爆する。爆発した相手はとてつもなくバカになり、その場でバカなことをおっぱじめる。

エースキャップこの帽子をかぶって物を投げると、狙った所に必ず当たるようになる。

ジャイアンは『エースキャップ』を被ると、『時限バカ弾』をのび太に向かって投げる。

だが、

パシッ

のび太の背中に付いた『時限バカ弾』をクロメが叩き落とし、壊してしまふ。

「ほらね。」

ドラえもんは予想通りと笑みを浮かべる。その後も、ジャイアンたちは色々な秘密道具を使うが、同じような結果になるのであった。

「何でだ、何で……」

「クソ……」

「私だったらドン引きするのに。寧ろ怒って帰るわ。」

ジャイアン、スネ夫、静香は口をあんぐり開ける。

「アカメやクロメはね、のび太くんの悪い部分を全て知ってる。それでも……」
ドラえもんは呆れた顔でジャイアン、スネ夫、静香に説教する。だがドラえもんの声は三人の耳に届いていない。

「ねえ、見てあれ！」

「あれは観覧車！間違いない！のび太さんはアカメさんとクロメさんを押し倒して、犯す気よ！」

「そうなの!？」

「観覧車と言ったらそれしかでしょう？あれはその為に作られたんだから！」

「え!?! そうなの!?! 知らなかった！アカメちゃんたちが危ない！」

スネ夫、静香、ジャイアンは急いでのび太たちを追いかけた。残されたドラえもんはベンチに座りながら、空を見上げる。そして思い出す。自分の身体がまだ黄色で、耳が付いていた頃の事を。自分には仲良しの雌猫型ロボットがいた。何をするにも、どこに出かけるのも一緒だった。だがそんな関係が崩れる日がやってきた。鼠ロボットがドラえもんの耳を齧ったのだ。耳を失ったドラえもんを彼女は笑った。腹を抱え、目に涙を溜め、大笑いしたのだった。

「・・・永遠の愛ってあるのかな・・・」

アカメ、クロメ、のび太の三人は観覧車に乗っていた。クロメは嬉しそうに窓の外を眺める。

「きよ、今日は楽しかったね。」

のび太はアカメに声をかける。

「そうだな。こんなに楽しめたのはいつ以来だろう。」

「そ、そっか！ならよかつたよ！アカメ、この間はごめんね……その……てつきり僕は……」

「私の方こそすまない。ちゃんと鍵を掛けてなかつた私が悪かつたんだ。そもそものび太は覗きなんてするわけがない。」

数日前。のび太は風呂に入ろうと、脱衣所の扉を開けたところ、裸のアカメと鉢合わせってしまったのだ。

最終章：ウラドラマンを斬る

「お前には助けられてばかりだな。のび太がいなかったら、私はクロメを……」

「もう、いいよ。」

「え？」

「アカメはもうそんなこと気にする必要はないよ。今まで沢山頑張ったんだから、これからは自分の好きなように生きなよ。」

そう言うとのび太は今までの戦いを思い出す。アカメは相手が誰だろうと、いつも肩間にシワを寄せ祈るように、刀を振るってきた。そんなアカメを見たくなかった。

「アカメはもう殺し屋じゃなくて、普通の女の子なんだから。」

「普通の女の子……」

「きゅ、急にごめんね！変なこと言って！」

「いや、嬉しい。それなら、私はもつとのび太と一緒にいたい。」

「僕も。」

のび太とアカメは互いに笑みを浮かべた。

「なに、あれ？」

「『え？』」

窓の外を見ていたクロメが目を見開く。いきなりタケコプターを付けた黒づくめの三人組が窓の外に現れたのだ。

「『殺し屋、ジャイアンズ 13！お命頂戴する！』」

そう言いながら黒づくめの三人組はライフルの銃口をのび太に向ける。

「『・・・・・・・・・・・・・・・・。』」

これは遊園地のイベントなのか？何を無茶苦茶な事を言ってるんだ、この三人は？突然の事にのび太たちは呆気にとられた。だが

「『あ、あれは？』」

のび太たちが乗っている観覧車の上に人影が現れた。

「『ドラえもん（ドラちゃん）!!』」

ヒーローに変装したドラえもんが降臨した。

「ドラえもん？知らないな、そんな人。僕は愛の戦士、ウラドラマンだ！」

ドラえもんは『秘密書類やきすて銃』を構え、銃口をジャイアンたちに向ける。

「人の・恋路を邪魔する奴らは消え去れ!!」

引き金を引いた。凄まじい光線が三人を直撃した。

ドーーーーー！！！！

三人はその場に転落し、凄まじい爆発を起こす。

「っ!？」

爆発の影響で観覧車が止まってしまふ。しかもその止まった反動で観覧車が揺れ、ア

カメとクロメがバランスを崩してのび太の方へ倒れてしまう。

『!?!』

アカメとクロメはのび太の胸の中に飛びこんでしまう形になり、三人の体が密着してしまふ。顔や耳までもが真っ赤になり、心臓の鼓動が今ままでより早くなつていくのがわかつた。

「ご、ごめん。」

「す、すまん。」

「だ、大丈夫。」

『申し訳ありません。ちょっとトラブルで観覧車が止まっています。今、復旧の作業にあたっていますので、少々お待ちください。』

遊園地のアナウンスを聞き、のび太は急いで少女たちから離れようとするが……

『……………』

少女たちは顔をゆつくりと近づけ、唇をのび太の唇と重ねるのだった。

「三人もお幸せに。」

ドラえもんはそれだけ言うと、その場を去っていく。